人の一生

はじめに

今回の調査地は南から大間々町の中央部を抜け、黒保根村～東村を経て足尾に至る銅街道の中間地域である。かつては桐生とは性格の異なった、いわばこじんまりとした商業経済の一中心をなしており、旧福岡村であった浅原、長尾根、小平地区は、小平川に沿って袋小路のような長細い地域に集落が点在し、塩原地区は渡良瀬川を隔ててはいるが、神梅地区と共に赤城山本麓の、浅原地区とはやや地勢の異なる地域である。共に山村的性格をもっている。

人の一生に関する民俗には、この山村的なもののほか、他の地域的と同様に東毛的なものが聞かれた。そして浅原地区では、今でこそ機織場として、どこにいっても威勢のよい機械音を耳にするが、それ以前は一般にはやはり貧しい山村であった。このことは八十才前後の人々の話の端々から知られる。今では生活も大きく変った。養蚕は衰え、山村でありながら山仕事の場とした職も消え、押しよせる近代化の波をかぶって、機織以外に特徴は失なわれている。

以下、人生の通過儀礼を中心に記述する。

「夫のつわり」は民俗書に時折みることだが、本県での調査では例が少ない。かつて桐生市梅田町で聞かれたが、この大間々でも一例があげられた。オトミマクという。夫も妻と同様な状態になって助けるわけである。出産前に誰しもが願う安産、お詣りするまでの距離は遠いが、勢多郡旧荒砥村の産泰本社まで行った。明治から戦前までは、この地域も小平の奥まで産泰神信仰圏にあった。

一方山村である旧福岡村一円に十二様(山の神)がお産の神として、特に隣村黒保根村桑の代の十二様が信仰されていた。そして後産がおりない時は、夫がホウキをかつぎ下駄と草履をはいて家の周囲を回る、お産の間夫が石を抱いて家の周りを回るなど、これも夫の力を借りる一つのあらわれである。また十二様とホウキ神の立会いでお産があり、子供が生れるという信抑はここにもあった。そのお産はナンドで、坐産であった。そしてお産の直前まで畑で働いた。近所のお婆さんに取りあげてもらい、産後はオカユと焼塩、味噌汁、カツオブシだけの食事、油物、梅干、肉類、柿などはたべられなかったという老婆の話、これは明治生れの婦人が誰しも経験したことであった。

お七夜のオヒヤマイリに、近所と三軒の便所にお詣りすることによって、「赤ん坊の仲間入り」をするという観念は注目される。その後のオビアキ、食いぞめ、初誕生祝、初節句の行事は他の町村と同様で、産後二十一日間産婦は汚れているとして、神、仏、井戸水には一切関与しないという禁忌はここでも守られている。

長尾根のオクマンサマはホウソウ神として信仰され、浅原を初め他の部落の人々も参詣し、オクマンマイリという言葉さえあった。

今では若衆組、娘組という名の青年男女の自主的団体を耳にすることはできない。青年会、青年団、処女会などは、私達が幼少の頃から聞きあるいは属して体験したものである。二五～三〇才位まで、そして村によっては結婚するとこの団体を抜けるのと、そのまま残るもの、

つまり結婚を一つの節にするか、年会集団をしての性格を重視するかによって異なってくる。前者の場合村人の結婚に関与し、古い時代の若衆組の性格を僅かながらももちこたえるのであろう。

こうしたこととは別に、青年の力くらべは他の町村を同様に行われていた。娯楽の少ない山村での当然であろうが、然し、単に個人的な力量の比較のみであったのか、他村の若衆との力くらべであったのか、そこまでは聞けなかった。

この地域の青年の夜遊びは、機織屋が多いだけに、そこに働く女が対象で、かなり盛であったようである。而もそれは双方楽しく行なわれていたようである。これに対しヨバイは、明治末期から大正初期に青年時代を過した人々の体験である。そして嘗て多野郡鬼石町であったように、娘側との連絡のとれた例えば一定の場所に予め話し合った標識が出されていた話合のもとで行為もあった。

十六才の男子の祝いに、屋敷稲荷にオカミアゲを供え、喜寿、米寿の祝いが霜月十五日に行なわれることは、年祝いのなかに屋敷稲荷信仰と祖先信仰のかかわりがうかがえるのではないだろうか。こうした意識は厄はらいにもみられる。厄おとしが村民全般に広く行なわれ、屋敷神、村の鎮守様にお詣りして、年を一つ余計にもらうことによって、厄年から逃げようとする。それは節分というトシトリの行事であった。

結婚はこうした山村では一般に家と家との結婚、従って親が決めた相手と結婚する。年頃になると世話づきの人に頼んでおき、その人が仲人役をする。つまりせめて「見合い」で、「恋愛結婚」など到底考えられない。といって異性が愛し合うことがないのではない。それが存在し、子供が生れても取り合わないのである。一方若衆が娘衆を管理するということもなかった。

婚姻は、山を越えても距離の近い隣村（川内ノ黒保根、東村）が多く、大間々、桐生地区とのものは比較的少ない。その中でこれも山村にいく程近視結婚は存在した。親戚を現在以上にふやさず、交際範囲を拡げないようにという、切実な事情に基づくものであった。それでも「仲人のナナデンボウ」「仲人のぞうりきらし」という言葉は、ここでも生きている。そしてあとあとまで仲人親として大切にもてなした。そこには義理が生きている。なかには大正の中頃、扶持をもち番頭、女中を連れて嫁入りした例も聞かれたが、これは特別のものとみてよい。

話がまとまると先ずクチガタメをする。他村でいう樽入れ、婚約成立である。そのあとトマリゾメ（足入れ）があって両人の関係は公認され、次いで結納、トリムスビという順序である。結納金には着物代、タンス代としてハネをつけ、ホカイを馬に片荷又は一駄っけ、あるいは迎えだんす、オシャク着物か婿方から贈られ、嫁の荷物は両者から出るチュウゲンによって運ばれる。これはイチゲンとは別に嫁を迎えるわけである。婿入婚の形はここでもみられた。次いで嫁の入家はタイマツか割竹に火をつけて掲げた中で、カドで青竹をまたぎ、姑が管笠をかぶせて行なわれる。

トリムスビは床の間で、イチゲン客を交えず行ない、ここにはお侍女房も坐る。前述の如く若衆組の機能のあらわでないここでは、若衆座敷も地味であった。一方御祝儀あとのオタイギ振舞、ヨメゴのお茶、村まわりの仁義、ミソメのオンナイチゲンはお堅くやっている。

初夏に麦が穫れると嫁は新粉をつくって実家に持って行き、秋は新米をもって里帰りする。そして神様に進ぜる実家が農家であるか否かは問わない。これをホカケという。これは東毛地区で多く聞かれることで、日本の農村としては然るべき行事であろう。単に新らしいものが出来たので実家の両親にたべさせるというのではなく、そこには儀礼とその背景にある信仰があるとみてよい。恐らく古くから行なわれていたもので。それがいまなおしっかりと維持されていることに注目したい。

「嫁は里からもらえ」「婿は床の間から、大尽から、里からもらえ」「嫁は台所からもらえ」とか「嫁はあしかけ三年」「嫁三年、婿八年」「嫁のつとめは十年」などという言葉がある。自分の家より大尽から、働き手をもらえとし他家から来た者はつらかった。働くことだけが求められたのである。身上廻しは親が死ぬことによって譲られる。ヘソクリはつくれず、自由になる金銭は実家の親からもらったものであった。現今では想像もされないもので、それだけに姑のいないノッツケガミサンは、皆にうらやましがられたのである。

科学的には説明し得ない死の予兆は、お百度詣り、魂よびと共に現実に存在する。私自身その体験があるからいつも取り上げるわけではないが、どこの市町村の調査でも、語る人は一方で不思議なことだといいながら、目をかがやかせて強調する事柄の一つである。ただ「人玉は十二様から十二様まで飛ぶ」というのは、何を意味しているのであろうか。

お通夜は、以前は兄弟子供達は起きての徹夜のことであったが、最近は夜半の十二時まで、更に三時間位で終えるというように形式化する傾向にある。その通夜の夜湯灌が行なわれ、終るとタイヤのお膳を皆でたべる。

納棺のとき入れてやる金銭は、あの世での小遣銭とか三途の川の渡り賃だとか説明しているが、そのほかに粟の穂も入れてやるのは興味ある習俗である。粒が小さいのでそれを教えていて、この世に帰って来られないようにするためだと説明しているが、何かほかに意味がありそうである。

藪塚本町で調査され、また東毛地区の各地で聞かれる「飾りだんご」はこの町でも行なわれている。ただ小平では六ケの団子をさした六本従って全部で七二ケ、神梅では七ケずつさして四九ケと多少の相違はあるが。

トコバン（穴掘り）は隣組単位で、妊婦のいる家を除いて、四～六人が組で、穴掘順番帳による順番制、若し葬儀が続いても必ず交代する。ただ神梅ではお寺でトコバンを決めるという。トメアナ（前日に掘った穴）は忌まれ、必ず葬儀の日に掘って、道具は共有物又は施主のものを用いる。

縁側から出棺すると、アナマワリは、庭に竹を四本立ててその周りを左廻りで三回半廻る。この出棺のあと部屋を掃き出し、メカイを座敷に転がす。これも東毛各地にみられる習俗である。

埋葬後その上にノベの灰をかけ、割竹で作ったメハジキをさす。これは山犬、テン、狼などの墓荒しを防ぐためのとするが、その形式が、神梅、狸原、茂木、谷田でそれぞれ多少の相違がある。墓直しは埋葬の翌日にする村、埋葬して家に帰ってすぐ再び墓地に行って行なう村、簡略化して埋葬直後に行なう場合とあり、また葬儀の翌日をナノカといい、ナノカのお経を葬儀当日やってブツツケナノカという。最近葬儀が簡素化、形式化しつつある好例である。スエノカサで四九杯の白米を晒の袋に入れ、四九日間の新仏への供物をその日に和尚に渡してしまうのも同様の考え方によるものとみられる。

葬儀後の念仏はかなり盛であった。神梅では男衆がやったといい、念仏の始まる鉦の合図で子供達も多勢集まった。そして赤飯の念仏ダマ或は念仏団子を配り（今ではこれもお菓子に代った）盛大な供養をした。

葬式の夜泊ると一週間泊らねばならないといわれ、泊らないで帰る。もし泊らねばならない場合は、一度トボグチから家の外に出てから帰ったこととし、再び家に入って泊る。また風呂はわかさないことになっている。こうした忌みごとは今もなお守られている。

小平で七日毎の墓参の団子は、六個の団子の粉をとっておいて作るというのは、古い形を残しているといえよう。以前は四十九日まで丁寧なお祭りが行われていたのである。魂は四十九日たって座敷から仏壇に上る。これをオタナアゲといい、忌切りであって、餅をついて塩

あんを入れ、忌切り餅といった。この餅をつく音で魂はグシを離れるという。それまで魂は家にあるので明りは絶やさないと説明する。そして最後の年忌の三十三年忌は、トムライジメ（トムライアゲ）で塔婆はタテジマイである。これをトメトウバといい、杉の生木のイキトウバ（シンツキトウバ、ハツツキトウバ）を立てる。これをここだけの習俗と意識しているのは意外であった。

耳ふさぎについて、小平地区では馬糞で耳にふたをするといい一般的であるが、戸沢では二銭銅貨を半紙に包んで耳につけ、それを幣束と共に三本辻に捨て、他人にみられないように振向かないで帰るという。生れ代りも神梅では死者の背に、高津戸では手の掌に、字を書いて埋めた例があるように、こうした習俗には多少の相違がみられる。

概してこの町にのみ存在する民俗というのはなかったが、離れて東毛地域に点在するものはみられ、またこの町の中でも部落によって多少異なるものがある。

（池田秀夫）

一、誕　生

㈠　妊　娠・出産

妊娠　妊娠することをデキルといい、妊娠した女をハラミ女という。十人以上或は数多く子供を生むと、ブタッコみたいに生むという。（浅原）

すっぱいものが食べたくなったり、顔色を見て姑さまが気がついて注意してくれた。五ヶ月のイヌの日に産婆さんに腹帯を巻いてもらった。今はてんずけ医者へ行く。（深沢）

妊娠しての注意　あるものをたべて、魚をたべるなど栄養は考えない。その日その日命つなぎをすることだけ考えた。高い所のものを取ったり、重たいものを持ってはいけないなど考えなかった。（浅原）

つわり　つわりがひどくて、うどんや魚が嫌いで食べられなかった。そのせいか、その時の子は魚がきらいで、ずっと魚を食べない。（深沢）

オトミマケ　且那がツワリと同じように、ごはんが食べられなくなったり、ツワリの母親にかまってもらえなくて、痩せてピーピー泣く子も共にオトミマケ、という（深沢）

腹帯　五ヶ月目の戌の日にする。お産が軽く済む。相手（夫）のフンドシを腹帯にすると軽いともいう。（小平）

五ヶ月目の戌の日にしめた。犬は産が軽いという。赤子には産婆が額に食紅で「犬」という字を書いてくれる。（桐原）

安産祈願　村の天神様（鎮守様）、桑の代の十二様、さとの方の産泰様（大胡を通って行き、歩きでがあった）に個人個人でお詣りした。

お産のときは十二様に頼むという。十二様には小さいボンデンをオガミヤに切ってもらってお礼まいりに行ってあげた。人の死があったときのローソクをもらってきておいて、産気づいて腹が痛くなると、そのローソクを神様にあげる。これが燃えきるまでに生れるという。又、女は便所をよく掃除するとお産は軽いという。（浅原）

黒保根村大字八木原字桑の代（戸数は五・六戸）の十二様が安産の神で、祭日は四月十二日。産婦が妊娠三～五ヶ月位のうち、軽く出来るようにとオサゴ、ゴマメを持って行って進ぜる。軽くできるとボンデンを立てる。（浅原）

大室の産泰様に安産祈願をした。講はない。安産するとお礼拝りに底抜けいしやくを進ぜた。願はたしとして生まれたとき、子供の額に「犬」という字を書いた。（浅原、大間々町三～四丁目）

前橋の城南の産泰様へ親がおがみに行ってくれた。お礼詣りは金か赤飯を持って行ったと思う。（深沢）

荒砥村の産泰様にお参りをし、底抜け柄杓をあげる。道がくどくて大変であった。（小平）

十二様とホウキ神様　お産はこの二柱の神様の立ち合いでできる。十二様の石宮からお燈明の短かいのを借りてくる。お燈明の火の消え

ないうちに生まれるという。お礼参りはする。
また後産がおりない時には、ホウキをかついで、下駄と草履をチンバにはき、主人が家の周囲を回る。（小平）
十二様にはオオヤマズミの命をまつってある。山の神様。桑の代には十二様神社がある。子どもが軽く生まれるようにおがみに行くお産の神様。ろうそくをあげて火をつけ、それが小さければ小さいほど早くできる。ろうそくの火を消して、他の小さいのを拾ってもらって帰り、お産の時につけると、消えるところまでに生まれる。（神梅）
馬の荷鞍を枕にして生むと軽いという。（小平）
お産　水天宮のお札を飲むとお産が軽く、すむ。又、腹帯にお札をつけておくとよい。
建前のお供え餅が棟上げのときの四隅の小さいお重ね餅を拾って来て神様に供えると軽くすむといわれていた。
にわとりの初卵を飲むと軽いとも聞いた。（塩原）
観音様に願をかけて、ろうそくを借りてきてともすと、ろうそくの火が消えるまでに産まれるという。（下神梅）
お産には晒のジバン、綿入れの胴着、ネルのきもの、綿入れのきもの。麻の葉のきものを青いのと、赤いのと用意した。
麻の葉は縁起がいいから。オメシを五、六十枚用意した。（深沢）
むかしは、お産はナンドでした。畳の上に俵を切り広げて敷き、その上にボロを敷いて産んだ。フトンを積んでこれにおっかぶさっての坐産であった。そのころは、お産でまちがいが出来たという。
お産のあとは、うすい布団を三枚ぐらい折りたたんで、よりかかっていた。よごれたものは畑に埋めた。むかしは、わら束を二十一把かさねておいて、一日に一把ずつ抜いて低くしていったという。二十一日目がおびやきであった。（浅原）
むかしは脱脂綿もなかった。綿と油紙を入れたフトンを作った。お産がすむと、洗ってとっておいて次の子の時使った。
新聞紙とカッパガミ（油紙）をすいた。
畳を上げて灰を敷いてワラをかぶせ、ボロ布をかけてした人も居たそうだ。
初めはつっぷしてお産をした。コタツヤグラにつかまったり、丸めたフトンを掴んだりした。
産婆さんの首が折れる程掴まった。（深沢）
家でお産をした。里の親がいいわけに一、二晩来て世話をする程度であった。（塩原）
お産の時に旦那が家にいれば取り上げばあさんを頼みに行ったり、お湯をわかしてくれるぐらい。
かみさんのお産の間ぢゅう、石を抱いて、ウロウロしてた人や、家の回りをかけってた人があったそうだ。
夜中に腹が痛くなった時「もう少し待ってろ。明るくなったら産婆さんを呼びに行ってやる」なんて言われたことがあって困った。（深沢）
昔は生まれるその日まで働らいた。でっかい腹をブランブランさせて畑のさく切りなんかする人があった。（深沢）
トリアゲバアサン　産むと汚水を飲まないように自分でかきのけて「オバサンたのむよ」といって近所のトリアゲバアサンに取り上げてもらった。これに対して盆、暮の礼は二、三年の間行ない、一生ではないのが多く、なかにはそのとき限りのも多い。戦後は産婆の手を煩わし、今は病院でのお産が多い。（浅原）
姑か近所の馴れた人に頼む。特別なお礼はしないが、お七夜にサンマと赤飯をあげる。（小平）
産婆さんは今は母子保健推進員といい、月に一度妊婦の家庭を回ったり、乳児やその母親の保健指導をしたり相談を受ける。（深沢）
ヘソの緒　ヘソの緒はしまっておいてなかなか治らぬ病気になった時せんじて飲む。埋める人もいるが、何れにしても粗末にするなといわれた。ヘソの緒を首に巻いて生れた子をケサガケという。（浅原）

後産　ハカバ、トボグチなどに埋けた。多くの人にふまれたりまたがれると、のし上りにならないといった。今の子は親などふみつけてのし上りになっている。（浅原）

へそのおは、人のまたぐほどいいといって、とぼにいけた。これはむかしのことで、最近は、墓へもって行っていけるようにしている。（浅原）

お墓へ持ってっていけた。今は大葬場でフトンごと焼く。（深沢）

あと腹が痛む時、本人が知らないうちに二尺ざしをふとんの下に差し込むといい。よくなる（深沢）

納戸の下とか、人に踏まれるといいといってトボロに埋ける人、また方をみてそちらに埋める人などある。（小平）

産後の食事　オカユと焼塩がオカズである。油物は百日間悪い、青物、草餅もいけないといい。柿は血を騒がすという。お産があると実家の親がカツブシを持ってくる。カツブシミソとフとカンピョウはたべてよいという。（浅原、小平）

お産の前は、力めし、力もちをくれた。産後は、おかゆに梅干とみそ汁だった。七日の夜には鯉を煮てくれた。甘いものはくれなかった。

流産のときは甘い湯をのませた。一ヶ月たつと甘いものでもよいとされていた。

柿は毒であった。お産ばかりでなく、けがの人などはふさがった口も開くといわれた。（塩原）

さとうは乳が細くなるからいけない。煮つけにもさとうぬき。さとうぐらい入れないとまずくて食べられない。

柿も梅干もだめ。サンマもマスもだめ。

卵もだめ。三年前の古傷がおこる。

イワシ、サケはいい。フにミソかなんかでおかいを食べる（中神梅）

産をすると実家からチカラゴメを一升持ってくる。一生食べられるように。一斗持ってきても「一升だよ」って言う。（深沢）

サンシの食物はオカイと、ミソにかつぶしを食べてれば間違いはない。イワシは食べていい。またマスはいけないがサケならいい。

産後百日ぐらい、油つけを食わない。子どもの目が悪くなるから。ナベまで別にする人もあった。

イワシの字を三つ書いてひたいにはる。（深沢）

とこあげ　ふつうは二十一日目にとこあげになった。家によっては、三十日、三十一日の場合もあった。（浅原）

妊娠中の禁忌　柿＝冷えるから。スルメ＝血を荒す。マス＝血を荒す。三年前の古血を荒すから。

火事を見ると赤いアザができる。死んだ人を見ると黒いアザができる。だからしじゅう鏡か半紙をふところに入れとく。（深沢）

今は柿は栄養があるから沢山食べるように指導する。（深沢）

兎の肉を食べると三つ口の子ができる。（小平）

産後一週間はナンドで過した。そのあとは明るい部屋に移った。二十一日間は汚れているので、仏壇、神棚などの供物は一切禁じられていた。井戸水を汲むこともできなかった。（浅原）

子を産めば百日は不浄といって男より先には風呂に入らない。母親はオブスナ様には行かない。（浅原）

始めて勝手をする時　「ハライ給え、キヨメ給え」と言って塩をまいて勝手へ立った。一週間寝ていた。（深沢）

チブク　オビアキまで遠慮する。（深沢）

神社へおまいりするのは、お産のブクはいいが、死にブクはわるいという。

鉄砲ぶちは、お産のあったうちへ行って火をもらっていくと、獲物が余計あるという。（長尾根）

間引　いかを食べると子どもが降るという。生のいかを食べすぎて死んだ人もいる。（塩原）

子のできない人　子ができない人は子沢山の人の腰巻きを借りてす

るとできる。（深沢）

生理帯　むかしはモッコを自分で縫った。腰巻きなんかで。心配でしかたなかった。薬局でビクトリヤを売るようになってから、とてもよかった。（深沢）

生理　女の子がメンスになった時、赤飯をふかしてやった。自分もそうしてもらったから。

今の子は早い。それをハバ（自慢）にして話す。（深沢）

(二) 生児儀礼

産湯　納戸の下とか便所に捨てる。（小平）

タライは嫁にくる時持ってきたものをおろして使う。お湯は畑へ穴を掘って捨てる（深沢）

大昔は、ナンドの下に穴を掘っておいて、そこへお産の洗い水、とりあげ水などをながしたという。その後は、あきの方（これは暦をみてきめた）に穴を掘って、そこへあけた。（浅原）

産着　お宮参りに着せる。嫁の実家でカサネを作って贈る。産着の背中には小さなお守りをつけた。（小平）

オシメ　むかしは浴衣とフトン皮、と相場が決まってた。浴衣のきれいなのはお客に行く時など使うように上げておいた。

昔と今ではオムツの使いかたも違う。今はただ股にはさむだけでオムツカバーで止める。

昔はオシメカバーに苦労した。綿を入れて横に長いオシメの形のオシメカバーを縫ったり、毛糸で作ったりした。今は同じことでも言い方がきれいになった。（深沢）

オボタテ　産むと一生くえるようにと家人が御飯一升煮る。オボタテといって神様にあげる。大勢でたべるとオオグラシができるといって、なるたけ大勢集めてたべてもらった。（浅原）

一生幸福なように、一升のごはんを炊く。オブタキごはんといい近所の世話になった人や、年寄を呼んで食べてもらう。

その時、朱のもの、赤い色のものを燃すとウルシにかせない。おわんをひとつ燃した。

ごはんが残れば家の衆が食べる。一升ぐらいじゃ残らない。（深沢）

産見舞　組合、親戚の人が布をくれる。また実家から米、カツブシ、三十日にはオボギをもってきた。これを着せてシユウトが抱いてオブスナ様に詣る。この日赤飯をふかすがこの日のお祝いをオバヤキという。（浅原）

孫だき　子どもが生まれると、嫁の里の親が、うぶぎをもって孫だきに来た。子どもが生まれるとなるべく早く来た。（浅原）

おひやまいり　お七夜に、赤ん坊をつれて、自分のうちと隣り二軒合せて三軒の便所まわりをした。うちで、赤ん坊の額に犬という字を朱で書いて便所まわりをしてきた。おさごをもって行って、便所にあげてきた。このとき、橋を渡ってはならないという。おびや（生まれて二十一日目）がすむまでは、橋を渡ってはならないという。その前に橋を渡ると、あたまの脳のかたまるのが遅くなるといわれている。

おひやまつりに、赤ん坊をつれて行くのはうちのとしよりがふつうであった。（浅原）

オヒヤ神参りはお七夜にやる。額に硯の筆で犬という字を書いて、自分の家と、両隣りの便所にお参りさせる。その時、オサゴを紙につつんで持っていく。また、割箸を割らないで持っていき供える。（小平）

この日「犬」という字を額に書いて紙に包んだオサゴを持って三軒の家の便所に詣る。自分の家の便所だけに行っていれば他人のことは判らないから他家の便所にも詣るのだというオヒヤマイリといい、取り上げた人が抱いていく。（浅原）

お七夜に橋をよけて、近所の三軒の便所を回る。オサゴと豆煎りを持っていって便所の中へまく。

それを拾って食べると虫歯にならない。これは赤ン坊の仲間入りで、

近所の家では五銭か十銭お金をくれる。これを子の貯金の始まりにする。

サンシはお七夜まで石橋を渡らない。土橋ならいい。（深沢）

お七夜に、赤ん坊をおぶって、おさごをもって便所をまわってくる。自分の家の便所に行き、近所を二、三軒まわってくる。便所をおへやという。（神梅）

三軒の近所の家を回わった。額に犬の字を墨で書いてもらった。赤飯とおさごを持って行った。この日に、髪毛をすり落した。（塩原）

名付け　お七夜に間に合うようにつける。姓名学などによってよい名を選ぶ。ただし、名負けをする場合もあり、届けたのと呼び名と違う人もいる。

いくつかの名前を書いてカンジョリにして稲荷様にあげ、子供に引かせてつける家もある。名前は半紙に書いて大神宮様に貼っておく。トメ、スエ、ナカなど簡単な名も多い。（小平）

お産婆さんにつけてもらう。三つぐらいいい名前を考えてもらい、神棚へ上げておく。子どもにくじを引かせて選んだ名をつける。或は夫がくじをひく。

お寺でつけてもらう人も。名前をつけると命名○○と書いて、生年月日を書いて神棚にはる。（深沢）

生後七日目、命名する、いくつも名前を考え、大神宮様に教わってこいといって、紙に名を書いてあげて、子供がひいてくる。（浅原）

名付親　太田の呑龍様や産婆につけてもらう。三つの候補名を稲荷様にあげてそのなかから選ぶ家もある。高島易断の姓名（判断）学などがあり、画数や陰陽、五行、満点はとれない。字の意味（干支）音、姓の最後の音、名の最初の音を合計した画数が最も重要である。女の子は名前だけよければよい。（上桐原）

オブアキ　男二十九日、女は三十日にする。女は汚れているから一日遅いのだという。狸原では観音様にお参りする。（小平）

男児生後二十九日、女児三十日、妻の実家から一番初めの男児、女児共に贈られるオボギ、黒紋付をきせてウブスナ様（天神様―菅原神社―）に詣って（オボヤキという）から実家にお客に行く。（浅原）

宮まいりを塩原では生まれて二十九日目に宮まいりをしたが、桐原では二十一日目、川内村では三十日目に行なっていた。

親もとからウブ着がとどく。それを着せて赤飯をもって神社へ行っておがむ。

たいていサンシのおばさんが抱いていく。居なければ産婆さんを頼む。子どもたちに赤飯を分けてやる。

お産見舞のお返しは赤飯にスルメを五枚ぐらいつけてくばる。重箱のお返しは豆かアズキを入れる。

なおオビアキは男の子二九日、女の子三〇日。（深沢）

赤ん坊のとまりそめ　ここでは、どの子ども、とつぎ先で生ませた。生まれて三月目に入らないうちに、赤ん坊を母親の里へ泊りそめにやった。一晩ぐらい泊って来た。母親がつれて行った。このときお祝い着をもらった。（浅原）

食い初め　男女とも百十日目にする。石をオカズにして食べさせる真似をする。歯が丈夫になるという。膳椀は新しいものを買ってやる。（小平）

男女共に百十日目、赤飯をふかし黒いマインを拾ってきてお膳にのせオカズとしてたべさせる真似する女児は高いお膳、男児は低いお膳で与えた。（浅原）

百日目に食初めを行なった。歯が強くなるように、膳の上に、ご飯と石二つのせて食初めをやった。（塩原）

食いぞめは百十日目にする。子ども用の茶わんとハシを買って一人前のお膳を用意する。

おかずは小石をきれいに洗って、二つ皿にのせて膳に置く。すぐ出してしまうが、ごはん粒を口に入れてやる。（深沢）

食い初めは、お誕生から三、四カ月、百十日めで、男女とも同じである。この日は、赤ん坊に石をなめさせて、赤飯をくれて、お頭つきを飾って祝う。つぎの子ができるまで水ひきをかけちゃって大事にする。小学校に入っても乳をのんでいると、女の子のばあい、月のものが長い（おもい）、ふといから、いいかげんでやめろという。どんな豊かな母乳でも、八カ月過ぎると栄養がなくなる。ほとんど水だけになる。便も母乳なら、百日のたれっ子といって、やわらかい。ミルクはどうしてもかたくなり、おしりがきれる。授乳が順調だと、栄養がよくいきわたり、顔などめきめき大きくなる。母乳の少ない子には、おも湯をとって飲ませた。ひきわり飯のおもゆはいいという。（上桐原）

㈢ 育　児

カニババ　赤子が生後、三日ぐらい黒いウンコをするが、これをカニババという。昔、ある産婆が胎盤エキスだといってもち帰った。しかし、カニババをもっていかれた赤子は寿命がちぢまるといわれた。カニババは難病にきいたとか。（戸沢）

初の糞をカナババといい、墓場あるいは畑に埋めた。（浅原）

七日め　お便所参り。頭に「犬」という字を書いて、おさごをもって産婆が抱いて向う三軒両隣りのお便所をお参りする。犬のように、じょうぶに育つようにという願いがこめられている。橋渡りについての禁忌はない。（上桐原）

うぶすな笑い　赤ん坊のねながらの笑いのことをいう。つまり、うぶすな様が胸中におられる、ということだろう。（上桐原）

初めてくれるもの　ホウズキの根を煮じて飲ませた。又は、薬屋からマクリを買って来てくれた。（塩原）

毒をおろすために、産まれるとホオヅキの根をせんじて飲ませた。虫がおこらないという。腹がへっているから一日位しやぶっていた。あるいはマクリをお湯をかけてしゃぶらせておいた。（浅原）

お乳　一昼夜ぐらいくれない。泣くようだらさとう湯でものませる。ホーヅキのつゆをのませると虫がきれる。（深沢）

スリエ　乳が足りないと、米をふやかしてすって与えた。これをスリエといった。（浅原）

乳歯　はやい子では、四カ月めの後半から、はえはじめる。はやすぎるのは弱いというが、そんなこともない。十月とお歯はよくない。（上桐原）

初誕生　餅をついて、背負わせて、十五個のあん入りの餅の上を歩かせた。歩けば一生丈夫であるとされていた。（塩原）

誕生餅をついて祝う。「寿」と餅に書いて組中、親類に配る。箕に餅を入れこれを踏ませたあと、餅を風呂敷に包んでしょわせる。踊ったものである。（浅原）

餅をつく。お金を背負わせて餅を踏ませる。餅は近所、親類に配るが、塩アンである。その子が甘くみられないようにだという。

反対に、四十九日の餅は甘いほどよいという。（小平）

モチをついて子にしょわせる。一升のモチを紅白二つに分けて丸める。それをしょわせる。ヨロヨロするから、すぐおろしてやる。実家へはタチモチ（切りモチ）にして持っていく。別に誰もよばない。くばるだけ。（深沢）

歩く　いまは、はやく七カ月位で歩きだすのがある。ふつうは、誕生前後にはじめて歩く。はやすぎるのは弱いというが、そんなこともない。昔は、年寄りがいて、ひまにまかせて、おぶっていたため、どうしてもおそくなった。（上桐原）

初正月　男は破魔弓、女は羽子板。（小平）

初節句　たらのひらきの干物を二枚と吹き流しを現在も男子の場合贈る。女子にはおくりびなである。（塩原）

女の子はおひなさま。男の子には吹き流しをおくる。お返しはさくらもち、かしわもちを返す。（深沢、小平）

拾い子　身体の弱い子供は、仲人の人のカド（三本辻）にサンダワラにのせて捨てた。これを拾ってその家の子にする。それから連れてくる。拾った人はおもちゃなど買ってくれた。その後三～五年は節句に拾ってくれた人の口に合うものや暮にはお茶一本（四半斤）位届ける。病気見舞をしたり御祝儀には呼んだ。（浅原）

虚弱児は丈夫な人から腹掛を縫ってもらったり、身につけていたものをもらって着る。葬式の旗で三尺をつくる。三十三色の布をもらってきてチャンチャンコを作って着る。或は七軒の家から布をもらってきて七色ギモンを作って着る。こうすると丈夫になれるという。（浅原）

生れつき弱い子は四才位になると、ムシが出ないように虫封じした柱に、オガミヤサンに書いてもらったり、柱に釘をうって、虫がおこると釘の頭を打つ。（浅原）

厄年子　「厄年子は役に立たない」といい三本辻に捨てて、拾ってもらった。その時拾った人に、お礼を少し出すだけで拾い親ということはない。

成人して親子げんかの際に、「おれは三本辻から拾われて来た子だ。拾ってもらえなければ死んでいたはず。少しでも役に立てばよい」とけんかの種にすることがあった。（塩原）

サンダワラに乗せて三本辻に捨てる。トリアゲバアサンが拾ってくれる。（小平）

おくまんまいり　一才にならない子どもが、ほうそうをしてすぐに、長尾根のおくまんさま（熊野神社）へ旧三月十五日におまいりに行った。それは、ほうそうが軽くすむようにということであった。ほうそうが無事すむとお礼まいりに行った。つれて行くのは、誰でもよかった。（浅原）

長尾根にあるおくまんさま（熊野神社）はほうそうの神社である。祭日は旧三月十五日である。この日は、むら中でおこわをあげに行った。

むかしは、一才未満と小学校三年生ぐらいの子どもがほうそうえをした。ほうそうが軽くすむようにと、赤ん坊をつれておまいりに来た。おまいりに来る人は、おさごとおさけ（おみきすずを二本さげてきた）をもって来た。おまいりには、よそむらからも来た。ここへおまいりに来たのは戦争前がさかんであった。これを、おくまんまいりといった。

なお、おくまんさまへおまいりに行ってから、さんだわらに、赤いへいそくをたてて、それを三本辻へおくりだした。（長尾根）

産育関係俗信　ほうきをまたいではいけない。

便所をきれいにしておけば、お産がかるいという。

おへやまいりはお七夜のときにする。

赤ん坊には産着をかけて、嫁の母親がだいて、三ところの便所をまわった。おさごをもって行ってあげてきた。犬という字を、ひたいに書いてもらった。これは、イヌのように、世話なしに育つようにということであった。（長尾根）

子さずかり　昔から、三年子なきは去るといういい方があった。草津の湯が効く。

男の不妊は、耳下腺炎がもとだという。

子どものさずからなかった夫婦が、離婚して、再婚すると、双方ともに、子宝にめぐまれる例が、よくある。（上桐原）

生まれかわり　死んだものが、よその家に生まれかわった話しもきかない。（上桐原）

生きかえり　死んだものの、復活した話しはきかない。（上桐原）

ともばらみ　ともばらみはよくない。どちらかが重くなるという。（桐原）

死産児　生まれてすぐ死んだ子は納戸に埋けた。（小平）

子供の遊びの行動範囲　子供の頃には上の台、間坂、戸沢、桐原の連中がよく一緒になって戦争ごっこなどをして遊んだ。渡良瀬川まで

いったこともあるが、たいてい村内だけで遊んだ。青年会に入る時分になって初めて村の外に出ることが多かった。（上桐原）

水泳ぎ　渡良瀬川ではよく泳いだ。当時、水泳ぎができない子はいなかった。（上桐原）

ハダカで水あびした。男の子がいない時にしかあびない。男の子とはケンカばかりした。（中神梅）

子守り　経済的に苦しい村中の人の場合は通いで子守りをした。戦前は沼田、黒保根あたりの遠くから来る子もいた。これは住込みである。これらの子守りは村の学校に半分位通わせ、先生もそれを認めていた。（浅原）

二、年　祝

七五三　女は七才・三才、男は五才の時に祝うが、昔ははでにしなかった。かすりの着物に縞の袴をはいて、氏神参りをした。（神梅）

年祝い　男子は十六才で誕生日に赤飯をたいて屋敷の稲荷様にオカミ上げといって供える。判を作ってもらったり、せんす、脇差しがもらえた。女子の場合は十二才から十五才の間で赤けだしを作ってもらい処女会に入会した。昭和初期まであった。内祝いとして赤飯をたいたが本人には神様に供えさせなかった。（塩原）

昭和九年生れの女の子に、十五年の時に長い袖のきものを作ってやった。おびときだから。

五つの時はハカマギだといって服を買って着せたぐらい。（深沢）

七十才　古稀の祝い。数年前に、六十年に一辺の年回りで、老人に紫の布団を送ることがはやった。（神梅）

七十七歳の祝　火吹竹を作って親戚に配った。近所が火災の時にこれで吹けば、火を除けるという。（神梅）

七十七歳の祝いはとくに祝わないが、お祝をしたときには、おかえしに火吹竹をつくってよこした。火事のとき、この火吹竹で吹くと、災難をまぬがれるという。

お祝いは霜月十五日にする。（浅原）

八十八歳の祝い　女は赤い帽子・赤いはんてんを着せて、酒・魚で祝う。身内の者が何か祝い品を買ってやる。神社参りはしない。（神梅）

八十八才の祝いは、米の祝いという。このときには、自分の娘たちが、赤い帽子、ちゃんちゃん、着物、はきものなどをつくってくれた。霜月十五日に、親戚の人をよんで祝った。おかえしには、名入れの風呂敷などをくばった。（浅原）

六十才の人（還暦）はとくに祝わなかった。（浅原）

八十八才には赤い帽子、赤いチャンチャンコを子供が贈ってくれる。昔は親戚に紅白の餅をひとかさねづつ配った。今は小さな写真を配る。（上神梅）

長生きの相　血統もあるが、耳の遠い人は長生きするという。女好きの人は長生きする。無理をした人は、長く続かない。（神梅）

厄年　男二十五、四十二才、女十九、三十三才が厄年で、成田山へお参りに行った話も聞く。最近は正福寺でも厄除けをやっている（三年くらい前からのこと）

男女とも四才も厄年だということもいわれている。（茂木）

男二十五、四十二歳、女十九、三十三歳、荒砥の産泰様へお参りして、護摩の灰に着物を合わせて来る。最近は穴原・湧丸などへお参りするようになった。

二十歳で兵隊検査、その年に黒の紹の夏羽織を親が作ってくれた。番頭は主人が作ってくれた。そのほかの祝いは特別にしない。（神梅）

三十三の厄年には帯を作るもンだ。一方は黒ジュス、一方は柄ものの帯を姑さまが作ってくれた。（中神梅）

四つの子どもは一月四日に反町の薬師様とか、一月八日に大間々の光栄寺へ厄除けに行く。

厄年は女性は十九才と三十三才、男性は二十五才と四十二才で、この年には厄除けをした。（浅原）

厄年になると大間々の神明様に詣る。屋敷稲荷に詣る人もいる、神様に行って年をもらってくるという。節分の日家で厄年のはらいをしてから年もらいに行く。本人だけ神様（天神様）に行って豆撒きをする。こうすると年が一つふえて（一つ余計に年をもらったことになる）厄年を除けられるという。（浅原）

大間々の光栄寺にまいってゴマをたいてもらう。十九の時ウロコの帯を買ってもらった。（深沢）

厄おとし　節分の豆を紙に包んで、中に金をいれて、あたまのいたい人はあたまを、のどのいたい人はのどをというように、いたいところをその包みでこすって、三本辻へおいてきた。このときふりかえらないでおいてくるものという。これは、豆まきの晩に、まめまきをしてからやった。これをやくおとしといった。（長尾根）

四つになると男でも女でもソリマチのお薬師さまにまいった。

大間々の光栄寺にまいってゴマをたいてもらう。

太田の呑竜さまへ連れてく人もある。（深沢）

三、青年集団

青年会と処女会　青年会・処女会とも、尋常小学校か高等科を出ると入った。処女会の方は結婚までだったが、青年会は二十五くらいまでで、結婚している人も中にはいた。補修学校（夜間）に行っていた。青年会は、個人の決った家を借りて集会場にしていた。青年会が畑を借りて耕作していたこともあった。（神梅）

青年団に学校を卒業するとすぐ入会する。十五歳から三十歳ぐらいまでで、結婚すると抜ける。青年畑という実習地があり、白菜・大根・馬鈴薯などの野菜を作って、売って資金を得た。危険箱を置いたり、雪かきをしたり、奉仕活動をした。年一回剛健旅行といって、徒歩旅行で、尾瀬・日光・菅沼・鬼怒川などへ行った。映画会もよくした。

結婚式には青年の座敷に呼ばれたり、お仲間として仲人のお供をしたりした。（神梅）

青年会には十六才から三十才まで男子は入られた。婿の場合は酒一升出して仲間入りになった。

芝居や祭典の事を会として行なった。（塩原）

夜学　青年は西山の中腹の学校へ、夜学に通った。かすりの着物に地下たびをはいて、荷物を風呂敷に包んで行った。男が夜学で、女は昼間に裁縫を習った。店でヒヤス（豆腐の冷ヤヤッコ）をよく食べたが、盆暮勘定で借りて置いた。（神梅）

力くらべ　かつぎごと、俵、天神様の拝殿前にあった石、コマイヌ、等、棒押しもやった。（浅原）

夜遊び　二、三人で川内村の方にも行った。ハタヤの若い娘のいる所に行ったものである。（浅原）

ハタヤの住み込み娘はサトの方から来た。四十年程前には遠くは東北地方、県内では新里村、粕川村、下仁田などから来た。娘の賃金は盆、暮に湯衣、下駄を買ってやり、あとは小遣銭程度。前借があって逃げられると結局はそれっきりである。流れ者のカイコビョウと仲よくなって逃げた例もある。（浅原）

若衆が五、六人組んで、新里の方まで夜遊びに行った。ノゾキが専門で、ヨバイなどは聞かなかった。娘のいる家を二、三軒回り、寄りこんでトランプやカルタをして、しゃべっていた。先方でもよく待遇してくれた。着物にはんてんを掛けて、下駄ばきだった。アシナカでは具合がわるかった。（神梅）

夜遅く帰って、朝早く草刈りに馬を引いていくので、居眠りして落ちたり、オカボの草むしりに出て、畑で夕方まで眠ったこともある。（神梅）

昔は道が悪かったから、夜遊びも提燈つけていった。目ざす機家の家に行くと提燈を消して、そのサマ（窓）にかけておいた。うっかり提燈を忘れて帰ってしまった。翌日、自分では行けないので、子供をやって、自分も後からついていった。子供は、そのサマの前で、大声で「コレカー」「コレカー」とどなった、などという話もあった。（桐原）

高津戸や川内村に行った。川内には機織女が多く、そこに遊びに行った。村内は割合少なかった。（浅原）

ヨバイ　小平の奥ではお蚕時期にあったという。女の許に行って寝すぎて夜があけ、朝起きて「いい蚕だね」と挨拶したという。度胸のよい例である。子供ができても一緒にならないのが多く、どこかにくれてしまう。そのあと親が認める例は少ない。

若衆がひやかしに行くのを主人がやかましくいい、若衆のうらみをかつて、庭先に石塔を並べられたりしたという話もある。（浅原）

よばいに娘の家に行った。赤い布が窓から出ていれば待っている印だった。白い切れの場合もあった。その長短でいろいろと合図があった。（塩原）

夜這いに壁に穴をあけて這い込んだ人の話を聞いた。（深沢）

四、婚　姻

(一)　結婚の条件

嫁入り前　好きな人があっても親は全然とり合わない。嫁に行って姑さまの髪ぐらい結えないと困るって丸マゲのゆいかたを習った。でも実際に丸まげをゆってやったことはなかった。（中神梅）

ムコ　いやな仕事、骨の折れる仕事はムコがする。ウワダには座れない。村づき合い、お精進などの時座敷へ座れないこともあった。三年ぐらいはシタデに控え目にする。（中下神梅）

婿は上座に坐るな、骨の折れる仕事は婿にさせろ、という空気があった。（神梅）

婿は村づき合いのため、お精進の時などに酒一升出して新入りの意を表わす。特別に婿の仕事というのはないが、骨の折れる仕事に進んであたるようにする。（強戸では婿が池にほおり込まれたという）（神梅）

嫁取り　「嫁は里から貰え」、百姓するのに働き者だから。「嫁はオシッコするだけでも、里へ出ろ」、嫁は少しでも下の平地の方を希望する。「婿は床の間から、嫁は台所から貰え」、婿は財政の豊かな家から貰い、嫁は財政のいくらか低い方から貰う方が、働き者でいい。（神梅）

ことば「嫁に行く時はションベンするだけでも街へ出ろ」という。

「嫁は里からもらえ」「ムコは床の間から。嫁は台所から」という。（中、下神梅）

「嫁は台所からもらえ、婿は大尽からもらえ」という。

また、「嫁は北からもらえ」ともいった。（長尾根）

「嫁は山手からもらえ、婿は里からもらえ」という。（塩沢）

嫁のつとめ　嫁は「あしかけ三年」といった。三年のあいだはがまんしろということである。また、「嫁三年、婿八年」ともいう。嫁が嫁ぎ先になれるのは十年かかるといわれている。（長尾根）

嫁といわれるのは、家によって多少のちがいがあるが、子どもが学校へ行くくらいまでである。

嫁のつとめは十年といわれた。また、嫁婿十年ともいった。あしかけ三年ともいった。嫁は、その家に十年つとまれば、どんな家でもつとまるものだといわれた。（浅原）

嫁の生活　ああ、くたびれた、と腰を伸ばして空を見上げたら「鳥がとぶんなんか見てるな」って言われた。辛い時はツゲでもきないか

なって思ったこともあった。

昼寝なんかとんでもない。横になったらどんなに楽だんべ、と思った。今はゴロゴロしてて天皇陛下みたいだ。（中神梅）

嫁にきた時、姑さまにまだ這えない子がいた。その子をおぶって子守りしてると、恋愛みたいね、と人によく言われた。（中神梅）

姑さまが五時だよって声をかける。もう少しで赤ン坊が寝る、と思っても仕方ないから起きておぶっていろりの火をつける。朝めしの用意をしておいて繭を煮る。

夜なべはつくろいもの。今夜は針を持たなくてもいいかな。と思ったが、毎晩かかさず針を持った。子ども九人生んで、七人元気でいる。（中神梅）

嫁の年季　嫁の年季は十年と言った。もの日にさとへ帰る時は一晩か二晩泊る。五十銭ぐらい小ずかいを貰って行った。さとのおっかさんに小ずかいを貰ってきて、それを大事に使った。

お客に行くとさとのおっかさんが送ってきて、一晩泊っていく。（深沢）

嫁の権利　親は自分の子どもが片付くまでは自分で切りもりするのが普通で、嫁に勝手はいっさいさせるが、身上回しは死ぬ前に譲る。（神梅）

シンショーを譲る時。舅が丈夫なうちは遠慮する。昔は死ぬまで親がした。自分の子がかたずくまでゆずれない。

今は違う。そういう観念があるから嫁のきてがない。

親はもらうに苦労、もらってまた苦労する時代だ。（中、下神梅）

見合　結婚は見合いが多かったが親がきめておしつけるのもあった。式のその晩まで顔を知らないで、初めて会うというようなことだった。（茂木）

昔もよく遊んだけれど、恋愛結婚は少なくて、見合結婚が多かった。（神梅）

むかしは見合いをしただけでご祝儀になる。

昭和九年、粕川から嫁にきた時は馬に乗ったり、歩いたりしてきた。荷もつも馬で運んだ。子どもの頃から馬にのれたから特別どうということはない。（深沢）

恋愛　ナリアイといい、その機会はお盆、村の祭、正月、大間々祇園の時などであるが、これが結婚まで進むことは少なかった。若衆が娘を管理する風はなかったという。（浅原）

恋愛結婚　くっつきあい、なれあいなどといった。福岡に八木節があるとかなど、祭りをきっかけにすることが多かった。それがもとで、遊びに行って、そのうち数多く行って、好きになったとかきれえになったとかいうのや、ぐうぜんにはなしていて、好きになったりするというのもある。（上桐原）

恋愛結婚の仲人　おれのとこもってこう、何とかしてやらぁ、という男気のひとに頼むが、頼まれたひとは、まとめあげるまでは、大ごとだった。できたものをまとめるのはらくであり、結ばれてしまえば、本人次第だから、ふたりがまじめなら、かえって楽であるともいう。（上桐原）

結婚年令　明治のころは、十三、四才の嫁がふつうで、早ければ十二、三才、男の方は十六才というのもあった。（茂木）

婚姻圏　川内村が多い。最近は里方つまり佐波郡東村笠懸村なども多い。行くのは川内村はマバラであった。山中筋もあり特にどの方面が多いというのはない。（長尾根）

村内は割合少ない。川内との往来が多かったので婚姻も村内より多かった。その他新里村、山中が割合あり、大間々や桐生は少ない。（浅原）

嫁をもらうのは、国定では東村から、強戸では小作争議で有名な太田から、田沼在は栃木からなどである。むらうち同志での結婚はすくなくなっている。昔からも少ないが塩沢は、わりあいに多い。（上桐原）

東村や黒保根村との縁組が多く、川内の方とは少なかった。交通の便が大きな理由で、時間的にも、きょり的にも山を越えればすぐの所だった。

「方が悪い」というのは断わる理由にしただけで、どちらの方がいいとはいわない。（茂木）

血族結婚　結婚の相手は、だいたいが親せきどうしで七、八割くらいになった。交流が難しかったり、親せきをふやさない――交際を広げないためだった。（茂木）

この村では近親結婚は少ない。山の奥に行くと多かった。これは親戚がふえないからよいとも云った。イトコ同志のトッケエコもあったという。また女の方が年上の場合もあった。近親結婚すると不具が生まれるからよくない。（浅原）

駆け落ち　親が許さなければ、駆け落ちをする。仲人がそそのかして、既成事実をつくり、その後、嫁方の両親家族の説得にあたるのもある。そんなにいいんならしょうがないということになり、たいていは、許される。同輩のものが、ふたりをとりもつということはない。（上桐原）

(二)　婚　約

仲人　部落の有志や親せきのおじさんがなる。名付け親のような人がやる。

「仲人ナナデンボウ」とか「仲人のぞうりきらし」ということばがある。（茂木）

現今と違って以前は男女（男で二十四・五才、女で二十二・三才位）を仲人がみつくろって結んだ。なかには仲人を商売みたいに、専門的な人がいた。普通、年頃の娘をもつ親が仲人する人にふだんから頼んでおいた。式の時初めて行き合ったというのが昔は多かった。（浅原）

仲人のお礼　どのくらいということはなく、適宜やるもので、四分六分で、もらい方が多く出す。日もきまっていないが、現在では近い日の日曜日にお礼に行く。（茂木）

仲人礼は貰い方がくれ方の二倍くらい出して、両方からお礼をする。酒二升も付ける。「仲人ノゾウリッ切ラシ」「仲人の七デンボウ」などという。（神梅）

仲人とのつき合い　たのまれ仲人なら三年。親の生きているうちはする。

三年たったあとは、できごとのあった時だけ。

「仲人はゾーリ切らし」って言うから容易じゃない。（中、下神梅）

お仲人さんには、ご年始お歳暮を三年する。あとは特別な事があった時だけ行く。（深沢）

頼まれ仲人は三年だが、普通は親の生きているうちはつき合う。盆暮やお産など、何かあれば顔を出す。（神梅）

仲人からのお歳暮　昭和十一年結婚したが、その年の暮に、お仲人さんがミを持ってきてくれた。男さまが、その時一升マスを返した。ミマスも言うのだ、と聞いた。（深沢）

クチガタメ　縁談がまとまるとクチガタメをする。ちょっとした御祝儀なみのことをする。

仲人はもらい方へあいさつしてから酒一升もって（仲人が買う）くれ方へ行き、組合や親せきが集まっているところであいさつをし、酒を半分飲んできめて来る。一つのものを同じに分けるといい、もらい方に戻って来て報告をすませてからごちそうになる。（茂木）

話がまとまると先ずクチガタメで、仲人が婿の家から一升持って行って飲み、話をつけて嫁の親と共に組廻りする。「こういうわけで家の娘をくれることになりました」と挨拶する。帰って婿の家で式をし、仲人の名刺をもって隣組を廻り「この人の世話で○○から嫁をもらうことになりました」と挨拶する。これで婚約成立である。（浅原）

近所まわり　クチガタメの日に、仲人は名刺をもって近所の家をま

わって挨拶して来る。手ぬぐい一本とか、半紙一帖くらいに水引きをかけたものなどをもってまわる。（茂木）

トマリゾメ　クチガタメをすませたあと、嫁が婿の家に泊ることをいう。最近はないが、クチガタメをしたその日のうちにする場合もある。特別の事情のある場合、出入するため、もらう方の親の具合が悪いときなど、早くカタメておくためにするもので、あとは住来は自由である。婿の家の組合を廻っての公認だから仕事を手伝ってもよいわけである。トマリゾメをしたあと駄目になることもあるが、それは例外で、普通は仲人のいう通りにする。（浅原）

クチガタメができると、適当な時期に仲人が話をして娘を連れて来て泊り初めをする。（茂木）

アシイレ　口がためは、いい日を選んでする、このときは、嫁さんを仲人がつれてくる。近所の人（代表として一名ぐらい）を呼んで、酒を飲んだ。

口がためをすると、アシイレ（トマリソメともいう）をするのが多い。中には、顔だけだして帰るというのもある。一日か二日泊って行き、式までのあいだ、双方、行ったり来たりする。うちによっては、その間に、嫁になる人が、仕事の手伝いに来る場合もある。口がためをして、そのまま先方へ行きっぱなしという例はすくない。双方のわたりがついても、お祝いをしないうちは、あまりおもてだっての行き来はしないのがふつうであった。（浅原）

結納おさめ　一週間前や当日とりむすびの座敷の前に、ヨメが、中宿にいる段階で、やる場合もある。組合の班長が、代表として受け取り、仲人がムコの両親にむかって、目録と品物をつけあわせて、あらためて調べる。「確かに右の通り受け取り候ふ」と裏書きして、はんこを押す。（上桐原）

結納　式の前日、または数日前、吉日をえらんで結納を納める。仲人が背負って来るもので、式の当日、嫁は中宿に休ませておいて仲人がもらい方へ結納納めをして、納まってからトリムスビということもあった。これは縁組がきまった時のきめでやればよい。（茂木）

三円か五円ぐらいだった。（大正・昭和初期）十円は中流以上の家のみだった。「はねをつける」といい、着物の代又はたんすの代としてつけた場合もあった。（塩沢）

赤飯をホカイという入れものに入れて馬につけて行った。片方の場合「片荷」といい、両方へつけた時は一駄と言った。（塩原）

クレモン、モライモン、ウリモンではないからいらないという家もあるが、負担にならない程度で、お互いにホンネをはいて、世間並みに、時代にまかして、そのうちの暮しにあわせて、中間をとることが多い。最近では、金五十万円が相場だという。（上桐原）

仲人が御祝儀の日に持って行くのが多い。タンスを買ってやるのはよい方で、着物をやるのは村の財閥級の家だけである。（浅原）

覚

一、金　五両也
一、金　三両也
一、金　七両也
右之通り慥ニ無相違受納仕候

慶応二寅年
三月廿日
同村
友衛門　花印

結納
御　代
但シ
繭蔵
引清
浅原村

当八　三次郎㊞

同

組合惣代　長右衛門㊞

目録（舞）

一、上下　壱折
一、小袖　壱重
一、帯　壱筋
一、扇子　壱対
一、多て紙　壱折
一、昆布　壱折
一、鯛　壱折
一、家内喜多留　壱荷

以上

年　月　日

住所
氏　名㊞

何某殿

男は八品、女は拾二品

目録

一、御家内喜多留　壱荷
一、御結納金　一金拾五円
一、御肴　一折
一、御小袖　壱重
一、御帯　壱筋
一、御櫛笄　壱組
一、御紅白粉　壱包
一、御毛技鋏　壱個
一、御丈長　壱折
一、御乙女麻　壱折
一、御末広　壱対
一、御熨斗　壱折

右之通幾久しく御受納致被下度候也

御目録壱通り幾久敷目出度正に祝納仕候以上

大正〇年〇月〇日

住所
氏　名㊞

何之誰殿

目録

一、小袖　一重
一、帯　一筋
一、櫛笄　一組
一、紅おしろい　一包
一、丈長　一折
一、結納金　一百円
一、乙女麻　一折
一、末広　一対
一、寿留女　一折
一、こんぶ　一折
一、さかな　一折
一、家内喜多留　一荷

以上

大正〇年〇月〇日

住所
氏　名㊞

何某殿

（これは目録のうら書とす）

婚礼の祝儀受帳　（小平）

迎えダンス　結納の一つになるもので、もらい方から嫁方へタンス一棹を贈る。嫁はこの中へ着物とかその他の衣類などを入れて持って来ることになっている。（茂木、神梅）

お酌着物　もらい方では迎えダンスを贈るのといっしょに、オシャク着物というのを一枚つくってやる。式の日、花嫁衣裳を脱いで着かえる着物で、祝儀の席でお酌をする時に着るものというのでオシャクギモンという。（茂木）

嫁入り衣裳　白もく二枚、それに黒の裾模様を重ねた。きもののタモトを切ったような形で裏つきの綿帽子をかぶった。（中神梅）

ツノカクシになる前のもので花嫁は綿帽子をかぶって来た。トリムスビをするまではかぶっていて、すむととった。（茂木）

島田の道具はムコの家で買ってくれる。マルマゲの道具は自分ちから持ってきた。マルマゲはミツメの時に一度ゆっただけ。（深沢）

マルマゲは髪結いさんや、器用な近所の人に結ってもらった。「よめごちゅうものは金がかかる」って姑さまが嘆いたそうだ。（上神梅）

チュウゲン　荷物運びをする人で、昔は番頭さんがやった。くれ方から一人行きもらい方からも一人来る。都合の悪い所は馬で運ぶ。この人にも普通にふるまい、一見座敷の末座に坐らせた。（浅原）

なお荷物が多いと近代の人が紋入りの弓提灯をもって新栄橋の渡し場まで、或は新栄橋の手前の峠、川内から嫁を迎えるときは長屋根峠まで迎えに行った。

結婚の時荷物を運ぶ役、紋入りのハサミバコをかついで行った。タンスは荷車で持って行く。チュウゲンは番頭さん、近所の人に頼む。双方でお祝いが出るので、頼まれるのを喜ぶ人もいた。（浅原）

結婚式の役一つで、仲人のお伴になって結納を入れたはさみ箱を担いで行く役の人のことをチュウゲンという。昔は馬方にあたる人で、身内や組合の人の中から出た。いまでは自動車を持っていて、運転できる人がやる。

また、イチゲンのお伴もチュウゲンで、どちらも同じ待遇がうけられる。（茂木）

長沢丹次祝儀受帳
（長沢利明　撮影）

㈢　嫁　入　り

嫁迎え　一見とは別に、仲人のお仲間として若衆が一人、挟み箱（衣裳箱）を担いで、お供をして嫁方に行く。嫁方からもお仲間が一人出て、馬を引いて嫁を送ってくるので、二人の仲間が一緒になって、嫁を迎えて来る。挟み箱には結納品や着物などが入っていた。（神梅）

迎えイチゲン　遠方ならば朝、村内ならば昼すぎ、ムコと仲人、兄弟、おじくらいがもらい方からくれ方へ行く。イチゲンは縁側から入るものでトボグチ（玄関）からは入らない。

仲人が挨拶をして、ムコやイチゲンは喜んでくれ方の親族と顔合せをする。そのあとは酒が出るが、オシャクッ子は近所の娘を頼むので、「嫁もらいに行って次の嫁をもらって来た」というような話もできた。

嫁は、したくができるとイチゲンにあいさつに出て来て、そのあとはひっこんでしまう。

イチゲンの宴がオツモリになると桜の花のお茶（サクラ湯）を出した。お茶をにごすことなくという意味という。（茂木）

ムコが嫁を迎えに行くのは男一見と一緒で、午前中である。嫁方で座敷をやってお祝いして、嫁と一緒に出てくる。ムコ一見（迎え一見）と送り座敷が一緒にくるが、中宿で時間をずらして、ムコ一見が先に来る。迎え一見の仕事は嫁を連れてきて、敷居をまたがせれば役は終る。（浅原）

結婚式の当日、午前十時頃、聟、媒人夫婦、親戚代表数名の者が、嫁方へ挨拶に行く。聟は、そこで嫁の父親に連れられて、近所へ挨拶まわりをする。これがすむと、こんどはもらいかたで嫁を迎え入れ、嫁方の代表も迎え入れられて、酒食でもてなしをする。これを一見座敷といい、一般の披露宴の客と区別する。（大間々）

イチゲンは貰いがたの人数を多くする。イチゲン負けするもンじゃない。（深沢）

一元客は、くれ方よりもらい方のほうが一人ぐらい多く行くべきだという。もらい方の一元はまけるものではないといった。（浅原）

ある席で、イチゲンで飲んできたから、遠慮しますと断わり、焼酎とうと称して、水をちびりちびりやっていたら、ばれてしまい、焼酎とうならいけるはずだと、こらしめられて、えらいめにあった。（上桐原）

もらい方で、嫁迎えの当日、はやく、ムコといっしょに嫁迎えにいく。（上桐原）

おしょうばん　イチゲンザシキは徹夜で飲む。イチゲンを酒でぶっつぶすまで飲ませるために村の中でも酒がたくさん飲めて座もちのよい人をオショウバンとして頼む。うっかりするとオショウバンが逆につぶされてしまうこともある。（茂木）

新客のイチゲン様には、オショウバンがでる。いわば、イチゲン座敷の進行係である。初めに、「ゆきとどかないものですが、オショウバンに命ぜられて参りました。何も知らないのですが、何分よろしくお願いします。」と、頭をさげてあいさつする。たいらになったら、おしゃくっこについでもらう。責任ある役なので、ことのおわらないうちは、やたらひょろひょろ出たりはいったりできない。

いっぱん座敷　イチゲン座敷のつぎは、イッパン座敷になる。ムコの朋輩、青年団、つきあい仲間など、若い衆の座敷である。このとき、ヨメは、着物を着かえて、あっちこっちとついで歩く。（上桐原）

いちげん座敷　いちげん座敷では、いちげんが顔合せをする。おじ、おば、いとこ、はとこなどをむかえ、夜八時～真夜中にかけて約三時間する。

多いときは、十五人もで、かわりばんこでするほどのこともある。このときは、嫁が、用意してきた茶菓をだし、茶をつぐ。（上桐原）

女イチゲン　女のひとは、翌年のお節供にあとからよぶ。（上桐原）

送りイチゲン　くれ方で、迎えイチゲンを送ってくるのをいう。送りイチゲンは、準備がすむまで中宿にいる。（上桐原）

出会いイチゲン　結婚式場で、初めて対面する現在のやり方である。昔も、ヨメ、ムコ双方が遠いときには、その中間に、式場を設営することがあった。（上桐原）

オチカヅキ　仲人が婿一見を連れて嫁の家に行き儀式（嫁方の親戚を一応紹介する。紹介が終るとこの座敷に嫁をちょっと紹介する）をする。オチカヅキという。これで嫁方の親戚は引込む。婿は床柱を背にして坐る。三宝にのった三つ重ねの盃が全部廻って終ると、最後に仲人は「めでたくおさめます」といい、次で祝宴となる。これにはもらい方だけが出席する嫁はこの間仕度したり、氏神様に詣り、これから嫁をもらってくることになる。（浅原）

嫁の家でのオチカヅキが終ると婿は先に帰り、仲人と嫁は嫁方のオクリ一見と共に来る。組の者は中宿に迎えに行く。オクリ一見はトリムスビの終るまで中宿に居る。トリムスビの式が終って一見座敷となり、嫁が床柱を背に坐りムコ一見が行なった時と同じことをやる。なお婿取りの場合は嫁は一応出て中宿に行き、婿が入ってから嫁が入る。（浅原）

門送り　花嫁は、くれ方のイチゲンと一緒に行列をつくって行くが、村の人たちが、ちょうちんをつけて村境まで送って行った。（茂木）

中宿　花嫁の行列は、直接もらい方へ行くことはせず、もどり道にならないような家を中宿にしてそこで休憩をする。お茶を一ぱいもらうくらいで、席についたらオチッキのモチ（トリノコモチ）スワマのようなものが紅白でお椀に入れて出された。

この間に仲人はもらい方へ行ってあいさつをして、座敷の都合などもみた。（茂木）

カミからきたひとも、ヨメはノボリコミをするのがいいといって、いったん嫁ぎ先より、シモへくだって、シモから上る。中宿は、たいがい、嫁ぎ先よりシモの隣家、あるいは懇意の家に設ける。ここで花嫁は仕度や化粧なおしなどをする。仲人はすでに家に入っている。（上桐原）

仲人が嫁と新客を一緒に連れてくる。中宿に居て、仲人が「向こうに行って連れてくる」といって世話役一人がついて行く。次で式が始まったからと迎えに行く。迎えに来てトリムスビとなり、それが済むまで一時間以上一見は中宿に居る。（浅原）

中宿から嫁入り（入家）まで、座敷仲人が中宿まで、迎えにでて、一行を案内する。（上桐原）

門謡い　中宿から、座敷仲人が、ヨメを案内して、当家の庭先まで致着すると、外と内の双方に、門謡いの若い衆が、謡いてとしてひかえている。内側のを受人といって、ひとりで玄関内、土間のところに控えている。入家式を終えたヨメは、最後に、受人の「はやすみのえにつきにけり。」で玄関に入る。外の、小謡い連中会、十人余が行列のあとにつき従う。いずれの面々も、ちょっとソラではいえぬので、だれにでもできるように、節まですっかりかいておいた扇をちらちらとみながら謡った。ヨメゴの列のあとに仲人がついてきた。（上桐原）

嫁が婿の屋敷に入る時、カド（門）の所で一行が提灯を付けて明るくして、近所の人が「高砂や」などのカド謡をする。カド謡が始まってから、嫁はカドに入る。三尺くらいの竹の先を割ってタイマツを作り、迎えの人が火を付けて明るくして待っていた。提灯は弓張り提灯を新しく貼り替て使う。（神梅）

門迎え　花嫁の行列は、昔は頂上くらいまで迎えに行ったのかも知れないが、おぼえてからはちょうちんをつけて庭先に迎えに出ることをやっている。門からは謡で迎えて来る。高砂の一部（コウタイ）で、格式の高い家では、本式にやるころは村の若衆に練習をしてもらったものだった。（茂木）

夕方弓張提灯をつけて嫁を迎えに出る。嫁が家へ入る前に、媒人がカドウタイをうたう。家の中へ嫁が入る時、入口に置いてある青竹をまたがせる。家の中に入ると、姑になる人が、嫁の頭に編み笠をかぶせる。（大間々）

中宿から女仲人が嫁を庭の門先まで連れてくる。すると玄関から上りはなまでしゅうとが連れてきて、ここで物干さおをまたがす。棹の上に上れといい、しゅうとは菅笠を、上を見るな（または笠の下にソマレという意）といって嫁にかぶせ、手を引いて上り口から上げ座敷には仲人ばあさんに渡す。この間謡がある。（浅原）

嫁の一見が家を出る時、嫁は玄関から出て来る。婿の家に入る時は、嫁はトボから入る。（婿は迎え一見から帰ると、縁側から自分の家へ上る。）

嫁がトボから家に入る時、姑になる人が待ち受けて、菅笠を嫁の頭上にかざして、手を引いて家の中に引き入れる。「上を見るな」という意味だという。（神梅）

カドを入るときに「高砂」を謡いタイマツを掲げる。その「着きにけり。」で青竹をまたがせたあとこれを持ち上げる。これは、以後その嫁の住屋になったということで、マーセンボウ（ませ棒）代りだという。縁に上る時、しゅうとめが傘をかぶせて抱き上げる。傘は、上を

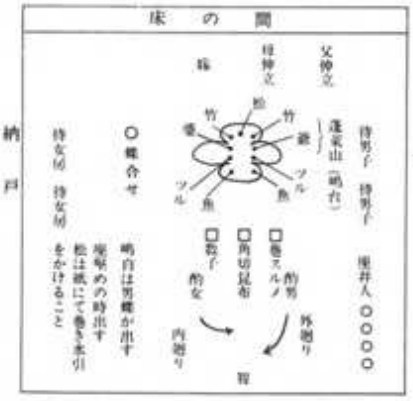
見るな、ということである。

雄蝶、雌蝶の取り結び等あり、ヨメゴノオ茶が最後。その時、みやげに菓子等を出す。（桐原）

嫁を迎えるのはたいてい暗くなる。紋のついた引張りちょうちんを張り替えておいて、つけたり、男の子、女の子が枯れた割竹に火をつけたのを持って、アカリにする。火は門を入る時、ひとつきりだからタイマツでなく、竹でいい。（中・下神梅）

嫁の一行が婿の家の門を入る時、青竹一本を横たえて両方側から持って、嫁が竹をまたいで入ると持ち上げた。「もう帰るな」という意味だという。意地悪い人がいると、嫁が青竹をまたぐ時に持ち上げることもあった。（神梅）

花嫁が家に入る前、庭に竹の棒を一本出しておき、オシャクの子が両端を持ち、タイマツ（竹の束）を一対にして照らして、花嫁が竹をまたいだらオシャクの子が竹を持ち上げて、「もう後へは帰れない」ということをした。これがすむと縁側から上がって直接席についた。（茂木）



おたかもりの御膳

嫁が入る時に、カイドーで組合の男しが二間位の青竹を二人で持ってる。嫁ごはそれをまたいで通る。みんなが面白がって、その時に竹を持ち上げろ、なんて冷かす。タカサゴのうたいをうたう。（深沢）

嫁が家のかいどうに来ると、おしゃくをする男女の子どもが、竹竿を向い合って持ち、嫁がまたぐ際高くしてまたがせた。

またいだら二度と、その家から出ないようにとの意があった。（塩原）

嫁が玄関を出る時、姑さまがスゲガサを嫁の頭の上にかざしながら手をとって入れる。（深沢、中下神梅）

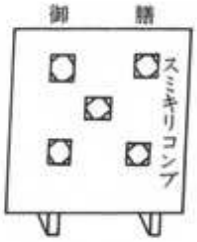
正福寺の辺では、嫁が家に入る時にシュウトが嫁の上にカサをかぶせて歩いたという。（茂木）

とりむすび　とりむすびは、床の間のある部屋でやった。嫁は床柱をしょわせるもんだといった。なお、とりむすびの座敷へは、嫁はとぶ口から入って台所から上った。むこは縁側から座敷へ入った。（浅原）

一見の居ない所で別の室でやる。オシャクコ（雄、雌蝶、小学校一、二年位の子供）には親のない子は頼まない。（浅原）

ウタイをうたいながら奥の座敷で取り結びをする。男蝶女蝶が酒をつぎ三々九度をする。（上中下神梅）

座ガタメにて出す
男には巻スルメをはさむ



男蝶が出す
座ガタメにて出す

女蝶が出す
座ガタメにて出し
女にはカズノコをはさむ

座盃　座盃は「土地の

習慣によってトリムスビを行います」と挨拶する。これは土地によって座敷の内容、式の順序が異るからである。（浅原）

世話方　トリムスビの世話をする世話方は、謡をうたいながら三・三・九度をやらせる。最後は仲人に盃をとってもらって納めるが、大がいのことは仲人に納めてオヒラキにする（茂木）

オマチ女房　嫁の仕度をしている。三人で、後家さんには頼まない。親類の人でも構わない。近所の人だと手伝ってもらわねばならないのに、お待ち女房を頼むと、いいこと幸いに頭をゆったりして役に立たないという。（浅原）

五組の夫婦　新婚夫婦、仲人夫婦、などとおまち女房とで三組そろう。また、しまだい、おしゃくつこなどを入れると五組がそろう。（上桐原）

トリムスビの席には、若い嫁さん（部落で一番新しい嫁）が江戸褄を着て夫婦で座る。男が部屋の中を向き、女は表に向かって座ることになっている。嫁いで来る女に好きな人でもいて、結婚に支障が出た時には、待ち女房が苦情をひきうける役になるという。（茂木）

床とり　仲人は、まるめた紙がながるまでいて、これで、安心したとひきあげる、という話しをきいたことがある。（上桐原）

いっさいがおわると、ミウトが「そこらに寝具があるから、おめえら、どこそこで寝ろ。」などという。泊る客もあるので、適当な場所をみつくろってやすむのも、ひとしごとだ。

夫やシウトが、床を敷くのはきかぬ。（上桐原）

結婚式の料理　米がとれない土地だから、小豆やイモをよく使う。イモヨウカンや、インゲンのキントンはどこでもつくるもので、百合の根のキントンをつくる家もあった。ウドンは組合の人がつくるもので、朝早くから出てつくった。（茂木）

料理番　イチゲンザシキでは、お勝手をまかなうマカナイ方・料理番が一番の権限をもっている。花嫁は出かける時には料理番にあいさつをして、料理番がだめだといえばくれないことになる。そのかわり、まちがった料理は出せない。（茂木）

酒　結婚式の祝いは三日が最低で、三日から四日くらいはかかる。米がないからドブロクは使わず、こもかぶりの四斗樽二本くらいは飲んだ。（茂木）

オチツキノ餅　餅をついておいて、嫁を迎えて三三九度のさかづきをする前に、座敷の客にこれをくばる。（大間々）

オタカモリ　嫁のオタカモリは、一升の米をたいて黒い椀二杯に盛り昔は三日位かかってたべた。しまいにはオムスビにしてたべたものである。今は仲人ばあさんが式のとき少しくれて、これでたべたことにしている。（浅原）

嫁のみやげ　嫁入の時、聟の兄弟姉妹に、身のまわり品などを手みやげとして持って行く。お勝手の手つだい人にはお菓子などを持って行ってふるまう。（大間々）

若衆ザシキ　結婚式のときに若衆のザシキをすることはなく、一般のお客と一緒で、村を上げてのお祝いとしてやる。（茂木）

嫁を送り込むと外の庭でやった。これをノゾッコミザケという。（浅原）

オタイギブルマイ　仲人や、役の人たちのごくろうぶるまいで嫁がオシャク着でオシャクをすることをいう。実さいにはお茶を入れるので「ヨメゴのお茶」ともいわれ、御祝儀のの夜の最後のことである。お茶とお菓子を嫁が持って来るものというが、実際には施主が用意することが多い。菓子はこまかくて数の多いものがよく、お茶はお手伝いの人が入れてくれたのをお盆にのせて出す程度のことになる。（茂木）

結婚式が終ったあと、オタイギ振舞といって、特別オオゴト（骨折り）した者を呼んで御馳走する。これはジャンボン（葬式）にも行なう。（桐原）

二日目、あと片付けをして近所の手伝った人に振舞うことである。（御祝儀の夜やる所もある）またこの日嫁はヒロメビローにしゅうとと一緒に近所廻りをして、帰るとオシャクをする。なお十九区では婿に来た者は浅原村中を廻るので二、三日はかかる。（浅原）

ヨメゴのお茶　嫁さんはみやげの駄菓子などでお勝手の女衆にお茶を出す。そして菓子をはさむ。「嫁さんのお茶」という。（深沢）

一切の式が終って朝方、列席した者全部、近所の女衆、男衆に配る。ヨメゴのオチャを飲まないと帰らないという。客一人一人にお茶を注ぎ、お茶菓子をはさんだ。これは嫁が用意して持ってくるものである。（浅原）

嫁・婿のむらまわり　嫁に来た人は、姑がつれて組内をまわったが、最近は、式の当日にその場で披露するので、まわらなくなった。

婿は親がつれてむら中をまわった。婿の場合には、むらの人と顔をあわせる機会が多いのでこうした。「よろしく頼みます」といってまわった。（長尾根）

二日目には、披露というのでしたくをしてツノカクシもして村をまわった。しゅうとや近所にいるおばさんが連れて（主婦代理が多い）まわるもので、まわる順は都合でよかったが、お寺と瑳峨神社にもお参りした。スショウというので三尺帯か何かをだらり下げてまわった。（細谷戸）

二日め　二日めは、ヨメの近所まわりの日で、半紙一帖か手拭をもって、一日中、むら中くたびれる程歩いた。案内人になった近所の老婦人が、元気なうえに足早でげにこりた。島田を自宅で結い、しずしずと歩かなくてはいけないが着物は重いでせっせと歩いた。ムコなら、男としよりが案内する。（上桐原）

姑さまに、連れられて近所回りをする。神社へもおまいりする。（深沢）

ミツメ　三日目に新郎新婦と両親が嫁の実家に行く。嫁方の家では祝酒、御馳走で迎え、そのあと、むこは嫁の親の案内で半紙をもって近所を廻る。嫁の実家からは両親が送ってくる。嫁の親は新郎の親の案内で組合を挨拶に廻る。「ふつつかなこういう娘をつかわしましたがよろしく御面倒お願いします」と挨拶、手拭をもって廻る。（浅原）

御祝儀の三日目をミツメといい、里がえりをする。オンナイチゲンで、しゅうとやおばが送って行く。ホンビ（式の日）に行けなかった人が行くわけで、このときには中宿はない。この日には仲人はつかず、むこも一緒に行ってひと晩だけ一緒に泊って来ることになっている。（茂木）

ミツメには実家へ行く。ムコと二人で。泊まんない。

ムコと嫁と、仲人さんで行く。オンナイチゲンと言って帰る時叔母さんや姉妹など女衆が送ってくる。（以上深沢）

三日目の里帰りのことをミツメ帰りという。新郎・新婦・媒人・親戚の代表が嫁の里へ挨拶に行く。聟は手みやげを持参する。一行を迎えた嫁の実家では、酒食を出してもてなす。（大間々）

三ツメの里帰りは泊れない。（神梅）

四　その他

嫁が里に帰れる日　嫁に来て三日目。農休みの日でふかしまんじゅうを持って行った。秋あげは赤飯、歳暮には塩びきのさけを持って行った。正月、節供、盆にも帰った。（塩原）

年始は男衆がまわるので、女衆は行かなかった。

一月十五日、十六日には、嫁はお客に行くという。このときは泊ってくる。家によっては、婿も一緒に行った。もって行くものは、その時期にあったもの。

ここは四月三日がひなの節供、このときは、サンマのひらきと、むきのもの（お菓子とか砂糖折など）をもって行った。

五月の節供のときは、タラのひらきと、適当なものをお土産として

もって行った。

七月の七夕のときには、トウナス（数は適当でよい）と土産（これも適当なもの）をもって行った。

八月の八朔の節供（旧八月一日）には葉ショウガをもって行った。そのほか土産は適当なものをもって行った。嫁の里方では、このときまでのおかえしをした。八朔までは、おかえしなしであった。嫁に来て、三～五年のあいだは、うちのためになる品物をかえしてよこした。最初の年は箕をよこした。

歳暮は、親の丈夫なうちはもって行くものだという。このときは、シャケをもって行った。（浅原）

むかしは、五節供のときには、かならず、親元へつけとどけをするものだといった。なお、そのとき、婿が嫁と一緒に嫁の里方へ行く場合もある。お節供には、一晩ぐらいは泊ってきた。

このほかはお客に行ったわけである。

むらのお祭りのときにはお客に行った。

おかいこ前には、これから忙しくなるからちょっと里へ行ってこいといって、嬢をお客にやった。このときは日帰り。

五月五日を中心にして三日間は、あそびじまいといって仕事を休んだ。これから忙しくなるからという。

八月二日を中日にして、祇園、農休みと続いた。このときには、嫁は一晩ぐらいは泊ってきた。このころ、新粉をもって里へ行ったが、この粉のことをほかけといった。里の親のところへもって行ったのである。

お盆のときにも嫁は里へお客に行った。しかし、嫁に来た年には、里へお客に行ってはならないといった。盆様をおくってからお客に行けといった。

彼岸から盆には、親がなくなっている場合には、墓まいに行けという。

秋は、新米をもって里帰りした。米は三升ぐらいで、十一日の末ごろ、日はとくにきまっていない。里が農家であっても、米をもって行った。（浅原）

嫁は五節供には里へ帰るものだという。五節供とは、（一月十五日）、四月の節供、五月の節供、八朔の節供、オクンチ。

一月十五日にはお客に行く。

四月の節供にはサンマのひらきをもって行った。

五月の節供にはタラのひらき。

八朔の節供にはショウガをもって行く。このおかえしは箕。

オクンチにはおこわをもって行く。

むかし、粉ができると（七月中旬）、農休みにかけて里へ新粉をもって行った。一升でも二升でも三升でもよかった。これは、毎年、親もとへ行ったものだが、嫁に来てはじめのうちぐらいであった。その粉で、ふかしまんじゅうでもつくって、とつぎ先へのおみやげとしてもって来た。親もとへ新しい粉をもって行くことをホカケといった。

米ができると、十二月になって、新米を里へ嫁がもって行った。一升か二升、これも親もとへもって行ったものである。これは、ホカケともいうし、お土産ともいった。

お歳暮はサケをもって行った。親があるうちは、お歳暮はもって行くものだといわれている。（長尾根）

嫁が里帰りする日は正月。節句。農休み。盆の十五日、十六日。秋あげには餅をついて大福餅を持って行った。これは米が取れて秋の終りであった。お歳暮には塩びきを持って行った。（塩原）

結婚したその年の暮に、実家へミを持ってった。ミが買えなければメカイでもいい、と言った。（深沢）

三日めは、最初の里帰りである。お茶菓子などを持って、ムコさんと兄弟がいっしょにいく。ムコもひとばん泊まった。はじめてなので、だいじにしてくれる。里の近所、親族へのあいさつは、迎えいちばんの

時すましているので、このときにはしない。（上桐原）
初嫁は、盆のときには里へ帰さなかった。（長尾根）
節供の里帰り　この日は、女衆も骨休めができた。（上桐原）
仲人礼　仲人へのお礼は仲人礼という。ムコ方とヨメ方の負担金額の比率は、六分四分か七分三分で、財産次第である。「トンビのハネ」とはいわなかった。（上桐原）
仲人とのつきあい　「仲人三年」とひとくちにいうが、子どもでもできれば、やっぱり男二人くらいまではでかけるのがふつうで、きりがつかない。仲人礼の額は少なくても、仲人とのつきあいは、七十になっても、二人で丈夫ならしたものだ。仲人すれば、あなはかがにぎやかだ、というくらい結局ながいつきあいになる。といっても、たいてい盆と暮れのつきあい程度である。（上桐原）
ヘソクリ　ヘソクリができるのは姑さまだけ。嫁にはできない。くず繭を売ったりした金は姑さまのもの。嫁は実家のおっかさんに貰う。黙っていてもおっかさんが渡してくれた。（深沢）
めまし　妻が夫より年上のことをめましという、「めまし夫（おっと）をすごす」ということばがある。「つ年上のかみさんはごくいいという。「金（かね）のわらじをはいて尋ねてもいない」とまでいわれている。（浅原）
のつつけがみさん　姑のいないところへ嫁に行った人のことをいう。これは、姑づとめがなかったので、まわりの人たちは、うらやましがったという。（浅原）
離婚　離婚のことを縁切りという。
結婚して、三年たっても子どものない場合には、ものもいわずに縁切りをしてもよいといわれた。この場合は、仲立ちにたのんで縁切りをした。この場合には、たんすは嫁にかえすのがふつう。
仲人については、いい世話はするが、悪い世話（離縁話）はしないといって、仲立ちをするのをいやがる人もある。
離婚の場合、子どもがいる場合は、子どもをつれて出る人もあるし、おいていく人もあって、どちらとはきまっていない。（浅原）
結婚式当日、花嫁が逃げてしまって、母親が代わって嫁の座について間に合わしたことがあったという（茂木）
扶持持ち　昔は扶持を持って来た人がいた。女中も連れて来た。有名な話は、東村花輪の大黒屋から「三石十二人扶持、番頭一人女中三人」といわれた。五十四年前のこと。扶持といっても金で持って来た。番頭は死ぬまで、その家に仕えた。女中は年頃になると嫁にくれた。（塩原）

五、葬　制

(一)　死の予兆と死

死の予兆　鳥が鳴きながら尻尾を動かしている。その方向に死人が出るという。鳴き方が違うのである。（浅原）
鳥が静かにのろまげに鳴いたり、家の近くで鳴くと、人が死ぬという。（神梅）
シニ、シニといって、四つ鳴いて、二つ鳴くと不幸があるという。また鳴に場があるともいう。（茂木）
今まで来たことのない人が、訪れて来ると、暇乞いに来たと見られて危いという。（神梅）
百度参り　天神様に行き百度拝む。木の葉を百枚もって一枚ずつ神前におき、百回の数をあらためる。（浅原）
六合神社や相生の日限（ひぎ）り地蔵で、病気が直るようにお百度をふんだ。（神梅）
ヨビモドシ　自音寺の住職の河内良存さんの父のはなし。脳溢血で倒れた時のこと、気が遠くなって、ふと気づくと、川原に立っていた。向う岸は極楽のお花畑のように美しい風景が展開していて、一人の女

が、川を渡って来いと、しきりに手まねきする。そこで川を渡ろうとすると、後から村人の声で、渡っちゃだめだと、大声で引きとめるものがあった。はっとして気がつくと、正気にもどっていた。村人が魂を呼びもどしてくれたのだ。（高津戸）

死にそこなった人の話によると、川の向うに美しいところがあり、そこで誰かが手招きをしているので川を渡ろうとしたら、足をひっぱられたので行けなかった。そこで気がついた。あのとき川を渡っていれば死んでしまったのかも知れない。

また、耳もとで大声で呼ぶ人がいるので返ってきたら助かった。今泉敬太郎さんもそんなことがあった。（高津戸）

魂呼び　人が息が切れそな時に「センドウもうせ」と言いながら、二軒在家の神明様の社殿の板をたたきながら回った。それが聞こえれば助かるという。（戸沢）

ここでは特にない。座間からまた人に、オコリをとると生きかえると聞いたことがある。（茂木）

人玉　二十才前に見ないと、その人は一生見ない。直径十五～二十五cmぐらいの火の玉が、地上十mくらいの所を青火を引いて、波をうつように上下しながら行く。シラサギが尾を引く時も光るという。（神梅）

二十才まで見なければ、一生見ないという。人玉は十二様から十二様までとぶという人もある。（茂木）

死後　人は死ぬといい処に行くという。十万億土に行くという。（戸沢）

葬式の総名　葬式のことをトムライ、ジャンボンという。大人はトムライの方を多く使い、子供はジャンボンと言っている。（二軒在家）

葬式　ジャンボンともいう。生れかわった話はない。魂呼びを昔は行なった。七日間は家の棟に魂がいるとされていた。なお昔は四十九日目が「オタナアゲ」現在は三十五日になった。ささかくし（神棚の神々をかくしておいたささのこと）を取り三本辻に出した。（塩原）

葬式の客は泊らない。遠かったりして泊る時は一回仁義して、戸を開けて一旦出てから家に入る。

近場に兄弟でもいればそこに泊る。

その晩、施主の家では風呂をたてない（中、下神梅）

葬式に泊ると一週間泊る。だからたいがい帰る。ほんとうに顔を見るだけだ（中神梅）

葬式の客は泊れない。遠方の客で泊るには、一度トボをまたいで家を出てから、戻って来て泊ることにする。（神梅）

葬式の夜　施主の家ではお風呂をたてないことになっている。今でもたてない。（神梅）

葬式の仕事分担　亡くなると隣組の人に集まってもらって相談をし、仕事の分担を決める。医者、役場、寺に行く人、引物の注文、穴掘り、棺桶を作る人、告げなどである。女衆は主として煮炊きを受け持つ。（小平）

死人が出るとすぐ隣組が寄って爾後のことについては組長が中心になって役割を決め指図する。但しそのオカミサンが身持ちであると遠慮してもらう。通知は身内の者から知らせる。寺には組の人が知らせをして寺の都合を聞き頼んでくる。（浅原）

なお、お布施などについての話合いは施主或は近い兄弟などがやった。

死後、隣り組に話すと、組合の伍長が知らせてくれる。組合の者が集まり神棚を笹の葉で隠したり、諸準備をしてくれる。（神梅）

葬式組　葬式組というのは特になく、隣り組でやっていた。（戸沢）

隣組への礼　故人の子ども連中が相談して、手伝ってくれた隣組の女衆にぞうりやエプロンなどを買ってお礼としてやる。これは最近やるようになった。（神梅）

葬儀の日取り　隣組と施主が相談して、暦を見て日取りを決める。

友引や寅の日を嫌う。午後一時の出棺が多い。寺の都合も聞く。（神梅）

暦をみて決める（小平）

ご祝儀より広い範囲で呼び、遠い親戚、従兄弟まで来る。（神梅）

ささひき　死者が出ると神棚に笹の葉をあげ、葬式がすむとそれを三本辻へ捨てにいく、このとき、サン俵と飯盛しゃもじ、竈の灰、お祓いなどもおいてくる。（桑津戸）

人が死ぬと神様には半紙を張っておく。折の内では、笹を神様にあげておく家もある。

これは四十九日のお棚上げの時に取る。（小平）

死人が出るとすぐ、神様に不浄を見せてはならないといって、笹の葉をとってきて神棚に上げる。これをメカクシという。葬式がすむと、笹の葉を燃やして、その灰を飯盛りシャモジといっしょにキョッパシ（俵の蓋）にのせて、三本辻へ送り出す。（高津戸）

死人が出ると神様には紙をはり、笹の枝を立てた。これは仏様に縁故のない他人にやってもらった。（浅原）

臼の絵　人が死ぬと、神棚に半紙を張り、その後すぐに臼の絵を書き、それをトボグチに逆さに張っておく。（小平）

火伏せ　死者があるとイロリは使うけれども、新しく作ってもらった御幣を、四十九日間イロリのカギ竹に結えてつけておく。これを火伏せという。（浅原）

告ゲ　葬儀の回取りが決まると、親戚へ知らせるため、告げの使者が二人一組になって行く。弁当は持たず、先方でもらって食べる。先方では清めの酒を出したり、タバコなどを出す。（神梅）

死亡通知をする人をツゲという。ツゲは組合のひとが二人選ばれた。ツゲに行く人には帳場からワラジ銭が出た。告げに行った家では必ず御飯を一杯だした。食べないと帰してもらえず、清めとして一杯頂いた。（戸沢）

不幸のあった場合、つげになるのはかならず二人で組んで行った。つげの人がいくと行き先で食事を出してもらった。つげをむかえた家では、食事を出さないと義理がたたないという風習があった。食事は何時であってもかならず出した。これは米のめしであった。箸だけはつけてくれといった。酒があれば酒を出した。（浅原）

隣り組みの人が二人で出る。そのとき施主はワラジ銭をもたせてやった。告げを迎えた家は、食事時でなくも一飯の用意をし、酒を出して浄めてくれという。二人揃ってくると告げがきたかという。（高津戸）

普通の仕度で二人で出る。迎えた家ではキヨメ酒、ナマグサなどをおひるに出した。今は施主がガソリン代・昼食代を持たせる。（浅原）

かならず二人で組んで行く。昔は全部徒歩だったので、一日に回れる範囲はきまっていて、告げは幾組も出た。

告げにはかならず何か出して、箸だけは取らせるもんだという。しかし、ウドンは出すものではない。続くといって嫌がる。（小平）

枕直し　死後、北枕に直したり、部屋をナンドに取り替えたりする。魔除けとして、布団の上に刀を半開きにして置く。鎌を置く家もある。この刀や鎌は施主が墓地まで持って行って、棺を穴に降ろしたあと、縄を切るのに使う。（神梅）

死者は北枕に寝かせ、身体の上にはナタや鎌などの刃物を魔よけに置く。魔物が死者を飛びこえると死者が息をふきかえすという。猫が死者に近づくのをきらう。（戸沢）

魔除けとして死人の上に刀、鎌、鉈などの刀物をのせる。（小平）

枕飯　組の者が寄ると、お茶を飲まないうちに、とがない米を釜に入れて枕飯を少したく。飯は煮ただけそっくり椀に盛って、箸2本立てて供える。（神梅）

枕飯を炊いた燃し屑と杓子とお寺で呉れるオハライ（篠竹に和紙をつけたもの）を、出棺の後、三本辻に捨てる。（小平）

枕飯は近女の女しが米をとがずに一合ほどたいた。室の外でサンマ

タをたてて鍋でたき、いつも使っていたシャモジで盛りつける。サンマタと灰はサンダワラに入れて、その上にシャモジをのせ三本辻に捨てた。枕飯は死者の枕元に置き、使っていた箸をまっすぐに立てる。（戸沢）

竹一本、木二本を結わえて三脚を作り、鍋を吊って炊く。火を燃す時には手でなく、足でつっくべる。普通の時、三本木とか、足で火をくべると叱られる。（小平）

昔は玄米を、外庭で木を三叉にしばって、これにナベをつるしてたいた。燃した炭火はサンダワラを起してその上に灰を入れ、オハライで家を祓ってそれを一緒に立て、シャモジを一緒に三本辻に出した。（浅原）

死ぬとすぐ玄米を鍋でたいた。生木三本を立てて、そこに鍋を吊し、外でたいた。この枕めしを死者の枕のところにおくことが一番先だった。この時の灰、もえ残りを三本辻に出した。（塩原）

枕団子（チョコダンゴ）　スエノカサ（オツユのお椀の蓋）に一つの白米を石臼でひく。石臼は反対回しにする。粉は白の真中に集まる。その粉でチョコダンゴを三組作る。これをしんぜると死人の枕を取る。楽にするという。だから枕団子という。

枕団子をゆでた汁は、枕飯のオツユにする。（小平）

米の粉は石臼を左回しにして（最初だけ）、粉をひき、庭に三本マタの棒を組んで、米の粉のだんごをゆでる。その灰はサンタワラバシにのせて三本辻に出す。だんごは二つ重ねて死者の枕元に供える。（神梅）

チョコダンゴは死後すぐつくり、おちょこの上に団子をのせる。七日七日につくった。（戸沢）

四十九個こしらえて、葬式が終わると血の近い人が半紙にくるんでもらって帰る。子供に食べさせると風邪をひかないという。（戸沢）

枕だんごはチョコダンゴともいい、二個重ねて三組作る。水ノミダンゴ、「七日七日のチョコダンゴ」といって、七日ごとに墓の前に供える。このダンゴを下げて食べると、かぜをひかないという。（神梅）

人が死ぬとすぐ枕めし、枕だんご（三つ、チョコダンゴという。下にチョコにしてその上に丸いダンゴをのせるのを三つつくるわけである）をつくる。そしてナンドに北向きに寝せて二枚屏風を逆さに立て枕許に供えた。これは葬式の時までおいて、埋葬する所まで持っていく。（浅原）

(三)　葬　送

湯灌　兄弟、子供達がやる。ヨ（ユ）モク―湯沐―は今夜六時からというようにツゲに伝えさせる。湯灌の湯はカマドでわかす。縄のタスキ、オビを着てやる。（浅原）

しょう油樽に湯を汲み、線香を束でいぶしながら脱脂綿で男しが上の方を、女しが下の方をふく。ふいた脱脂綿は棺の下に入れる。湯灌をする人は血の近い人がやった。（戸沢）

葬式の前の晩、隣組の人が帰ってから、近親者が湯灌をし、納棺をする。男衆は褌一つになり、荒縄を腰に巻き、女衆は荒縄をタスキにかけてやる。上半身は男が拭き、下半身は女が洗ってやる。

湯灌した水は川に入らないようにいける。醤油樽は人目につかないようにつぶす。（小平）

納戸の死者の所へ近身者が集まり、遺体をきれいにする。男はふんどし姿で縄帯をたて結びに締め、女も薄着になり縄帯を締める。やかんか鉄びんに水を入れて、あとから湯を入れて沸かし、その湯でガーゼを濡らして布団の上の遺体をはだかにしてふく。線香をたいて匂いを消し、酒を吹きかけて遺体をやってくもむ。湯はしょうゆ樽に入れて使い、あとで親戚が墓地へ運んで棄てたり、底を抜いてこわして、棺と一緒にいけたりする。（神梅）

ステバ　褌一本で湯灌に使ったものをしょう油樽につめて渡良瀬川に捨ててきて、家に帰ってから風呂に入り、塩で清めた。ステバは高津戸発電所の近くにあった。昔は馬の死骸を捨てたところで間坂の共有山であった。（戸沢）

お通夜　昔は、兄弟や子供は起きていた。葬式の日までやった。（小平）

坊さんはいい家にしか来ないで、身内の者だけでやる。夜十二時ごろまで。（神梅）

タイヤのお膳　死んだ夜（従って子、兄弟、親戚の者などが寝ずにお通夜をする夜）湯灌を終えての夕食をいう。このときは豆腐の厚揚げ（ナマアゲ）をおかずとすることになっている。（浅原）

入棺　親子兄弟など死者に近いものが立合って納棺する。その際、死者の好んでいたものなど入れるほかに、ズタ袋をかけさせ、隠し金といって着物のあちこちに銭を結びつけてやる。六文銭は三途の川の渡し賃だが、この着物につけていった銭は、途中でとられないようにという。（高津戸）

以前は立棺だったが、最近は寝棺が多い。遺体の下へ座布団を入れたり、回りに又力袋をかって動かぬように固定する。棺の蓋は裁せて置き、行き会いたい人がいれば蓋を取って会わせる。棺巻き布と、棺かけの布を掛けて、台の上に前向きに置く。（神梅）

棺は坐棺が多い。寝棺だと死人の足の上に乗って拝むことになるし、坐棺の方が経済的に安い。（浅原）

タテガンが普通であった。土葬。（戸沢）

経帷子を左前に着せ、裾のところに六道銭を入れてやる。六道銭は今では紙でできている。

その人の生前の好みの物を入れてやる。煙草好きには胴乱やキセルを入れる。ただし酒だけは入れない。仏様がにぎやかだとか、異常の子が生まれるという。（小平）

晒しを一疋（二反）買ってきて経帷子を作る。戻し針をしないし、結びも作らない。物差も使わない。出来上ったものは釘に掛ける。だから新しい着物を釘に掛けてはいけないという。（小平）

カタビラを縫う時は麻の糸で結び目をつくらずに皆が寄って縫った。（戸沢）

カクシゼニ　棺には文久銭をキョウカタビラの端に麻でしばって入れてやった。これをもってあの世に行くのだが、途中でみつかるとエンマ様に取り上げられるという。死んでいってあの世での小遣銭である。その他棺には普段使っていたものを入れてやる。（浅原）

頭陀袋　頭陀袋の中には六文銭を入れた。三途の川を渡る時の渡り賃が六文だという。六文銭の他に栗の穂を入れた。栗の粒は小さいので、死者がそれを数えていてシャバに帰ってこられないようにするため。（二軒在家）

死装束　遺体には男はわらじ、女はぞうりをはかせる。カタビラはさらし布を、しまいを結ばないで縫い放しにして作り、左前に着せる。手甲・脚絆に杖（長さ約一m）を持たせる。（神梅）

飾り団子　六個の団子ともいう。前日に作っておき、式の当日に飾る。六升の米をひいて作った。ひき方は、秋団子と違って普通である。

竹の串に六個の団子をさしたものを六本、両側に供えるので、団子は七十二個になる。団子は麦藁をまるめた芯につける。芯の頭には色紙で作った花（赤で花、青で葉を作り、竹を割ってはさんで花の形にしたもの）をさす。（小平）

葬式の日に、といだ米の粉三・五升または四・五升をこねて、四十九個の飾りだんごを作る。径一寸ぐらいのだんごを七個ずつ串にさして、高さ30㎝、径15㎝ほどの麦わら束にさし、麻紐でしばって立て、上に金・銀紙や色紙で花を作ってかぶせて飾る。二つ作って祭壇の前に飾るが、最近は皿に盛って供える家もある。だんごはあとで近い親戚や隣組に配る。（神梅）

道具　葬列の道具はその日に組の者が作る。前日には作るなという。午前十時の出棺だと間に合わないので、出せない時だけ、前日に用意する。花籠（色紙や小銭を入れる）、六角塔婆、六地蔵、四本旗、穴回りする竹と旗、ショウコウバナ（長さ15㎝ぐらいの竹に色紙を付ける）などを作る。（神梅）

共有の物があり、使用した家で預かって置いて、次の家の時に送る。（神梅）

床番　葬式の穴掘りを床番といい、六人ずつ組んで順番に当る。家の女衆が妊娠していれば除外される。（深沢）

穴掘りは穴掘帳面ができていて、順番にやってもらうことにし、妊娠している家はのぞく。穴掘りは四人でやった。昔は穴掘り銭を村中から集めて歩き、掘ってくれた人にやった。昭和五年頃、穴掘り銭は一銭であった。（上桐原）

穴掘りは六人（四人、五人の所もある）が、順回りの番で当り、施主の決めた所に穴を掘る。順番なので女世帯では女も出る。穴は必ず当日掘り、トメ穴はできない。

穴掘り道具は共有物（非常小屋に預けて置く）または施主の物を使う。使った道具は一週間墓地に置いて、七日に家へ持って来る。

穴番には清めの酒と、ムスビ・おかずも出すが、余すものではないので、小さいものを出し、残さず食べる。（神梅）

寅久保（第十七区）一～三班では穴掘り順番帳があって、上の組一人、下の組一人（家族に妊婦があると除く）、石の多い所に墓があると四人で掘る。穴掘りは必ず葬儀のその日、朝から出て掘り、掘っておくことはしない。前日に掘った穴はトメアナといい、いけないこととされている。葬式が続いた場合、第一回に掘って同じ隣組内で次のときは掘らない。同じ人は続いて掘らず、掘る人が交代するということである。二つあることは三つあるといって、同じ隣組で二年続いて葬式があったとき、年を越えても同じ人が二回続いて掘ることはしない。

穴掘り道具は施主の家のナタ・トウグワ・シャベル等を用い、使用後一七日の間、穴を掘った所に置く。オキヨメといってツマミ、酒を出し途中に飲んで作業をする。穴掘りはいやなことなので順番にしたという。穴掘りに報酬はない。（浅原）

村中六十何軒で順番に穴掘りに当る。六人だったが、四人になった。穴番には清め酒が出て、穴を掘る。穴番が葬列の時に墓標を担ぎ、音頭取りになる。（神梅）

穴っ堀りは隣保班単位でおこなった。たとえば、むらの上に不幸があった場合には、下の隣保班から穴っ堀りがでることになっている。むかしは、大勢の人をたのんだ。以前は二隣保班の人が出たが、現在は一隣保班の人が出るようになっている。

一回で四、五人で穴堀りをした。穴っ堀りの人が棺をかついだこともあった（四人でかつぐ）。

穴っ堀りの人には、清め（酒）を出した。また、わらじせんも出した。（浅原）

葬式は穴ばんが音頭とり。穴ばんは隣組の人とは別に、帳面があって、寺で決める。こんだはあの人を頼もう、ってことになる。穴ばんがあれば、全部世話してくれるかららくだ。今でもある。

おらが方は自然消滅した。（以上中、下神梅）

穴堀りの時にボヤでたき火をする。墓を埋める時も火を燃して、灰を墓にかける。（神梅）

本膳　昼食を本膳にして食べてもらうが、ブッツケ本膳にして早くすませたり、七日の膳も、ブッツケハダンといって、その日に略してする家も多い。野辺送りから帰って食べる。（神梅）

葬式の日の食事として、御飯に豆腐汁と生揚げを出す。これを本膳という。手伝いの人には、朝食がわりに、また式の前にくる親戚にも出す。（小平）

飯・豆腐汁・ガンモドキ（平椀）・煮豆などが付く。隣組の大人も

子供も坐る。膳椀は二、三軒の倉のある家が持っていて、共同のものはない。（神梅）

オチツキ　坊さんが来ると、オチツキと言って団子で汁粉を出す。その後でお茶を出す。お茶を下げると読経になる。（小平）

坊さんが来ると、お茶を出し、落チツキとして粉餅・吸い物を出し、本膳に坐ってもらう。食事後、拝み始める。（神梅）

オベントウ　僧侶がお経をあげている間に、重箱に飯を入れ、箸二本で隣組の代表の人がはさんで参列者全部にやり、オテノクボでたべる。（浅原）

焼香　家の中で親族だけの焼香をし、庭のところで外来者の焼香がある。（小平）

葬儀の知らせ　近所の人が念仏鉦（かね）をたたいて回ると、村中の人が集まって参列する。（下神梅）

葬列の役割　役割は前に決まっている。施主が位牌、膳はその連れ合い。松明と提灯は身内の人。松明、提灯、棺、位牌、膳の順序である。（小平）

高張提灯（身内の者）、位牌（後継ぎの子か、施主が持つ）、膳（看病した女）、六地蔵、花籠、竜タツ、のぼり旗、棺（穴番の人が六人いて四人ずつ交代して担ぐ）、一般の人の順で行列を組む。子の葬式には、親は見送りしない。露払いは出ない。（神梅）

1　六地蔵　隣組みの人が行列の前に墓へ
2　灯籠　親戚の人
3　四旗　親戚の人
4　花かご　組の人
5　天蓋　目上の人
6　膳　長男の嫁
7　位牌　長男
8　棺　組合の人
9　墓標　親戚代表
10　杖　（高津戸）

出棺　坊さんがドラをジャジャンボーンと鳴らすのを合図に出棺となる。そのため、葬式のことを「ジャンボーン」という。坊さんは墓地へ行かないが、行く所もあって、そこでは穴回りするいっぱいドラを鳴らす。出る時に竹鳥居はくぐらせない。（神梅）

親族や組の者が庭に降りて葬列を組む。竜頭（たつがしら）2、花籠2、のぼり4、六地蔵、六角塔婆、メハジキなどは組の人が作って置いて、それぞれ持ち、葬列を組む。庭に竹四本を立てて、その回りを三回半回り、墓地に行く。家によって、墓地へ行ってから、穴回りを三回半することもある。（神梅）

座敷から縁側へそこから出棺するが、そのとき相続人は肩にサラシの袴のような布をかけて出る。嫁は頭に三角の布（ツノカクシ）をつける。（浅原）

棺は縁側から出る。庭でアナマワリといって左廻りに三回半廻った。そこで坊さんが拝んで引導をわたし墓地へ行った。（上桐原）

親しい男性は紙で作ったカンムリをつける。施主は布のカンムリをつける。（小平）

アナマワリ　棺は穴掘りの人がかつぐが、庭に出てから左廻りで三廻り半する。これをアナ廻りという。竹を四本立て、寺から借りたハタを立てその廻りを廻る。そのとき行列はハナカゴなど持って廻った。行列の順番は僧侶が指示する。そして墓地に行くには紙で作ったハナオを草履にはさみこれをはいて行った。肩には紙で作ったカミシモをかけて行く。これらは墓地に置いてきた。（浅原）

穴の回りに四本の竹を立て、半紙四枚を張り合わせた紙に坊さんが書いたものを広げて四隅をカンジョリで止めて蓋にする。葬列は穴マワリを三回半回る。（神梅）

庭でやる。葉のついた竹を四本たて、それに、車西南北と南無阿弥

陀仏と書いた紙を張り、この回りを和尚が先導して左回り三回半をやる。

この時、大人の場合には花籠を振る。昔は一銭銅貨で、今では十円銅貨。この銭を拾って鉤竹に吊るすと縁起がよいという。年寄りの人のを拾うと長生きするともいう。また、種銭にする。（小平）

まき銭　花かごの中に入れる金のことで、近親者が出す。今は百円玉で千円から二千円ぐらい入れる。「供養せん」ともいう。（塩原）

花籠の中に文久銭をいれて、まいて歩った。（間坂）

ミオクリ　野辺送りのことをミオクリという。（戸沢）

野辺　出棺して野辺に出る時は、馬を鳴かせるな、あとを引くから。馬には餅をうんと食わせておけという。（神梅）

墓地に着くと、穴の中に棺をおろして土をかける。埋めた土の上に、ノベの灰をかける。ノベの火は穴掘りの時から、ボヤを焼しておく。竹を七つに割って貝ハジキを作って、土の上に六本折り曲げてさし、一本をハジイテ立てて置く。オオカミ除け、マミ除けという。（神梅）

草履　半紙で草履の形を作り、靴のところに入れて野辺送りに行く。その紙は墓場に置いてくる。それ拾って尻をふくと痔がなおるという。（小平）

出棺後　棺が出ると、竹箒の箒で掃き出す。掃き出すのは隣組の女衆がやる。そしてメカイを座敷に転がす。そうすると家族が淋しくないという。（小平）

座敷を親のそろった子供が、男と女ではき出す。隣組の者が一七日（ひとなのか）の飾り付けをする。（神梅）

埋葬　棺を穴の中に降ろす時は、縛った縄を持って下げる。その縄を、刃を向こうに向けた刃物で切る。その後、親族が土を少し埋めて、あと穴番の者が埋める。（神梅）

お墓に行って和尚が拝む。棺を穴に吊るしこむ。そこで施主が縁切り綱を切る。線香を一本ずつコウロウにさして、土をかける。（小平）

埋葬すると相続人が魔除けの刀を腰にさしていったのを抜き、棺をさげていた縄を切る。エンキリ縄という。そのあと参列者が少しずつ土をかけ、次で穴を掘った人が残り全部をかける。家に帰ってくると塩を撒き、御幣でハライ、庭に転がしておいた臼に腰をかけ、タライの水で足を洗った。（浅原）

エンキリ　棺をはこぶのに使った竹をアトトリ（相続人）が切る。これをエンキリという。（戸沢）

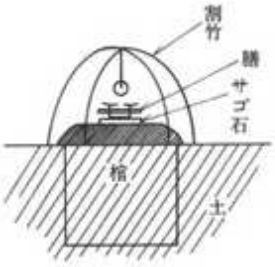
埋ける場所に清水が湧き出たりすると、棺の上に大きな石をのせて浮きあがるのを防いだこともある。（上桐原）

新墓の葬送施設　（深沢）

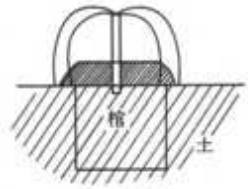
新　墓（深沢）
（長沢利明　撮影）

メハジキ　大ハジキともいう。埋葬後、親戚の人が帰ると、隣組の人がやる。竹を割って、土饅頭の上に弓形にさす。その場合、青いのが内側になるようにさす。割竹の中心から荒縄で石をさげる。石の下にはお膳を置いておくが、石が落ちて、お膳が早くこわれる方がよい

という。膳の下には平らな石を置くが、これをサゴ石という。
メハジキは墓荒しを防ぐためにする。テン死人をかじるといって一番嫌がった。
以上は狸原と茂木のやり方であるが、下の谷田では丸竹の上部を割ってさす。膳はメハジキの外に供える。



（狸原・茂木）



（谷田地区）

メハジキは、そのまま放っておき、改めて片づけるということはしない。一周忌になると風化してしまっている。（小平）
ハカナオンをするとき或は埋めてすぐ棺をかついだ竹を四つに割って・曲げてメハジキをつくって立てる。山犬に掘られぬようにするのである。（浅原）
葬式の日に棺をかついだ竹を使って犬が掘らないようにメハジキをこしらえた。メハジキは一日だけ。（二軒在家）
竹を七つに割って、六本を曲げて墓の上にさし、一本をはじいて立てる。盛り土の上にノベの灰をかけて置く。（神梅）
四十九院（印）　葬式の前に寺にいって書いてもらう小さな塔婆で、七本木と同じようなもの、四十九日まで毎日持っていく、四十九日には七本木を持参し、百日目は塔婆のたてはじめ、三十三年忌は塔婆のたてじまいといい、杉塔婆をたてる（高津戸）
今では四十九院といって、土饅頭に囲いをする。この場合はメハジキをしない。四十九院は丁寧な葬式のときにやる。（小平）

ノガエリ　野辺から帰ると、家の入口に臼を横に描いた絵が貼ってあり、そこで塩をふりかけて、たらいで足を洗うまねをして、身を清める。座敷に上って、清メの冷や酒を一杯だけ飲む。（神梅）
野辺送りから帰ると、玄関先に用意されている洗面器の水で手を洗い、塩で清める。その後、冷酒を盃に一杯飲んでもらう。（小平）
墓直し　今は野辺から帰った夜、身内の者が墓直しに行く。念仏の水を持って供えに行き、青竹を七本に割って一本を立てたまま、他の六本を折り曲げて土にさし、メハジキを作る。割った竹を土まんじゅうの上に四角に並べ、正面に横に何本も並べて階段を作る。墓前に花をさしてきれいに飾る。土まんじゅうは高いほどよい。うんと食った人だという。（神梅）
四十九位や四方鳥居は葬儀屋で買って、墓の上に置く。（神梅）
家に帰ってきて客はオキヨメの膳につく。その間に親戚の者行ってハカナオシをする。ハカナオシは埋葬直後にする家もある。墓直しに行っている間に、近所の人が残っていて位碑を飾り直したあと僧侶に拝んでもらう。これを七日のお経という。葬式の次の日をナノカといいこれを葬式の当日やってしまう。これをブッツケナノカという。従って今ではオキヨメをやっている間に七日のお経をあげるわけである。（浅原）
葬式の夕方、近親が行ってやる。杉の葉を持っていって、土饅頭の回りを囲い、垣根を作る。（小平）
墓直しの時、川原などからサゴ石を拾って来て、位牌の台石として土盛りの上に置く。この石は後まで残る。（神梅）
トムライの翌日に墓なおしをやった。土まんじゅうを整地し、杉の葉をふせて竹をはさむ。（二軒在家）
七日の膳　野辺送りの間に女衆が座敷の用意をしておく。清めがすむとすぐに座敷に上がってもらい七日の膳になる。和尚にはその時、七日の拝みまでしてもらう。

昔は、魚は出なかったが、今では魚のパックでやる。その他、里芋やキンピラが出る。

酒は最初の一杯だけが冷酒で、あとは燗酒になる。

下手をすると御祝儀以上で、年寄りの時などは天寿を全うしたというので歌までやることもある。

七日の膳に坐ったとき、引き物の外に、位牌と飾り団子を二つぐらい紙に包んで渡す。位牌は紙のもので、和尚に頼んで葬式の時に持ってきてもらう。（小平）

ブッツケ七日　野辺送りから帰ると手をきよめ、家に入ると本膳が出される。これを「ブッツケ七日」という。七日目には近所や近い親戚が集まって七日の行事をする。（塩原）

四十九杯　七日の膳のあと、お布施と引き物の他に、白米をスエノカサ（椀の蓋）で四十九杯計って、新しく作った晒の袋に入れて、和尚に持っていってもらう。それを四十九杯と言っている。お寺で、四十九日の間、新仏に供えてくれるという。（小平）

念仏　墓場から帰って、ブツツケ七日のお経がすんで、組の人や親戚の者が念仏をする。親戚や身近の人が、桶に水をおき、一方コップを二つ三つ置いて、それをコップに入れ、次でこれを別の桶に入れるという事をひっきりなしに繰返す。音頭とりがいて十三念仏がすんだところで念仏ダマといって、強飯をふかした握飯、煮しめを配った。（今はお茶菓子となっている）これは概ね念仏の真中頃でいわば中休みである。そこに居る人にも念仏ダマをやる家もある。昔は念仏を始める前にカネをたたいた。これを聞いて、念仏が始まるというわけで子供が集まった。これらにも念仏ダマを出してやり、子供はそれを楽しみにしていたものである。（浅原）

葬式後の夕方、男衆が主体でやる。鉦を叩いて、十三仏を唱和する。最初三べんがえしを三回やり、十三仏を十三回唱える。（小平）

念仏　夕方、身内の者や近所の人が寄って、念仏を唱える。夜、近親者が念仏の水あげに、墓参りに行く。（神梅）

念仏玉　葬式を出したあと、念仏供養をするが、その時に赤飯を握って茶椀くらいの大きさの真丸い念仏玉を作り、念仏をする人々に配る。食いきれないほど大きい。最近はまんじゅうを使うようになった。（神梅）

六個の団子のあまりの粉で念仏団子を作り、念仏を申してくれる人に配る。（小平）

あと念仏　一七日から四十九日まで、念仏をあげる。四十九日に餅はつかない。（深沢）

喪服　男は黒、女は白無垢だったが、最近は女も黒となった。（神梅）

コウデン　コウデンは金が多かった。必ず施主に「線香代です」と言って渡すのが一般的。（戸沢）

十三仏　葬式があるとオタナアゲまで十三仏の掛軸をかけておく。十三仏の掛軸は十二区中でつかっている。（二軒在家）

位はい　家から出た兄弟は戒名を紙に書いてもらっていき、自分の家の勝手の流しの隅にはっておき、水、めしを毎日供え、四十九日目に仏壇の中に入れて線香を上げた。（塩原）

告別式　以前は祭壇がなかったので、座敷に箱をならべて台として、その前で坊さんが拝んで引導を渡し、タイマツを庭に投げた。親族が焼香してから出棺になった。（神梅）

火葬　五、六年前に赤城霊園ができた影響で、火葬がはやり出し、土葬は少なくなった。石塔もカルウトで組んだ納骨式に変りつつある。（神梅）

カルウト　六、七年前から火葬にしてお骨を納める形式の、カルウト式の石塔がふえて来ている。（神梅）

ハカバ　ハカバは共同と個人持ちがあり、埋めるところと詣るところは同じである。（二軒在家）

(三) 葬後の祭り

一七日　親戚や隣組の人もお参りする。チョコダンゴを作って持っていき供える。

七日、七日にお参りする折の団子は、六個の団子の粉を取っておいて作る。(小平)

一七日には坊さんを招き、近所の人も来て墓参りをする。(神梅)

一七日まで、毎日夕方墓へ灯りをつけ墓参りに行く。(神梅)

一七日、身内、隣組の人がお墓詣り

昔は七日毎に四十九日まで丁寧にやった。今は三十五日でオタナアゲとして、近しい人を呼び、集まってお寺を頼み、拝んでもらって焼香する。昔は精進料理だった。(浅原)百ケ日は四十九日に同じ。一週忌、三年忌、七年忌、十三年忌、十七年忌、二十三年忌、三十三年忌で塔婆のタテジマイといい、杉の木の幹の頂上を葉のついたまま削って戒名を書いてもらい立てる。三十三年のトメトウバともいい、これはここだけの習俗だといっている。(浅原)

ショナノカ(初七日)には近親に話をして供養する。(戸沢)

四十九日(または三十五日)　坊さんを招いて拝んでもらう。家の人や身内で用意をして、他人様の手にはかからない。昔は餅をついたが、今はまんじゅうを配る。

これで魂が仏壇に上がり、座敷は壇払いになる。忌切りで、以後生仏でなくなる。それまで線香を一本ずつ立てたのが、以後は二本ずつ立てることになる。(神梅)

四十九日には、いい家では忌切り餅をついた。(神梅)

四十九日のオタナアゲには酒を少し飲む。この日は餅をついて塩あんを入れた。これを親戚に配ったが餅つきの音で死者の魂がグシを離れるという。餅つきは必ず家の中で臼の音をさせてやった。これで忌があけるという。(戸沢)

四十九日は死者は屋根裏から離れないから明りはたやしてはいけない。(桐原)

死後の供養　ショナノカ、フタナノカ、ミナノカ、ヨナノカ、イツナノカ、ムナノカ、シジュウクニチと供養する。墓に詣り、チョコダンゴをあげた。ショナノカとシジュウクニチには必ずおはぎをこしらえ、来た人に食べてもらった。(戸沢)

お棚上げ　昔は四十九日であったが、最近は早くなる傾向がある。三十五日とか三七にやる家も多い。しかも日曜日を利用してやってしまう。(小平)

棚上げ餅　白を四十九日まで使用しないで四十九日目に餅をついて、塩あん入りのものを二個ずつ紙に包んで親類、近所に配る。水引きは白黒のものを使う。(塩原)

(四) 年忌

年忌　一年忌(一週期)・三回忌・七年忌・十三年忌・十七年忌・二十三年忌・二十七年忌・三十三年忌と続く。七年忌ぐらいたたないと石塔は立たない。(神梅)

先祖念回御布施帳
(長沢利明　撮影)

イッシュウキ、三年忌、七、十三、二十三、二十七、三十三年忌をやった。三十三年忌はトムライジメ(トムライアゲともいう)である。トムライジメには杉の芯木を削って戒名を書いてもらった。

イキトウバという。（戸沢）

三十三年忌　トムライジマイで位牌を位牌堂に入れてしまう。墓地にシンツキハトウバ（葉ツキ塔婆）を立てる（神梅）

塔婆の建てじまいで、枝つきの塔婆を建てる。（小平）

三十三回忌の盆になるとトムライジマイに位牌をもしてしまった。（桐原）

先祖念回御布施帳、回忌香料受帳控　（小平）

(五)　その他

流れ灌頂　お産で死ぬと赤い旗を川に立て、皆が水をかけて白くなると、普通の仏様と同じになるという。赤いままだと血の池地獄が渡れず、白くなると渡れるという。（浅原）

お産で死んだ人、赤い腰巻を道ばたの堀に竹で立てて、通る人が左手でひしゃくに水を汲んでかけた。昔したのを見た。（無梅）

ながめの四丁目に、四本の柱があり、赤い布とヒシャクがあって水を通る人がかけてやった。子供の死んだ特などにした。（高津戸）

流れ灌頂という言葉はないが、実際を見たことがある。（小平）

お産でなくなった場合には川に四方を竹でさして、赤い布を麻でしばったのをとりつける。そばにひしゃくと水桶を置いておき、通る人に水をかけてもらった。（戸沢）

産死者が普段身につけていた肌着を裏庭につるしておいて家の者が朝晩乾かぬように濡らしておいた。（桐原）

盆に産死した場合　盆中に産でなくなった人は地獄に行って往生できないというのでスリ鉢を頭にかぶせた。（桐原）

暮、正月に不幸があった時　暮や正月に人がなくなった時は仮埋けをする。坊さんと組の人に来てもらう。ツゲは血のつながりのあるところだけにした。枕団子や枕飯はちゃんとこしらえた。正式な葬式は早くても正月二日すぎにやった。（戸沢）

七日ザラシ　死人の着ていた着物は、家の裏に北向きにかけ、毎日水をかける。仏様のノドが乾かないようにとの意だという。（浅原）

葬式の翌日、死者の着ていた物を洗濯する。布団の皮をむいて洗うか、燃やす。洗った着物は北向きに乾し、七日間水をかける。（神梅）

耳ふさぎ（同齢者拘束）　同齢の人が死んだ時に、二銭を半紙に包んで耳につけた。それをすぐ幣束と一緒に三本辻に捨ててきた。人に見られないよう、ふりむかずに帰ってくる。（戸沢）

同年輩の人が死ぬと、馬糞で耳に蓋をしろという。（小平）

わら人形　一年の中に一軒で二人亡くなると二人目の葬式のときわら人形を作り、墓地に持って行って穴を掘り埋める。（塩原）

生まれ替り　死者の背中に字を書いて埋めたら、違う家の子の背中に同じアザがついていたという。だから死者に印しを付けるな、書いてやるものではな。（神梅）

桐生に手のひらに字を書いて埋めたら、何年か後にその字の書いてある子が生まれた。お墓の土で洗ったらなくなった。（高津戸）

蘇生した話　塩原の不動滝の上のくるまやのせいやんがなくなって、組合の人たちが買物に行くとか、ツゲに行ってくれる相談をしていたところ、棺に入れておいたせいやんがムーンと大声を出して起きあがった。家に居た人は皆逃げてしまった。明治時代のことだという。

死者と猫　今泉二三三氏の何代か前の人が死んだとき、棺の上を黒雲が覆ったので、自音寺の和尚に珠数で雲を払ってもらったら、片目つぶれた猫がいたので、和尚が猫に引導をわたしたらおとなしくなった。（高津戸）

生前供養　生前に戒名をもらっておくと長生きをするという。また、子孫がやくざでも安心していられる。生きているうちに自分の葬式をした人もあった。（高津戸）

ホカイ　親が死ぬと、地家へ嫁や聟に行っている者、家を出て独立している者などが、ホカイ（器のこと）に米三升入れて持って来た。建

てまえの時も同様にした。（大間々）

お祝いの時、餅を入れて持参する容器で、二個で一駄（イチダン）として馬の背に付けて行く。（神梅）

盆棚　組立式で四隅には新竹を立て、三方をチガヤの縄で周らす。この上下両段の縄にホウズキ、色紙などを挟んで垂らす。上の段には生のウドンを掛ける。盆棚の上の段の端に大きなどんぶり様の器をおきイモの葉を敷いて、その中にキュウリ、ナスなどを入れ、別に水の入った壺を置き、一方ミズハギで箒の形のものをつくってもとを紙でくるみチガヤでしばった約二十センチ位のものをつくり、これの頭の方をツボの水で浸して、線香を上げに来た人がキューリやナスにかける。

お盆様にあげる物はお膳に乗せて進ぜる。

盆棚の下にはチガヤで編んだゴザを敷き、素焼のカワラケには、ボタモチ、煮付けなど上段のと同じものを少量のせて進ぜる。これは無縁仏（石塔に判らなくなった者）にやるといっている。一方一人前にならずに死んだ者も盆棚に上れないといって下に一緒に祀る。この盆棚の下の仏様をショウリュウ様といい、ショウリュウ様にあげろといってカワラケに入れて供える。（浅原）

新盆　新盆には新しい盆棚を作る。一代替りのはじめになる。前の仏は古い盆棚に置く。したがって新旧二つの棚が出来る。ショウレイサマといい無縁仏を古い棚の下におく。（塩原）

イキトウバ（桐原世音寺境内）（板橋春夫　撮影）

イキトウバ（桐原）（板橋春夫　撮影）

お盆様を飾る。親戚はウドン、フ、瀬戸物などを持って新盆見舞に来て線香を立てていく。盆棚は組立式で竹は新らしい竹を用いる。（浅原）

寺へのあげものをする。昔は施主が菅笠、ワラジ、草履などを、今はこうもりを寺に納める。寺から塔婆をもらってきて、僧侶が拝みに来たときお布施を包む。（新盆の塔婆は五、六尺のもの、普通の先祖代々塔婆は三尺のもの。新盆のときは両者を立てる）

新盆迎えは施主が行く。昔は提灯もって本堂に入った所の前の座敷にある盆棚の灯明からつけて来て、自宅の盆棚に移した。

盆棚は、チガヤを廻らし上の二段に色紙、ホウズキを飾り、棚にはスイカ、カボチャ等を供え、御先祖様に供えるお膳は台の上におく。棚の下にはサトイモの葉の上にボタモチを入れて供え、ソウリョウ様にあげるという。（無縁仏はもと家があったが遠くに出て誰も供養する家のないのをいい、一人前にならないで死んだ者も盆棚に祀る。）（長尾根）

迎え盆　紋付きの弓張提灯、ローソクを持って、寺の本堂入口にある盆棚から火を提灯に分けてもらってくる。途中で消えると再び寺でもらってきた。今は五百円持って行き、マッチ三本寺からもらってくる。家にもらってきて盆棚の種油の行燈にともし三日間は火を絶やさなかった。（浅原）

送り盆　十六日は墓地に送り、盆棚の竹や花などそこで燃す。仏様はその煙で帰るという。また生竹のはねた音で仏様は帰るのだともいう。送迎にカドで藁束を燃すことはしない。（浅原）

年中行事

はじめに

大間々の年中行事を見ると、ここが東毛地方にあって北部は赤城山や黒保根村に通じ、勢多郡東村にも連らなるという、地勢の特色が出ているので、そちらとの比較が必要になってくる。目立ったことがらをいくつか取り上げてみよう。

正月棚はナラかクヌギの木を割って編んで棚を作り、天井から吊るしたというが（塩原）、前橋市城南地区などのやり方と類似している。利根郡などの山間部で、松坂をコビキでひいて一杯板を棚にしたのと対照的である。平坦部に近い地帯では入手し易い雑木を使ったものであろうが、常設の神棚になる以前の形を示すものといえよう。なお、棚板は二十日正月の朝、屋根へ上げて、年神を送り出した。

三が日の食事の家例として、里芋を食べる家があり、ふつうは二日ごろトロロ汁を食べる風習が多いのに、ここでは六日ドロといって六日に食べることにしている。芋類は稲作以前から大事な食物とされていたので儀礼の日に使われるのであろう。また、三が日に餅を食うとデキモン（腫物）ができるといって、餅を食べることを禁じた家例がある。餅は神への供え物で、供えた後に下げてからでなければ食べられなかったためであろう。餅に対する考え方が現われている。

竹ぼうきの作り方にまで、平年は十二本、ウルウ年は十三本の技を使うという区別をつけていたのは興味深い。昔の人が年回りや暦に深い関心を示していたことがわかる。

正月四日のオ棚探シには、三が日に供えた物を下げて、四日ガユに作って食べたというが、正月にはカユや雑煮など、祝い物らしからぬ食物を作る例が多い。これらは直会（ナオライ）に起因するもので、神に供えた物を下げて人間が食べる食物として作られたためであると考えられる。

山入りが六日というのは遅い方であろう。この日に十二様にオサゴ（米）、オミキ（酒）、カケオ（懸魚）などを供える。その後、枯枝などを拾って来て、湯を沸かして家の神々に供える（浅原）。県内では六日の行事は六日年というだけで、行事らしいものがない所が多く、ふつうは「六日爪」というが、ここでは「七日爪」といって、七日に爪を切ることにしている。大正月から小正月へ移る区切りの日だったのだろうか。

初市は一月七日で、八坂神社から神輿を担ぎ出して飾る。市神を祭るのであろうが、冬の神輿渡御はあまり見受けないものであろう。

小正月は東毛の特色として、道祖神焼き（ドンドン焼キ）がほとんど見られない。正月の松飾りのシメ縄は下げたあと、ほぐして田植えの時に苗をしばる苗バにする。正月と稲作との関連が伺える。正月十四日は蚕の祝い、十五日は田の祝いだとか、小正月を蚕正月ともいい、十四日に女衆が針を持つと、蚕の口を縫うといって禁じられる。小正月の飾り物にしたケズリバナを集めて、養蚕ざるの中に入れて置き、春蚕のハシリズウ（最初の熟蚕）を五、六匹付けて、マユを作らせる風習は、西毛の藤岡市上日野などにもあるが、養蚕農家が正月にその年の豊蚕を期待したことがわかる。

オカマ様（カマ神）を祭ることも東毛地方に著るしい。オカマ様は三十二人の子どもがいるというので、マユ玉を三十六個以上供えるものだといわれる。子だくさんの神という点では北毛地方の太子（だいし）様に似ている。ハラミバシをわらで十文字にしばって、オカマ様に上げると、歯痛が治るというが、なぜ十文字にするのだろうか。よそでも見られることだが。

正月十五日におむすびを十二個作って、一つ一つにハラミバシを突きとおして、箕に入れて年神様の隣りのオミタマ様に供えたという。このようにしておミタマ様を小正月に祭る風習が県内各地にあったことがわかってきた。十五日カユは、柿の木の皮をはいでカユを付けてやり、実が成る呪いをしたり、食器などを洗った水を家の囲りにまいて、蛇・ムカデが入らない呪をしたりする。十六日はしょうゆ飯を作ってジオウ様に供えるなど、小正月には多くの行事が入り混んでいる。

一月二十日のエビス講について、商人のエビス様は帰って来る祝い、農家のエビス様は出かける祝いとしたり、商店は朝エビス、農家は夜エビスとしたりして、区別している。利益をもたらす福神として、生活形態に応じて信仰されたものであろう。なお、エビス様は北向きにしたり、一段低い所に置いたりして、いじめる方がよいというのもおもしろい。

一月二十四日に愛宕精進をして、火伏せの神として祭り、下神梅では寒中に水ごりをとったというきびしい行事だった。ふつうは夏七月二十四日の愛宕精進が多いのだが。

節分の豆まきを下神梅では大晦日にしたこともあったというが、県内では藤岡市中島や多野郡万場町などにも例がある。節分とか、年取りとかいうことは、年に何回もあったものが、次第いに二月初めに固定したのであろう。

初午にオシラ祭りをして、蚕影大明神の掛地を掛けてマユ玉や里芋デンガクを供えて祝ったり、屋敷稲荷を祭るが、仕事をするな、火を燃すな（火にたたるから）などと、禁忌も厳しかった。ここでは秋には屋敷祭りをしないという（上神梅）。

三月節供のヒナ祭りの時、ヒナ人形を出して飾らないとヒナ人形が泣くので、しまったままにして置かない。人形を飾らなければ川へ流すものだといい、「淡島様へあげます」といって流せという（塩原）。ヒナ人形は本来流されるべきものという意識が伺える伝承である。

五月節供のショウブ酒を飲むと、ムカデに刺されないというが（塩原）、ふつうショウブは蛇除けとされてるのに、ここではムカデ除けとなっている。蛇もムカデも同類視されていたものか。

七月二十八日はアフリ神社の夏祭りで、川で水ごりをとる。川の中に一升びんを立ててまわりから水をかけ合い、一杯にする行事で、雨乞いと災難除けを祈る愉快な祭りである。

八月一―三日の祇園祭りには、山車に獅子頭二個が飾られる。まず、神馬が大間々の町内を駆け抜けてから、祭典の儀式が行なわれる。そして神輿の渡御と山車の巡行がある。祇園祭りの典形的な形が残っているといえよう。

七夕には笹飾りに対して、箕の中にキュウリやトウモロコシなどの農作物を入れて供える（上神梅）。笹飾りは神のヨリシロであるという意識が残っているからであろう。七夕から七日間、七晩焼きといって、夕方門前で麦わらを燃して疫病除けをする風習があった。（浅原）

盆は月遅れの八月に行なうが、盆棚は組立式の木の枠を用意して十三日に表座敷へ組み立てる。四隅に新しい竹を立て、カヤの縄を張り回す。棚の上に新しいござを敷き、棚の奥は一段高い壇を置き、位牌を並べる。盆棚の下に板一枚分の壇を作り、チガヤとかマコモで編んだござを敷いて精霊（しょうりょう）様を祭る。（浅原）精霊様の壇がはっきりした形を取っているのは珍しい。

盆迎えには寺の盆棚から提灯の灯をもらって来て、家の盆棚の灯に移して迎え入れるが、寺の遠い所では代表が灯明代を集めて寺へ代参

し、マッチをもらって来て各戸へ分け、盆棚の灯明へ灯をつける形に変った。（長尾根）

新盆迎えには、寺へ笠とぞうりとお金を持って参詣し、先祖様にこれで旅仕度をして来て下さいと、納めてくる（神梅）。盆の十三日には盆魚を必ず食べる。ナマグサ物を食べないと仏様に口を吸われるからという（長尾根）。盆が純粋な仏教行事でないことがわかる。

十五日夕方、または十六日の盆送りには、三本辻へ盆棚に使った笹竹やナス馬や花などを各戸から、持ち寄り、麦わらなどを焚き付けにして送り火を焼やす。竹がはねる音によって仏様があの世へ出発するという。送り火の煙に乗って仏様が帰るので、この煙で身体の悪い所をこすって、持って行ってもらうように呪う人もいる。（神梅）

盆様には水をたっぷり飲んでもらうように、必ず水を供える。盆送りの時も、お茶を供えてから送り出し、仏様の茶椀にお茶を入れて行って、三本辻でもお茶を注いでやる。

盆の十六日は馬屋肥いを出してから遊ぶことになっていた。五月十六日も同じで共通している。この日はカテ飯（五目飯）を作って十王様に供える。

旧八月十七日に下神梅では山上で百八灯をする。本来は盆の送り火だったものであろう。

八朔には新嫁婿は、ゴボウやショウガを持って里帰りをする。前橋市城南地区でもゴボウを持参したので、共通しているが、一般にはショウガの例が多い。

旧十月十日の十日夜には「九日餅二十日ダンゴ」といって、餅をつく。餅はサイノメに切ってわらのツトッコに入れて、家の外の稲荷・地神・氏神・十二様などの神々に供えて回る。ツトッコは十本も二十本も作る。供え餅を十個、田や畑に供える家もある（浅原）。供え餅は家の中の神棚・仏壇・米俵などにも供える。（長尾根）ダンゴを桝に山盛りにして、床の間のオシラ様に供え、初午と同様に祭る家もある。（下神梅）。「麦蒔きは十日夜までにしておけ、十日種はおろすものではない。」といわれ、取り入れ・蒔き付けの目途になっている。

麦蒔きが終ると、イヌコロ餅をついて、畑の真中に供えてマクラブサゲにした所もあり（深沢）、十日夜が収穫感謝の祭りだけでなく、麦作とも深い関連を持つことを示している。

十二月八日は正月のコト始メだといい、木の葉を入れる大籠を庭に伏せて、ヒイラギの枝をさし、ダイマナク除けにする（塩原）。籠の目によって魔除けを祈るもので、ふつうはメカイを用いる所が多かった。

以上、気づいたことの中から、この地域の特色を示すようなものを、いくつか取り上げてみた。

各項目の記述については、北部の山村地域から南部の平坦地域の方へ順に並べて、地域の変化を比べて見る便を考慮した。

（関口正巳）

一　月

旧正月　明治四十年頃、旧暦から新暦に変わった。旧正月だった頃の方が雪もたくさん降って正月らしかった。（塩原）

正月様　正月様は卯の日の卯の刻に帰る。（塩原）

年男　その家の主人公（総領）がなる。若水を三ガ日汲んで来て飯を炊いたりする。（塩原）

正月中のお神のことをいっさいとりしきる男性のことをいう。例えば、元旦には、若水を汲み、神に供えることからおろすまでする。（下桐原）

成人に達した男子で、たいていは、その家の大将である。成人した息子があれば、それがかわる。正月のおカミのこといっさいや、節分のときには豆まきをする。（上桐原）

若水　たきものをするのに、主人が早くおきて、ごはんの中に若水

を入れた。煮物をするのにも入れてたく。（神梅）

若水をくむのを初くみといって、年男の仕事である。神棚にあげたり、ゾウ煮用の水としてつかう。また湯をわかす。神棚に供えるのはすべて年男の役目で、三元日はやった。

正月に最初に使用する火は、豆ガラを燃す。（小平）

朝湯　各戸毎にたて、年男から順に入った。特に一族などで順に朝湯をたてる風習はなかった。（高津戸）

三カ日に、朝湯はたてるが、イツケうちでの、あるいは、近所同志での、朝湯のもらいっこの風習はない。（下桐原）

初詣で　元旦に鎮守様である八幡神社に詣でる。（塩原）

初詣では、午前中にすます。昔は、とうのくぼ稲荷や、八幡様に集まったので、特別な年始まわりはいらなかった。（上桐原）

元旦の朝には、先ず屋敷稲荷にお参りする。そのあと、近くの神社に、初詣でする。どこに参るかは、その家でまちまちである。八の宮には、戦時中には、よく集まったが、現在は、その風習はない。（下桐原）

初もうでは一升ますに米を入れて、地元の神社に行った。元日の朝。（神梅）

正月の一日、元山城の跡に祀られた要害山頂の神社におまいりする。要害神社といい、高津戸部落の鎮守である。はじめ、自音寺七世（現在二十二世）の住職高海和尚が、四国の金比羅様を勧請して来て要害山頂の天主閣跡に祀った。明治になって赤城様を合祀して、現在の要害神社となった。高津戸から六キロほどはなれたところにある貴船さまに初詣りするものもいる。（高津戸）

くわ入れ　二日には、くわをもって畑にでて、かたちだけの、くわ入れをする。畑仕事のはじめである。（下桐原）

二日は仕事始めで、初夢の日である。（小平）

書き初め　二日に書いて、神棚や床の間にさげた。親戚のひとや近所のひとがお客に来たとき、ほめてもらって、お年玉でももらう。これを燃すということはなかった。（下桐原）

書き初めは二日にやる。（実際は暮にやっておく。）懸意のところに配って、小遣いを貰う。書き初めは十五日正月まで飾っておく。（小平）

初夢　二日には、初夢をみるため、紙で宝船をおって、枕の下においてやすむ。どんな夢でもぼっとねがえりをすると、忘れてしまうのはきたいだ。（上桐原）

元三大師　正月三日、せいおんじの元三大師には、昔は、桐生や足尾から臨時列車も出て、そのにぎわいは、前橋の青柳大師に匹敵するものがあった。寺では、当日参詣する講中に雑煮を用意した。このためについたもちは、二俵から二俵半にもなる。講中の宿をした藤生家なども、早朝から来るひとには、朝食を用意するなど来客の接待でたいへんだった。参道や境内には、「ちょいちょい買いな、何でも買いな。」とはやしながら、景気をつける店もあった。これをちょいちょい店という。（下桐原）

三日は元三大師で、正福寺（天台宗）でゴマをたいて祭る。そのゴマにあたると厄除けになる。皆がお参りをして、そこで飲み食いをする。ネギヌタ、キンピラなどの精進料理である。（小平）

貴船神社の初詣で風景　（塩原）
（長沢利明　撮影）

年始回り　組合中回る。誰が一番早かったとか言った。今のようにせわしく回らず、上がりこんで一杯呑んでくる。泊まりこんだりすることもあった。せいぜい一日五～六軒回る。（塩原）

年始は元旦に要害神社（赤城神社と琴平様を合祀した神社）に集まったが、今は公民館で初顔合せをし、このときは会費もとって酒も出るので各戸から一名出て年始をした。（高津戸）

昔はご年始回りをしたが、今は村中が一か所に集まって、新年会をする。会費三百円で酒を飲む。（深沢）

日は定まらない。いつでも、自分の都合のよい日にいく。女の年始は、三月のおひな様まで（四月三日）いいという。（上桐原）

年始の品物は茶や下駄が多い。正月にはたいていもちまわりである。（上神梅）

寺への年始　元旦の朝、その家の主人が一番はじめに、お金を包んで（今は五百円）年始に行く。これを寺しげんという。このあと先達さんのところへ年始に行く。（浅原）

普通の年始回りは四日をいやがる。寺の始日である。（小平）

寺への年始日は、正月一日である。ぜんしょう寺へは、壇家では、金と米を年始としこのとき、藤生家では、「お年玉」と書く。せいおん寺の壇家は、「御年賀」と書く。（下桐原）

寺の年始は四日に行く。（塩原）

四日に坊さんが各戸を年始回りする。お供を連れて来て、シャモジを配ったが、今は回り切れない。（深沢）

一般には「四日のご年始はするものでない」という。（深沢）

四日は坊さんが村中を回る。鬼のような絵のあるお札を配る。お札は門口にはっておく。（小平）

四日は寺の年始で世音寺から大師様の御姿を書いた御符としゃもじを配り歩いた。御符はトボグチに貼る。四日の夜には頂いたしゃもじを使って家の人たちの御飯をよそる。すると一年間病気をしないで無事にすごせるという。御符は風かなにかで吹きとばされてなくなってしまうと神様が災難をしよっていってくれたと考えた。（桐原）

四日の日に和尚さんがまわってきた。このときお札とシャモジをくれた。ときには高野山の箸や暦をくれていった。（高津戸）

壇家からの年始に対する、寺からの年始は、四日で、一日に百軒余もまわるので、何といっても、はやいのが特徴である。あがる家は、前もって決めておき、たいていは、玄関先であいさつをして、そのまま帰る。（下桐原）

四日は、寺の年始の日である。三カ日は、坊さんの方で神様に遠慮しているのだろう。四日は、坊主の年始だから、一般の家庭はご年始に行くなという。善慶寺は、おしゃもじと暦に藤森稲荷というお札をもってくる。こちらは、ご年頭として、お金を包む。（上桐原）

寺の年始日である。なべかりともいう。ヨメは、実家に帰って、泊ってきてもよい。（上桐原）

五日正月　「ごかにち」とはいうが、持別には何もしない。（上桐原）

七草がゆの七草を、野にとりに行く日である。（下桐原）

五日から、年始受け、年始まわりが始まる。一月いっぱいくらいだった。名入れのてぬぐいと塩釜（お菓子の名）を持っていった。（神梅）

門松　カイドの入り口の両はじに、松と竹を立てる。門のそばでもよかった。それを門松といった。

また、オクザシキ（デエ）の前の庭にお松を三カ所たてる。横にならべて、松だけを立てる。それは、オマツ、メマツ、コマツの三本である。

門松やお松を立てるのに十二月二十八日から三十日までのあいだ、一夜かざりはするものではないという。

お松は一月十四日のあさ、さしかえる。そのあとにはまゆ玉をさした。（浅原）

元旦は門松にごはんを少しずつあげた。（神梅）

イナリ様に飾られた正月のシメ縄（小平）
（長沢利明　撮影）

門　　松（狸原）
（板橋春夫　撮影）

元旦には庚申様にも幣束をあげる（深沢）（長沢利明　撮影）

門　　松（塩原）
（長沢利明　撮影）

三方辻に幣束をたてカマドの灰の包みを置く。（塩原）　（長沢利明　撮影）

墓地に立てられたお松（塩原）
（長沢利明　撮影）

三方辻に立てられた幣束（塩原）
（長沢利明　撮影）

畑に立てられた幣束（塩原）
（長沢利明　撮影）

水田に立てられた幣束（塩原）
（長沢利明　撮影）

貴船神社境内の小祠に供えられた幣束、オヒネリ、お守り、供え餅等。一月一日（塩原）
（長沢利明　撮影）

松飾りはナラの木のクイをうって、それに竹と松をつける。松飾りは、門ジメといって、クヌギにシメをはったものの下に作る。門ジメは一年中、そのままにしておく。ただし葬式の時にはとる。（小平）

ゴボウとサトイモとニシンのオスイモノを朝お松にあげる。（小平）

稲荷さまのしめなわはハッチョウじめといい、なわを三ツ折りにして作る。これに御幣束をつける。（神梅）

正月棚（十二月三十日に作る）　ナラかクヌギの木を割って板にし、これを棚に作って天井から吊るす。この棚に幣束を一本立てて歳神様をまつる。正月棚はアキノカタに飾るものだ。（塩原）

正月棚にカキ・コンブ・炭などを供える。（深沢）

正月棚は、部屋の角に飾るので三角になっている。その位置は、本来はその年の恵方で毎年変わるが、最近は一定して、上の棚に飾る。

棚には、穴が二つあいていて、はめこみ式の鳥居を立て、これに、鳥居のかたちをしたしめ縄を七、五、三にして結わえつける。しめ縄には、板昆布の中に、住み住みよいといって、すみ、まめにといって、大豆の枝とお頭つきのごまめを二本入れる。やぶこうじを両方にまるめて結わえて、その台として、ゆずり葉と半紙を折ったものを用意し、干し柿を三つ、その下にみかんをさしこんでつける。正月棚は、松がとれても、飾っておいて、二十日正月が終えてから外す。（下桐原）

お飾りは、オシメの外、ミカン、コブ、豆のカラ、ゴマメ・スミ（木炭）、カキ、ユズリハ、手拭などである。（小平）

家例正月の料理（一日～三日）　小倉家では、三が日、五日、十一日、小正月、二十日正月、初午には里芋と大根の吸い物を必らず作り、雑煮を食べる。（塩沢）

三が日の朝食は家によってきまりがある。雑煮エンギ、ソバエンギ、ウドンエンギなどの家では各々、雑煮、ソバ、ウドンを食べる。大晦日に赤飯を炊いておいて三が日に食べる家もある。また、三が日のうちにトロを食べると風邪をひかぬという言い伝えのある家もあり、正月の餅をつかない、二十三夜餅以降に餅をつかない、という家もある。（塩原）

正月にはソバ家例・赤飯家例・餅家例などと、家によって決まった食事を作った。三元日の間は守った。（深沢）

正月三ケ日の食事は（話者の家では）モチは食べない。サトイモやごはんを食べるが、おわんを、とり変えて使う。

昔の苦労を忘れないためといい、部落に、何軒かある。

他に、ウドンが食べられない家がある。これは、ウドンを持つ板、めん板を、歳神様の神棚として使ってしまうため。（神梅）

正月の食事のはしは、白木のはしを、いずくの木で作って、使った。木は山から年内のうちに切ってきて、寒水にひやしておいた。そうすると皮がよくむける。それをはしの長さに切って、はしを作った。（神梅）

新井イッケでは三が日の朝、トガズ飯（とがない飯をたいたもの）を食べる。

鎌木イッケでは暮の三十日がソバ、大晦日は飯、三が日の朝は芋吸物（芋・大根の汁）で、大晦日に残した冷や飯を食べる。「ムカデにかじられない」という。三が日に餅を食うとデキモンができるといい、四日にならないと餅が食べられない。（下神梅）

星野イッケは赤飯をふかす。餅は少ない。（下神梅）

反町イッケは三が日はメンバ板が出せない。大晦日にうどんをうって置く。（下神梅）

家例として、大晦日に炊いたアズキ飯を三元日の毎朝あたためて食べる家がある。（小平）

オゾウ煮をミソ汁でする家がある。前日からミソでサトイモをどろどろに煮ておいて、それに餅を入れる。オゾウ煮は、三元日に、十一日、十四日、二十日にする。二十日のゾウ煮は、オソナエのカチカチの餅を使用した。（小平）

今泉氏は三元日はお雑煮で四日がそば、浅原の宮田氏は正月に餅をつかない。また二渡氏も餅をつかないで近所の人が持参していった。このときお返しにオナメをくれた。（高津戸）

竹ぼうき　竹ぼうきを作る時、ふつうの年は竹の枝を十二本、うる年は十三本使って、もとを締めた。（下神梅）

お年玉　お年玉をくれることはなかったが、年内にかきぞめを書き、年始まわりについていってそれを出すと、二銭ほどくれた。家には、かけじく、かきぞめなどが、かけならべてあった。（神梅）

オタナサガシ（四日）　四日ガユは三ガ日の供物をさげて、あげ直す。供え餅をおろす。（十一日まで置く家もある。）（塩原）

三が日に供えた物を下げて、一緒にしておカユにして食べる。棚サガシという。（深沢）

正月四日にすべてのおそなえをさげて、煮っかえしてあげた。（上神梅）

三が日に供えたものをオジヤにして食べる。（下神梅）

四日の棚ざらい　四日には、三カ日の間、お神にあげたものを、おじゃにして食べる。（上桐原）

お棚さがしは四日で、オゾウ煮の具をゾウスイにしてたべた。（小平）

年神様　豆がら、昆布、炭をみずひきでしばりつけて串柿とみかんをつけて年神様に飾った。（上神梅）

山入り・十二様（六日）　正月六日、十二様にオカシラツキ、オサゴ、塩、餅、竹で作ったオミキスズ二本をもって行って供え、帰りに

山からカレッコ（枯枝）一把拾ってきてお湯を沸かし、茶を入れ、家の中の全部の神様にあげる。（浅原）

六日山入をした、この日までは山へ入らなかった。

十二様へ、もち、菓子、おかしらつき、おさご、塩をもって行って、清めてから、山へ入った。おみきすずを二本つくって、酒を入れてもって行った。帰りに、山の木（かれっこ）をひろってきて、家でお湯をわかして、お茶をいれて、うちの中の神様（神棚にまつってある神様）にあげる。

なお、山の神様は、酒がすきだという。（浅原）

主人が山入りして、十二様に御幣束を持っていく。ごまめの頭つきとおさごに米を入れて持って行き、そなえてから仕事をした。小正月に使う木、みずぶさの木を切ってくる。マユ玉をさす木。（神梅）

山入りは正月六日、正月の仕事始めに山へ、オサゴ（散米）とカケオ（掛魚）を持って、ボク伐りに行く。（下神梅）

六日は、山はじめ、山入りの日で、山へ入るひとがおしめなどを持って、神を祀ってくる。（下桐原）

六日には山入りといって、小正月の飾り物の材料集めをする。ボク（白ハギ、水ブサ、ノデンボウ（ヌルデ）を切ってくる。（小平）

六日は、寒の入りである。この日は、また、消防の出初め式の日でもある。（上桐原）

六日ドロ・トロロ飯（六日）　この日はトロロ（山芋）を食べる。（塩原）

六日ドロといって、夕食の時、トロロ汁を御飯にかけて食べる。夏負けしないし、病気にならないという。（小平）

正月六日には六日ドロといって、トロロの御飯をした。トロロは消化によいので食べた。（上神梅）

七日爪　正月の七日に七日爪とっておけば、あとはいつとってもいい。（塩原）

七草・七草ガユ（七日）　本式には春の七草全部を入れて作る。春の七草とは、セリ、ナズナ、ニンジン、ゴボウ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ（大根葉）である。普通はナズナだけ入れる。ナズナは一つで七草という。（塩原）

七草ガユは七色の草を入れてカユを作る。七草は節供の一つ。（下神梅）

セリタタキは主人公が歳神棚の前で俎を叩く。包丁を両手に持って太鼓を叩くように刻む。菜切包丁ではなく、うどん包丁を用いる。唱えごとは、「トウトノ鳥ト、ニホンノ鳥が、〜ノ橋ヲ渡ラヌウチニ、七草ナズナヲ〜」とか、「七草ナズナ、トウトノ鳥ガ、ワタラヌウチニ、ミズホノクニノ〜」とか言う。（塩原）

正月五日にナズナ、にんじん、大根、ホウレンソウ、ミョウガの根、ホトケノザ、はこべの七つをとっておき年神様にあげておいた。それを七日の朝にとって七草粥をつくった。「七草ナズナ、唐土ノ鳥ガ日本ノ土地ニ渡ラヌ先ニストトントン」と唱えながら刻む。（上神梅）

七草のおかゆを作る。

「七草ナズナのセリはたき。唐土の鳥が日本の国へわたらぬ先に、七草ナズナのセリはたき。」と言って、おかゆの中に七草を入れて食べた。このいわれは、唐の鳥が、昔鳥取県にきた。そして悪い病気がはやった。それが飛んできて、川上で羽をはたいたんで、非常に病人が出た。そこで七草のいろいろな草を食べたら病気が直ったというので、それを言ったものだ。そのまな板は、柳の木だったので、お勝手の台所のまな板は柳にしろという。（神梅）

いまでもやっている。セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロこれぞ七草といい全部そろわぬときは、「ナナクサ」で代用する。これ一種で、その役を果す。どろくさい、ギザギザのあるものである。他のものが欠けても「ナナクサ」は必ずいれる。七草は、前日の六日の寒の入りに、野にとりに行く。七日の朝になっ

て、すぐ仕度できる（きざむ）ように、前の晩、ニンジンやゴボウとともに、洗って用意しておく。

春の七草は、セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロをいう。五日に、野に七草をとりに行き、六日の夜には、もうすっかり準備をととのえておく。七日には、はやくから、主婦が起きて、「トウドノトリが、ニホンノシマニ、ワタラヌチニ、ストントントン」と、七草ナズナのセリたたきをする。（下桐原）

七草ガユは、セリ、ナズナ、大根、人参、ゴボウ、コブ、カキ、フキノトウなどを入れる。カユには塩気を入れない。

厄年の人のいる場合には、セリを家の中に入れてはいけない。一年中家に入れない。

「唐土の鳥が日本の土地に渡らぬ先に、七草ナズナのセリたたき。」と三回ぐらいやる。マナイタをスリコギをたたいた。年男がたたく。

カユとどうしても食えという。ふいて食べてもよい。（小平）

「ナナクサナズナ、トウドノトリが、ニホンノハシヲ、ワタラヌウチニ、ストトンノトン」といって、キウリ板をたたいて音させながら、きざむ。七草がゆは疫病を防ぐという。（上桐原）

初市（七日）　この日は、祇園祭りの当番町が神輿をかついで、一丁目から六丁目までまわる。夜の明けないうちに八坂神社からかつぎ出し、大通りを一丁目から六丁目までかついでまわした後、当番町内に飾っておく。七丁目は、ワリダシと言い、戦前までは町内の公の行事には仲間に入れなかった。戦後祭事にも参加するようになった。（大間々）

初市は、大間々は二・七、桐生は三・八の市で、大間々の一丁目と六丁目に市がたった。（高津戸）

クワダテ（十一日）

サクタテは暮の三十日、門松を立てる日に、作神様（畑の神）にも門松、幣束を立てる。正月十一日まで畑に入らないが、この日御幣、お松にオサゴ、オカシラツキを供える。そして鍬で農作物を作る真似を、家の主人がやる。小平ではミノ、カサつけて、裸足になり、前もってきれいに洗っておいた鍬でサクを切る真似をするという。（浅原）

この日、おかしらつき、おさごをもってはたけへ行き、暮（十二月三十日）にたてたお松のところへそなえものをし、その近くのところを一さくでもさくをきってきた。これは、その家の主人がいってやった。

（小平のかたい家では、みの笠をつけて、はだしで、鍬をあらって、はたけへ行ってさくたてをしたという。）

その日までは、はたけへ入らなかった。（浅原）

畑に行って二尺くらいサクを切る。仕事始めである。（塩原）

クワダテは一月十一日、畑にお松を立てて、サク切りを三サクして、米一升・頭付きの魚を供える。（深沢）

正月十一日はクワタテで、箕の中に一升ますを置き米を入れる。その米を少しとって半紙にのせ、頭つきのゴマメ二匹ものせて、田に行ってあげてくる。鍬でサクを三ケ所くらいきる。今でもやっている。（上神梅）

十一日、畑でさくを切る。米を一升持っていきそなえ、持って帰って床の間にかざる。この米を十五日のおかゆにする。白かゆの家、あずきがゆの家とある。（神梅）

十一日はクワ立てて、年神様にあげたものを持っていって、サクを切る真似をする。オサゴも持っていく。主人公の仕事である。

十一日はクラ開きともいう。（小平）

正月十一日は十一日正月ともいう。お松を畑に立て、煮しめを皿に盛って上げる。畑にサクを三サク切る。（下神梅）

蔵開キ（十一日）　蔵のある家は蔵を開く。（浅原、塩原）

十一日に鏡餅を、ぞうにしにして食べた。蔵を開いた。（神梅）

倉に入っているコメ、ムギなど五穀を閉じてあけるという。衣類に

ムシがつかぬように倉をひらく日でもある。（上桐原）
倉開きは正月八日、何かしたが不明。（下神梅）

十二様・山の神　（旧二月十二日または一月十二日）　山仕事をしている人は、旧二月十二日に、黒保根村桑ノ代の十二様へお詣りに行く。（塩沢）
十二日は十二様に詣る。この日は木を切ったりしてはならない。十二様におこられる怪我をする。この日は十二様が木の数を数える日であるという。（塩原）
十二日は十二様の日で、その日は山に入らない。十時前には、木を切るなという。（塩原）
十二様は山の神で、山に十二山神社の石宮がある。山へ入る人が祭る。正月のお松迎えの時、お散米・オミキスズ・カケオ（掛魚）を持って行き、拝んでから、松を取る。オミキスズは竹二本を切って、麻でしばり酒を入れて供える。カケオはゴマメの魚を使う。（下神梅）
十二日は山仕事をする人が集って祭り、昔はバンダイモチもついた。（高津戸）
十二日は、山仕事をする人たちの初十二様である。桐原には、山仕事専門のひとはいない。（下桐原）
十二日は山の神様の日で、山仕事ができない。十二講をやった。山にボンデンをたて、バンダイ餅をついて食べる。炭火をおこして、砂糖入りのミソを煮て、それを餅につけて食べる。サンショの葉をミソに入れるところもある。（小平）
十二日は十二様の日であるから、山に入ってはいけない。山仕事をさける。（小平）

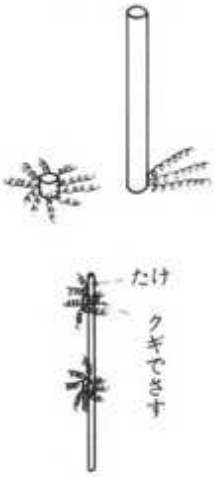
小正月

ボク迎エ　十四日の朝、家の主人が自分の山へボク迎えに行く。根ごとこいでもってくる。小正月が終わるとそれをもとの所に植えてくる。（狸原）
正月飾りを取る日。玄関などの松飾りをはずして稲荷様のそばにでも捨てる。門松の杭だけは残しておいて十五日の朝、カユを供える。（塩原）
松は、十四日の朝さげ、カキ花、まゆ玉ととりかえっこする。ドンド焼きはしない。（上桐原）
十四日はハナカキで普通二段のもの作るが、大神宮様には、十六段のものを作った。ニワトコの木で作る。（小平）
一月十四日に正月のかざり、しめなわをさげる。しめなわは、ほぐして、ナエバといって、苗をしばるのに使う。どんど焼きはしない。神さまのものだから、むだにしないという。（神梅）
正月十四日に針を持つと蚕の口を縫うといってお針をしない。（上神梅）

モノツクリ　ヌルデ（ノデンボともいい、護摩を焚く木）を削って、ハラミバシやカユカキ棒・木刀などを作る。木刀は長さ二・五尺ほどで、つばの所にハナをかいたのを二本作る。座敷のボクの所へ供えて置く。（上神梅）
ヌルデンボウ刀といって、カユカキ棒と同種の木で作った刀を、マユ玉をさした木にたてかけておいた。刀の柄の部分は皮を残しておいてバッテン印をつけた。（小平）
ニワトコの木を小正月の三日前にとってきて皮をむいて蔭干ししておいた。ニワトコの木をハナカキナタで削る。十六の段をつける。（二軒在家）
大門から小判やハナを売りに来た。ハナはニワトコやノーデンボーで作る。小判は四日のオタナサガシのとき下げるが、暮の三十日墓に立てた門松は正月十四日にハナをとりかえる。このハナは家の門外の門松をあげた所には全部あげる。そして二十日の風にあわせるなといって十九日中にさげる。門松は十四日にさげるが年神様と大神宮様のオマツは二十日まで置く。そして正月のオタナイタは二十日朝にそのオマツは二十日まで置く。

まま屋根にあげる。二十日正月で正月は終りである。（浅原）

小正月を蚕正月ともいう。十六段のハナを初めすべてのハナを集めておいて折って養蚕ザルの中に入れ、蚕室の隅におき春蚕のハシリズーを五・六匹つける。蚕は繭を作りやすいのである。繭をかいたあとハナは畑で燃す。蚕の足は十六本あり、蚕神を十六善神という。（浅原）



ハナ、アーボヘーボは一月十五日に、ニワトコの木をハナカキナタで削ってハナを作る。アーボヘーボは、竹にハナを幾つもさしたもので、マユ玉もさしてつける。これはコヤシ場に立てておく。（塩原）

ニワトコをむいて、二段バナをかき、屋敷稲荷様など、松飾りした所に飾る。

ニワトコの長い枝一本に十六段のハナをかいて飾ったり、ツボミを飾る家もある。

大間々にハナの市がたって、小正月のハナやマユ玉を買った。（上神梅）

正月十四日、ハナをかいて、おシメと一緒に、臼や墓地にまで上げた。

ヌルデの棒を短く伐って、皮をむいたのと、皮をむかないのと、十五個くらい、ハナをかいて所の枝にさして、それを堆肥場に立てた。名は不明。（下神梅）

一月十五日にハナをかざる。ハナは、ニワトコの木の皮をむいて作る。神棚にそなえる。（神梅）

ノーデンボウで家人数だけのハラミバシを作り、十五日のカユを一ハシでも食べる。カユを食べる時に、吹いて食べると田植えに風が吹くといって、禁じられる。（下神梅）

小正月にノデンボウの皮をむいて、四つ割りにしてハラミバシをつくる。歯が痛い時に墨で十文字にしばってオカマサマにあげると歯痛がなおる。（上桐原）

山へ行って、ノデンボウの木を切ってくる。割って、ハラミバシを作り、十五日のおかゆを食べる。山くわという、山の木のかぶつを毎年こしらえておいて、それをざしきにとってあげてきれいにさす。（神梅）

ノデンボウの木（ウルシに似る）でカユカキ棒とハラミバシを作り、マユ玉をはさんでカユをかき回す。カユカキ棒は苗代を作った時に刺しておく。（塩原）

オシラマツリ　一月十三日の晩、まゆ玉をこしらえた。

かいこには足が十六本あるという。前足が六本、腹に六本、尻に二本ある。そのためにかいこの足になぞらえて十六本まい玉をつくるのだという。特別大きいまゆ玉をつくって、やまっくわにさした。（浅原）

いい繭ができるようにと、正月十四日の朝、家中で米の粉で繭玉をこしらえた。この繭玉をジュウロクデンジといった。ジュウロクデンジはハギにさして、ハナと一緒に神棚に飾った。（狸原）

マユダマ　粉は三升位なければ足りなかった。十六マイダマが主で、エビス様、大黒様、作神様等に供える。（浅原）

ハナを作るとき一本は必ず十六段のを作る。またマユダマを作ると

小正月のジュウロクギ（狸原）
（板橋春夫　撮影）

き十六マユダマといって特に大きいのを作り、山桑にさす。十六マユダマというのは蚕の足の数によるのである。（浅原）

マユ玉を十五日にザシキのまん中に飾る。ボクの木（ヤマクワ）を二本庭に植えておき、小正月の毎に交替で根ごと掘り起こしてきて飾る。終わるとまたいけておく。ナラ、シラハギの木も用いる。枝にマユ玉をたくさんつけて飾るが、コバンという餅米で作った小伴型のもの もつける。五升くらい米をひいてマユ玉を作った。また、子供のおもちゃにマユ玉をニワトリの型などに作ったりもした。（塩原）

十六メエダマは十六デンヂといった。ボクにさしてかざる。十四日はカザリつけという。（小平）

大きいマユ玉を十六個作って木につけ、オシラ様にあげる。（塩原）

山桑のかぶつを二つ取ってきておき、蚕室にかざる。マユダマを十三日の晩につくり、十四日の朝ふかして飾る。大きいマユダマを十六個つくって小さいマユダマと一緒にミズブサの木にさした。ミズブサは火災よけの木だという。ミズブサは梁のまん中につるした。（二軒在家）

山桑をつかい、十三日の晩に米の粉で繭の形にこしらえて、十四日にふかして飾る。一緒に小判もさした。十四日に正月のお飾りをとってから繭玉をあげた。ザシキに飾った。（上神梅）

正月十四日に卵大の十六個の繭玉をつくり、小さい繭玉と混ぜて、一升マスに入れて、年神様に飾った。カマガミサマには小さい繭玉を三十六個、ナラの木にさしてあげる。（上神梅）

マユ玉は白二個、黒三十四個、計三十六個のマユ玉をミズブサの枝にさして、カマ神の柱（水がめの傍）にしばり付けて供える。

座敷のマユ玉は山クワかナラのボク（木）にさして飾った。

シラハギの枝にマユ玉を十―十二個さしたものを八組も作って、大神宮・年神・エビス・仏壇・床の間・便所・屋敷稲荷・水神様などに供える。マユ玉はマユ形と丸形と雞の形なども作った。（上神梅）

十六マユ玉は米の粉一升で十六個の大きいマユ玉を作り、カキの枝にさして、年神様に供える。（上神梅）

一月十四日にマユ玉をミズブサの枝にさして、十二様に供える。早く下げられると縁起がいい、いつまでも下がらないとよくないという。（下神梅）

十四日にマユ玉を作り、ボクにさして飾り、蚕を祝った。マユ玉をひょうたん形にして、紐を付けて吊るした。（下神梅）

山クワのボクにマユ玉をさして、座敷に飾り、箕に野菜・果物などを盛って供える。オシラ様とはいわない。（下神梅）

正月十三日を、まるめ正月という。まゆ玉を夜まるめて、十四日の朝ゆでる。養蚕農家では、大きな十六まゆ玉をつくる。ナラの根物、ヤマツクワ、はらみ箸もつくる。十六団子、十六でんじという。三方荒神には大きな三つ丸いものをそなえる。座敷の真中にござをしいて桑のボク（かぶつ、根のある）をおいて、それにつるすうちもあるし、つるさない家もある。いまは、もったいないからかきとりといって縁起がいいから、柿のかぶつを利用する。洗った水を家のまわりにまく。できものが家に入らない。ぜいたくなひとは小判をつけた。小判を飾らない縁起のひともある。

大神宮の歳神様には、特別にウメのボクをとってきて、まゆ玉をさす。（上桐原）

まるめ年越しといって十三日は、その夜、小正月のまゆ玉をまるめるので、まるめ年越しという。（下桐原）

十三日にマユ玉を作り、十四日の朝ふかす。年神様の棚作りであまった木や門松の回りをおさえた木でマユ玉をふかした。

マユ玉は山グワの木にさすのが一般的である。家によっては、年神様にだけは梅の木に十二個さして供えたり、その他の神棚にはハキにさしてあげたりする。その家では、水ブサの木の大きな杖を使う。門松の先を残しておき、そこにはY字型のもの供える。

マユ玉をゆでた水をとぎれさせずに家の回りにまくと、蛇が入ってこないという。（小平）

まゆ玉正月といって小正月には、松飾りをとった後に、ニワトコで花（かき花）を作ってさす。

まゆ玉木には、最近は、シラハギを用いる。昔は、かぶつごとのものをとってきて、まゆ玉木とし、座敷の真ん中に飾った。まゆ玉は、米の粉でつくり、ふつうのもののほかに、特大を十六つくったが、何故十六かは詳かにしない。まゆがあるようにと、祈りをこめてつくるのだが、真ん中がくびれているので、なかなかむずかしい。粉は、前の年にでたくず米を、自分の家でひく。大きな家では、一斗五升もつくるが、子どもが多いと、二升くらいは、作っているうちに食べてしまう。ほかに、印刷したかぶの絵や、米の粉でできた色と味のついた小判や大判を市で買ってきて飾る。（下桐原）

小正月の飾りは、十三日の晩に繭玉を作り、桑の木にさした。エゴ、ナラなどにもさした。繭玉の外に餅の紐もつくった短ざくとしてかけた。

削り花はニワトコの木でつくり、十一日につくった。十六段菊、ハラミバシ、カユカキ棒なども作った。（高津戸）

オカマサマ　小正月にまゆ玉を作って山桑の木にさして供える。この神様は三十二人の子どもがいたといわれ、「三十二上げろ」といわれた。山桑家の近くに植えておいて用いる。三本置いて三年に一回ずつ使用する。植木鉢のまま供える。（塩沢）

オカマサマには三十六個以上マユ玉をあげる。オカマサマには三十二人の子供がいて、親の分を含め、それ以上の数を供える。（塩沢）

稲刈りの始めに、稲を一株抜いてきてオカマ様の所に下げた。

小正月のマユ玉を三十三個―三十六個以上ミズブサの三段ついた枝にさして、オカマ様の柱に掛けたり吊るしたりして供えた。十六日に下げて煮て、いくらか取って置き、二十日正月に煮てお神に供えた。モロコシの粉や黒いコゴメのダンゴもオカマ様に供えた。（下神梅）

若餅　正月十四日に新井イッケで餅をついて供えたり、近所の餅縁起でない家に上げた。（下神梅）

穴原一家と薗田一家は正月餅をつかない。小正月の十三日についた。大正月には、餅は原則としては食べないが、貰って食べるのはよい。

穴原一家では十三日に、おんかはれて餅をつく。その時に始めてオソナエをとり、諸々の神様に供える。狸原では、遠藤一家と星野一家では大正月の餅はつけない。（小平）

小正月のもちを昔は、大正月と同じくらいついた。少くても一人一うす（三升うす）位はついた。正月といっても、他にご馳走があるわけでなかったから、たくさんついたのである。

現在は、つかぬ家の方が多い。（下桐原）

オミタマサマ　正月十三日にむすびを十二個こしらえ、ひとつひとつにハラミバシをつっとす。年神棚の隣りにこしらえた。十八日にさげて、あっため粥をして食べる。風邪をひかないし、金にこまらないという。（上桐原）

正月十四日に二合五勺の白い御飯をたいておむすびを十二個つくった。ニワトコの木でこしらえたハラミバシをひとつひとつのむすびにさし箕に入れてオミタマサマにそなえた。七八年前までやっていた。（上神梅）

年神棚を作って、年神の隣にオミタマ様を並べ、年神と同じに進ぜた。

重箱にご飯を十二個握って、ハラミバシを十二本立てて、オミタマ様に供えた。大神宮の脇のお札はりの前に供えたが、重箱を田人ぼにたとえて、稲株の形だという。うるう年には十三本立てた。（下神梅）

道祖神　ドンド焼きはしない。カド様は個人ごとに燃した。青面金剛の石碑は建つが、祭りはしない。（深沢）

ドンド焼きはなし。ただ、道陸神はある。ドウロク神渕という所に

ある。（小平）

どんどん焼き、鳥追い　小正月に、どんどん焼きや鳥追いの風習はない。（下桐原）

十五日ガユ　一月十五日の朝、あずきがゆをつくった。このあずきがゆを食べた茶碗、うつわなどを洗った水を、うちのまわりにまいた。こうすると、ヘビ、ムカデが家に入らないようにということであった。（長尾根）

十五日ガユをかき回すカユカキ棒はとっておいて苗間の水口にさす。ハラミ箸もとっておき、田植えの時の食事に使う。

ハラミ箸には稲がよくはらむようにというのと子孫繁栄の意味がある。また、カユカキ棒で女の尻をたたくと子供ができるといわれている。

十五日ガユはふいて食べてはいけない。ふくと田植えに風が吹くという。

カユは普通のものとアズキのものと、家によって違う。（小平）

小正月には小豆ガユを作る。このカユは吹いて食うものではない。（風が吹くから）さまして食べる。小正月の餅をつく。（塩原）

コタネガユ　十五日ガユには、アワ・ヒエ・小豆など、小粒のものを入れる。カユカキ棒でかき回して煮る。ハラミバシを使って食べるが、ハラミバシはあとで、水田に立てて、穂バラミするように祈る。（深沢）

正月十五日の朝は粟の粥を食べた。コガネで祝うという。（上神梅）

十五日カユはヌデンボウの木でカユカキ棒を2本作り、アズキガユをかん回す。米粒が多くはさまれば豊作だと占う。このカユが固ければ豊作だという。

カユカキ棒は半紙にくるんで神棚に上げて置き、あとで苗代の水口に二本立てる。

正月十四日は蚕の祝い、十五日は田の祝いだという。（下神梅）

女衆の年始　正月十五、十六日。（上神梅）

正月十五日に新婚夫婦は里に行く。（神梅）

嫁の正月　正月十五日で、餅に酒一升添えて嫁は里にお客にやった。（高津戸）

成木責め（十五日）　柿の木の皮を鉈で剝いでカユをくれてやる。（塩原）

ジオウサマ（十六日）　一月と盆の十六日の晩、しょうゆめしをつくって、仏様にあげる。これはジオウサマにあげるといった。ジオウサマがどういう仏様だかわからない。（長尾根）

ジオウサマには一月十六日醤油飯をあげる。醤油飯は仏様にだけあげるものといい、盆の八月十六日の夕食にもあげる。（浅原）

まゆかき　十六日に、小正月に飾ったまゆ玉をおろすこと。おろしたまゆ玉は、焼いて食べたり、煮て食べたりする。相当硬いものも、寒水に冷しておくと、やわらかくなる。（下桐原）

十六日はまゆかきで、小正月にあげたまゆ玉は、十六日にさげる。さげたまゆ玉は、ほうろくで焼く。大神宮様のまゆ玉は、二十日正月にさげて、煮て食べる。（上桐原）

十六日はマユカキで、アズキのつぶのまんまのオシルコを作ってたべた。（小平）

十七日はマユカキといって繭玉をさげる日である。繭玉木は軒下に集めておいて、初午に繭玉をこしらえる時にもやす。（狸原）

観音様・石山観音（十八日）　馬頭観世音のまつり。馬小屋にしめなわをはった。石山（現在前橋市東大室町、旧勢多郡荒砥村）まで馬をつれていった。（神梅）

石山観音へ正月十八日に初嫁ゴがお参りした。馬持ちは馬を連れて参拝した。座布団を三～五枚重ねて、毛布で馬の背にしばって飾りにして、新しい荷鞍を付けて引いたり、乗ったりして行った。（下神梅）

馬の正月は正月十八日で、この日は馬の敷藁を交換し、ふすまなども多く与えた。餅ものしはくれ、石山の観音様に馬をひいてお参りに

いった。（高津戸）

十八ガユ　十五日のカユを残して、十八日の朝食べる。（下神梅）

二十日正月（二十日）　一月二十日で正月が終るという。

二十日の朝、正月棚をそのまま屋根の上にほうりあげておいた。（浅原）

小正月に作ったマユ玉などを煮て食べる。神棚にも供える。（塩原）

二十日正月に桐生の西の宮へいった。これが正月の最後とし、年始に親類へ出かけるのもこの日でおわりにした。（高津戸）

エビス様とカイコ神様には正月のおそなえをさげないでおいて、正月二十日に繭玉とハナを取りかえる。（狸原）

えびす講　あきんどのえびす様は、一月の二十日に帰ってくるという。

農家のえびす様は、旧十月二十日がえびすこうで、この日に帰ってくるという。そのために、農家では、盛大にえびす講をする。（浅原）

朝エビスといってエビス様を送り出す日。エビス大黒をまつり、米の飯を炊いて、鯛、サンマなどの頭つきの魚を焼いて供える。エビス様の膳は左膳である。家の主人がこれをおろして頂く。算盤、金、家計簿、帳簿などもエビス様に供える。身上が良くなったら山盛りにするといってほんの少しだけ飯をあげる人もいる。（塩原）

二十日には年神様の棚を片づける。またエビス講でもある。エビス様の旅立ちの日であるといわれている。夜お供え物をして、希望をのべる。お供え物は御飯、ケンチン汁、オカシラツキ、コブマキ、果物などである。

一升マスに財布を入れてあげておき、お供え物を幾らで買いますといってさげる。供え物は家族以外に食べさせるなという。（小平）

二十日正月には朝エビスで、エビス様を棚からおろしてきて、御馳走をした。（上神梅）

正月二十日。店は朝えびすで、農家は、夜えびすという。（神梅）

二十日正月はエビス様を座敷に出して、机の上に祭り、一升ますに有り金を全部入れて供えたり、種銭を入れて置いたりする。春はエビス様が働きに出るので、お膳のご飯は少く盛り、頭付の魚を添えて供える。秋には働いて帰って来るので、ご飯をテッコ盛り上げて供える。とくにサンマの大きいのを、エビス講サンマといって供える。

エビス様は南向きを嫌うので、カネノテ（斜め北）に中央に向けるか、北向きにする。人通りが多い所がいいというので、お勝手に祭ったりする。（下神梅）

正月エベスはあきんどエベスと言って、たいしたごちそうはしなかった。床の間へかざり、「今年は、うんともうけさしてください」と願をかける。朝おまつりする。エベス棚は神棚と反対側の北向きの棚に安置してある。ふだん北向きにかざっておき、もうけさせてくれたら、エベス講の時に南向きの床の間にかざってやる。エベス様は、うんといじめないと、もうけさせてくれないからである。（大間々）

二十日ゑびすは商人がまつる。一月のゑびす様は、これから一年かせぎにいくわけで、食事も、おそばか何かそまつなもので出て行く。そのゑびす様を、みおくる日である。旅立つゑびす様を、おーいゑびすこういと呼んでやるのがこの日である。この日旅立ったゑびす様は、旧の十月の二十日に帰ってくる。ゑびす様は貧乏で、大黒様は金持ちな神様である。（上桐原）

二十日正月には、モチはつかず、まゆ玉を煮て食べる。まゆかきのときも、さげなかった大神宮様の、ウメのボクにさしたマユ玉を、この日さげて煮る。（上桐原）

正月二十日は、一年で最初のゑびす祭りである。ゑびす様にお頭つきをあげたり、畑でとれたものを供えれば、もうそれでご馳走だった。他には、いもの煮ころがしやきんぴらくらいだった。（下桐原）

愛宕精進（一月二十四日）　愛宕様祭りに日を合わせて、米一升ずつ持ち寄って会食をして、三食食べる。下神梅には精進小屋があり、

火を清める行事だという。竹筒に酒を入れて、オサゴを持って愛宕様の石宮に供える。

お精進なので宿の女衆は外に出して、男衆がうどんぶちや、料理を作った。シンカンモリといって、大皿にニンジン・芋・コンニャク・ミカン・切りイカなど、五品を盛って、懐石膳に並べた。(深沢)

男衆が回り番の宿に集まって、米一升、たくあんなどを持ち寄り、愛宕大明神の掛軸に供えて祭る。火伏せの神。その席で一年の仕事をとり決める。村の役、衛生委員・道路委員などを選ぶ。新年の初会合だった。(中神梅)

高岸の山頂に石宮もある。戦後、昭和二十七年ごろまでしていた。深沢では今もする。(中神梅)

下神梅では栃久保十二戸と下組二十戸と、2か所の宿で会食をする。茶椀・箸などの食器は倉に預けてあるのを使う。アミダ式のくじ引きをして、お金を出し合って茶菓子などを買い、オゴリをする。「神ヲカズケニ、己が食ウ」と悪口をいわれたが、昔の人は、寒中なのに沢の水や井戸水で、水ごりをとった。

入婿がお番衆(炊事係)をする。婿や長男が組に入る時は、酒一升持って仲間入りする。

朝たいたご飯を全部食べないと、「火ガ上ガラナイ」(全部片付かない)といい、鍋・釜を洗った水まで飲んでしまう。「火ガ上ガル」と、女衆を入れて、夕食のご馳走を用意して、オゴリとなる。

新しい家ができると、とくに順番を抜いて宿にする。(下神梅)

シマイ正月(二十八日)　オシリマクリとゆい一月二十八日に、子供達が人の着物の尻をまくって歩く。「オシリマクリに御用心」などと言った。(塩原)

しまい正月は二十八日、遊ぶだけ。(下神梅)

正月二十八日で、この日は不動様の日、しまい正月ともいったが、たいてい二十日までで正月のことは終えた。(高津戸)

一月二十八日のことを、しまい正月とはいわない。(上桐原)

初絵売り　宝舟、七福神など目出度い絵をもって売りにきた。主に香具師の人などが売りにきた。(高津戸)

門付　佐野から獅子舞、三河から漫才がよく来た。ササラなども来た。(塩原)

畑入り　新しい年に、はじめて畑にでることを、畑入りというが特定の日はない。(上桐原)

納戸の掃除　納戸は三之日掃除をしない家がある。その他の部屋の掃除をする場合、最初は松でやり、次にホウキを使用する家例の家もある。(小平)

二　月

二郎の一日(一日)　栗飯を炊く。奉公人の入れ替え日。(塩原)

二月一日は、二郎のついたちである。あわのおかゆを食った。(上桐原)

節　分(三日)

ヤキカガシ　イワシの頭を二つ、つばをひっかけながら焼き、豆ガラに刺してトボロに刺しておく。焼く時に「七十二色の虫の口を焼き申す」「四十二色のこうさくの虫を焼きます」「油虫の口を焼き申す」とか唱える。(塩原)

ヤカガシは、豆ガラにイワシの頭をさしてやく。「四十二いろの耕作を害する虫の口を焼き申す。」ととなえて、ツバをかける。豆をいっているいっぱいやっている。(小平)

ヤカガシは年取りの豆をいる時、豆の木のザンマタにイワシの頭をさして、ツバキを三度トットッとかけながら焼く。この時の唱え言。

「四十二色の耕作の虫の口を焼く。

耕作にたかる虫の口を焼き申す。

菜や大根にたかる油虫の口を焼き申す。
ノミ、シラミの口を焼き申す。」
ヤカガシは玄関にさして置く（深沢）
イワシの頭を豆がらの木にさしてやく。「耕作の十二いろの虫の口を焼き申す」と言いながら唾をペッペッペッと三回はく。このヤッカガシはトボグチにさしておく。（上神梅）
いわしを、豆の木か、ヒイラギの木の枝のふたまたになっているところにさす。頭を、二つさして、節分にまく豆をいりながら、いろいろな呪文をとなえる。
「油虫の口をやきもうす。」
といった風に、「〜の口をやきもうす。」という。そして、イワシの頭につばをかけて、火であぶる。豆がいり終ると同時に戸口にさす。（神梅）

やっかがし（塩原）　（板橋春夫　撮影）

豆まき　ホウロクで豆を煎る。豆ガラ、ナスガラ、菊のカラ（良いことを聞くように）などを焼く。年男が豆をまく。まず年神様からまき、大神宮、家の中の神様、外に出て十二様、稲荷様などにもまく。家の中は隅から隅まで「福は内」を二回、「鬼は外」を一回どなってまき歩く。（塩原）
節分には鎮守（八王子村）でまず豆まきをし、家の各部屋をかけ声に合わせて、戸の開閉をきちんとやる家もある。
福茶は、豆だけの家もあるし、豆に茶を加える家もある。（小平）
節分の豆は、大豆の豆がらや菊の枝を乾しておいたもの（菊がら）をもし木にして、「良いことときくから」と唱え言しながら、大きなほうろくで煎る。このとき、イワシの頭をすまたにさしまものに、三度つばをかけて、「油虫の口あけ申す」と唱えて、虫封じをする。
煎った豆は、歳男がまくが、男がいなければ、最近は、女でも子どもでもまく。まく場所の順番は、戸をあけて、神棚・座敷と、「福は内、鬼は外」と唱える。まきおわったら、戸をしめる。つぎには、外に出て、蚕室、家畜小舎、外（下）便所、物置、屋敷稲荷、井戸神様などにもまく。夕方には、どの家でも、競争するようにして大きな声でまいた。
まいた豆は、歳の数だけ拾って食べると、丈夫になるといわれ、子どもたちは、競って拾った。また、豆を入れた福茶を飲みながら、冬至につけたコズの味噌漬を食べる。これは好きなものでないと、何度食べても、にがくて食べなれないものだった。残った豆は、袋に入れて、神棚や囲炉裏の鉤竹につるしておき、初雷様が鳴るとき、主人が跡取りのねえさんかのどちらかがとってきて、家族そろって食べる。子ども心に、不思議なことをするものだと思っていた。（下桐原）
節分の豆を、ほうろくで煎るときには、はじめは豆から、足りないときはふつうのもしきをつかう。良いことときくから、借金なすがらとなえたり四十何種類の害虫の口封じ申すとか、家内安全お願い申すといいながら、イワシの頭に三べんつばをはく。（上桐原）
二月三日の節分の豆は、ほうろくに入れて、豆がらをもして、生豆のないようにいる。また、このとき、イワシの頭につばをかけながら、四十何種類の〇〇〇の虫の口を封じ申すと三回となえる。イワシの頭は、ヒイラギにつっとおしてとぼ口の柱の割れめにさす。
豆まきをするのは、成人男子で、ふつうはその家の主人があたる。これを節分の歳男という。豆は、まず屋内の大神宮様などのお神、それから、部屋部屋にまく。まきおわったら、玄関の戸は、鬼は外、福

は内といって急いでしめる。ついで、外へ出てからは、稲荷様、井戸神様、外便所の順である。

豆は、自分の年齢の数だけ拾って食べる。歳をとれば、そんなにたんとも食べられないので、56歳のひとならば、五つと六つ合計十一食べればよい。そして福茶をのむ。このとき、冬至に砂糖づけかみそづけしたゆずを食べる。

拾った豆は、袋に入れて、昔は、いろりのかきだけにつるしたが、いまは、神棚かどこかに進ぜておき、初雷のとき、袋をあけて、これを食べる。鬼の食べ物を食べているんだぞ、と雷様をなだめ、知らせる意味でもあろうか。(上桐原)

主人か長男が、神棚からまき始める。

「福は内、福は内、鬼は外」という。家中、すみずみにまいて、神社に行ってまく。納屋などにも行く。帰ってきた時、「福の神さまが入ってきたよ」と言って入っていく。そして福茶をのみ、年の数だけ豆を食べた。年をもらった人は、その数だけ。余った豆は、とっておいて、初雷(はつがみ)の時、鬼が来ないように食べた。(神梅)

ずっと前、大晦日に年取りの豆まきをしたが、ちょっとやって、すぐ止めた。話を聞いた程度である。(下神梅)

一二〇～一三〇年も前に、川ゼンと伊勢松の者が厄ばらいにしただけで、全部ではない。(下神梅)

家で豆をまいてから、神さまのところに行ってもう一度まいてくる。厄年の人は、一つ年をもらってくる。(神梅)

豆　節分の豆は紙袋に入れて、いろりのかぎ竹にさげておいた。初夕立のときに、だして食べると雷の難にあわないという。(浅原)

節分には年の数だけ豆を食べる。豆を入れた福茶を飲む。節分の豆はとっておいて雷様が鳴った時に外にまく。「鬼の豆」といって茶袋に入れ、カギ竹にしばっておく。とてもいぶ臭くなる。(塩原)

豆まきの豆を鬼豆、福豆などといい、あとで福茶に入れたり、砂糖豆にして食べた。豆は自分の年だけ食べる。

豆は紙に包んで、いろりのカギ竹に吊るして置く。初雷の時に、蚊屋の中で食べると、雷が落ちない。(上神梅)

年取りの晩に豆をいり、その豆を袋に入れてイロリの鉤につけておき初雷の時に食べる。(上神梅)

豆を紙につつみ、その中に金を入れ、家の者の頭や肩がいたくならぬようになぜてから三本辻に捨ててくる。捨てたら後ろをふりむかずに帰ってくる。(上神梅)

年占い　としよりの豆を、ほどのはじで十二粒やいた。これは各家でやった。

十二粒の豆を、一月から十二月までの月に見立てて、そのやけぐあいを見た。赤くやけたときには天気、黒くやけたときにはどうのといった。豆を灰の上にならべてやいた。これはとしとりの晩にやった。

なお、この日福茶を飲んだ。また、冬至につけておいたユズのみそづけをこのとき食べると風邪をひかないといった。(浅原)

豆をいる時、囲炉裏に豆を十二個置いて、ボウボウ燃えると嵐がくる、その反対は平穏であるという。(小平)

ヒイラギ　魔除けにカドへ植える。墓地にも植えてあるが、何軒もなかった。(深沢)

初　午(二月初午日)

稲荷様　家の稲荷様に旗を飾り、赤飯をふかしたり、マユ玉を作ったりして供える。(塩原)

団子をアンコにくるんだものを作って食べる。(塩沢)

初午に仕事はするな、火にたたるという。色紙に「奉納正一位稲荷大明神」と書いて旗を2本作り、正月のおシメを飾った竹にしばり付けて、屋敷稲荷に飾る。最近は文字を白く抜いた色紙(赤・青・黄・白の四色)を売っているので、それを供える。

屋敷稲荷は、稲荷のほかに、地神様や八幡様、天満宮などがある。

屋敷森の隅に祀られたイナリ様（塩原）
（長沢利明　撮影）

長沢イツケのイッケ稲荷（小平）
（長沢利明撮影）

秋に屋敷祭りはしない。（上神梅）

二月の十日か十二日。赤飯をたいて、正一位稲荷大明神の旗を書いて立てた。しるこを作った。（神梅）

初午の旗を杉森稲荷と自分の家の稲荷様と両方にたてる。旗には、杉森稲荷大明神、昭和〇〇年二月〇日初午、〇〇氏と書く。杉森稲荷大明神は、無格である。（下桐原）

初午には、奉納稲荷大明神と書いてあげる。（小平）

初午の日には、針供養をする。この日、おんなのひとは、針をもつものではない、ひばやいという。豆腐に、かけ針を全部つっとおして、針の御魂を全部まつってやって、埋めるということをした。（上桐原）

神棚にあるオシラ様を祀る。また蚕影山の掛軸にオマイダマを供える。

初午にはオマイ玉を作って、オシラ様に供える。枡に入れてあげる。蚕に馬蹄形の紋があるが、それは馬にふまれて蚕になったからだという。（小平）

初午の日には十時までは裁縫をするなという。火にたつといって、お湯もわかさなかった。（長尾根）

女衆が針供養をし、針仕事を休んだ。火にたたるといって、茶も立てなかった。（神梅）

オシラマツリ　初午の日にやった。まゆ玉のようなだんごを作り、「蚕影大明神」という、かけじをかけて、いわった。（神梅）

初午の前の晩がオシラマチで、マユ玉を一升ますにのせられるだけ入れて、床の間に供えた。里芋を串にさしてつなげて、砂糖みそを付けて焼いた芋レンガクを供えた。松葉はいぶさない。（上神梅）

初午にはナラの木に繭玉をさす。（上神梅）

初午の前の晩、マユ形のマユ玉をますに盛って、床の間のオシラ様に供える。

また、芋田楽（イモレンガク）を作って供える。芋を串に数個～十個もさして、砂糖みそ（たれ）を付けてオキで焼いて、二本～五本くらいを皿に盛って供える。焼くと香ばしくてうまいので、下げて食べる。（下神梅）

火ニタツ　初午のときには、まゆ玉を一升ますに山もりにして、年神様のところに供えた。

初午の日には、十時までお茶を飲まない。また、この晩には、風呂もたてない。初午に仕事をすると火にたつ（火事になる）といって、仕事をしなかった。また、早く初午が来ればよいといった。（浅原）

芋デンガク　芋をゆがいて串にさしたイモデンガクをこしらえて食べた。イモデンガクには山椒と味噌をすり鉢ですってあえた山椒味噌をつけた。イモデンガクは初午の前の晩に食べ、初午には繭玉を屋敷稲荷にそなえた。（上神梅）

コト八日（八日）　二月のコト日は「コトじまい」である。キノハッカゴという木の葉を入れる大きなカゴ（直径三尺、高さ四尺）を庭にかぶせて置き、ヒイラギの大きな枝一本とイワシの頭を刺す。ダイマナクをよけるためのものである。ヒイラギは家の南の方に植えておき、鬼門を守る。（塩原）

コト八日は二月八日、十二月八日。（上神梅）

こと八の日に、「霜柱、氷のはりに雪の下駄、雨の樽木に露のふきくさ」と書いて、かき竹につるしておくと、火事にならないという。このとき、鉄びんが鳴ると、その年に、天変地異や大火事がある。（上桐原）

コト八日には、ヒイラギをメカイにさして竹竿につけ、門口や表口に立てた。目がいっぱいある、トゲがあるというので、魔除けになる。草刈り籠がダイマナクで、メカイはショウマナクという。

コト八日には針を使わない。（小平）

ダイマナク・小マナク　二月八日・十二月八日、メカイを庭に状せて、ヒイラギを立てておく。

ダイマナクは大きい籠、小マナクはメカイなど小さい籠で、籠をかぶして庭に置き、ヒイラギの枝をさして、魔除けにした。子どものころした行事。（深沢）

大きな草刈りガマを出して、それに、ヒイラギの葉をさして、庭に立てておく。ダイナマクという、大きなかごを出して、ヒイラギの葉をさして、かまを入れて、立てておく。かまの刃を、風の向きに、悪魔を切るというので、北向きにしておいた。（神梅）

ダイナマクに、カマ、ヒイラギを入れて立てた。（神梅）

二月八日はコト八日。水もならさぬコト八日という。この日は「大魔なく、小魔なく」といってヒイラギの木にメカイをさして、庭先においておいた。（上神梅）

三　月

雛市（二日・七日）　三月二日。きわもの屋が、一丁目に雛市を開く。四月三日が節供であるから、三月に入ると二日と七日に開かれる。いわゆる二・七の市で嫁にやった娘の長女に贈るヒナサマを買い求める。地主の地処に住むタナ子たちは共同で雛を買って贈る。（大間々）

ヒナ様は大間々に出て買った。小平にヒナ市は無かった。（小平）

雛祭り（三日）　大間々に雛市が立つ。初節供はダイリ様を飾る。昔はすわり雛ばかりだった。雛人形は飾らないと雛様が泣くのでしまったままにしておくものではない。飾らないのだったら川に流すものだ。雛人形を流す時には「淡島様へあげます」と言って流す。（塩原）

餅をついて草餅と白餅の菱餅をつくり、近所に配った。古い雛人形は川に流した。（上神梅）

ひな段を作り、人形をならべて女衆が祝う。モチをついて、男衆も一緒になって、一日あそぶ。おとそをいただく。家だけで祝った。（神梅）

雛祭りまでが女の御年始という。（小平）

女の子の節句は、旧でやるので、四月三日である。三月二十七日には、大間々にひな市が立ち、ひなを出す日は、二十八日と決っていた。昔のひなは、立ちびながふつうで、ひな段には、ほかに、大きさがそれぞれちがう五枚の菱もちや、草もちを飾った。当日は、客呼びをし、もち、甘酒、赤飯などで祝った。

女の子の初節句には、母の実家、近い親戚、近所で懇意の家などから、ひな人形が贈られる。三月二十七日に、大間々にひな市が立つので、そこで買う。初節句の人形は、もらったら、すぐ飾るのがふつうである。四日には、これらのひとたちを、客として招くが、このときは、もう何ももってこないで、お返しは、赤飯だった。何事にも、祝

い物のお返しは、もらった半分くらいだろうか、正確には、勘定できないが昔は、ていねいにやったけれど、今は軽くすます。（下桐原）

贈答　三日はヒナ節供という。長女を祝う節供である。次女以下は祝わない。嫁の里から雛人形が贈られる。地主の家では、タナ子の井戸組合から共同で買った雛人形が贈られる。その他、仲人、親戚、知人なども贈る。雛人形でなく、衣類、衣類、履物などを贈る者もある。贈ってくれた家へは、四月二日に餅をついてお返しをした。節供の料理は、海苔巻きと稲荷ずしを作る。料理と酒二合を雛壇にそなえる。（大間々）

流しびな　昔のひな人形は、たちびながふつうだった。古くなった人形は、ひまなとき、近くのはや川（昔は藤生沢川）に、持ち主の女の子が持っていって流した。（下桐原）

古くなったヒナ様は川に流すのがよいという。（小平）

春彼岸　墓参りに行く。（塩原）

墓まいりをし、だんごと、せんこうをあげる。墓そうじもする。親せきがくる。（神梅）

「中日ボタモチ食いたくないが、ならば半日あすびたい」というた。（深沢、中神梅）

彼岸ダンゴ　粒が小さいダンゴを、中日に多く作った。走り口にも作った。供えたダンゴを下げて食えば、カゼを引かない。（下神梅）

四　月

赤城神社例祭（三日）

塩沢部落の鎮守である赤城神社の例祭は、四月三日、十月十九日である。（塩沢）

奥沢観音（三日）　桃の節供の時にお参りした。（下神梅）

花まつり（八日）　おしゃかの花まつりという。お寺に入って一合か二合入る入れ物を持って、あま茶をもらってきた。おしゃかさまの像にあま茶をかけた。（神梅）

八幡神社例祭（十五日）　塩原部落の鎮守神である八幡神社の例祭。（塩原）

近戸神社例祭（十五日）　秋は十月十五日が祭り日。（下神梅）

霜除け観音（十八日）　霜除け観音は光栄寺にあり、四月十八日が縁日とされ、この日は町中つつじ、ふじの花がかざられて花観音ともいい。桑の霜害を防ぐ信仰があった。（大間々一～二丁目）

神梅神社例祭（十九日）　四月十九日は、神梅神社の祭日。明治初年に、栃久保の神社の日枝神社と鏑木家の氏神である神明宮が合社して、神梅神社ができた。昔は、盛んで、すもう大会があった。祭日には、赤飯をふかしてそなえ、神宮が来て、のりとをあげた。（神梅）

春四月十九日、秋十月十九日（旧九月十九日）をオクンチといい、神梅神社（日吉・神明を合祠）のお祭りをする。（中神梅）

妙見さま（十九日）　北辰妙見大菩薩といい北斗七星を祭る。三大妙見の一つである。昔、徳川家康の遺言で久能山に葬ったが、分骨を日光東照宮へ移して権現として祭った。天海僧正が分骨を持って日光裏街道を通って行く途中、神梅で一夜の宿をとり、もてなされた札に金の独鈷と守り本尊の妙見菩薩を授けた。それを覚成寺の境内で祭る。元の薬師堂の建物を山からおろしてトタン葺にした。なお、天海僧正が来た時に道を踏み違えた所を「フンヂガエ」と呼び、二また道になっている。そこに権現様の腰掛石（高さ六五、たて一三〇、横九五センチ）があったが、寺の境内に移した。

妙見さまは白蛇がからまり合っている木像である。以前はやぐらを組んで盛大に祭った。（上神梅）

角地蔵縁日（二十四日）　角地蔵は二十四日が縁日で、回り番で二人ず当番になって、太鼓をたたいて参詣人を集め、お茶や煮物をくれる。（上神梅）

五　月

五月節供（五日）　子供が強く育つように鯉のぼり、カブト、鍾馗様などを飾る。屋根にショウブとモチグサをさして飾る。菖蒲湯、菖蒲酒もする。菖蒲酒を呑むとムカデに刺されない。（塩原）

ショウブとヨモギを軒先に三ヶ所さした。神棚、稲荷、仏壇にもさした。この日はショウブ湯に入った。（上神梅）

五月五日には、ヨモギとショウブを屋根にさす。藤もさす。またカブトを新聞紙で折った。

ショウブ湯に入る。ショウブ酒は、蛇の子をはらんでいるのをおろすという。（小平）

男の節供、ごんちの節供という。春蚕が近くて急がしいので、のぼりを立てるくらい。男の子の初節供の家には、里方や親せきから大のぼりやざしきのぼりが送られた。（神梅）

前日からコワメシをし、ゴンボウやイモを煮たりして御馳走を準備した。この日は農休みであった。ヨモギとショウブを朝早くとってきて神棚にあげたり、軒先にさしたりした。夜はショウブとヨモギをさげてショウブ湯をした。子供の背中をヨモギとショウブで「夏やみせんように。悪い病気にたからないように。神様、仏様、お稲荷さま、お願いします。お願いします。」と三回唱えながらこすってやった。（桐原）

五月節供のショウブとヨモギ（浅原）
（長沢利明　撮影）

男の節供という。長男だけを祝う。大店（だな）の長男は、里親から鯉幟が贈られる。吹流しには両家の紋を入れる。仲人や親戚や知人は、五月人形（ヒナサマとは言わない）を贈る。鯉幟の上げ下ろしは店子が行なう。この日の料理は赤飯と煮しめである。（大間々）

赤城登山（八日）　皆で赤城山に遊びに行く。お産をした人は行ってはならない（塩原）

赤城山の五月八日の山開きには、深沢六十戸から、会費百円ずつ集めて、二人ずつ代参が出て赤城山へ登る。赤飯・四合びん酒を持って、小沼の宮に供えてくる。十九才の娘は赤城山へやるものではないという。ここからは、赤城三里といった。（深沢）

五月八日には赤飯をたいて、竹筒に酒を入れて毎年二人づつ赤城の大沼まで行った。現在でもやっている。深沢部落だけで廻り番でやっている。（上神梅）

赤城山の山開きで、五月八日には大洞の赤城神社（歩いて参拝した。回り番コに2人ずつ、代表が出て、春四月の都合のいい日に赤城山へ登り、悪病除、五穀豊穣のお礼を受けて来て、三本辻に竹に付けて立てる。（下神梅）

赤城登山は五月五日にする。水沼から鳥居峠を経て登った。（桐原）

旧四月八日には、藤をとって来て、軒にふいた。（桐原）

八十八夜の別れ霜　山を伐採する時、八十八夜が限度で、それからは秋に伐る。そうしないと芽が出なくなってしまう。（小平）

六　月

忌日（いみび）　毎月わるい日がある。六月がタツ、十月がイヌという。

田植はウとタツの日がわるいという。また半夏の日にも田植をして

はわるいという。

ムギまきは、イヌの日をきらう。（浅原）

麦まきは戌の日をきらう。田植えは卯の日と辰の日はいやがる。また地蔵日にしてもいけないといわれている。（小平）

田植えは辰の日にしてはならない。寺の田植えをする日だという。この日に田を植えても、米が取れないという。（深沢）

イヌの日に小麦を蒔くな。昔、弘法大師が中国に行って、杖の先に小麦を付けて持って来た。犬が見付けて吠えたので、その犬をたたいたら、ころりと死んだ。五戒の殺生戒を犯したから、犬を気の毒に思い、供養するために、イヌの日には小麦を蒔かない。もし取れてもそれを食わない人が出るとか、犬も食わないとかいう。（深沢）

八丁ジメ　六月にやった。大きなワラジを作って村の出入口にさげた。（小平）

七　月

フセギ（一日）　下神梅と中神梅の境界で坊さんが拝んでから、でかい馬のわらじを下げた。径三十cmもあるアシナガのでかいものを、村境の道路に縄をまたがせて、下げておくと、悪い者が来ても、おれよりでかい足跡があるのを見て、入って来ないからだという。縄は栗の木か何かにしばった。（下神梅）

土用　うなぎとか、どじょうとか、なるべく栄養のあるものを食べる。（塩原）

土を動かすのはいけないという。土用には小麦藁を燃す。（小平）

水ごり　七月二十八日はミズゴリをする日である。この日はアフリ神社の夏祭りで、村の当番の八戸から人が出て、神社の前の渡良瀬川に入る。一人が一升びんを川の中に立て、これを七人がまわりから水をはね上げて、びんの小さな口から中へ入れる。一杯になるまで水をかける。雨乞いと夏の災難よけにするのだという。（高津戸）

半夏生　ハンゲソウをトボロにさげた。（小平）

八　月

祇園祭り（一～三日）　大間々町の祇園祭りは元禄年間に始まったと伝えられる。戦前までは一丁目から六丁目まで祭に参加したが、七丁目はワリダシだからという理由で、参加できなかった。六丁が上三丁と下三丁とに、更に分れていて、上三丁はよくまとまったが、下三丁とは仲が悪く、祭のたびに喧嘩した。夜中に山車をひっくり返しに行ったりした。

七月三十日に当番町内に仮宮を設置し、各丁内にシメ縄を張りめぐらし、店先に祭り提灯をさげる。祭り当番は、上と下と交互にし、一

大間々祇園祭。仮宮の入魂式八月一日（大間々）　（長沢利明　撮影）

大間々祇園祭。樽神輿への入魂式（大間々）（長沢利明　撮影）

おぎょんのやぐら（大間々町）
（板橋春夫　撮影）

樽神輿への入魂式（大間々）
（長沢利明　撮影）

子供の樽神輿（大間々祇園祭）
（根岸謙之助　撮影）

天王宮（文化七年歳六月吉日
（上神梅）（関口正巳　撮影）

祇園祭の神輿の渡御（大間々）
（根岸謙之助　撮影）

山車の引きまわし（大間々祇園）
（根岸謙之助　撮影）

丁目の次が四丁目、その次が二丁目にもどり、次が五丁目という順序である。頭番丁の山車には獅子頭二個が飾られる。

八月二日の午後に神輿の渡御が行なわれるが、その前に、味噌こしざるの中に塩を入れ、大道りを撒いて清め、そのあと榊で祓ってまわる。塩まき修祓のあと、神馬の背に幣束を立て、紅白の手綱を二本つけて片方に十人ずつ、ねじりはちまき、シャツ、サルマタ、白足袋といういでたちの若者が手綱につかまって馬を走らせ、一丁目から六丁目まで駆けぬける。これがすむと、正午頃当番丁に各丁内の役員、名誉取が集まり、仮宮で神事を行なう。神主が祝詞を奉上し、一同は玉串奉奠を行って儀式は終る。

神輿は白丁を着た長男十二人が担いだ。大間々の神輿は女御輿だからあばれず、静かに担いで丁内を渡御する。渡御の順序は次のとおりである。

先頭から、神主、鉦、祭典長、大榊、大太鼓、柏子木、塞銭箱、地区役員代表、稚児（一五〇人ぐらいで山車を引く）、天狗、大傘、本部崇敬会役員・招待者・各区付祭の山車四台の順で行列を作り大通りを練り歩く。町内によっては、子供神輿を造って各丁内の通りをまわるのもある。表通りから裏通りまでくまなく、一軒一軒まわる。昭和の初年ごろから子供神輿が出るようになった。（大間々）

天王様　以前、八月一日に祇園祭りをした。石宮が石の上にあり、「文化七午歳六月吉日」と彫ってある。（深沢）

農休み（一日～三日）　この三日間、大間々で祇園祭が行なわれており、仕事を休んで見物に行く。（塩原）

農休みは八月一、二、三日で、大間々のギオンを見物に出かける。（小平）

農休みは八月一日～三日、村で一斉に仕事を休んだ。（神梅）

貴船のテンノ様（八月一日）　貴船神社でテンノ様の祭がある。お菓子をくれたりする。（塩原）

カマノクチアケ（一日）　八月一日をカマノクチアケといい、この日は、地獄のかまのくちあけで、仏様がお客に来る日という。ヤキモチをやいて仏様にあげるが、とくべつの行事はない。（浅原）

盆の月の一日のことを、カマノクチがあいたという。この日のことをカマノクチアケという。この日はやきもちをやいて食べるものという。やきもちはまた仏様にお供えした。仏様が地獄からでてくる日といった。（長尾根）

カマノロアキは七月一日、盆月の一日のこと。地獄のカマの口が開く日なので焼餅を仏様に供える。（塩原）

カマノクチアキの名称はいわない。鬼の首も許される日で、オンカデ（公然と）休めた。焼キ餅は作らない。（上神梅）

七夕（八月七日または七月七日）　七夕飾りは新コの竹でかざりをつくった。これに短冊をさげた。「天の川、七夕の……」という歌の文句を何枚にも分けて短冊に書いた。そのほか、いろいろの歌を書いた。短冊に書く墨は、イモの葉のつゆをあつめてきてすったものである。

かざりの竹は、六日の晩に飾って、七日の夕方川へながした。竹を飾る場所は縁側の柱のところ。七夕様には、うどんをあげた。

七夕の晩には、一年に一回お星様が出会いをするという。

七夕の日には、女衆が朝早く水浴びに行って、あたまを洗ってきたりした。

飾りの竹は、うら（先）の一枝をかいて、大根ばたけへもって行って立ててきた。その意味はわからない。（浅原）

新しい竹でかざりものをつくった。これに色紙で短冊をつくったり、つづみのかたちをつくって、竹につるした。短冊には、百人一首を書いたり、自分の願いごと、天の川とか七夕などと書いた。かざりの竹は六日の晩にのき下（えんがわの中央）とか、玄関のところへ立てた。ここへはうどんをつくってあげた。この竹はあとで川へ流した。

七夕の日には川へ水およぎに行って、ネブタをながした。

六日の晩と、七日には、桐生川内の機神様（はたかみさま）へおまいりに行った。（長尾根）

竹に短冊を飾る。サトイモの葉にたまった汁を習字の墨汁にすると、字が上手になるという。箕の中にキュウリ、スイカ、トウモロコシなどの農作物を供えた。（上神梅）

竹にかざりをつける。イモの葉のつゆで、墨をすって字を書く。女の子は人形を作るとお針がうまくなる。飾りは、大根をまく畑に持っていってさしておくと、虫がつかない。（神梅）

七夕に芋っ葉の露で墨をすって、字を書いて上げると、字が上手になるという。女の子は人形などを作って上げると、裁縫が上手になる

という。

新粉でゆでまんじゅうを作る。

「七夕や いつ来る年も ゆでまんじゅう」

ゆでまんじゅう、ナス・キュウリなどの野菜、果物をちゃぶ台に上げて供える。ネブタや豆の葉は供えない。特別に洗い事はしない。天道柱とはいわない。（上神梅）

七夕飾りはあとで菜大根の畑に立てておく。（上神梅）

八月七日は、七夕祭り。おおやの家でタナバタかざりをする。店子はしない。子供が、里芋の葉にたまった水を集めて来て墨をすり、これで七夕かざりの短冊に字を書く。（大間々）

朝早く起きてネブタの葉を流す。新しく出た竹に、短冊を切って歌を書いたり、天ノ川と書いたりして吊す。そうめん、うどんを作って七夕様にあげる。竹にひっかける。この竹は後で大根畑だの菜畑だのに立てておく。芋の葉にたまった露を硯に取って字を書くと書道が上達する。

七夕には雨が降った方が良い。雨が降ると天ノ川の水が増える。この日に水を浴びるとカッパにひかれるから泳ぐものではない。

七夕飾り（上神梅）
（板橋春夫　撮影）

七夕には墓掃除をする。草を刈るだけで何も供えない。今泉家ではふかしまんじゅうを作る。（塩原）

七夕には、竹に短冊やノロシ（紙で作った網状のものをいう）を下げる。

字を里芋の葉にたまった露で書くと、上達するという。

七夕に水あびをしてはいけない。河童に尻を抜かれるという。（小平）

七夕には、雨が降った方がいい。一緒になったんじゃ病気がふえる。（塩原）

機神様（七月七日）　川内の白滝神社の機神様は七夕の日にさがったといってお詣りに行く。札を受けてくる。（塩原）

七晩焼き　これはむかしやった。

七夕から一週間、夕方、門先で麦わらの束をもやした。子どもたちがやったことで、唱えごとはとくになかった。

疫病神が入らないようにということであった。（浅原）

盆（十三～十六日）　盆行事はおぼえて八月十五日。（浅原）

盆は、もとは旧の七月十五日であった。いつから変更になったかわからないが、現在は八月十三日から十六日までである。（長尾根）

盆は八月十三日から十六日まで。農作業の都合で、一年だけ日取りを違えてみたが、結局この日になって安定した。（上神梅）

盆の日は昔は七月十三日から十六日まで。その後八月二十三日から二十六日までとなったが現在では八月十三日から十六日までである。お蚕の関係でこのように変ってきた。盆の日から逆算してお蚕を掃き立ててきた。（上神梅）

旧の七月を盆月という。（神梅）

迎え火、盆迎え（盆ぶち、盆打ち）　盆は、十三日の迎え日からはじまる。お寺さんに提灯をもって迎えに行くのが、ふつうだが、お墓に行く家もある。せいおん寺では、提灯をもって寺に行き、坊さんの拝んだ、ほやほやの明りをもらってつけてくる。このとき、墓参りはしない。たいていおとなが行くが、養蚕があがるまぎわで、農繁期とかちあうため、子どもが行くところもある。子どもは、十～二十銭をもらって、往復一時間くらいかけていった。寺からは、仏様のおみや

げといって、小さな半紙の包みに入れた抹茶と、みじんこの菓子を二、三ヶもらう。禅宗の善慶寺では、マッチ（二十本くらい）と茶、それに如来像の名前を書いた五色のお札を、5枚紙につつんでくれる。帰ったら、マッチは、家に、しけないように箱をうつして、お灯明のそばにおき、盆中には、他のマッチはつかわない。お札は、祭壇を飾ったところに、さす。（上桐原）

西福寺　門徒寺である六丁目の西福寺は、お盆そのものはやるなといい、盆迎えも、何も全然しない。坊さんは、毎年盆と彼岸に来るが、盆棚も飾らず、ふだんと同じである。（上桐原）

新盆の迎え方もほとんどかわらぬ。（上桐原）

生き盆　盆の十五日に、両親が丈夫なうちに、ヨメが、嫁ぎ先でできた野菜や粉をもって実家に帰ること。（上桐原）

盆のあいだは生き物を大事にすること。

盆のあいだは、生き物を殺すな、さかなをとるなと、むかしからいわれてきた。（長尾根）

盆月になってからなくなった人は、埋葬するときに、かわらけ（すりばち）をあたまにのせた。これは、仏様はお客に来るというのに、なくなった人は反対に行くというので、仏様におこられて、頭をはたかれるという。（浅原・長尾根）

盆中の墓参り　お盆の最中、仏様は盆棚に来ているから、墓地は留守になっている。特別なお客のばあいは、例外だが、二度行くことはほとんどない。十六日の送り盆には、墓参りする。（上桐原）

墓掃除　上桐原では、ほとんどが、家々の墓地をもっている。七夕の日に、その家の主人か跡とり息子が墓地に行き、墓掃除をする。七夕と盆との関連は、不詳だが、七夕は星まつりというから、仏教であると理解している。また、七夕に入ったら、盆月だから、よそ様に、病気見舞やお産見舞いに行くものではない。（上桐原）

墓掃除は七夕前にやった。おそくとも七夕の日の昼前にやった。墓掃除をして七夕をむかえることになる。個人の墓を掃除した。また、墓地への道もきれいにした。

この辺では、一家共有の墓地が多く、一家では、一戸一人ずつ出て墓掃除をした。（浅原）

十日に墓掃除をした。うちのものだけでやる。（長尾根）

十日に墓掃除や道刈りをすることにきまっていた。（小平）

盆月になれば、十三日までの適当な日に、各自の墓地を掃除する。七夕にする家もあり、十一日に共同墓地を掃除する組もある。自分の家の墓地のほかに、古寺の墓も掃除する。花立ての竹や香竹を、二〇～三〇cmの長さにして、二本ずつ墓石の前に立てる。（上神梅）

8月7日の墓掃除（二軒在家）
（板橋春夫　撮影）

七月七日の七夕の日にめいめいが自家の墓掃除に行く。また八月十一日には朝八時頃、各戸一人ずつ出て「中の墓地」の掃除を共同でする。草を刈ったり、墓地から大通りに通ずる道の整理をする。この地区には「上の墓地」と「中の墓地」と墓地が二つある。「上の墓地」からはすぐ大通りに出られるので共同作業はしない。（上神梅）

道刈り　八月十一日に共同で道路を清掃する。（上神梅）

盆の用意　十二日に、朝、草刈りに行って、盆花をとってきた。十三日は、仏の足を切るから、行ってはならぬとされた。（神梅）

盆市　黒保根村荻原で開かれた。新暦八月十二日。盆市では盆棚に飾るゴザや造花、線香、提灯、瀬戸物類などが売られていた。小平の方からも行った。（狸原）

二日と七日が大間々の市日、大体このころ大間々の町まで盆の買いものに出かけた。これを、盆買いもんといった。買いものに行くのは女衆が多かった。買ったものは、盆迎え用の提灯、ござ、盆花、線香、ろうそくなど。

なお、このとき、子どもたちのしきせも買ってきた。（浅原）

むかしは、二、七が大間々の市日で、この日大間々へ盆買いもんに行った。

買ってきたものは、ござ、花、かわらけなどであった。

むかしは、桐生の人が盆花売りに来た。造花の盆花で、これを一本ずつ買った。（長尾根）

大間々の市へ行って、盆ゴザ、七色紙、線香、かわらけ、花（造花）、ちょうちんなどを買ってくる。（塩原）

盆買物はござ、盆花（造花）、提灯（新盆の時）などを買う。（上神梅）

トボグチに盆棚に使うチガヤが干してある。（狸原）（板橋春夫撮影）

盆買いもんは現在では農協で買っている。以前は大間々へ買いに行った。大間々では二・七の市がたっていた。（上神梅）

盆棚　本体は、大工に頼んで作ってもらう。

茅を刈って干しておき縄にない、その縄で竹を結わえる。縄に色紙をたらす。

シンコ（その年の竹）四本の、枝三段を残したものを縄で結わえて作る。色紙とホオズキを下げる。

ナスで馬を作る。馬にはトウモロコシのチンケをつけ、芋の葉の上におく。そのそばに水鉢を置き、ミソハギの筆で馬の背中に毎日水をかけてやる。

盆送りには、ショイナワといって、生の手打ちウドンをチガヤの縄にかける。

送え盆の晩には、トウナスとフを使った料理を作る。（小平）

盆棚は木の枠があって、盆のときに出して組み立てた。新しい仏様がでた場合には、盆棚を大工につくらせた。つくりかえる場合には、盆の時期をえらんだ。

盆棚をたてるのは十三日の午前中。表座敷にたてる。

棚の四方に新竹を立てる。先から三枝きったものを立てる。カヤのなわをなってまわりに張った。棚にはあたらしいござを敷く。

棚の正面の奥に壇をつくって、そこへ位牌をかざった。位牌は全部だしてかざった。

色紙で幣束のようなもの（短冊）をつくって、棚の正面のつなにさげた。そこへはホウヅキもさげた。そこへはうどんの生のものをさげた。これは竹様の背負い縄という。

棚の下には板一枚分の壇をつくった。そこへは、チガヤとかマコモでつくったゴザをしいた。そこへは、一人前にならない仏様（独身者）の位牌をかざった。これを、ショウリョウボトケとか、ショウリョウサマという。（浅原）

仏壇の前に、ちゃぶだいを利用して盆棚にする家もある。また、盆棚のわくがあって、それを組立てかざる家もある。まわりに新（しん）と竹を

四本たて、チガヤでなったなわを三段にはった。なわには色紙を切ってご幣のようにしてさげたり、ホウズキをさげたりした。棚の上にはゴザをしいて、その上に位牌をならべた。（長尾根）

十三日の昼頃までに、次の間、ザシキなどに飾る。組み立て式の棚にゴザを敷いて、新竹を四方に立て、節が四段になるようにする。（四段にするなという家もある）その竹にチガヤの縄を張って七色紙の垂れとホオズキをぶら下げる。

今はアラ盆でもなけりゃ本式の棚は飾らぬ。仏壇に竹を二本立てて略式にする。アラ盆の時には新しい組み立て棚を新調する。（塩原）

八月十三日に盆棚を作る。棚は枠が組立て式になっているので、これを拡げて据えつける。そして、四方に竹をチガヤでなったなわでむすびつけ、前には色紙を五箇所さげ、またホーズキもかざりつける。チガヤのなわは右なわでなう。（左ではない）仏壇の中のものは、この盆棚に全部移してしまい、なにも残さない。

無縁仏は盆棚の前の下の方に低い台をもうけてそこにまつる。

新盆の家は盆棚を作る。表座敷のお客に見える所に作る。組立式の棚があって、竹を四本回りに立て、チガヤの縄でしばる。チガヤの縄にホウズキや色紙を下げる。杉の葉は下げない。棚の上に盆ござを敷き仏壇の位牌を全部出して並べ、後ろに掛軸を下げる（チガヤの敷き物は敷かない）。

盆棚は組立式で三尺四方で高さ六尺の棚があって、回りに四本の竹を立てる。このごろは新盆の家は盆棚を作るが、ふつうの家では仏壇で間に合わせたり、仏壇の前に机を置いて供え物を上げて済ませたりする。（上神梅）

戦争前は盆棚を作ったが、敗戦を機に、世の中が変ったというので、作らなくなった。今は略式で、仏欄の前に二本竹を立てるだけ。かざりを少しする。昔は、組み立てて、かざりをつけた。寺や神社の仏画や字のかけじをかけ、いはいの他、盆花、茶、おはぎ、もらったものをおいた。ナスとキュウリの馬をおいた。ナスを細かく切って、かいばといって、イモの葉に入れ、萩の葉でほうきを作って、水をあげ、ほうきをしめして、かいばをしめした。上のだんは大人がいて、下のだんには子どもがいるといって、盆棚の下に机をおき、かざってやった。（神梅）

供え物　ウマはナスでつくった。これには盆棚をかざるときにつくった。これをナスウマといった。盆中に、ウマは壇の上においた。足は四本で、棒をさした。尻にはトウモロコシの毛でしっぽをつけた。盆中、仏様をおがむときにミソハギを小束にまるめたものを水にぬらして、ウマの背に水をかけてやった。

仏様は、ナスウマに乗っ

盆　　棚　（上神梅）
（関口正巳　撮影）

盆　　棚　（下神梅）
（関口正己　撮影）

盆　　棚（茂木）
（板橋春夫　撮影）

盆　　棚（狸原）
（板橋春夫　撮影）

盆　　棚（上神梅）
（関口正巳　撮影）

移す。仏様に水をあげるのである。またカワラケにボタモチを入れて供える。

送り盆ではナス製の馬に四足をつけ、うどんをのせて送り出す。墓地にボンダナの竹など持って行って燃す。（長尾根）

盆棚の下に台をおいて、その上にどんぶりを二つならべた。片方に水をいれ、片方はイモの葉の上にのせて、中にナスでつくったウマを入れておいた。

ミソハギの小枝をとってきて、その先をすこし切って、三ところしばったものをつくる。それを、どんぶりの水にひたして、片方のどんぶりに水をうつした。これは、ウマに水をかけてやることである。（水手向け）

（ナスのウマは、足をマッチ棒かしの竹でつくり、しっぽはトウギミのチンケ）

仏様はこのウマに乗ってきて、ウマに乗って帰るという。（長尾根）

ナスとキュウリに四本棒を刺して、トウモロコシのチン毛のシッポをつけた馬を作る。ボタモチ、菓子、果物、スイカ、トウナス、トウモロコシ、うどんなどを供える。仏様の食事は十三日の晩から供え始めて、三度三度とりかえる。（塩原）

棚の上や前の机の上に、カボチャ・スイカ・ナスなどの供え物を置く。

芋ッ葉をハスの葉の代用にして、露受けに敷き、井に水を入れて供える。萩の枝で井の水を散らして、供え物を濡らした（子作の頃）。

ナスの馬を一頭作り、トウキビの毛を尻っぽにつける。お膳の箸は萩を使う家もある。（上神梅）

てかえるといった。

ショウリョウサマへの供えものは、カツラケ（土器）を買ってきてそれにのせてあげた。おはぎなどは小さめにつくってあげた。上の仏様には、ふつうのうつわにのせて、お膳であげる。上の仏様へあげたものはさげて食べるが、ショウリョウサマへあげたものは、あげっぱなしにしておいて、おくりぼんのときに、墓へもって行った。（浅原）

盆棚の上にはどんぶりにイモッパを入れてそこに水を入れ、山から取ってきたミソハギを束ねて別の皿に入れ、ミソハギの束で水を皿に

盆棚の供え物（小平）
（板橋春夫　撮影）

盆　　棚（小平）
（長沢利明　撮影）

盆棚の供え物は膳に茶椀を九個並べ、六個には白飯、三個には煮物を盛って供える。午後白飯を下げて、お茶を上げてから送り出す。

また、茶椀六個に水を入れて、寺から貰った茶の葉を入れて供える家もある。コップに水を汲んで供える家もある。

チガヤの縄を張って、ホウズキ三個ずつ下げる。（下神梅）

盆花　造花の盆花は大間々へ行って買ってきた。これは、盆様へ飾った。（盆棚の向って左側、位牌と同じ壇に立てておく）盆が終ると、仏壇に供えておいた。古い盆花は、盆のあいだは盆棚の下に飾っておいて、盆おくりのときに、送りだした。

山からとってくる盆花は、キキョウ、オミナエシ。ボウズ（カルカヤ）をとってきてあげることもある。これらは、花瓶にさしてあげる。盆棚の柱に、しばりつけてあげるうちもある。（浅原）

造花の盆花は大間々へ行って買ってきた。盆花は毎年とっておいて、翌年はかばへもって行った。

草花はキキョウとかオミナエシを、十三日にとってきて、盆棚にそなえた。（長尾根）

盆花はキキョウ、カルカヤ、オミナエシなどで、秋の七草を、盆棚に飾った。

また、造花の花を、大間々の花屋が大きなザマを背負って売りに来た。ほかに色紙、カワラケ、マコモなども持ってきた。古い盆花は、送り盆のときに、もしてしまう。（上桐原）

山からキキョウ、オミナエシなどの盆花を取ってきて盆棚に供える。（塩原）

造花の盆花は大間々から行商の人が売りにくる。草の盆花は秋の七草を山から採ってきて盆棚にそなえる。ききょう、おみなえし、なでしこ、かるかやなどが主なものである。盆送りの時は新しい造花の盆花は仏壇にしまっておき、去年のものを燃やしてしまう。（上神梅）

盆花は山へキキョウ・オミナエシ・カルカヤ・ボウズなどを取りに行く。前には上の原に生えていたが、今は無くなった。（上神梅）

無縁仏　ショウリョウ様は一人前にならない子供の霊で、上にあがれない。茅で小さなゴザを作り、盆棚の下に祀る。供え物は同じ。（小平）

盆棚に飾った十三仏の掛軸（上の台）
（板橋春夫　撮影）

ショウリョウサマは子どもの仏様のこと。この仏様の位牌は、ほかの仏様と一緒に棚の上に置くが供えものは棚の下にする。ここへは、小さいぼたもちをつくって、かわらけにのせてあげる。位えものをするときに、「ショウリョウサマにあげます」といってあげる。（長尾根）

畑を人から買った時などに隅に墓地がついてくることがある。これが無縁仏で、盆棚の下に小さく供え物をしてまつる。（塩原）

無縁仏は行き倒れなどの精霊や、縁故のない仏をいい、無縁場という墓地もある。盆棚の下にカワラケを置いて、ボタ餅を2個ぐらい供える。「無縁仏がいるから」という。（上神梅）

留守居仏　位牌を出した仏壇にも、留守居仏と言って同じ供え物をする。（小平）

盆のあいだは、仏壇には留守居仏といってお茶とかごちそうをあげる。ここへは線香とかおあかりはあげない。（浅原）

盆棚の下に飾るオショウリュウサマ（狸原）
（板橋春夫　撮影）

盆棚の下に置かれた無縁仏の供え物（小平）
（長沢利明　撮影）

位牌を移した仏壇にも盆棚同様に、供物をあげる。留守居仏がいるという。（塩原）

イキミタマはしない。

地蔵盆もしない。（上神梅）

盆むかえ　遠い人は十三日の午前中から行く。ふつうは十三日の午後。だれでもすきのものがむかえに行く。むかしはいい着物を着て行った。

お寺へはお金と投灯をもってむかえに行った。提灯にはお寺で火をつけて、墓へはおまいりしないで家へ直接来た。玄関から入って、棚に火（行火に火をうつした）をつけた。お茶をお寺でくれた。それをもらってきて仏様にお茶を入れてやった。（門火なし）

このあと、夕飯を食べた。

新盆の場合には、お寺へ草履と笠とお金をもって行った。これは旅仕度という。（浅原）

むかしは十三日に盆むかえに寺（桐生市の川内町、雲禅寺）まで盆迎えに行って提灯にあかりをつけてきたが、寺まで一里もあるので、今は世話人が代表で盆むかえに行ってくれる。各戸から、塔婆を書くかどうかを聞いて、希望があればその代金とあとは灯明代として五百円ずつあつめて寺へ納める。寺からはマッチを一箱ずつ各戸へよこした。このマッチで盆棚のお灯明へあかりをつけた。それはそこのうちのおとなの仕事である。これが、現在の盆むかえのかたちである。

新盆のうちは十三日にお寺まで盆むかえに行く。お金と、サイダーなどの飲みものをもって行く。塔婆を書いてもらってきた。むかしは、笠とぞうりをお寺へもって行ったという。

なお、むかえてきたあかりは、縁側からあがってつけるのがふつうである。中には玄関から入ってつけるうちもある。（長尾根）

この村の寺は三寺、雲祥寺（桐生市川内町―曹洞宗）自音寺（大間々町高津戸―真言宗）日輪寺（大間々町浅原―天台宗）である。盆迎えはお寺に役員（寺の世話人）が代表で行き（元は希望者が一〇～三〇円持って）寺ではマッチ棒を三本包んであるのをくれる。戦前は米、戦後は麦を一升、寺から寄越したエコウ袋に入れて持って行く。（寺では他村では米を搗いてくるのに長尾根では搗いていないというので、それではやらないといって持って行かなかった事もある。）寺の仏壇に燈明がついていて、それをもらってくるべきなのだが遠いので、燈明の代わりにマッチ三本くれた。今は五〇〇円を納める。これで寺では先祖代々の塔婆をつくって、十六日に拝んで盆送りのときくれる。遠いから送ったあとで持ってくることになるので、これを先にもってくる。以前のこと、マッチ三本は馬鹿げているというので、代表がマッチ小箱を皆にくれたことがある。それからはこのマッチを寺で作るようになった。その後五〇〇円納め大きいマッチを寺ではくれるようになった。

新盆のとき寺へのあげものは、昔は施主が菅笠、ワラジ、ゾウリなど、今ではコウモリを納める。寺では塔婆を作ってくれ、僧侶が拝みに来たとき包む。普通の先祖代々の塔婆は三尺位のだが、新盆の塔婆のは五～六尺位のである。

新盆迎えは施主が行く。昔は提灯を持って、寺の本堂を入った所の前の座敷にある盆棚の燈明から火をつけてきて、自宅の盆棚に移した。盆棚はチガヤの縄で囲み上の二段には色紙・ホオズキを飾り、棚上にはスイカ、カボチャ等を供える。お膳は台の上に置く。一人前にならないで死んだ人も盆棚に祀る。（長尾根）

八月十三日、盆棚を作ってから、寺へ盆迎えに行く。城の正円寺まで、提灯を持って車で行く。帰り道に墓へ回る。弓張提灯に火をつけて来て、玄関から入り仏壇の明かりをつける。「迎えに来たよ」といって迎えて来て、家へ着くと、「連れて来たよ」というわけになる。迎え火は焚かない。

盆むかえは八月十三日。寺へお包（金）を納めて、ちょうちんに火をもらう。寺からは、お茶と菓子がでる。墓場へ行き「お盆だよ、いっしょに行くべ。むかえにきた。」といって仏様を連れて家に帰る。門火はたかない。明りは家の玄関から入る。ちょうちんは盆棚の前にかざる。

新盆の時はお包のほかに笠と草履をお寺に納める。（上神梅）

迎えは七月十三日にお寺まで行き、ちょうちんに火をつけて、家まで案内してくる。その火を盆棚の灯明にうつす。御先祖さまが、ちょうちんに入ってくる。（神梅）

十三日午後、覚成寺（盆迎えに行き、お布施を三百～五百円も包み、棚から提灯の火を貰って来る。（下神様）

八月十三日が、迎え盆。朝盆棚をつくり、ほた餅を作り、夕方定紋付きの提灯を持って、お寺へ迎えに行く。寺では、新竹につるした高灯籠を上げておく。これを目じるしに先祖の霊が集まってくる。寺から迎え火をもらって提灯のローソクに火をうつし、墓に立てた行燈に灯りをつけて、家へもどって来る。家に入る時、玄関から入らず直接盆棚を祀った部屋から上り「こんばんわ」と言って、盆棚のローソクに灯を移す。（大間々）

寺の盆棚　（上神梅覚成寺）

新盆　施主は、なにがしかの金と、傘と草履を寺に持っていく。そして盆を迎えてくるが、寺では茶とロ

ーソクをくれる。

盆棚は新盆の時に直す。（小平）

新盆の場合も盆棚は同じであった。ただふつうとちがうのは、岐阜提灯を、盆棚の前にさげるとか、縁先にさげるとかした。

新盆の場合の位牌は、古い仏様の位牌の前列の中央にならべる。

盆中に和尚さんがまわってくるのは新盆の家、そのあと一般の家をまわった。盆棚の前でただおがむだけ。仏様に水をかけるまねをした。（浅原）

新盆の場合は盆棚は同じ。新しい仏様は同じ棚にならべておく。

新しい提灯（岐阜提灯）を買って、盆棚の前につるしておく。（長尾根）

新盆用の管笠・ぞうりを持って、寺へ新盆迎えに行く、「これをはいて来て下さい」といって、寺へ納めて来る。（上神梅）

盆の墓詣り（上の台）　（板橋春夫　撮影）

新盆棚奥の台上に遺影を飾る。（下神梅）（関口正巳　撮影）

新盆見舞　昔は丼とか麩、ウドンなどを持っていった。ウドンを沢山貰ってもかびてしまう。今は金になった。

新盆の時の挨拶は「この度は新盆でお淋しうございます。」と言う。普通の盆には、「結構なお盆様でおめでとうございます。」と挨拶する。（小平）

盆のあいさつは、けっこうなお盆様で、おめでとうございます。という。お盆様がお客にくるので、このいい方がある。新盆にはいわぬ。（上桐原）

新盆のときには見舞客が来る。会葬に来た人くらいは見舞に来た。むかしは、麩とか干うどんとか、丼などをもって来た。最近は、コップなどの器とか、お金をもってくる人が多くなった。しかし、むかしも今も、新盆見舞に来る人は茶碗類をもってくる。

あいさつは、「結構な盆様です。」という。

お見舞に行った人は線香をあげた。近親者はごちそうを食べたが、一般の人はお茶を飲んで帰るだけ。（浅原）

ふつうの盆の場合は、親戚のものが見舞にくる。これを線香立てに来るという。このときの挨拶は、「結構なお盆様です。」という。もってくるものは、果物とか、砂糖とか、お金など。

新盆の場合には、葬式に立ちあった人が来るのが本来の形というが、それほどの人は来ない。親戚の人とか、近ばの人が来る程度。このときの挨拶は、「新盆様でおさびしゅうございましょう。」という程度。お見舞としてもってくるものは、むかしは、うどんとか輪麩、瀬戸物（どんぶりとか茶碗など）をもってきた。今は砂糖折とかお金。

なお、新盆のときには、坊さんが来ておがむ。（長尾根）

アラ盆のあった時は棚も新しく作りかえる。盆見舞のあいさつは、「こちらはアラボンで、おさびしゅうございましょう」と言う。新盆見舞はソウメンを持っていくものだが、今は砂糖、金の包み、スイカ

などを持っていく。（塩原）

新盆の場合、葬式に立ち会った範囲くらいの人たちが挨拶に行く。その時、砂糖の折箱を持っていく。これにお返えしをする地区もあるが深沢（上神梅）ではお返えしはしない。

挨拶は「新盆でおさびしゅうございます。」という。ふつうの盆の時は「けっこうなお盆さまですね。」というような挨拶をする。（上神梅）

新盆の家には、水をたっぷり飲んでもらうというので、どんぶりを持っていく。普通の家同士では、さとうを持っていく。（神梅）

新盆見舞は組合では十三日、ふつうの人は十四日に、新盆の家（線香あげに行く。千円くらい包んで行く。清めに酒を出すが、精進揚げに、キュウリもみ、ナスもみなどの料理が出る。

寺へ話せば、坊さんが拝みに回って来る。

挨拶は「結好なお盆様でございます」

新盆見舞は「新盆でおさみしゅうございましょう」。（上神梅）

普通の家では「お盆さまで、さぞさびしいでしょうねえ」、新盆の家では、「さぞ、おさびしいことでしょう。」という（神梅）

中日　七月十五日。下神梅では、この日に送った。（神梅）

盆送り　十六日の午後、お昼を食べてから、墓まで送って行く。盆棚をかたしてから送って行った。位牌は仏壇にかえした。

うち中で送って行った。お客に来ている人がいれば、その人も一緒に送って行った。門火はたかなかった。

このときもって行くものは、ムギわら、竹、なわ、うま、花、ショウリョウボトケにあげたもの。これらをござに包んでもって行った。ただ、ござは、あとでもちかえった。そのほか、線香、だんご、水をもって行って墓にあげてきた。

墓地の空地で燃した。このとき竹がはねるといいといった。そなえものを燃やすけむりにのって仏様はかえるといった。

遠い人は三本辻までおくって行った。（浅原）

十六日の午後、お昼を食べてから送って行く。うち中のものが墓地まで送って行く。このとき持って行くものは、だんご、線香、水、花（前年に買った造花の盆花ももって行く）と、盆棚の図囲に立てた青竹、ナスでつくったウマなどである。送り方は家によって方式がちがう。

三本辻でムギわらと青竹をもやす家もあるし、墓地で同様に青竹をもやす家もある。三本辻で青竹が三回はねるまでもやして、それから墓までおくって行く家もある。青竹をもやしたけむりと音にのって、仏様はあの世へ帰るのだといっている。ナスでつくったウマは、墓地か三本辻へすててくる。（長尾根）

送り盆は三本辻で竹その他を燃す。生の竹を燃すとよい音がでる。その音に乗って仏様が帰るという。

馬だけには火をつけないで、別の所に置く。（小平）

送り盆は十六日の午後墓地の近くの三本辻で火をたいて送る。神葬祭の人も同じ。

迎え盆は寺に行き火をもらって来る。

神葬祭の人は貴船神社から幣束をもらって来る。塩原、塩沢、穴原に二十三軒ある。

十六日の昼飯時に「しょい縄」といって、盆棚の竹にうどんをひっかける。

夕方、盆棚の四方の竹をまとめてサンボン辻に持っていって焼く。その火で線香をつける。竹がドカンと鳴って、その音とともに仏様が出発する。音が大きいほど良い。そのあと、線香、花、ボタモチを持って墓詣りに行く。（塩原）

盆送りは八月十六日。最後のうどんを打って盆棚に上げてから送り出す。むぎわらを燃やして門火をたく。きゅうりやとうもろこしをそなえ、香炉を持ってきて線香をたて、鐘を燃えつきるまで叩きつづける。この時、なすで馬を作ったものをそなえる。この馬が供えたもの

を運んで行くという。また、去年の盆花や、盆棚にかざったものも一緒に燃やしてしまう。それから墓地に行き、線香をたてダンゴを上げる。

送り火は盆棚の縄などをはずして、三本辻で焚いてから、墓へ送りに行く。

盆送りには三本辻に麦わらを置いて、ボンボンと送り火を燃す。今は墓地の前で燃す家もある。（上神梅）

送り火は、むぎわらを持っていってたく。かざりをもやし、竹がはねるとその音で御先祖様が、十万億土に帰っていくとされた。きゅうりとなすの馬をそばこに置いておいた。（神梅）

下神梅では十五日午後、ふつうは十六日午後、盆送りをする。朝ボタ餅、昼うどんを供えて、二時か三時ごろ、盆棚をこわして竹や供え物を持って、三本辻の元地蔵様があった所（中井の辻）に行く。何軒かモヨッテ集まり、麦わらを燃しつけ、竹・盆花その他を燃やす。芋の葉にのせたナス・キュウリなどの供え物を置く。盆様に上げたお茶を膳ごと持って来て、こぼして供える。仏様が乗って帰るナス・キュウリの馬に、餌としてナスを細かに切って里芋の葉にのせて出す。

十五日に盆送りする所もある。（下神梅）

十六日に早くうどんでもぶって送る。

高津戸橋で灯籠流しをしたこともある。（上神梅）

盆様に供えたトウモロコシを送り火で焼いて食べると、デキモンができない。風邪をひかないという。

送り火の煙で顔・腹・膝などなでて、痛みを持って行ってもらうように呪う。

仏様のものは変えるものではないといって、昔からの古い茶椀や銅碗などを用いて、茶を供える。（下神梅）

八月十六日が、送り盆。早おひるを食べて、家の庭で送り火をたく。

盆送りナス馬、茶、盆花、竹を外して送り出す。（下神梅）
（関口正巳　撮影）

盆送り、ナス馬、盆花、茶を持ち出して灯明と線香をあげ、茶を注ぐ。
（下神梅）（関口正巳　撮影）

盆送り（上の台）　（板橋春夫　撮影）

盆の飾り物。ナスの背に五円玉がのせられている。（上の台）　（板橋春夫　撮影）

盆の飾り物に火をつけるところ。（上の台）（板橋春夫　撮影）

送り盆。川辺で盆棚の竹を焼く。（小平）（長沢利明　撮影）

盆送りもと地蔵様があった辻へ数戸が集まって送り出す。（下神梅）

盆棚の飾りものや、供えものすべてを燃やしてしまう。笹竹が燃える時に、ポーンポーンと音がする。この音を合図に、ホトケサマは、煙に乗ってあの世へ帰って行く。

送り火がすむとお寺へ行く。新盆の家では、道中が暑いだろうというので、菅笠、履物をお寺さんに上げる。親戚から贈られた岐阜提灯なども寺へ納めてしまう。（大間々）

正月と盆の十六日　この両日にうまやごいを出したことがあった。うまやごいを出すのは若い衆で、この仕事をしてから遊びに行った。（浅原・長尾根）

盆の十六日の晩に、かてめしをこしらえて神様？（ジオウサマ）にあげたことがあった。（浅原）

盆の十六日は出かせぎ人も来て、ゆっくりする。馬屋肥（こ）いを取る日で、五目飯でも作れといい、生臭物を食べてもいい。馬にはくれない。（上神梅）

盆の食習　盆にボタ餅、昼はウドン、夜は米の飯トウナス汁よ。（小平・長尾根）

盆中の食物は、「朝はボタモチ、昼間はウドン、夜はコメの飯、トウナス汁。おらちは盆だちうにナスの皮のおじや」と、盆踊唄にある。（上桐原）

十三日は、朝と昼はいつものとおりで、とくべつのごちそうはない。夜はいくらかごちそうをする程度。

十四日は、朝はぼたもちが多い。昼はうどん、夜はごはんととうなす汁。

十五日の朝はぼたもち、昼はうどん、夜はこわめし。

十六日の朝はぼたもち、昼はうどん。これをひるばてえという。盆様のしょいなわといって、盆棚の前にかざる。晩にはかてめしをする。

十七日は盆がらといって、半日ぐらい仕事を休んだが、とくべつのごちそうはない。（浅原）

十三日…朝はとくにきまりなし。ふだんと同じ。昼も同じ。夜はごはんとうどん。トウナスのにもの（トウナスは買ってあげた）。

盆の十三日の晩には、かつぶしを食べろといわれた。このときは魚を買って食べた。こうすると、仏様に口をすわれないという。これは、家中で食べた。仏様は、魚をきらったというが、盆魚はかならず食べるものだといった。新盆のときにも同様。

十四日…朝はぼたもち、ひるまはうどん、夜は米のめしをした。

十五日…朝はぼたもち、ひるまはうどん、夜は米のめしか、ありあわせのもの。

十六日…朝はすしとかかわったもの。（これはぼたもちであきたからである。）ひるは、朝こしらえたもので間にあわせるか、うどん。よるはべつに用意をしなかった。ありあわせのものを食べた。なお、夜、かてめしをつくるうちもある。これは、ジオウサマにあげるといって、仏壇にあげた。（長尾根）

十三日の朝、昼はふつうの日と同じ。夜はご飯をあげ、トウナスの煮たのをあげる。この日は、仏様に口をすわれないようにと、うち中でさかなを食べる。

十四日の朝はぼたもち、昼はうどんで、夜はごはんとトウナスの煮たもの。

十五日の朝はぼたもち、昼はうどんで、夜はごはんとトウナス。

十六日の朝はぼたもち、昼はうどん（おひるごはんを食べてすぐ盆様をおくりだす。）、夜はしょうゆめしをたいて仏壇にあげる。これは、ジョウサマにあげるという。

十七日のことはボンからといって、食べものはかわったものはしないが、仕事を半日休んだ。

盆の十三日の晩には、なまぐさもの（くさいもの）を食べろという。この晩は、家中のものが、さかなをおかずにして、トウナスをにて食べた。こうすることは、仏様に口をなめられないようにということである。（長尾根）

盆の食事は「朝はボタ餅、昼間はうどん、夜は米の飯・トウナス汁よ」と歌われ、盆の間はこのとおりに作る。（上神梅）

うどんとおはぎ。朝はぼたもち、昼はうどん、夜はごはんとおはぎ。（神梅）

盆の食事は朝ボタ餅、昼うどん、夜白飯（しろめし）を十四、十五日と続ける。（下神梅）

盆踊り　盆踊りは毎晩やっている。最近は納涼おどりになった。出しものは八木節が主であった。八木節のことは、むかしは関東節といった。むかしは石投げおどりとか田植おどりもやった。八木節は四つあし、八つあし（八歩いってもどるやり方）といって、なにをやってもおっついた。（校庭でやっている）。（浅原）

盆踊りは寺か神社で行なった。昭和以前は松源寺の庭で、それ以後は貴船神社、八幡様で、昭和二十年以降は学校の校庭でやっている。今は八木節だが、ずっと昔は関東節をやった。のんびりした感じの曲で、文句は同じだが曲が異なる。栃木の方の民謡である。踊り手は村の青年達で、ヤグラを立てて、早々と練習を始める。

昔は、柏山、花輪、川内、小平、仁田山、新里、諸町の方まで盆踊りの見物に行った。歩いて行くので帰りが夜明けになることもあった。各地区毎に日がぶつからないように日をずらしてやっていた。（塩原）

盆踊りは音頭取りが太鼓をたたいて歌い、猫もしゃくしも参加して踊った。堀米源太も貴船神社に来た。一時低調になったが、最近復活して、景品を付けるようになった。（上神梅）

盆踊りは埼玉県の方の口説みたいなうたと八木節。国定忠治、佐倉宗五郎、乃木将軍、〜づくし、宿めぐり（黒保根村の）など。場所は、寺や庭の広い家を借りてやった。（神梅）

八木節後援会ができて、青年に中学生も参加して踊る。ここ二、三年で青年が勤め人になり、最近は中学生が中心になってやる。(下神梅)

盆ガラ　八月十七日を昔は盆ガラといって農休みをしたが、今はお蚕があって休めない。

盆中は生ぐさを使うものではないといって豆や豆腐など精進料理を食べる。(上神梅)

十七日は盆ガラで念仏をする。鉦をたたき、鈴を回して、「ナムアミダンブツ、ナムアンダ」と唱えながら、毎戸を回る。お金を貰って、最後にお寺にいき、その金で菓子を買って帰る。昔は大人がやった。今やっているのは、折の内と中組だけである。昔は皆やった。(小平)

十七日は盆がらといって、午後の半日休んだ。一把線香を庭に立て、十玉様を名ざしてあげる。夜はショウユ飯をたく。馬(牛)小舎のこやしをだす。(上桐原)

盆がらには仕事をしないで、休養をとる。

両親がいるうちは、嫁は盆のうちはお客にやられなかった。盆がら(十七日)になってお客に行った。(上神梅)

嫁に来た年には、盆には里へ帰るものではないという。盆が来るから、嫁を(盆前に)里へお客にやれといった。(浅原)

盆中の不幸　シラジ(流れかんちょう、白と赤、赤はふつうのお産)をかぶしてお棺に入れる。皆きているのに行ってしまうので、避けて先へ送るということはない。四十九日にならぬものは皆シラジをかぶせてだした。(上桐原)

観音様(十七日)　石尊様と同じ日に祭る。ここは足尾路の東三十三札所の二十番、如意山観音寺で、渡瀬川を流れて来たという石仏を二体祭っている。

お産と目の神で、よくお願をかける。歓音・薬師二体が並んでいる。(下神梅)

九　月

二百十日(一日)

百八灯　赤城神社に集って、この日に百八灯をたてた。神社の回りに、しのの先にろうそくを立て、火をつけた。作物の豊作を祈願するのだともいった。これは役員の人たちが行なった。(塩沢)

(旧八月十七日)　山上の石尊大権現の石宮の所へ、新井の近所の者が百八本のろうそくを持って、回りの木の技にろうそくをさして明かりをつけてくる。主に子供たちが登るが、夕方、竹にボロを入れたタイマツに火をつけて持って行く。警防団員も火の用心のために行く。下の観音様の宵待で、お参りして一緒に祭るが、こちらでは百八灯はしない。

そうそくは封筒を回して寄付を集め、近所の人が世話をして買う。山上で百八灯をともしたあと、花火を上げて楽しむ。終って、下におりてから、地主新井家の庭にむしろを敷いて、大人は酒、子供はジュースなどで、一杯飲む。この行事をしないと、不幸が多いといい、マが悪いので続けてやる。(下神梅)

八朔(一日)　もとは、ハッサクオドリといって踊りなどもやった。嫁は盆には里に帰らずに、この日に帰る。親に何かを持っていく。(塩原)

ハッサクは嫁ぎ先でできた野菜や粉をもって、ヨメが実家の両親のご機嫌うかがいに行く日である。この日の里帰りは、泊ることが許される。実家からは、竹で編んだミ、ザマ、ショウギなどをお返しとして、もたせる。(上桐原)

ハッサクは九月一日、婿が嫁の実家へゴボウやショウガを持ってお客に行く。帰りにメカイやザルをもらって来る。(中神梅)

嫁とりして、始めてのハッサクには、行く時、ゴボーを持ってった。

帰ってくる時にメカイを貰ってきた。
「ありゃ新ムコだ」なんてひやかされるから、嫌だった。メカイの代りにザルでもいい。うちはゴボーがなくて、買って持ってった。（中神梅）
ハッサクには葉ショーガを二束持ってく。カタイ家がやる。
ハッサクに実家へ行く、なんて家はそうはない。（中・下神梅）

十五夜（旧八月十五日）

供え物　オマルとススキを十五本、野菜、サツマイモ、サトイモなどをお月様に供える。子供が竹に釘針を刺した道具を作り、遠くからオマルを突き刺して取る。これをやらないと子供達の仲間入りができない。十五夜の供え物は子供にさげられた方が良いが、家によっては盗まれたといって騒ぐ。（塩原）
十五夜はお月見大根（美濃わせ）ができるので、大根の初を供える。子供たちが供え物を下げに回った。家では下げられるように、戸をあけておき、行くと分けてくれた。今の子は欲しがらなくなった。（上神梅）
十五夜にオマルを米の粉二升で十五個作って供える。あとで切って焼いて食う。代りにふかしまんじゅうを作る家が多い。
子供が「下げてもいいかい」と回って来るので、「お月様が下げに来た」といって、供え物を分けてやった。十年も前のこと。（深沢）
八月十五日。山からすすきをとってきて、ダンゴを十五作って、柿やくりをそなえて、月を見る。子どもが、竹の先に針をさしたものを持ってまわり、だんごをさした。とられるほうもよろこんでとられてやった。見て見ぬふりをした。（神梅）
十五夜には、オマルをさげにいった。竹にクギのついたものを使用する。十五夜をすれば、十三夜もしなければいけない。片月見はいけないという。（小平）

社日　小泉、大泉の社日様は百姓の神様で、お祭の時には農具の市が立つ。遠いからあまり行かない。（塩原）

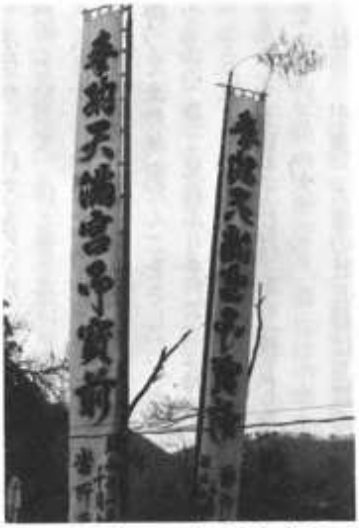
十　月

神送り（十月一日）　神送りだといって氏神様（八幡神社）へお詣りに行く。（塩原）

オクンチ（旧九月九日、十九日、二十九日）　九月には三回オクンチがあり、合わせてミクンチという。赤飯をふかして早朝、われ先にと競って八幡様にあげに行く。重箱一杯持って行って神様の口につめこんでくる。また、クンチナスといってナスを煮て食べる。（塩原）
オクンチはむらの氏神様の秋まつりのこと。むかしは旧九月九日、現在は十月十五日。この日は赤飯をつくってあげる。（浅原）
はるか昔のオクンチは、九月の九日、十九日、二十九日の三日間だった。神明様のお祭りで、十四日、十五日、十六日と三日間やった。産土様のお祭りで、おコワをふかす。この日、おコワを一番早く神前にあげたひとに、ご利益があるといわれ争ってあげた。十二時すぎれば、その日の分だからと、十四日はよい祭りで、お社に日番がとまる。十五日は一日中、飲んだり食ったりし、十六日は後かたづけをした。現在は昔の気分はない。（上桐原）

六合神社（上神梅）　（関口正巳　撮影）

十三夜（旧九月十三日）



天神様の祭日に立てられたのぼり旗（小平）（長沢利明撮影）

供え物は十五夜と同じだがススキは十三本。十五夜によその家に客に行ったら、十三夜にも行く。片見月はするものではない。（塩原）

十三夜には大オマルやうでま根、芋、ニンジン、ゴボウなどを表の縁側へ供える。（上神梅）

片見月　片見月は悪いので、十五夜を自宅で見たら、十三夜も自宅で見るようにする。祭り方は十五夜と同じだが、数は三個にする。（深沢）

十五夜と十三夜　十五夜に曇りあれど、十三夜には曇りなし。十五夜に雨が降ると大麦がはずれる。十三夜に雨が降ると小麦がはずれる。十五夜にはカキやクリを供え、ススキを五本か、十五本上げる。十三夜にはイモ・大根を供え、ススキは三本か十三本上げる。（深沢）

十三夜は、十五夜と同じようなこと。（神梅）

十一月

神迎え（十一月一日）　神様が帰ってこられるので氏神にお詣りに行く。（塩原）

七五三（十五日）　三歳と七歳が帯とき、女の子。五歳がハカマギで男の子。十一月十五日に神社におまいりした。（神梅）

十一月十五日は七・五・三のお祝い。長男と長女だけを祝う。次男次女以下はお祝いをしない。親戚から、女なら髪飾り、履物、お金などを贈られる。お返しには赤飯をたいて重箱に入れ、定紋入り、又は鶴亀などの入った袱紗を上に乗せて持って行く。重箱返しには、豆とつけ木を中に入れる。（大間々）

十日夜（旧十月十日）　十日夜には、わらのつとっこにきりもちを二コずつ入れて、地神様、稲荷様、荒神様、坂の稲荷様などに、名ざしであげた。（浅原）

トウカンヤといい、旧十月十日。もちは九日の晩についた。四角のもの（サイノメギリ）と、まるいのと二色つくった。

四角のもちは、二センチぐらいのサイノメにきったもので、これをわらのつとっこに三コずつ包んで、むら内の神様とか、仏様にあげた（屋敷の稲荷様、神社、墓場、自分の信心する神様とか仏様など）。一カ所に二本ずつあげた。

まるいもちは、十コつとっこに一列にならべていれて、わらでからげた。それをはたけとか田にあげた。一つぐらいのこして、あとはもちかえった。

もちをあげに行くのは十日の朝、だれがあげに行ってもよい。ただ、うちの神様には主人（としとりをする人）があげる。うちの中の神仏には、おはちとか皿にのせて、かさねないおそなえもちをあげた。

うちのものが食べたのは、きりもちとかあんぴん。これは神様などにはあげない。

だんごは作らない。

麦まきが終ると続いて十日夜である。餅をついて二センチ位のさいのめ型に切り、二～三ケツトッコに入れて各神様（墓を含め正月のオマツをあげた処全部―井戸、物置、お稲荷様、蔵、馬小屋等家屋敷の中、部落の神―に進ぜる。ツトッコは二十位つくる。またお供え餅を田、畑に十ケ供える。これは一、二ケを残しあとは持帰る。この日アンピン餅もつくり、これは家族でたべる。

神様全部にお供えをするのは、正月にお松、初午（赤飯）節分（大豆）五月節句（赤飯又は餅、外にショウブとヨモギ一本ずつ）オクンチ（赤飯）などである。（浅原）

トウカンヤという。旧十月十日にまつる。

「九日餅に十日だこ」といい、もちは九日の晩についた。もちのことは、トウカンヤモチという。

もちは、たてよこ二センチぐらい厚さ一センチぐらいの大きさに切って、わらのつとっこに入れて、はたけと田の神様に供えた。もちの数は、三、五、七、九コというようにつとに入れて供えたうちもあるし、二つ入れたうちもある。食べるもちは、あんびんにしたり、きりもち（ひらもちともいう）にした。

もちは、十日の朝、神仏に供えた。大体、お正月のときにお松をあげたところに供えた。はたけと田には、うちから近いところへそれぞれ供えた。供えるのはその家の主人で、十日の朝に供えた。

そのほかに、おそなえを神棚、仏壇に供えた。また、台所に積んでおいた米俵の上にもおそなえを供えた。

だんごは、十日の朝、米の粉でつくった。これはうちの神様だけに供えた。

餅をサイの目に切りツトッコにはさんで田・畑に置いた。シンは藁だけのワラデッポーをつくり、「十日夜のワラデッポー」といいながら土をはたく。大根がよく抜けるようにというのである。ツトッコは十二様その他の神様にもあげた。たべる餅はアンピン餅である。（長尾根）

十日夜は旧十月十日にする。九日夜に米の餅をついて、つけない家には分けてやった。十日夜餅はあん餅・ひら餅など、二、三臼つく。モグラップサギといって、餅を桑の葉にのせて、畑に持って行って、畑の真中に供えた。畑の神に供えるもの。大根は供えない。

餅二個をワラットコに挟んで、外の神様に供えて回った。天神・庚申・八坂・屋敷稲荷など。（深沢）

トウカンヤのモチは九日の夕方につく。形は家によって違う。話者の家では、切りもちを作る。七センチ×五センチほどの大きさ。神棚に丸いはちで、二個ずつ。食べるもちとそなえるもちは同じ。特に名はない。丸いもちをそなえる家もある。（神梅）

のし餅の断ちっぱしを刻んでダンゴとまぜてツトッコに入れたものを、十本も十五本も作り、お神に上げた。屋敷稲荷、村の氏神、その他、十二様などに一本ずつ上げて回った。（下神梅）

十日ダンゴ　トウカンヤの日に作った米の粉のダンゴ。神さまにあげるが、数は決まっていない。（神梅）

ウルチ米の粉でダンゴを作り、ますに盛り上げて、床の間のオシラ様に上げた。初年に同様にして供えるが、十日夜にはしないという家もある。墓場にも行って、二粒ずつダンゴを墓に供えた。（下神梅）

九日もち、十日団子（十日夜モチ）といって十日夜の前日九日には、モチをついて、畑に供えたり、川端に供える。十日には、団子をつくる。（上桐原）

ワラデッポウ　ムギまきが終わるとすぐ十日夜になる。

わらでっぽうをつくって、子どもが庭などをはたいてあるいた。そのとき、「十日夜、わらでっぽう」といった。これはモグラよけという、モグラはこの音がきらいだからという。

もちをついて、さいのめに切って、わらづとに二コずつ入れて、屋敷の神様から、むら内の神様（お正月のときにおまつをかざったところ）まで、二十カ所ぐらいあげた。

わらでっぽうをつくって、子どもがたたいてあるいた。わらでっぽうは新わらでつくった。中にイモガラを入れるといい音が出るといった。これは、子どもがつくったりした。うちの庭をたたいたが、近所の子どもがくると、よそへもたたきに行った。これには唱えごとがあったが忘れてしまった。

ムギについては、十日だねをおろすものではないという。その理由

はわからない。十日夜までにムギまきをしておけといった。
十日夜にはモグラ退治のまじないのために、わらでっぽうで庭などをはたくのだという。（浅原）
十日夜にはわらでっぽうをつくった。新わらをなわでしばった。中には、いい音がでるようにと、イモガラを入れた。これは、大人がつくってやった。子どもたちが、むら中たたいてあるいた。このときの唱えごとは、「十日夜のわらでっぽう、もちくって、ひっぱたけ」というもの。これは、モグラをかためるわけだという。大根は、わらでっぽうの音をきいて首をもちあげるとか、ぬけでるといった。
シンにイモガラを入れたワラデッポーを作って、土をたたく。畑、田、庭など。モグラ退治ともいい、これで大根がよく伸びるともいう。土をたたくときの唱え言は「トウカンヤ、ワラデッポー、モチクッチャ、ブッタタケ」。そして餅を小さく切って、ツトッコに入れ田の神と畑の神（正月に幣束を立て、お松を立てた所）にあげる。家の人は四角のノシモチをたべる。（長尾根）
イモガラに藁を巻いて、家の庭を子供らが集まって叩く。ワラデッポウがちぎれるまで叩く。これはモグラを退治するためのまじないである。
十日夜にはわらといもがらで、わら鉄砲を作って地面をはたいて回った。
もぐらを防ぐまじないだった。もぐらは土手の中を通して土手が崩れる危険が多かった。しかし、畑の虫を食べてくれるのでよいともいわれていた。（塩沢）
新わらに芋のジクを一本入れて巻き、ワラデッポウを作って、庭先で地面をたたく。麦蒔きを終えて、モグラ退治の呪いにする。
「十日夜、十日夜、夕飯食ってぶったたけ」
大根などは供えない。
旧十月十日はトウカンヤで、子供が藁にイモガラを入れて、藁鉄砲をつくり「トウカンヤ、トウカンヤ、ムグラ鉄砲、ブッバナセ」といいながらたたいた。もぐらふさぎであるという。（上神梅）
トオカンヤには藁でこしらえた藁鉄砲を四五人でトッカン、トッカンと「トオカンヤのワラデッポウ～」と唱えながら打って歩いた。昭和十年頃にはイモガラの太いのをとってきて藁鉄砲のかわりにやった。この頃は唱えごとはなくなっていた。（二軒在家）
ワラデッポーはミョウガ、イモガラを入れる。音がよくなる。その音を聞いてもぐらが逃げていくという。子どもがワラデッポーをついて、村の各家をまわって庭をたたく。家では、何も出さない。
「トウカンヤ、トウカンヤ、モグラモチはお宿にか。」といってまわった。（神梅）
子供がワラデッポウを作って、地面をたたいて回った。「九日餅二十日ダンゴ、サンザクッテブッバタケ」と唱える。家の回りをたたけば、モグラがもたせない（持ち上げない）という。（下神梅）
子どもたちが、十日夜、十日夜のワラデッポウ、といいながら、ワラ鉄砲で地面をたたく。ショウガの葉を芯にすると、よい音がでる。モグラたたきだという。ダイコンとの関連をいうこともある。使ったあとのワラ鉄砲は、特定の場所ではなく、そこらに捨てる。（上桐原）
大根の年取り　トウカンヤのことを「大根の年取り」ともいう。「ココノカモチとトウカダンゴ」といって、九日に餅をつき、十日には団子を作る。切餅を二個ずつ藁のツトに入れ、氏神、大神宮、機神、稲荷などいろいろな所に供える。十日夜には麦をまくものではない。（塩沢）
十日夜には近所の庭を回って、「トウカンヤ、ワラデッポウ、ヨウメシクッテ、ブッバタケ」といってたたく。
十日夜の餅をつく音で大根が育つといわれている。（小平）
十日夜は大根の年取りという。縁側には供えない。（上神梅）
ダイコンの年とりで、トウカンヤのもちをつく時に、からみもちを

食べた。まいて百十日くらいでとれるから、とって食べてもいい。

トウカンヤにカカシを立てることはなかった。

トウカンヤに山にのぼることはなかった。

麦まきなどで、「十日たねは、おろすものではない」といわれた。よくないことがあるといってきらった。

よそに出ている人が帰ってこなくてはならないということはなかった。（神梅）

十日夜に縁側のハナ（先端）にススキや花を飾り、まんじゅう十個～十五個を供えた。箕に野菜をもったり、大根二本入れたり、栗・柿・サツマイモなども供える。庭には供えない。（下神梅）

イヌコロ餅　麦まき終わった時に、餅をついて畑に持っていって供えた。モグラがもぐらないように、モグラブサゲとして畑の真中に置いてきた。今はダンゴを作って汁粉にして食べたり、ふかしまんじゅうを作って食べる。（深沢）

イノコさま、イノコモチ、聞いたことがない。（神梅）

恵比須講（二十日）　一月二十日は朝恵比須。これは、えびすさまが商いに出かける日だという。朝、赤飯をたいて祝った。一月のえびすこうはいそがしかった。

十月二十日は夜、米のめしで祝う。

このときは、えびすさまが帰ってくるので夕飯にごちそうをした。えびす大黒の掛軸をかけて、サンマ（尾頭付）の生（なま）をあげ、けんちん汁、ミカン、カキなどをあげた。えびす講にはたねのでるものをあげるものだという。（浅原）

十月、ゑびす講という歌があるが、ゑびす講を実際にやるのは、十一月二十日である。この日には、ひのみや神社におまいりする。塞銭をあげるほかに、塞銭箱からこぼれたものを、種銭として拾ってきて、翌年のゑびす講に二倍にしてかえす。ゑびす様には、金福のご利益がある。あまりばっとしないと、塞銭をたんとあげないから貧乏しているのかな、などという。すると家内安全以外何も頼んだことはないからね、とやり返す。

家内のおまつりとしては、ゑびす様に新鮮なタイ（例が少ない）やサンマ、いくらかのご馳走、それに上げ底した一升ますに、家族それぞれが持前の金をお高盛りにしてあげたりする。また、家内のもの同志で、家でかざったささげものを買う風習がある。ごはんのお高盛とか、鯛のお魚とか、かきあげとか、おみおつけとかを何百万円と値をつけ、それぞれ買ったものがいただく。（上桐原）

エビス講は旧十月二十日、新十一月二十日。

春と同じ。一月二十日に家を出たエビス様が稼いで帰ってきた祝をする。作物が何でもできる頃なので、いろいろなごちそうを作って供える。柿、けんちん汁は必らずあげる。（塩原）

エビス講は十一月十九、二十日。この日の前に畑仕事を終わすように、目標をたてる。（深沢）

十二月二十日の恵比寿講の日は、はだかにならないようにといって、お湯に入らなかった家がある。（高津戸）

正月と秋のえびす講のときには、桐生のえびす様へお参りに行った。ここから、気のあったものとつれだって、あるいて行った。（長尾根）

エビス棚　えびす様はかせぐ神なので、台所へ北向きの棚を作って上げる。斜めに北を向ける。南向きに上げると、金が出るという。棚の下は人が通り歩かない所がいい。

エビス講には床の間で祭る。（上神梅）

エビス様に宝珠の玉の形にシメ縄を作って供える。（深沢）

十　二　月

川ビタリ餅（一日）　この日はカビタリモチだといって餅をつく。（塩原）

十二月一日には、カワビタリモチをつく。カビタリモチともいう。モチをつく音で、ネズミが逃げる。もちを供える場所は、神様、仏様、おかま様などであるが、現在は、ほとんどつかない。（上桐原）

カワビタリモチは十二月一日について食べるもち。河童に、おそわれないためという。

十二月二十八日につき、正月のしたくとしている家もある。（神梅）

川ビタリ餅は金子イッケでしていた。（下神梅）

ツジュウ餅　新井イッケは正月の餅がつけないで、暮に餅をついた。豆木に餅を二個つけて、トボにさしたが、名は不明。サマダンゴについては知らないという。（下神梅）

コト八日（八日）　春と同じ。十二月のこと日は「コト始め」で、正月のことを始める日。（塩原）

事八日は十二月八日、直径三尺ほどのキノハッカゴに柊を一本挿し、地面にかぶせておく。ダイマナクをよける。（塩原）

シマイコト八日。ヒイラギを、目かえにさして、目かえを、長竿の上につるす（いつける）。この日、来る魔物のことを、大目玉といった。かまは出さない。（上桐原）

霜月十五日（十五日）　この日は祝い日で、なんのお祝いをしてもよいという。七つのおびときもこの日神社へおまいりに行く。（浅原）

十二月十五日をシモツキ十五日という。（神梅）

冬至（二十二日）　ユズをとってきて風呂に入れる。

事八日のキノハッカゴ（塩原）
（上野勇　撮影）

トウジトウナスといってトウナスを煮て食べる。コンニャクも必ず食べる。コンニャクは土払いといって腹の中の泥を吸い取る。また、トウジソバといってソバを食べる家もある。（塩原）

冬至と霜月十五日は暦をみずにいい日であるという。トウナスを食べると中気にならないという。ユズ湯に入る。この日ユズをミソヅケにして、それを節分に豆と一緒に食べる。また、この日にコンニャクを食べる。「一年中の砂はらい」といって、腹の中の砂をはらうという。（小平）

カボチャをにて食べた。コンニャク、ユズも入れた。冬至―トウナス、ユズ―ユニタエルに通ずるという。（神梅）

ススハキ（二十三日）　十二月二十三日は日を見なくてよい。建前でも普請でも何でもしてよい。ススハキも大抵この日にする。（塩原）

すす払いは、もちつきの前日、あるいは、前々日に、家中総出でする。ふつうは、二十六日である。（下桐原）

ススハキは十三日が一般的であるが、それにこだわるということはない。竹でホウキを作ってやる。神棚から先に特に丁寧にやる。その年の幣束を集めて、川に流したり、屋敷稲荷におさめたりする。（谷田）

すすはらいは二十五、六日の都合のいい日にする。（神梅）

煤払いは冬至にした（十二月の二十一日か二十二日）。（高津戸）

歳末諸事

暮の市　暮の二、七の市（十二月二十二日と二十七日）で正月用品を売り出す。トビ職のおかしらが、門松、輪飾（ワジメのこと）などを街の一角に小屋がけして売る。買って来た飾りものは三十日に正月棚その他にかざりつける。輪飾りは、稲荷様、神棚、仏壇、門口に松の枝とともにかざる。ていねいな家では、井戸、便所、カマド、墓の入口などにもかざる。（高津戸）

大間々の暮の市で、正月の供え物をのせるオシラキを買う。(上神梅)

歳暮（十五日～二十日）　塩びきシャケ、ミカンなどを贈る。お返しにはネギの束でも返す。大体半額くらいのものを返す。返さない家もある。(塩原)

餅つき（二十八日、三十日）　クンチモチ（二十九日）とイチヤモチ（三十一日）はつくものではない。トウモロコシモチ、アワモチもよくついた。(塩原)

もちつきは十二月二十八日。九日もちはつくものではないといわれた。十二、三人の家で一俵はついた。(神梅)

餅つきは十二月三十日。臼の下に藁を十文字におき、臼にはシメ縄をはる。餅は、米の餅（白米だけ）、ツキマゼ（米と粟・黍・蜀黍などを混合したもの）などをつく。米の餅はお供えと、来客用につき、ツキマゼ餅はふだん家の者の常食用につく。(高津戸)

一夜もちをつくなといい、三十一日のもちつきは避ける。たいていは、二十八日から三十日のあいだに、つきあげる。(下桐原)

もちつきは、二十三日の夜がいちばんいい。たいていは、二十八日につく。二十九日は、九日もちというのでいけない。三十日でもよい。三十一日の夜ももちつきはいけない。一夜もちは、よくないという。(上桐原)

餅は二十九日か三十日につく。(谷田)

門松迎え（二十八日、三十日）　餅をつく日に、お松様も迎えてくる。アキノカタの山に行って松を切ってくる。シメ飾りは家で縄をなって作る。輪飾りはオエビス様、大黒様に、シメはミカン、和紙をつけて各所に飾る。大神宮にはコブをつけたシメ縄を飾る。(よろこぶの意)

大間々では二十七日から正月市が立ち、オシメなどを売る。(塩原)

お松迎えは日のいい日と方角をみて決める。二十八日がふつうである。(上桐原)

十二月二十五日。山へ、おさごと、ごまめの頭つきを持って行き、山の神様におそなえして、松の枝を切ってくる。しんは切らず、枝をとった。(神梅)

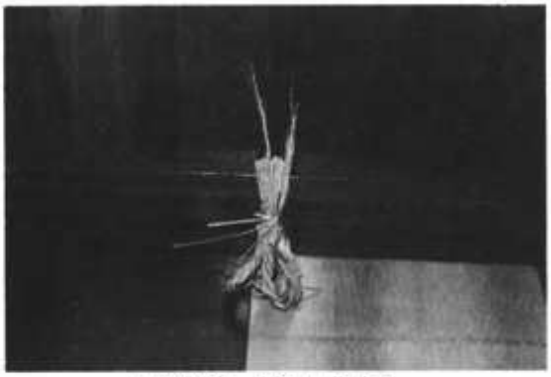
松迎えは十二月の二十五日頃山へ枝松をとりにいった。どこの家の松でも咎められなかった。オサゴと頭つきをもって山の神様（石宮がある）にあげてから伐ってきた。この山神様を十二様とも呼んでいる。(高津戸)

十二月二十五日が、お松迎え。山へ入って正月の門松にする松の枝を伐ってくる。どこの家の持ち山の松でもよい。別にとがめられるということはない。オサゴと、おかしらつきを山の神様（石宮が祀ってある）にあげてから伐った。(高津戸)

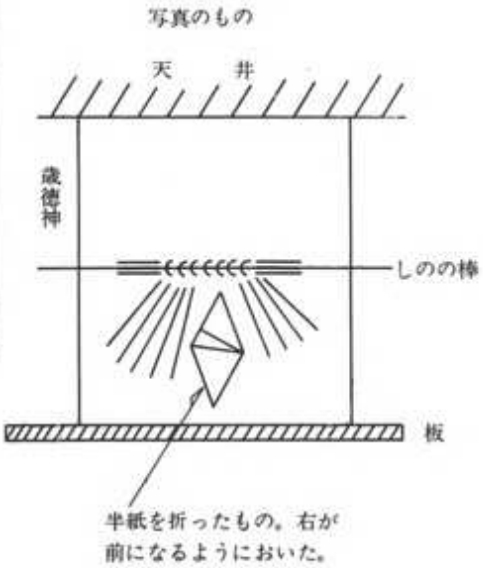
三階松がいいとされている。いい日（大安日）とアキの方をみて松を迎える。(小平)

正月用のシメ飾りを売る出店（大間々）
（長沢利明　撮影）

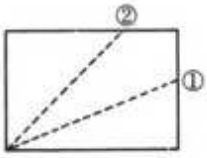
歳末になるとシメ飾りの市が立つ（大間々）
（長沢利明　撮影）



大黒様のシメ飾り（神梅）
（井野修二　撮影）



シメ飾り（ふつうの神様用）
（神梅）（井野修二　撮影）



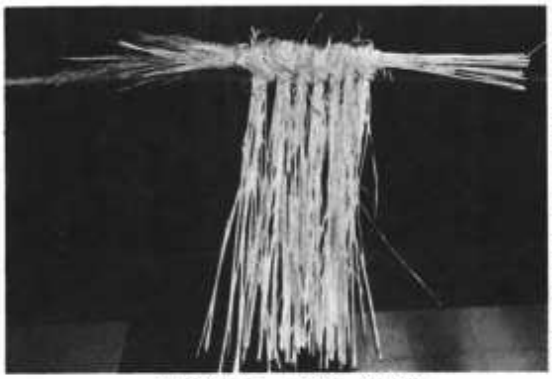
シメ飾り　わらで宝船を作って供える家もある。宝珠の玉飾りを作って、エビス様に上げる。（上神様）

三十日にしめかざりをする。一夜かざりをしてはならないといわれた。うすにもしめなわをかざった。（神梅）

しめなわ作りは十二月二十七日。歳徳神、大黒さま大神宮、おいなりさま、他の神様用と四種作った。（神梅）

しめ飾りは、二十八日に作りはじめ、三十日までには、お飾りできるように準備する。藤生本家では、ふつうの神棚はごぼうじめを飾る、また、毎年恵方の角に、三角形の棚をつくって、歳神様をまつり、そのむかい側に御魂様をまつる。その三角の棚に鳥居ができていて、その鳥居のかっこうのしめ縄をつくる。（下桐原）

松飾りは一夜飾りは良くないといって、大みそかの日は避ける。ふつうは、二十八日である。九の日もきらった。主人が、自分の山か共



歳徳神のシメ飾り（神梅）
（井野修二　撮影）

有山に出かけて、枝の小さいのをとって来る。同じ日に、しめ縄やしめ飾りも作りはじめ、三十日までには、お飾りできるよう準備する。

門松を一対とほかに、屋内では、歳神様、神棚、大神宮様、ゑびす様、かまど神様、屋外では、屋敷稲荷様、井戸神様、家畜小舎、ご不浄などに飾る。

現在では、おそらく、ふつうの家では、ひとの山からもらってまですることはないということになって、神棚を飾ればてんになる。さらに簡単なのは、門松と、あとは床の間に生花ていどとなる。

神棚の松は、ていねいには、三尺くらいのナラの木の細いのをうちつけた上に、三がいの松をとりつけて、しめ縄を一本張ることになる。（下桐原）

上神梅の福田勘助家では餅つきも、お飾りつけも、すべて十二月三十一日にやった。普通は一夜飾りをするものではないというが、福田家は家例として一夜飾りである。（上神梅）

正月飾は冬至後都合のよい日にした。主に二十八日から三十日にする家が多く、正月の餅をつく日に飾ること大部分である。オシメを太神宮、恵比寿様、竈神様、機神様にあげた。竈神様のところは、荒神様の分もあげるので二本あげ、機神様は機あしにあげた。

門松は、松の外に竹のシンコ（新竹）をあげる。この外に屋外では稲荷様、庭、井戸、物置、倉などにも飾った。（高津戸）

神棚　正月様をまつる神棚は、三角板になっていて、部屋の隅の上に吊した。年によってアキノカタをみて、その方面に吊した。（高津戸）

歳神　オシンメサマ（神明宮―大間々の鎮守）から、伊勢神宮のお礼を受けて来る。歳徳神と印刷されている。トシガミサマは、卯の日の卯の刻に来て、卯の日の卯の刻にお帰りになる。（高津戸）

餅を供える神　年神、大神宮、エビス様、オカマ様、コウジン様、井戸神様、水神様、稲荷様、床の間、玄関、機織を職業としている家では機神様。（谷田）

松を立てない家　妻沼の聖天様を信仰している家では松でなくクヌギを立てる。聖天様を信ずると、七代先の福を先取りしてしまうという。（谷田）

大晦日（三十一日）　ミソカソバを食べる。（塩原）

晦日ソバを食べると小遣い銭に困らないという。（小平）

大みそかにはそうじをするくらい。年こしそばを食べ、早く寝てしまう。朝までおきていたことはない。（神梅）

ミソカッパライ　年中バライともいって、不幸のあった家では、成満院で幣束を作ってもらって、三本辻に持っていっておさめる。（小平）

除夜の鐘　せいおん寺では、大みそかに、住職と近所の若い衆が除夜の鐘をついた。一月三日のお祭りがあるので、近在のひとは、元三大師とよんでいるが、子どもたちは、かんがん大師といっていた。鐘は、戦時中供出して、現在はない。

ぜんしょう寺は、壇家の衆が集まり、鐘をついている。（下桐原）

オシラキ　正月神様に食事をお供えする木の皿のようなもので、正月前にどこからか売りにきた。（高津戸）

奉公人の休み　十二月の末日から、正月十五、六日まで。鬼の首も許されるといわれた。（神梅）

口頭伝承

はじめに

伝説は、道玄の娘・伊勢ころがし・腰掛石・狸石・念仏石・弘法水・桜峠・山中・オイドその他の地名伝説が集った。伊勢ころがしは問答に勝って伊勢神宮の御神体を、塩原に遷したという話である。他に類話があれば知りたいものである。

昔話は、すずめとつばめ・めめずとへび・ほととぎすの兄弟・猿聟入・蛙と猿の餅競争・馬鹿聟・和尚と小僧などと、雑煮、戌の日に麦蒔きをしないわれが集った。「時鳥と兄弟」の昔話は、旧の四月下旬から五月上旬にかけて夜通し鳴く時鳥の悲しい声を耳にする生活、やがて厳しい田植え期を前に、たまたま賞味すべき山芋を掘って節句を祝う生活を通して実感されていたものである」（「昔話研究入門」三弥井書店）という文を、最近読んだので、興味を持ったが、ここでは山芋ということは、すでに失われている。

怪異には、きつね・むじな・かっぱ・山犬・人魂・あずきとぎが登場する。他ではあまり出て来なかったむじなが、ここでは顔を出す。

命名の、採集されたあだ名の中には、ツーツートキさん（どんな話でもすぐ通ずる）ヘヘラのイサさん（いつもヘラヘラ笑っている）などユーモアのある名が多いが、中でも、しらみのいきどりひょうきんたんごと呼ばれる人の、しらみをつかまえると、赤城山へ行って子を産んで来いといって、逃がしてやる話はおもしろい。

諺には、一種二肥三手入、家畜なければ肥料なし、米は土で作れ麦は肥料で作れなど、これまでの調査地と比較して、農業に関するものが特に多かった。

「小さい時はお父さんに似て、大きくなるとお母さんに似るものなんぞ」の答はあけびという謎を、私は始めて聞いた。「ことば遊び辞典」を見ると、この謎と同じ謎が、津軽と越後とにある。あけびの生えるところには、同じような謎が生れるものか、それとも伝播者がいるものか興味がある。なわを手でなうことがなくなれば「拝めば拝むほど長くなるものナーニ」という謎も、使われなくなれば、きせる。かぎ竹の謎も、やがては姿を消すだろう。

私が渡良瀬川流域の方言調査に歩き始めた昭和十四、五年頃は、虫のあめんぼのことを、足尾の子どもたち（小学六年の男女）の四四％はアベカワといい、東村の沢入ではカヤが四二％、花輪では七四％、黒保根では三四％、福岡では一一％、黒保根ではカヤカリ（三九％）ともいい、大間々はカツブシ（六〇％）だった。その他、川内・相生・桐生ではほとんどがマンガだった。しかし二十年経って、同じ地域を廻ってみると、どの地域も、アメンボ・アメンボーの一色になってしまった。今度の調査では、中下神梅でカヤ、小平でカルカヤの報告を得た。カルカヤは、私のかつての調査には、見出されなかった貴重なものである。

（上野　勇）

一、伝説

道玄の娘　赤堀道玄の可愛いい娘、赤城様を信仰して生れたので

あった。十七才になって赤城に行きたいという。行かないようにというがどうしても行くといい、しょうがないので連れて行ったが、沼に入ったきり姿が見えないので大騒ぎになった。ひときりたったら大蛇の姿になって湖の中から出てきた。道玄は金があったから干してしまうといって干した。このとき小沼から柏川、新里村を流れている川も堀ったのである。

どこの村でも娘が十七才の時には赤城に登るものではないという。そして道玄の娘が湖に入ったのは四月八日であったので、毎年一回その日には赤飯をたいて重箱に入れ、沼に浮べてやる。するとスーツと沼の真中に渦を巻いて入り、あとで重箱は空になって浮いてくるという。道玄の娘は大蛇の生れ代りだったのである。湧丸のお寺にはこの娘の用いた帯があるという。（浅原）

伊勢ころがし（塩原）　（上野勇　撮影）

渡良瀬川の対岸から見た伊勢ころがしか　（上野勇　撮影）

伊勢ころがし　伊勢参りの代参が行くと、今年は上州の人の問答を受ける番だって、問答ってのは、昔神社仏閣でやった。絶対に向うが勝つわけになっていた。負ければこっちがいくら奉納するって、神社が奉納金を取る手だてだった。その時も問答立てた。その時こっちが勝った。負ければ御神体をかける。こっちは千両箱二つ。絶対勝つと思って、誓約書をとりかわした。行司役が上州が勝ちだと、勝ち名のりをあげた。当時連中はこれが立つわけだ。こっちがよもや勝つわけがない。腕づくで取ろうって、忍者まがいのが追手になって来た。その当時この川（渡良瀬川）には、橋がなくて、渡しなんだけど、ここへすぐ入ると、判るってんで、それをくらますために、向の袈裟丸山を登って、それからこっちへ移って、八木原通って入って来た。どこをどう通って来たか、ここへ来て気がゆるんだのか、地元の者も、その御神体を奪われかかった。その時渡良瀬の河原の渕で、それを切ったんだって。それが抱いたまま川へ飛び降りた。それが伊勢ころがしという場所で、お伊勢さん抱いたまま飛びこんだから、塩原に神明の森ってあった。今は畑になっている。そこへ持って行って祭った。当時は立派だった。上野十二社ってのがあって、その一つだ。問答は、身ぶり手まねでやる。その時は、天文のことが出た。天文のことは専門だったのが行った。（塩原）

大岩の蛇　大岩に蛇が巻きついていた。今は埋まっちゃって、ほんの一部出ているだけだ。わたしのおふくろのじいさんが、鉄砲でぶった。ぶちはぶったが、ぶちはぶったかと、三日間いい通して、もっこやみで死んだ。（塩原）

神明様　伊勢の天照皇大神宮のご神体をまつっていた。それは、松島小平太信清という人の先祖が伊勢に行き問答に千両箱を賭け、相手が、皇大神宮のご神体である曲玉、剣、鏡を賭けて、勝ったので持ち帰って祭ったといわれて

妙見様（権現様）の腰掛石（下神梅覚成寺）
径 130 cm×95 cm高 65 cm　（関口正巳　撮影）

いた。地名に「伊勢転し」というところがあり、それを持って来た時、後をつけて来た人と取り返しをする中に転んだところだという。ご神体は、その後盗まれた。（塩原）

渡良瀬川のアワ渕というところに大蛇がすんでいた。これを先祖がしとめて家に持って来たら、みんなたまげて腰をぬかしたという。頭の骨だけを切って保存し、雨乞いに使ったが、のち新里村の常広寺に収めたところ、同寺が火災にあっていっしょに焼失してしまったという。（桐原）

妙見様（権現様）の腰掛石　日光に徳川家康を祀る時、天海が家康の骨を背負って裏街道を来たが、坂を下って右へ行くか、左へ行くか、迷ってフンヂガエをした所がある。そこをフンヂガエと呼び家号もある。道の傍に天海が腰掛けた石があった。そこに妙見様を祭っていた。今はその石を覚正寺の境内に移してある。

妙見様は亀に乗って、地を守る仏で、天海が寄進するため持って来たという。

天海は金の独鈷を置いて行ったが、今は紛失した。（神梅）

神梅　昔、安倍貞任がそむいたのを討つため、源義家が通った時、土地の人が梅の花を棒げたので、神梅と名付けたという。（神梅）

狸石　高瀬友平家の裏に狸石と呼ばれている平らな大石がある。正月の飾り物などはみな、ここへ収めた。（狸原）

念仏石　セドガ原と桐原の間の山林中にある。昔、石がうなり出したので、尼さんが祈って「南無阿弥陀仏」と書いて供養したら、うならなくなった。（桐原）

念仏石の銘

元禄十二大八月
南無阿弥陀仏　霊位
梵怒禅定尼〇〇〇〇（桐原）

八王子様と嵯峨宮　小平川をはさんで二つの神社があるが、昔神様同士が戦争をして、八王子様が、胡瓜畑で足を取られて敗けたという。だから八王子様の氏子は胡瓜を作らない。氏子には穴原という姓が多い。（谷田）

あまんじゃく　塩原にあまんじゃくという地名がある。ここに祭ってある庚申様は、道ばたに置くよりいま少し奥の方に寄せた方がいいだろうと、七八人かかって、やっと移したが、元に戻りたいというので、戻す時は、実に簡単に来た。（塩原）

薬師様の弘伝水　弘伝水という名だけで、伝説はなし。湧水をわかして鉱泉にして人を入浴させたことがあったが、風儀をみだすとてとりやめになった。（桐原）

あまんじゃくの庚申塔（塩原）
（上野勇　撮影）

石原の三本兄弟松　石原ミネ家には尾

あまんじゃくの庚申塔の背面
（塩原）　（上野勇　撮影）

敷内に大きな松があり、火事があっても登れば、どこでも見えるというのがあった。これは三本の兄弟松で、上桐原と間坂にあった。大昔、石原本家からワカサレになった時に植えたものだという。（桐原）

弘法大師の杉　桐原山際に弘法大師の杉があった。そこには水がたまっていた。（桐原）

メンドリ畑　あまり税金が高いので作りきれなくなった。誰ももらい手もなかったのでメンドリ一羽をつけてやったという。（桐原）

矢畑　手振山では、上杉謙信が手をふったという。この山に上杉がこもり、要害山と戦争をしたとき、この畑に両軍の矢が落ちて来たという。（桐原）

観音堂　寄せっこするのに、膳椀を借りたいというと、出して寄こしたが、どこかで痛めてなしたら、それから貸さなくなった。（塩原）

桜峠　小平から川内へぬけて、小倉峠を越えて桐生へ通う道の峠のこと。正福寺（天台宗）と雲祥寺（曹洞宗）との間でもめごとがあり、楼峠で口論して福寺が勝って、小平の阿久津家は正福寺の檀家になったという。（谷田）

山中　大間々の方から見て黒保根村や東村の方の全体をさして山中（さんちゅう）という。渡良瀬川流域の黒川郷をさしていう。小平でも茂木や狸原は山中的な所である。（谷田）

オイド　オイドは昔、要害山と手振山とで戦争があった時分に偉い人が飯んだので御井戸と称している。また、一説には黒保根村城の河久沢能登守のやかたを攻めにいく軍が、良い水はないかと武士が捜しまわったところ、良い水が出ていたので、そこの水をさし上げた。それで、その井戸をオイドと尊称したので、この地名が生まれたという。オイドは桐原上ノ台にある。（上の台）

白井権八供養の燈籠　粕川氏墓地にあり。粕川家は、白井権八に殺を送っていたので、権八が殺されたとき、その供養のためにつくったと伝える。（桐原）

桜田門の変　うちのひいばあさんが店番してたら、わたしは江戸から来た。今朝井伊掃部頭さまが殺されたって話を聞いて出発した。現場は見ない。その頃廻りくねって三十里ある。それを歩いて、夕刻ここに着いた。どこへ行って泊りかって聞いたら、花輪へ行って泊る。大雪の中を歩くのが早いから、胸につけた饅頭笠が落ちなかった。（塩原）

カロウト畑　成満院の上の畑で、空洞があって、そこに宝物が埋められているという。実際に土方が掘ったこともある。（小平）

ミソと小判　エバラ大尽は、軍用金を運ぶのに、ミソにみせかけたということである。（小平）

二、昔　話

むかし、いろりばたで、おばあさんたちから、むかしばなしを聞いたことがある。時期はおもに寒いころであった。

長い話をしてくれというと、「天上から長いふんどしがさがってきた。いくらたぐっても、たぐっても、たぐりきれなかった。それで市が栄え申した。」といった。これが長い話だという。

話が終ると、「市が栄え申した。」という。

この辺で聞いたむかしばなしとしてはつぎのようなものがある。しばらくのあいだ話していないので、こまかいことは忘れてしまったが、

聞いたことのある話のあらましを記してみることにする。

○ネコのはなし

お釈迦様が病気で寝ているときに、お母さんが、きんちゃくに入れて天から薬をさげてくれた。それをネコがとんでいって、薬を食べてしまったという。そのために、ネコはどこまでもおにだといわれている。（吉原シモさん、明治三十二年一月二日、浅原の生まれ）

○スズメとツバメのはなし

むかし、親がなくなったときに、スズメは着のみ着のままかけつけたという、ところがツバメは紅白粉をつけて着かざって行ったのでおくれたという。

そのために、スズメは米をさずかって、米が食べられるが、ツバメは泥で巣をつくるようになったという。（吉原さん）

昔、お釈迦様の具合がわるい時、あらゆる鳥に通知がいった。雀は着のみ着のまま、すぐに駆けつけた。燕は、ちゃっかりお化粧して燕尾服を着ていった。雀はおかげでお釈迦様の死に目に会えたが、燕は間に合わなかった。

そこでおつきの人は、雀には、どこに行ってもある穀類を餌に与えてやった。が、燕の方には、「お前にやるものは、地上には何もない。」といった。それからのち、燕は、寒い国から暑い国まで飛び歩いて、虫を食べているのだ。（桐原深沢富四郎さん）

○馬鹿むこのはなし

馬鹿むこが嫁さんのところへ行って、だんごをごちそうになった。あまりうまかったので、その名前を聞いてきた。忘れないように家へ帰る途中、あるきながら、「だんご、だんご」といっていた。ところが、途中に堀があったので、「どっこいしょ」といって渡ったところ、そのあとはどっこいしょといいながら家へ帰ってきた。うちへ帰ってきて、嫁さんに「どっこいしょをつくってくれ」といったら、そんなものは知らないといわれたという。（吉原さんの話）

馬鹿むこが、あついお茶をこうこ（沢庵）でかきまわせば、お茶がさめるということを聞いていた。あるとき、風呂があついといったら、そのむこが、こうこをもってきたという。（福田ハツさんのはなし、明治二十六年十月十八日、浅原の生れ）

○ホトトギスのはなし

あるところに兄弟がいた。あるとき弟が兄にいいもの（おいしいもの）をくれた。兄は、弟がこんなうまいものをくれるのなら、弟はどんないいものを食べているんだんべえというので、弟ののどを切った。腹の中から、山芋なら、あおっくびというまずいところがでてきた。

兄は弟に申訳ないというので、わびのために、「ぽっとつっきった、ぽっとつっきった」と鳴くという。

ホトトギスのことはボウコンドリともいう。この鳥は姿がみえないという。夜中でも鳴いていて、一日に八千八声鳴くという。（福田さんのはなし）

○ほととぎすの兄弟

昔、兄弟のほととぎすが住んでいた。兄はめくらだった。兄はひがんで、弟は自分でうまいもの食って、自分にはまずいもの呉れる、といった。そこで、弟ののどをさいてみたら、自分よりまずいものだったので、それからのち、ポット　ツッキッタと鳴くようになった。（桐原深沢富四郎さん）

○さるむこのはなし

むかしあるところにおじいさんがいて、はたけで草むしりをしていた。おじいさんが、「このはたけの草をむしってくれれば、三人いる娘のすきなのを（嫁に）くれる」といった。それをサルが聞いていて、草をむしってくれた。

サルは一番しまいの娘をくれてくれてくれといってきた。
おじいさんは末娘をサルに嫁にくれてやった。
娘が実家へお客に来ることになった。途中に花が咲いていた。その花を折ってくれと娘はサルにたのんだ。サルが木にのぼって、枝をさしてこれかといったら、娘はまだその上だといった。そうしてサルはだんだん上の方へのぼっていって、とうとう枝が折れて、サルは木から落ちてしまった。サルは川に流れながら
「猿沢に流れる命はいとはねど、妻の気持は無情、無情」
といったという。（福田さんのはなし）

このほかに、ヘビ婿のはなし、桃太郎のはなし、メメズとヘビのはなし（むかしはメメズに目があり、ヘビには目がなくうたをうたっていた。あるとき、目とうたを交換した。それから、メメズは土の中でうたをうたい、ヘビは目があるようになったという。）利口な小僧のはなし（和尚の外出したあとでぼたもちを食べてしまって、それを仏像がたべたことにして、口のまわりにあんこをつけておいたという）などがあった。（浅原）

○アマンジャク

昔、アマンジャクの父娘がすんでいた。父の誕生祝を、娘は派出にしてやろうと思った。併し、父は、派出にするといえば、いつも何でも反対のことをいう父のことだから、というので、その時は、誕生祝はしない方がよい、と言った。そしたら、その時は、その方がよい、ということで、ついにお祝いはしてもらえなかった。（桐原）

○蛙と猿

昔、昔、蛙と猿が大間々の市に行った。道に稲の穂が落ちてたんでそれを拾った。そこで、ふたりで、田んぼつくるべやということになって帰った。
さて田を耕そうと蛙がいいだすと猿は頭が痛い、といって出ない。蛙はやむなくひとりで耕した。ナエオコシ（種播き）をしようと蛙がいうと、猿は腹が痛い、蛙さんやってくれやあという。これまた蛙がひとりでやった。田植えの時も、田の草とりも、何とかかんとか理由を構えて猿は働かなかった。そのたびに蛙はひとりで仕事をした。
稲はどんどん成長してたいへんできがよかった。いよいよ刈ろうとしても、また猿は駄目、稲こなしもだめ、結局、作業という作業は、みんな蛙がしてしまった。
いよいよ米になったので、これで餅をついて食んべやということになって、これはふたりでついた。蛙は、仲良くふたりで分けようといったが、猿は、ひとり占めにしようと思って、臼ごと荒神山に担ぎあげ、転がり落としてとったもんバッコ（がち）にしようと言い出した。蛙が反対しても、お構いなしにひとりで臼を荒神山に背負い上げてしまった。止むなく蛙もついて登った。
山頂につくと、「用意、ドン。」で、蛙は臼を転がり落として、その跡をまっしぐらにつけて下りた。餅は臼からこぼれ出してあたりの木々にひっかかったが、それに気づかない猿は、構わず臼のあとをつけた。臼が止ったころに駆けつけたときには、臼は空っぽになっていた。
一方、蛙は、木にひっかかった餅を食べ食べ下った。しかし、とったもんバッコということだから猿には権利がない。いかにもほしそうにしていたが、やがて「餅は、縦に食うもんじゃあないよ。横に食うもんだ。」といった。蛙は「縦に食おうが、横に食おうが、おれの餅だもの、勝手さ。」といってひとりで食べていた。（桐原深沢富四郎さん）

むかしばなしの結語

「市がさけえもうした」という。（浅原）

笑話　大間々の市は、昔から二七の市だった。昔、沼田から大間々の市に、馬をひいて来た人がいた。その人の股引の間からチラチラ出ているものがある。通行人が言った。

「出たね。」
その人答えて
「ああ出たよ。市だもの。」
通行人「黒いね」
その人の馬の背には黒やきのかけが着いていた。そこで
その人「ああ、本やきだよ。」
通行人「デッカイネ。」
その人「大一番だよ。」（桐原深沢富四郎さん）

戌の日に麦まきをしないいわれ　昔中国から足のひらを割っ麦のて、種をつめて、わらじをはいて来た。その家でくだんという犬を飼っていた。犬が鳴くので切り殺したが、くだんは、人が盗んだから鳴いたので、うそはいわなかった。それで証拠のしまいにもっていって、うそをいわない証拠に、よってくだんの如しと書くようになった。この日蒔くと、食わない人ができる。（塩原）

雑煮のいわれ　昔、となりの国と戦争した時、となりから虎を向けてよこした。それで、こっちでは虎より象が強いから餅で象を作った。食べものがなかったので、象の中をえぐって煮て食ったので、餅を食うことを、ぞうにというようになった。（塩原）

三、怪　異

狐の嫁入り　昔はよく村中の人が狐の嫁入りだといって向う山に明が見えた。

老人が説明してくれた。「あれが長持、ちょうちん持ち、嫁ご、はさみ箱など」と聞いた。日が暮れて宵の中の一時間ぐらい見えた。（塩原）

向うの山にあかりが見えるが、今頃お祝があるわけがない。けれど年寄りが説明する。先に行くのが先達だ。あとから行くのが長持かついで行くんだ。あかりがあと先四つ見えて、そういわれると、その通りに見える。今度は嫁御さんだ。下から上行くまで一時間もかかる。何十人も火が見える。日が暮れきったという時間、宵のうちだ。十人も十五人もで見る。（塩原）

貴船の山に出た。（神梅）

二軒在家の出はずれに上んちといわれる家があった。裏に細い道があり、そこを通ると、とくに雨の降る晩などは、フク、フクという声がする。あれは何かが化かしているのだ。

その近く、夜な夜な提燈が見えた。川面山から要害山に抜けるあたりに、狐のヨメドリといっていた。提燈は点いたり消えたりしていた。（相原）

狐火　穴原でオトウカ（狐）の嫁取りを見た。火がチカチカチカチカと、あっちこっちに行ったり来たりしていた。昭和二十四、五年こうである。（神梅）

狐に化された話　戦後から来て二十四年間も手伝ってくれて家の者と同じように生活していた独身の田中栄四郎さんが、時々、小遣をねだっては町へ遊びに出たが、ある時、帰りにいわしを買って来た。

次の朝、自分が昨夜地下タビをぬいで、風呂にはいり、たしかに手拭をかけておいたが誰かがかたづけたかと家中の者に聞くが、どこにも見つからない。本人は本気で、ねえちゃんも風呂に入ったわけだ、確かに見たと言い張ったが、見つからず。友人と昨夜来た方に見つけに出かけたところ、あらせ稲荷の近くの杉林に、ちゃんと地下タビがそろえてあり、木の枝に手拭がかけて、着ていたハッピまでかけてあった。これは狐に化されたということであった。いわしを取られたときに裸にされたことがわかった。（塩原）

夜中に帰ってくると、月もないのに、杉山の中が明るい。火がもえているのとも違うのに、ぼーっと明るい。石を投げてみたが消えない。通りぬけたら頭がせいせいしたが、渡り出したら、頭の毛が後ろに、ひっぱられるようだった。（神梅）

鏑木イチゾウさんが赤銅街道の日光坂を、えびす講のサンマを買ってきて、こえようとしたら、そこに水たまりがあった。そこまできたら、サンマがえらくピクピクするんだって。それでおもしろくなって、水たまりに入れておよげといったら、すーっと向こうへ行くんだって。それでみんなおよがして、なくなった時気がついたが、もうみんな持っていかれたあとだった。（神梅）

「おお深けえ、おお深けえ」といって、山を分けて歩いて、山奥に入っていく。（神梅）

ムジナの嫁入り　水沼の役場（黒保根村）から見た。しめっぽい霧雨がふったり、霧雨がまいているような日だった。（神梅）

むじなの話　むじなは、子どもが五六人で、しゃべっているような声を出すが、そのうち笑う。その声がものすごくよくする。終戦後土方が石をぶち割って運ぶ。大勢人夫が来ていて、排便をうちの下の藪でした。むじなはその排便を食べに来る。三月ぐらい続いた。残飯はあるしするので、むじながふえた。土方が終ったら、うちの藪の下に、むじなのためぐそっていうでしょ、極端にいうと、三〇キロも四〇キロもあった。古いのや新しいのや。うちのそばを通って、河原へ子どもが、がやがや遊びに行く。日が暮れちゃいそうなのに、早く帰らないと、うちの親が心配するぞ、むじなとは知らないから、そう思っていた。そのうちに、わさわさ笑ったり、きゃあきゃあいったりしている。どうも聞いていると、道からはずれている。子どもが藪の中に入っているはずがない。こりゃむじなのいたずらだなと思って、上から大きな石をまくった。そうしたら、ぴたりとやまった。それが幾日も続いた。

提灯ぶら下げて便所に行った。兄貴達がいろりの所で、見ていた。すると便所通り越して、階段まっすぐ行っちゃう。こっちだ、こっちだっていうが、今少しで土手におっこちる所まで、連れて行かれた。後で大きな声でどなったんで判ったんで、便所でなくて、いくらでも先へ引っぱられちゃう。むじなが、提灯の蠟燭を食べる。（塩原）

むじなは人に化けないで、しゃべっているような声を出す。

終戦後、川で土方が仕事をしていた。石運びの作業だったが、むじなは土方の糞を食べに来た。又、弁当を捨てたものも食べに来た。あるとき、がやがや、子どもがさわぐような声がする。しかし、子どもが遊ぶ場所とは違う方向なので不思議に思ったのでわざと大きい石を投げたら声がとまった。確かに、しゃべるような音を発する。（塩原）

河童　盆に水あびに川に行くと、カッパに引き込まれて、肛門が開いて死んで浮いてくるから川へ行くなといわれた。（塩原）

かっぱの昇天　下神梅の渡良瀬川のふちに、観音寺というお寺があったらしいんですね。今は、もうないんですが。

その下に、観音寺ケ淵というのがあって、かっぱが住んでいたんです。竜も住んでいたんです。

かっぱは、どうしても天にのぼりたいというので、どういうふうにしたら、天にのぼれるかなあというので、いろいろ考えたすえ、竜神に、何か、おごっそうでも持って、話を持ちこんでやろうというので、いろいろごちそうを作って、毎日毎日持ってって。

そしたら、竜が、わかったと。

そして、てめえは、いつ、おれが天にのぼるからと。おれが天にのぼる時は、あたりがすっかり暗くなってくる。霧がずっとまいてくる。霧にのって、おれが天にのぼるからと。その時は、必ずおれのしっぽにつかまって、のぼれと。

そしたら、いく日かたって、霧がまいてきて、霧の中に、竜が入っていったというんですね。

その時だというんで、しっかりと、しっぽをくわえていったんだそうです。

ところが、その竜が、一生懸命ふって、ずーと、ずーと、いったんだけど、何がおかしいのか、はっと思ったひょうしに、しっぽをはな

しちゃったんだそうです。
くわえてたしっぽを、口をはっとあいたもんだから、下へ、だーんと、落ちてきたんだそうです。
そいでもその、かっぱは、さらは割らずに、淵の中に、ぽかんと落ちたんだそうです。それで、かっぱは、
「ああ、おれは、天に住むものじゃない。この淵にいるものだなあ。」
と言って、始めて、天上へ行くことをやめたそうです。（神梅）

人魂　ヒカリモンともいう。兄貴は大工で山の方に行っていて一人の時、人魂が出た。またつるというのが死んだ時は、三人いたが三人ともみて青くなって帰って来たことがある。魂が遊びに出るということだ。人魂は、成年式までに見なければ一生見ないもんだという。（桐原）
十一月末頃のおじいさんが死ぬ前の日の夜十時頃、夜学の帰り道で人魂を見た。
鳥のとび方とは違っていた。高くなく、低くなく、明るくなった玉が見えた。相当のきょりはあったと思う。（塩原）

山犬様　昔は山道を来ると、山犬様に後を付けられた。波の花（塩）とお散米を出して置くと、食べて帰った。米つきの帰り道で、馬が動かないので見たら、山の上から山犬が見おろしていた。その帰りにも山犬の前を通ったが何でもなかった。前で転がると、一口に喰われてしまう。山犬は夜十二時前にはいたずらしないが、十二時過ぎると食われるという。犬より大きいなりをしている。（神梅）

あずきとぎばばあのはなし　晩方になると、橋の下で、おずきとぎばばあが、「あずきとごうか、人とってくおうか」といっているという。これは、夕方、子どもが早く家へ帰ってくるようにいうわけである。（浅原）

犬の生れかわり　大間々の桐原で、大きい犬を飼っていた。ある時、村の若い衆に、えらいしうちを受けて殺された。太郎という犬、その殺った人が子どもに太郎って名をつけた。その犬の生れかわりだ。その犬の脇の下に痣があった。その子にも痣があった。むごいことしたから、生れかわって出た。大正年間の話だ。（塩原）

四、命　名

三四次　男の子で三番め、女もまぜると四番めに生まれたので、名付けた。（神梅）

あだ名

ちょうしのふくさん　歌でも何でも、調子よく自分の調子に合わせる。
部隊長　でかいことばかりいう。
陸軍そうさん　始めて陸軍にとられた。
穴原の八軒ぐるわには、ほとんどあだ名がついていた。
はやがねおええ、うまかたぜんとく　すけべのしんとう　はたやのゆきさん　こびきのおとさん　くりげのもたさん　じだまのかっつぁん　となりがごけどん。
しらみのいきどりひょうきたんごといわれた人は、奥沢丹後という人で奥嶽と号した。しらみをつかまえると、赤城山へ行って子を産んで来いと逃がしてやる。
○ペテンのハッちゃん
○ツーツーのトキさん（どんな話でもすぐ通ずる）
○へへラのイサさん（いつもへラへラ笑っている）
○グイ飲みジッさん（酒飲み）
○ジッチのジッさん（まじめ）
○ペタリチョーさん（餅屋）
○クセンマヒツさん（くせ馬を扱うのが上手）
○オヒラのセンさん（頭が平ったい）
○お茶菓子コーさん（お茶菓子をはさまないと気にいらない）

○アヤメのサダさん（美男子だった）
○ボタモチイマさん
○オニギのワゴさん（ニギリッペをするのがくせ）
○キタムキタヘイさん（なんでも反対した）
○いつでもイコネルフジヤのトラさん（いつでも理くつをこねる）
○ヨメゴのタカさん（いつでも長い着物を着ていた）
　この人は、毎朝東を向いて、次のように唱えて拝んだ、「来れ災難、来たらば来たれ、逃がれる災難、逃がらせ給え。」
○オハジキツネさん（いてえか、といって、すぐ人を指先きではじく）
○ダンマリブンさん（しゃべらない）
○スネナガカゾーさん（すねが長い）
○観音山タケゴロー（芝居の観音山の役をしてから）（上神梅）

人を批評することば

けちな人に対して、ドケチ根性の強い人にはシブA、シブBなどのあだ名。
ギンナガシ　長裾や何か着て仕事に精出さない人。
うそつきな人に対して千三ッ何々さん、万カラ何々さんなど言って信用しない。千いってもほんとうは三つきり、万言ってもすべて空であるから。
ビショッタネー　だらしない人
夜中の長さん　夜半までカセイだ人。（桐原）

地名（小字名）　手振山、雷電山、天狗山、蚕影山、なぎのくぼ、花坂、おたかもり、上の上、下の山、赤羽、上の原、中村、高松、上堂、中堂、下堂、荒瀬、下具戸、あまのじゃく。
利根郡利根村の穴原に対して、塩原の穴原のことを利根の人たちが「サト穴原」と呼んでいた。山に対して平地の穴原という意味をもっていた。（塩原）
狸原という地名は狸が原にいっぱいいたからだという。（狸原）

五、諺

餅は乞食に焼かせろ。ちょくちょくかえすから。
さかなの一つかえし、餅の千かえし。
あずきは馬鹿に煮らせる。燃したり燃さないでも煮える。
うす田で米とれ、厚田で藁とれ。
親の意見と茄子の花には無駄がない。
木もと竹うら
木六竹八塀十郎
土用にてれば豊作。
こごみ鉈にそり鎌。柄をすげる時にいう。切れ味がちがう。
こごみ女にそり男。
土用布子に寒かたびら。桑原の手入れは、夏の暑い時に土をよせ、寒い時にはさらす。
彼岸過ぎての麦の肥、土用すぎての稲の肥。（塩原）
○あずきは馬鹿に煮らせろ…火をもしたり、消したりするので、よく煮るという。
○一種、二肥、ご手入れ…一番の基礎は種子である。そのつぎが肥料が大事、あとは手入れ次第で作物はよくとれるという。
○うす田で米とれ、厚田で藁とれ…稲はうすく植えろということ。そうするとみはりがいいという（実がとれる）。厚く植えると、実がとれずに、わらがとれるということ。
○大雪に不作なし…雪が多く降ると水が豊富であること、特に苗代に関係がある。
○寒肥ききめあり…寒肥はムギにも桑にもよい。とくにムギ作によいという。
○家畜なければ肥料なし…家畜を飼育することによって、堆肥ができ

る。農業をやっていく上には、堆肥と金肥は両方なければだめであるという。有機質のところには堆肥（だごえ）が必要であった。堆肥の入っている土地はこなれもよかった。

○寒九の雨…寒に雨が降るのは悪い。これはあたたかい証拠である。雪のほうがいい。寒い霧がまくのもだめという。

○木もと竹うら…これは、木を割るときはもとのほうから割れ、竹を割るときにはうらのほうから割れということ。

○米は土で作れ、麦は肥料で作れ…米は地力がなければだめということ、麦はこやしでつくれ（麦には追肥がきくということ）ということである。

○とり入れ、しつけ…とりこみ、しつけともいう。収穫すべきものは早くして、まくものは早くしろということ。とりこみにしても種まきにしても、時期をなくすなということである。

○におい松茸、味しめじ…松茸は味よりにおいがよい、味はしめじのほうがいいということである。

○ひでりに不作なし…雨ばかり降っていると作物はとれない。同じなら照ったほうがいいということ。

○麦の十七刈り…ムギは早く刈れということである。おそくまでおくと品質がおちてしまうという。

○お天道様と米の飯はついてまわる…真剣に仕事をやれば、どこへ行っても食えるということである。

○クマネギの茎は踏倒すといい…立ったままだと、栄養が茎のほうへのぼるので、茎をねせて、根のほうへ栄養をやれということ。

○春雪は麦だわら…二月末に雪がうんと降ると麦が沢山とれるという。（長尾根）

○嫁は台所からもらえ、むこは財産のあるところからもらえ。（浅原）

○桐生着道楽、足利の食い道楽。（浅原）

柿はいじめると成りがいい。（神梅）

朝茶のむと、今日の難儀をさけられる。

管原道真が、太宰府に行く時、一軒の家によって、茶をもらった。そのお茶がとてもにがい上に梅干しが出て、それを食べている間に刺客をやりすごした。そこで、朝、茶を飲むといいという。（神梅）

生木生味噌五割の損

生味噌食うようじゃあしんしょは残らない

青野の北風三日ももたず

大霜の三日目雨が降る

朝雨と女の腕まくりにたまげるな

二月の空っ畑（麦が見えないくらいの方がよい）

青田と馬鹿はほめられない

木元竹ウラ

トシヨリッ子は三文安（桐原）

青野の北風三日ももたず

東雷　雨降らず

ミカボの三東雨

長ぶりの夕空……良くなるように見える。とくに梅雨の候。

鼻取半人前（桐原）

秋山春里　秋は山、春は里が元気がよければ、元気はよくなる

隣りのものは糖香煎

親が死んでもゴク休み

彼岸すぎての麦の肥

三杯汁は馬鹿が吸う

めんどりがときをふくとしんしょうがつぶれる

遠くのシンより近くの他人

遠くの上田より近くの下田（桐原）

物臭者の節供働き（桐原）

六、謎

なぞなぞ遊びを始める時には、なぞをやるべとか、それなんぞ、やれなんぞといってから始める。それなんぞはそろばん、やれなんぞは矢立てのことである。答えられない時は、ながしたという。（塩原）

昼は小屋の中、夜は一列に並ぶものなんぞ　雨戸

小さい時はお父さんに似て、大きくなるとお母さんに似るものなんぞ　あけび

三里先の大火事なんぞ　きせる（塩原）

つかうときにいらなくて、つかわないときに用なものナーニ　水がめのふた

一ツ目小僧に足一本ナーニ　ぬい針

足一本で立っているものナーニ　山田のかかし

拝めば拝むほど長くなるものナーニ　なわ

用のあるときたたかれるものナーニ　木魚

朝起きて細い道通るものナーニ　雨戸

朝、庭をなぜまわすものナーニ　竹ぼうき

いつも人のあとをついてくるものナーニ　かげ（長尾根）

家中の力持ちなあに　カギ竹

さかさ井戸から大蛇がとび出す、コブナがとび出す、なあに　カギ竹（茂木）

朝早く一本道通るもの　雨戸

池にそり橋、ダンゴチンコなーに　鉄瓶（桐原）

アメンボ　カヤという。（下神梅）

水スマシ　スーメン。（下神梅）

上杉謙信の馬　塔の本の石塔の所に、上杉謙信の首なし馬が埋かっているという。「朝日が早くあたり、夕日がいつまでもさす所」だという。梨木館には上杉謙信の馬の足跡岩がある。（下神梅）

雪の日　学校が高いところにあった。ゲタじゃ決まってころんだ。タビハダシで学校へ行った。タビも、ももひきもびっしょりぬれる。タビのはきかえを持ってった。（中神梅）

立つうた　一月正月松が立つ。二月は初午旗が立つ。三月は節供でひなが立つ。四月八日にゃあ釈迦が立つ。五月五日はぼうやの節供でのぼり立つ。六月は天王様でさかき立つ。七月は七夕祭りで竿が立つ。八月は十五夜様ですすき立つ。九月オクンチ旗が立つ。十月は神無し（神有り月）月で神が立つ。十一月は霜月でたつべがたつ。十二月は借金取りが門に立つ。（上桐原）

ひとだま　青いような赤いような玉が、ゆらゆらとお墓の方へ飛んで行ったのをみたことがある。あれが、ひとだまということは、あとできいた。そう知っていたら、もっと注意もできたろうと残念だ。ヤマドリの年老いたのも、その尾を光らせて飛翔する。（上桐原）

芸　能

まえがき

大間々町の今回の民俗芸能の調査部門では予測し期待していた資料が得られなかった。地方歌舞伎や人形芝居はもちろん、神楽や獅子舞なども現在行なわれているものは皆無であった。これはきわめて珍しい現象である。ただわずかにその痕跡をさぐる程度にとどまったのである。この点が本地区の芸能の特色と言えば言えるかも知れない。

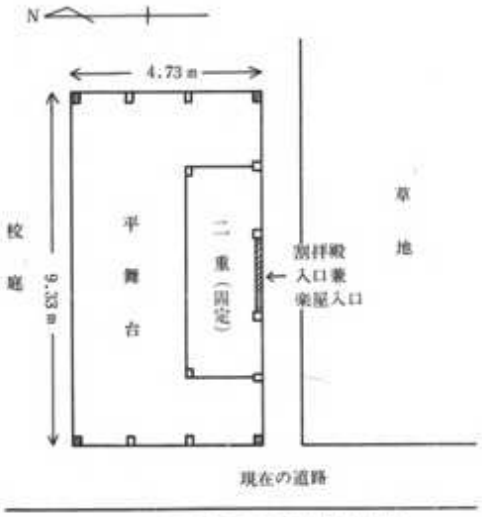
しかし、予想しなかった収穫がなくはなかった。その一つが農村歌舞伎舞台である。しかも利根地方の舞台と共通する幾多の点が判名した。これだけの舞台を持ちながら地芝居は現存者の記憶以前に消滅してしまったのである。旧大間々町では祇園で山車屋台を利用して地芝居が行なわれたことが文献資料でわかっていたが、ここも勿論現在は地芝居が絶えてしまっている。

民謡やわらべ唄については別に酒井調査員の手で進められたが、この面でもやはりこれという収穫は無かったようである。したがって、民俗芸能では、主として歌舞伎舞台についてやや精細な調査ができたにとどまったのである。他の部門と違い、最早や民俗芸能は調査の時期を逸してしまってすべて後手にまわってしまったという思がした。このことはやがて他の部門においても見せられることであろうが芸能はその消滅度がいかにも速い。

（萩原　進）

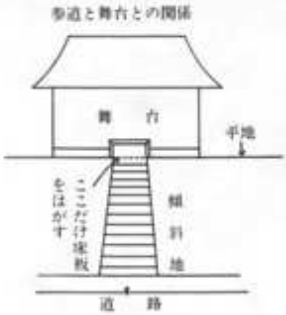
一、農村歌舞伎舞台

概観　群馬県における農村歌舞伎舞台の分布は、赤城山中腹の勢多郡と利根郡、沼田市、吾妻郡などに多く遺されている。しかし、山田郡、太田市、新田郡、桐生市、邑楽郡、館林市地方のいわゆる東毛地方には極めて稀れにしか見られない。ところが、本調査地区の旧福岡村には現存するものが二つ、すでに取毀したもの一つ（以上は常設舞台である）と組立式舞台が一つあったことが確認され、少なくも大正



小平字狸原の歌舞伎舞台平面図

期までは四つを数えたことがわかる。このように、農村歌舞伎舞台の分布から見る限り、大間々町の福岡地区と黒保根地区は利根・吾妻郡型の中に入ると思われる。しかも、福岡地区の舞台は利根郡水上町藤原や昭和村具之瀬に見られる割拝殿型式の舞台であることがわかり興味深い。さらに、水上町藤原の現存舞台と似た観客席の型式が見られるなど、平坦部としての農村歌舞伎舞台が利根郡方面と共通する特色が指摘できる点も大きな特色といえよう。以下個別に調査概要を記すことにする。



狸原の舞台全景

狸原の舞台（軒組み）

小平狸原の舞台　現在廃校となった旧福岡東小学校庭の南に北面している。もとは、校庭の西側に東面して建てられていたものを校庭の拡張工事の際に移転した。校庭の東側は山の傾斜地となっており、石階を登ると馬頭観音堂が西面して祀られている。屋根はトタン葺きで左右は切妻破風造りとなっているがもとはカヤ葺きであったという。移築の際に小屋組を現在のように直したもののようである。したがって屋根組みは腕木から上部の梁は後のものであろう。垂木は神社建築のように二重垂木であるから屋根の張りは大きく外方に伸でおり美しい線を見せている。間口九・三三メートル、奥行四・七三メートル、床の高さは九三センチである。尺では間口五間、奥行二間半床高三尺の構造である。正面上部の虹梁は巨木からとった一木であるこ

狸原の舞台（内部）

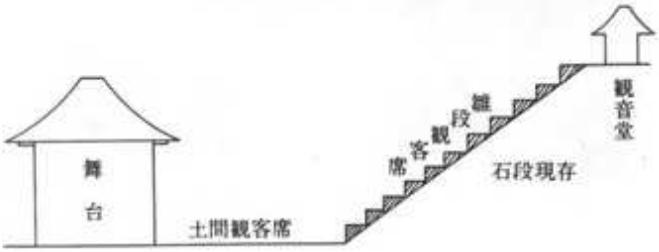
とは他の舞台と同じである。紅梁が右と左の柱に組み込まれた先端の繰り鼻は唐草の彫刻がされている。建立年代は不詳であるが明治初期かそれ以前と見てよいであろう。

この舞台の特色は三つある。一つは、背後にまわってみるとよくわかるが、中央に縁の下の入口があり、その入口の上部に唐草の彫りのある紅梁がある。これは、校庭の西側にあったとき観音堂への参道入口になっていて、ここから舞台をくぐって堂へ往来した、構造を示しているものである。いわゆる割拝殿型式の舞台であることを物語っている。上図のように、傾斜地に建てられ、下から登ってゆくときこの舞台の下をくぐって観覧席に出られるように工夫されたものである。これと似た型式が利根郡水上町綱子と同郡昭和村貝之瀬にある。この様式は、社寺の多くが傾斜地にあり、その前庭を利用して舞台をつくることから思い付いたものとみてよい。実際に舞台を使用するときは、床板をもとのように並べ、割拝殿として使われた通路は楽屋の出入口としたと思われる。ちなみに割拝殿というのは神社の本殿しかない初期の神社建築に用いられたもので、本殿と一直線上に並べられ、お籠りや祭典の式場として使った。後に本殿と渡廊下で接続して拝殿を付けるようになると割拝殿は姿を消していった。利根郡片品村花咲の武尊神社、藤岡市本郷の土師神社には今も古い形式の割拝殿が遺されている。寺院でも、吾妻郡中之条町は日向見薬師堂にも同様式の割拝殿がある。(先年解体修理のとき一直線上から外して右側へ直角に移した)小平の舞台の割拝殿型式にはこうした信者の休憩場、お籠り場としての利用目的があったかも知れないが確認できなかった。

第二に本舞台の特色は、平舞台の奥に設える二重が固定式になっていることである。県下の多くの舞台は、二重(上段)が固定していないで、利用の都度一段高い二重をつくるものが多いが、この舞台ははじ

狸原の舞台(側面)

狸原の舞台(背後)



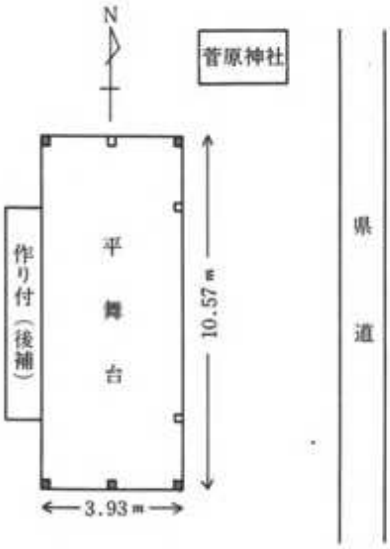
狸原舞台の観客席

めから固定してある。これと同じ例は、利根郡水上町藤原の舞台で見られた。例の少ないものである。

第三には、この舞台の観覧席が、正面僅かの土間をおいて傾斜している地形を利用して雛段式に見られるようになっていたと推定されることである。平面図にする別掲のような構造である。観覧席の構造では、四国に国の重要民俗資料になっている舞台が雛段式として有名である。これにはちゃんと石で段々の腰かけがつくられている。ここの場合はそうした段は見られないが、明らかに雛段式の観覧席であったと見られる。この例は第二の特長の例として記した水上町藤原の舞台に見られる。

柱は四隅の主柱のほかに、左と右側面に中間支柱が二本ずつ、背面にも主柱の間に二本の支柱がある。正面にはもちろん柱は現在もない。つくり付けの二重にも天井の梁とつないだ支柱が左右に一本ずつある。壁間はすべて板のみで壁を使っていない。

浅原の舞台全景



浅原舞台の平面図

浅原の舞台（軒組み）

この舞台が地芝居に使われたのは大正初期までであったという。その後は買芝居をやったが、買芝居は昭和四十一年頃までやった。大道具の襖などそのときはあったというが現在は遺っていない。四十一年のときの引幕は役者の一座が持参したものを使った。現在この舞台の中には地元の人の猟銃を競った鉄砲の額が掲げられていたり、旧東小学校で使った体操用具や机椅子などの物置になっているが、建物はまだしっかりしており、保存には十分耐えるであろう。

浅原の舞台　浅原の菅原神社の境内にある農村歌舞伎舞台である。県道のすぐ脇にあり、神社（南面）の左側に東面して建てられている。間口一〇・五七メートル、奥行三・九三メートル、床高六四センチである。尺に換算すると、間口約五間半、奥行二間、床高二尺である。小平の舞台と比べると間口はやや大きく、奥行は狭く、床は低いことがわかる。したがって、全体的に見て美しく見える。屋根はもとカヤ葺きであったが、現在は瓦で葺かれている。このとき勾配を緩やかに、軒は垂木を張り出したために建築物としても美しく見える。二重垂木ではない。建築年代は不詳であるが、小平より幾分古いかも知れな

大門の舞台跡（鳥居のあたり）

い。主柱は四隅に四本、左右の側面に中間の支柱が一本ずつある。正面は梁は一木の虹梁であるが、左右の袖に支柱を建てて区切っているのは、社務所などに利用するための改造であろう。土壁は使わず板で三側面がつくられている。くわしいことについては地元の伝承者が得られずわからなかったのは残念であった。保存状態は極めてよい。特に切妻の破風などはまことに立派であるし、軒の四隅の肘木の構造が二手先となっていて軒を長く張り出している点などやはり保存してゆきたい舞台である。

小平大門の舞台跡　小平の大門にある嵯峨神社の鳥居が県道に接して西側にあるが、その鳥居から石段を登ると平地に出る。その石段を登ると一直線に神社に通ずる参道があるが、その石段を登り上げたところに歌舞伎舞台があった。狸原の舞台と同じく割拝殿形式の舞台であった。構造その他について詳しいことはわからないが、取こわしたのは昭和三十年頃というからまだそう古いときではなかった。平地はいま田となっているが、この平地を利用して歌舞伎舞台が神社に面してつくられていたことがわかる。聴書によると、狸原のものと同じようであったという。大道具などもすでに失われている。

深沢の組立式舞台　上神梅の深沢の一番奥の墓地の的に舞台倉があり、そこに組立式舞台が一式あったが、大正一〇年頃になくってしまったという。組立式舞台は勢多郡の赤城山中腹地帯に多く見られるが、常設舞台と違い、その都度移動してどこでも舞台が設けられるということで各地でつくられたものである。現在は富士見村不動堂に一組ある。この舞台の規模その他についても全く不詳であるが、農村歌舞伎舞台の分布上注目されるのでここに記しておくことにした。

このほかに、塩原の赤城神社境内に歌舞伎舞台があったが、日露戦争の頃に解体してしまったという。また小平の中組に割拝殿形式の舞台があり、通路の渡り棒は九尺位あったが、戦後になって解体消滅してしまったという。

これらを綜合すると、明治末期には、旧福岡村地区に舞台が五種もあったことになり、当時の盛況だけを伝えている。

二、人形芝居

人形芝居については、旧黒保根村の深沢で、一人遣いの豆人形の存在が確認されたにとどまった。その人形一式は大正十四年の火災のときに消失したという。黒保根村地区には、湧丸の豆人形、清水の三人遣い人形が現存しており、それらの関連で比較できればと思ったがやむを得なかった。詳細については話者の誰もが知らなかったのである。

「深沢人形、城神楽」といって、昔、深沢では義大夫による人形芝居をした。新里へも巡業に行った。酒を買って出して、聞いてもらったという。道具は火事で焼けてしまい、舞台の材木は残っている。曾祖父の頃身代をつぶすほどしたというが、今の人は知らない。（深沢）

「深沢人形・神梅義太夫、神権ボタ餅」といい、神梅ではよく食べた。（神梅）

三、武　三　番

下塩原に、以前白式尉と黒式尉の翁の面があったというから、この地方で式三番が行なわれていた痕跡は知ることができる。しかし、現物は散在して現在見ることはできない。

四、大間々の祇園

由来・徴証　大間々町の祇園は県下でも有名なものの一つであった。高草木家文書や大泉院記録から見ると寛永年間から始まったものらしい。

寛永六年正月八日　初市の祭祀
寛永九年六月廿四日　祇園の祭祀（八坂神社日記）

最近の祇園の山車

最近の祇園風景

とあり、寛永九年六月二十四日にはすでに祇園祭礼のことが見える。大泉院の神明宮祭典日記には、「寛永六年正月八日牛頭天王の社を祭ると言ふ」とあり、市神としての牛頭天王を祭ったことがわかる。八坂神社日記の初市の祭礼の意味が牛頭天王社を祀ることにあったことがわかる。同じく神明宮祭典日記に、寛永九年六月二十四日に市を立て始む、祭礼を始むと言ふ、とあり、祇園祭礼が市神の牛頭天王の祭として行なわれたことを伝えている。

高草木家文書によると、「寛永年中より慶安之頃迄は毎年御輿みなかは（注みながわむしろのことか）にてかり屋を作り、あとへ幟などを付、黎初（ねりはじめ）に致候。其外母衣思ひ付こしらへ子どもを出し二三十年は右之通り祭礼致候」（大間々町祭礼黎切り之事）とあり、当時はすでに仮屋を作り、そこへ御輿をおさめ、幟などをたてておねりをし、母衣などを身につけて行列をしたことを伝えている。万治元年に江戸から神輿を新調をしたが、そのときの祇園の行列は上町は頼朝の富士の巻狩の帰還の行列をし、三丁目四丁目では三宝院門跡あずま下りという行列をやり、山伏の装束行列、五丁目六丁目では子供に母衣をつけさせて御輿の渡御をしたという。大間々町の本町、三丁目から六丁目ごとに出しものを工夫して実施していた。渡御には神島が出された。（これは祇園に共通している）この神島は河原毛の島と定められていた。ついで町内を一丁目二丁目を一組、三、四丁目が一組、五、六丁目が一組とな

最近の山車のおねり

り、三組に分けて祭礼を分担した。

元禄時代になると、十四年六月二十四日の祇園にはじめて町内有志で踊狂言（芝居）が行われた。そのときの外題の演し物は大間々における地芝居の最初だったらしく

大間々踊初り候とて近村より見物の人々来り大評判をとり申候。此時近郷之踊初に御座候而六月祭鵜はしく繁昌致し、踊上町より始まり申候。

世話人　師匠宿　星野仁兵衛

（大間々町祭礼祭初り之事）

元禄年間より三組で分担したものを上三町、下三町の二組に変え、祇園の神幸は大名行列、花万燈を加えてはなやかになった。この上町と下町によって一年交替で祭を主宰した。

しかし、幕末から明治初めにかけて衰微したが、明治十年後足尾銅山が古河市兵衛の手によって開発されると同時に、銅の輸送で活気を呈したというが、その後もまた衰退したり盛んになったりして現在に至っているのである。

現在の祇園　江戸時代の六月二十四日が、明治以降の太陽暦の実施以後は七月二十四日となったが、後に八月一日二日三日に変更となり現在に至っている。昔は七台の屋台が出たが、いまは二台しか出されない。あとはトラックに屋台を載せておねりをする。一時牛車であったがいまは子供によって引かれる。

神　輿

獅子頭（此獅子）

上三町（一、二、三丁目）と下三町（四、五、六丁目）が交代でやったが現在は上三町が主体をなして下三町は補助するかたちで行われてきた。七丁目は屋台を持たず「割出し」とよばれた。四、五年前に危機におち入ったので五丁目が中心で保存運動をはじめ、今年で六年目である。いま再び全町の行事に戻そうと努力している。

屋台に飾る人形はスサノオの尊、太田道灌などが多かった。上三町組は富士の巻狩、下三町は金がなく浴衣がけで加わったこともあった。昔から世良田の祇園、沼田の祇園、大間々の祇園が上州の三大祇園といわれたという。

祭礼の模様　市神さまの天王様は昔は三丁目にあったが、後に神明宮の境内に八坂神社として移された。現在の祭礼はつぎの日程で行われている。

七月三十日　当番町に仮宮がつくられる。順序は賽を使って決めた。

八月一日　午前五時集合して祇園の準備に入り、午後五時三十分に式典が行なわれる。この宵祭り、宵宮といって仮宮に町民は参詣する。

八月二日　午後一時集合、午後一時三十分式典のあと午後二時より御輿渡御がはじまり、一丁目から七丁目へとお

ねりが行われる。午後五時に御輿の遷御となる。この日が本祭り。

八月三日　午後二時に出発して「御礼参り」をしたあと、午後五時集合して五時三十分祭りを終了する式典となり、祭礼は終了する。

行列の順序はつぎのようである。

切幣を持った神宮（二人）―金棒（二人）―祭典長―大太鼓（二人）―拍子木（二人）―賽銭函―地区役員代表―稚児（一五〇人位）―山車と獅子頭―天狗（一人）―大傘（一人）―本部役員崇敬者代表―招待者―各区の付け祭の山車（予定四台）

となっている。途中休憩的（御旅所）は第一区、第五区、第七区の三カ所である。

以前は踊り屋台があり、町内ごとにこの屋台を使って御神楽をやったこともあった。曲目は「にんば」「ねんねん」「がく」などであった。（注この曲目からみて神楽の中の火吹男踊の系統と見られる）

このほか以前は「神馬（じんば）」といって生きた馬が大きな御幣束をつけ、天王さまの渡御の前に露払いとして一丁目から七丁目まで駈けった。そのあとに町民が続いたものである。神馬の出るときは、大榊が午前九時頃出てそのあとに太鼓が続き、太鼓のあとに神馬がつづいて町内を回った。

神明宮境内の屋台　神明宮の境内に五丁目で使っていた屋台が神楽

獅子頭（雄獅子）

神楽殿に代用された五丁目の屋台

旧五丁目の屋台正面破風

旧五丁目屋台背面の装飾

殿に代用されて現存している。昭和二十二年誰持できなくなり神社に寄付し、神楽殿として利用している。間口二・八三メートル（一間半）奥行は四・三メートル（二間二尺）、軒高は四メートル（一三尺）あり、背の高い祇園屋台の特長を見せている。切妻造りの屋根で、破風にはみごとな三頭の竜の半肉彫が飾られ、その下の虹梁もの彫刻も、木鼻も立派である。背面には牡丹に唐獅子の彫刻が破風にあり、その下にあかりとりの格子障子がはめこまれている。この屋台に木札がつけられている。その札に、

大正七年七月吉日
棟梁　斎藤儀八　　脇棟梁　佐藤安平
鳶部　青木門三郎

とあり、世話人として細川栄太郎、田村太一、高橋啓太郎、角田歌次、栗田儀助、藍原菊児の名がある。寄付金は最高四五円、最低一円で七〇名の寄付金でつくられた。昭和二十二年六月に神楽殿に改造したときの札には

神楽殿改造
鳶職　荻原盛太郎　　工匠　荻原金次郎
宮司　斎藤堯祐
昭和二十二年六月

とある。床には舞台でいう二重（上段）がつけられており、これを利用して芝居や的作事がやられたことを示している。以前の祇園祭礼の日の豪華な一面を伝えている珍しい屋台である。この神楽殿も現在は神楽がやれなくなり、空しく遺されているのは惜しい。五丁目では山東を失ったので、昭和二十七年に勢多郡新里村山上から現在のものを二万円で買ってきて使っている。

神輿　神明宮境内の宝物庫に、祇園祭礼に用いる御道具が一括保存されているが、その中に御神輿がある。記録にある万治年間江戸で買ったものではなく、その後の新調であろうと思われるが県内でも数少ない立派なものである。

獅子頭　同じく宝物庫に保存されている。雄雌二体あり、高さ雌獅子が五〇センチ、雄獅子が五二センチ、奥行は四六センチと四八センチある大きなものである。用材は桐材と思われたが箱表には「白檀」とある。布張り朱漆塗りである。二つとも頭の頂部に写真のような毛のついた飾物をつけている。雄獅子は角、雌獅子は宝珠を載せている。唐草の風呂敷も保存されている。獅子箱を収める箱に墨表で、

文政十二年丑六月新造之
白檀　獅子頭雄

と雄雌別々に納められており、寄進者の氏名もある。したがって、この獅子頭は文政十二年につくられたことがわかる。祭礼のときは今も行列の中に加わって町中をねる。

このほか、渡御の行列に使われる天狗面、大太鼓なども一しょに保存されている。

（資料提供者は高村梅吉、石原輝久、小林惣左久の三氏）

五、遊　戯

子供の遊び　竹馬、スゴロク、オテダマ、オハジキなどのほか、「タケガエシ」というのがあって。これは、竹の短冊を四本つくりそれで様々な遊びをした。十六武蔵、紙鉄砲、杉鉄砲などもつくって遊んだ。（大間々一～二丁目）

指あそび　左右の指と指を合せながら歌う。子どもと子どもと喧嘩して、薬屋さんが止めて、なかなかとまらねえ。人たちゃ笑う。親たちゃおこる（おどす）（塩原）

こま　よく廻って、こまの心棒が一本に見えるのをスワル、不規則になって倒れそうになるのをミソスリという。（塩原）

フジマワシ　藤の新しい葉をこいで、まくと、穴ができる。その穴

にさわらないように藤の葉の板を入れる。沢山入るほどいい。

ベタ（めんこ）　武者絵のが多かった。大間々の玩具屋から買った。シカクッペー、マルッペーとある。ベタといって、ペーとはいわない。

オタマ（お手玉）　中に入れるのは、とうもろこし、あずきが一番いい。たびのこはぜを入れると、いい音がする。（塩原）

童　戯

男児　こま、たこ、ビー玉、タケンガエシ（女の児より男の方が多かった）竹馬、ベタン（めんこ）

女児　まりつき、お手玉、キシャゴ。（桐原）

昔の子は、今の子どものようにはげしくなかったから、女の子は、赤いきれさえみれば、人形の着物を縫ってくれという、貧しい家では、きれっこさえないから、往生する。一度縫ってやれば、ほかに、遊ぶものもなかったから、いつまでもあきずに遊んでいた。

男の子には、縄で木と木を丈夫な棒でしばって、ブランコをつくってやり、誰にでもかすんだよといってきかせると、皆で仲良く遊んでいた。（下桐原）

村に来た人々

毒消しや　新潟から

おき薬　富山、大和から

ゴゼ　新潟から

ヨカヨカアメヤ　飯台を頭にのせ、旗を立て太鼓をたたいて廻ったどこから来たか判らない

マキ運び職人　新潟から（長尾根）

他所から来る人

アメヤ　どこから来たか判らないが村に泊って商売していた。

浄瑠璃　大間々の大夫が来た。好きで来るのだから無料（浅原）

六、その他の芸能・娯楽

獅子舞い　正月にきた。二銭か一銭をくれた。泊らなかった。（神梅）

瞽女　新潟県蒲原郡からやってきた。宿をしてくれる家に泊った。二、三人で、中に少し目の見える人がいた。おセキさんという人がいた。民謡と口説（くどき）をやった。（神梅）

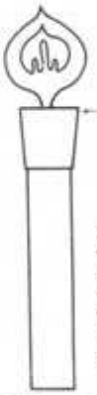
明治末年まで越後蒲原郡から二～三人一組で来た。ゴゼが来ると唄っている間にサシ（カンジョリに文久銭を入れる）を廻し、これをゴゼに与えた。泊る家は決ってなく、陽が暮れると「泊めてくれ」という。すると「今日はゴゼが来たから聞きに来ないか」と触れて廻る。ゴゼはオヒネリをおいて、隣の村に行く。小平ではゴゼの泊る家はワサビヤ（茂木、黒田氏）カヤ（茂木、鹿沼氏）胡桃具戸の福田氏宅などであった。（浅原）

昭和初期まで来た。四、五人連れで一人はいくらか目の見える人が混っていた。越後の西蒲原より来たといった。歌、じょうるりなどをやり楽しませてくれた。（塩沢）

少し見える者か片眼見える者が先頭で来た。宿では、かならず土間にねた。食事やお茶は上でいただくが、休むときはかならずむしろを借りて土間ときまっていた。

食事には、コウセンを背負って来た。湯や水をもらってかいて食べていた。（塩原）

祭文語り　「エー、デロレン、デロレン～」と言いながら、ホラ貝をふいた。間に、国定忠治などをやった。一晩人を集めてやり、行った人は、花をやった。（神梅）

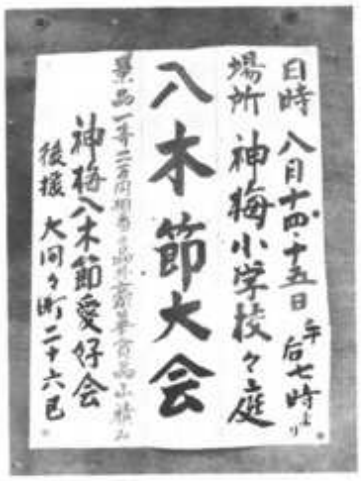


これをふった。
この調子に合わせて
ホラ貝をふいた。
節をつけて、唄うような感じで語った。

万才（三河万才）　宿の家にとまり、笠は馬場（バンバ）の家にあずけた。大夫の名は沢井雄次郎といったが、才蔵の名は不詳。愛知県碧海郡から来た。宿の家では三十銭から五十銭、普通の家で十銭ほどを出した。懇意な家には、豊川稲荷大明神のお札を持ってきてくれた。（神梅）

村尽くし　花輪から室町まで下って行く所の地名を読みこんだ歌がある。ほかに、「母と娘」、「馬鹿と利口」（漫才）、「警察官」の歌などがあった。（深沢）

盆踊り　八木節が盛んで、八月十四、十五日の夜、盆踊りの八木節大会が、神梅八木節受好会の主催で行なわれる。（神梅）



八木節大会ビラ
（関口正巳　撮影）

盆踊りのヤグラ（神梅）（関口正巳　撮影）

機織唄（桐原新井コトさん　明治三四年九月二九日生）

○中日牡丹餅　食いたくないが
　ならば半日　あすびたい
○色に持つなら　おけやをお持ち
　はなればなれを　丸くする
○いきな男だ　ほっかぶりはへたよ
　ぼんにお出でよ　おせてやる
○あんな男に　ほれたじゃないが
　時のせいなん　気のまよい
○花のさかりに　しんとめられて
　しおれ花とは　わしのこと
○山で赤いのは　つつじにつばき
　咲いてからまる　藤の花
○ゆんべ来たのは　よばいとか猫か
　猫が下駄はいて　くるものか
○なくななげくな　日影のもみじ
　いくら泣いても　日は照らぬ
○かわいがられた　竹の子でさえも
　いまにゃ割られて　桶のたが

（注）新井コトさんの年季奉公は、生産生業・社会生活にあり

機織りうた

山になりたい　高くら山に
　阿久津　山同　日の下に
機が織れない　機神さまよ
　どうぞこの手が　上がるよに
かわいあの娘が　仁田山通い
　桜峠が　さびしかろ　（細谷戸）

民家

はじめに

この民家調査は予備調査と本調査の二回に分けておこなわれた。予備調査は七月中旬に二日間の日程で、町教委の小池政之助氏および地元の文化財調査員の方々の御案内によりおこなった。予備調査では町内全域をくまなくめぐり、主に明治中期以前の民家にたち寄らせていただき、昔の家業および母屋の建立に関する伝承等を聞き取りながら、家の周囲および主にダイドコロ内や大黒柱等をながめさせていただき本調査の対象民家を選定した。その結果、上毛電鉄線以南は新開地のため本調査対象民家を全く見出すことができず、これより北部に限られてしまった。

大間々町も他の町村と同様に、近年における近代化は顕著で、道路は相当奥地まで舗装化され、廃家となった草葺民家が山間部で目に映った。古老の話によると町内の民家は街路ぞいの町家を除いて昔は総べて草葺であったというが、町内全域を廻ってあまりにも少なくなった草葺民家に驚かされてしまった。そこで本調査では予備調査で廻った草葺民家は総べて対象民家としてとり上げた次第である。

本調査は八月五日～八日までに行うことを心掛けたが、予備調査の結果そう遠くないうちにとりこわして新築したいという家がいがいに多いことを知ったので、明治中期以前の民家はできるだけ多く本調査の対象民家としてとり上げた。そのため本調査の日数は十日を要した。

なお、本調査に際しては大間々町文化財調査員板橋春夫氏及び日本大学大学院生田島豊穂君に連日ご協力をいただいたのでここに記して感謝の意を表します。

（桑原　稔）

一、調査民家の形式分類と編年

本調査を行った民家は表―1に示す四十四棟で、これらを平面形式より分類すると八つの形式に区分される。四十四棟の調査民家のうち、伝承等により建立年代が判明あるいは推定できた遺構は二十一棟になり、その比率は四十八パーセントになる。

編年はこれら建立年代の判明あるいは推定できた遺構の原形の示す各特徴と、他の民家の平面・構造・細部等を比較・検討して編年の指標を求め、全体の編年系列をつくったのが表―1である。

ここに大間々町内における調査農家遺構の平面形式を溯源的に順次列挙すると次の①～⑦のようになる。⑧は農家ではなく昔の商家を指し、その平面は俗に「通り庭式」とよばれるもので、土間（トーリとよぶ）が表から裏まで縦長に通じており、各室は土間に面して表から裏へ縦に配されるため、全体の平面も縦長を示すものである。このような町家は農家とは逆に古くから人口の密集地に建てられ、しかも商店が多いため、特に改造が激しく往時の姿をとどめることは極めて少ない。しかし大間々町では繁華街の中に数棟ではあるが、古風な感を与える町家を残しており、これらが往時の風情をほそぼそと今日に伝えている。

今回の調査では四棟の町家をとりあげたが、一棟は改造激しく復原

表－1　　大間々町民家遺構

所有者	所在地	間取の形式								構造							柱間装置						設備仕上その他						
		一間取型	二間取型	広間型	喰違四間取型	不整形田字型	多間取型	多間取型	町家	大黒柱なし	の逃げあり	表側の一間	柱間二間	表側軒上げ下し	の構造せがい	土台なし	の有無あい	デーの壁あい	表側全開放	デーと閉鎖	ナンドの半閉鎖	の境全開放	イドコ境ザスキ・ダ 簀ぐし	簀ぐあり	トコなし	トコあり	大黒柱の仕上チョーナ	大黒柱の仕上併用	二階カンナ	二階なし	二階あり
正田　猛	高津戸	○										○		○		○			○				○		○				○	
石原　岩三	桐原	○										○		○		○			○					○	○				○	
久保田吉松	〃		○									○		○		○			○						○				○	
金子　元治	長尾根		○									○		○		○			○							○			○	
正田　猛	高津戸		○										○	○		○			○			○				○			○	
高瀬　好夫	小平			○						○		○		○		○		○		○			○		○		○		○	
須永　武男	浅原			○						○		○		○		○		○		○			○		○		○		○	
関口　宗佑	小平			○						○		○		○		○		○		○			○		○		○		○	
穴原　和郎	〃			○						○		○		○		○		○		○			○		○		○		○	
小池考太郎	上神梅			○						○		○		○		○			○		○		○		○		○		○	
星野　幸作	浅原			○						○		○		○		○			○		○		○		○		○		○	
小野　雅造	桐原			○						○		○		○		○		○			○		○			○	○		○	
高瀬　恭平	小平			○						○		○		○		○			○			○	○		○		○		○	
金子　定夫	浅原			○							○	○		○		○		○			○			○		○		○	○	
高瀬　友平	小平			○							○	○		○		○			○			○		○	○				○	○
小倉　元男	塩沢				○					○		○		○		○			○	○			○			○		○		○	
小倉　玉吉	〃				○						○	○		○		○			○	○				○		○		○		○	
福田　勘助	上神梅				○						○	○		○		○		○			○			○		○	○			○	
高草木増次	塩原				○						○	○		○		○			○			○		○	○				○		
小池政之助	〃					○					○	○		○		○			○		○			○		○		○		○	
深沢　順磨	〃					○					○	○		○		○			○		○			○		○			○	○	
星野　邦次	小平					○				○		○		○		○			○			○		○		○		○		○	
鹿沼　利夫	〃					○				○		○		○		○			○		?			○		○			○	○	
関口三郎司	塩原					○					○		○	○			○		○			○		○		○			○	○	
赤石　康	小平					○					○	○			○	○			○			○		○		○			○		○
深沢　豊次	浅原					○					○	○			○		○		○			○		○		○			○		○
松島　和男	塩原					○					○	○		○		○			○			○		○		○			○	○	
福田　富三	浅原					○					○		○	○		○			○			○		○		○			○		○
漸田良一郎	塩原					○							○	○			○		○			○		○		○			○	○	
高草木昭夫	〃					○					○		○		○		○		○			○		○		○			○		○
鏑木多真喜	上神梅					○					○		○		○		○		○			○		○		○			○		○
高草木春吉	塩原					○				○			○		○		○		○			○		○		○			○		○
荻原　一郎	浅原					○					○		○		○		○		○			○		○		○			○		○
星野　清一	小平						○				○	○				○			○			○		○		○			○	○	
奥沢　実	塩原						○				○		○		○	○			○			○		○		○			○	○	
小倉真佐留	〃						○				○		○	○		○			○		○			○		○			○		○
星野　与市	浅原						○				○		○		○		○		○		○			○		○			○		○
水島松次郎	塩沢						○				○		○		○		○		○			○		○		○			○		○
藤生二三夫	浅原						○				○		○		○		○		○			○		○		○			○		○
小野里公男	塩原							○			○	○			○	○			○		○			○		○		○		○	
金子　正次	長尾根							○			○	○		○		○			○			○		○		○			○		○
須永善十郎	3丁目								○																						
野口信三郎	〃								○																						
岡直三郎商店	4丁目								○																						

の形式分類及び編年表　　（M：明治、T：大正、S：昭和の略）

建築について					
不明	建立されたまま	再建されたもの	職業・家柄・役割など	推定建立年（代〜紀）	建立についての伝承等
○			農家	19初	旧母屋、現在は養蚕場として使用、13年前77才没の先祖も知らなかったほど古いものだと伝える。
○			〃	19中	当主(69才)の親が住んでいたが建立については不明。
○			〃	19初	150年以上は経ている。
○			〃	19中	不　明
		○	〃	20中	持主が移転したため、買い取り移築した。間取・規模は移築前と全く違わないという。
○			〃	17中	不　明
○			〃	17末	不　明
	○		〃	〃	ダイドコロ部分はおじいさん(M29年生)が18才の時大改造し2階をつける。他は宗佑さん(T・9年生)より13代前に建てた。
○			〃	18初	
○			〃	18中	この辺では最も古い家であると伝える。
○			〃	〃	
○			〃	19初	当家は雅造氏(T・12年生) で6代目になるという。
○			〃	19中	
○			〃	〃	
○			〃	〃	
○			〃	18初	
○			名主	〃	
○			〃	18中	村方覚書帳(正徳6年)により、正徳の頃当家の先祖が名主を勤めていたことが明らかである。
○			農家	19中	
○			組頭	18末	
○			農家	19初	
		○	〃	19中	宗平(天保12年生)が当地へ移築して住んだ初代という。
○			〃	〃	
	○		〃	19末	安政6年(1859)生れの人が16才の時結婚してこの家をつくって住んだと伝える。
○			〃	19中	
	○		〃	19末	豊次さんの祖父(T・8年76才没)がたった。建立時期はM中期と伝える。
		○	〃	〃	S・45年75才没の親が移築した。
		○	〃	〃	当主の祖父がM・20年頃移築した。S・10年頃土間の方を3間位もぎとる。
	○		〃	〃	火災にあい、2年前81才没の人が腹にあるとき建ったもの。
	○		〃	〃	M・28年の建立と伝える。
○			〃	〃	大間々町内でみられた赤城型は当家だけであった。但し福田富三郎は復原すると赤城型になる。
		○	〃	20初	前兜造、M・34年生の人が5・6才の時古家を買って移築した。グシはクレグシだったという。
	○		〃	〃	2階で主に養蚕を120貫もとれた。S・2年の建立、建築費2千円、出桁造。
	○		〃	19中	馬次郎(M・15年74才没)が建った。年代は祖母(S・8年86才没)が10才の時建ったという。
		○	〃	〃	当主(51才)の3代前に火災にあい建て替えた。
○			〃	19末	
		○	〃	20初	前の家が古くなったのでM・33年に建て替えた。
		○	〃	〃	大正3年(1914)建立、前兜造。
	○		〃	20中	S・16年(1941)建立
○			名主	18初	
	○		農家	19初	S・51年に92才で没した人が20才で嫁に来た時93才のおじいさんがおり、その人が3才の時建替えた。
			商店	19末	M・28年の大火でもえ、翌年の29年に建ったもの。
			〃	〃	〃
			〃	〃	〃

の全く困難なものであったため、この報告書では三棟をとりあげていた。

① 一間取の民家
② 二間取の民家
③ 広間型の民家
④ 喰違四間取の民家
⑤ 不整形田字の民家
⑥ 整形田字の民家
⑦ 多間取の民家（室数が四間以上あるもの）
⑧ 町家

次に以上の各形式について、その特質を遺構例を解説しながら順次述べることにする。

二、一間取の民家

この形式に属する民家は正田猛家と石原岩三家の二棟が発見され、その復原平面は図―1のようである。

わが国における民家の発展を考える時、その出発点は竪穴住居になると考えられている。

円い竪穴住居から生成した民家平面は、次に外壁をめぐらした矩形の平面となり、これが直家（ヂカヤ）の出発点と考えられている。当初の内部は竪穴住居と同様に土間であり、片側に干草や藁をぶ厚く敷きつめて寝所（ドヂロ）としたものであろう。これがやがて土間の一部にころばし根太の床を張るようになり、さらに束で支える床上部分に発展し、土間と床上部分に分割された一間取の民家が発生したものと推察される。

このようなところから、一間取の民家は現在残されている近世民家のうちで、最も原始的な形態を伝える遺構として極めて貴重であると考えられる。

正田猛家は梁間二間、桁行五間であるから建坪は十坪であり、トボーグチを入ると左手の二間四方を束で支える板張りの床上とし、他は土間としダイドコロとよんでいる。床上とダイドコロの境は建具を用いず開放とし、構造も極めて単純で古い形式をよく伝えている。当家は現在、近くに母屋を新築し、当遺構は主に蚕室として使われている。

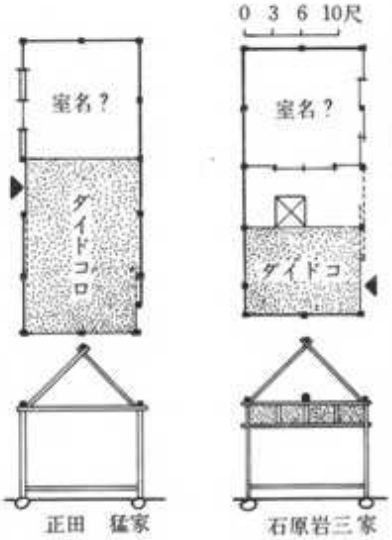


図1　1間取の民家（復原図）

建立年代については、十三年前七十七才で亡くなった先祖も知らなかったほど古いものだと伝えるが、具体的な建立年代は不明である。しかし、構造及び細部の特徴などから一九世紀初期頃の遺構でないかと推定される。

石原岩三家は梁間二間桁行四半の規模であるから、建坪は九坪である。トボーグチはダイドコの妻側の外壁に接して設けられ、ダイドコと床上の室境では差鴨居を用いて建具を嵌め込み、室と土間の間に幅一間の板張部分を設けて、ここにイロリ備えている。当家は前述の正田猛家より新しい特徴を示しているところから、およそ十九世紀中期頃の遺構と推定する。

近代化の波が農村の隅々まで押し寄せ、町内全域を見わたしても草屋根の民家はもはや数えられる程の少数になってしまった今日におい

て、ここにとりあげたような一間取の民家を調査できたことは奇跡に等しく、民家を研究するものにとって全くありがたいことであった。

三、二間（フタマ）取の民家

二間取の民家は三棟を調査し、それらの復元平面及び復元断面図は図―2のようである。

久保田吉松家は梁間二間、桁行七間で桁行方向に二室並べた細長い造りである。室名は二室とも不明で室境には中間（棟下）に柱を建てている。上手の室境では建具を嵌め込んでいるが下手の室とダイドコ境は建具を用いておらず開放されている。当家の建立年代についての伝承は、当主によれば一五〇年以上経ているものという。建築の各部の特徴から推察しておよそ一九世紀初期頃の遺構とみて穏当であろう。

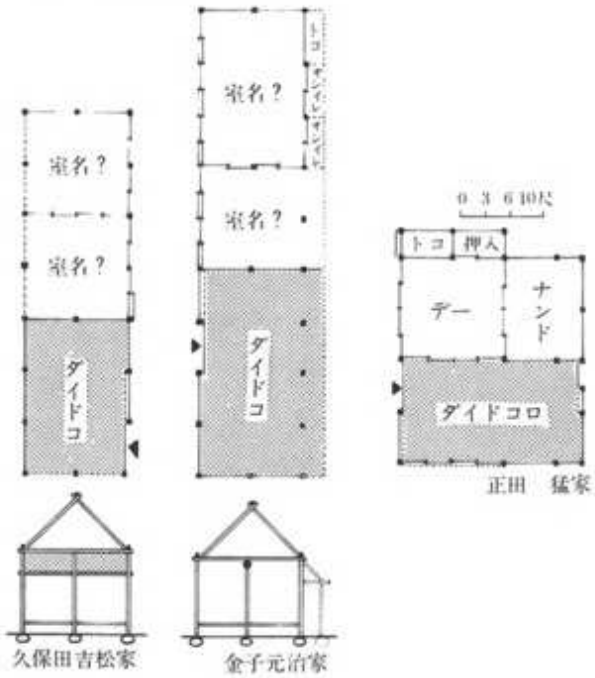


図2　2間取民家（復原図）

金子元治家は梁間二、五間、桁行九間で久保田吉松家よりさらに細長い平面を示している。当家も上手と下手の室境及び下手の室とダイドコ境の棟下に中住を有し、下手の室とダイドコ境は建具を用いず開放している。しかし、トコ・オシイレを備え下屋を設けているなど新しい特徴もみられるところから、久保田吉松家より新しく、一九世紀中期頃の遺構と考えられる。

正田猛家は一間取の民家所有者と同一の所有になるもので、十年前頃近くに住んでいた旧所有者が移住して空家となったため、その母屋を買い取り、全く旧態のまま解体移築したものといい現在は物置に使用されている。したがって移築年代は二十世紀中期となる。

久保田吉松家や金子元治家のような桁行方向に並んだ二間取の民家は、県内ではめずらしく、今のところ他地域でみられないめずらしい形式であるといえる。

正田猛家のような二間取の形式は県内他地域でも数多くみられるもので、二間取の一般的な形式と考えてもよいであろう。

いずれにしても二間取の民家は庶民住宅の発達史上、一間取の民家に次いで発展したと推察される平面形式として、極めて貴重な有形的史料となるものである。

四、広間型の民家

調査遺構四十四棟のうち、十棟がこの形式に属し約二十三％が広間型の平面形式を示していることになる。

広間型遺構の中で最も古い様式を示しているのが高瀬好夫家である。高瀬好夫家の規模は梁間三間半、桁行八間半余で、その平面は開

口部少なく、極めて閉鎖性の強い特徴を示している。例えばデーの表側は半間の開口部を設けているだけであり、ナンドはジャシキ側に設けられた半間の開口部を設けていたものと考えられる。そしてナンドの出入口は他よりも敷居を高めて（痕跡では床上よりシキイメヂ上端まで四寸一分）帳台構えとしていた。またジャシキでは表側の半分にサマを設けているのも古い手法である。

各室の機能について述べると、ナンドは寝室に相当する部屋であった。寝るためには暗く静かな、そして外部から色々な危害を加えられる心配のない空間が求められるのは文化程度の低い時代にあってはいうまでもないことであろう。恐らくそのような配慮から、丈夫な土壁を四周にめぐらし就寝のための小空間をつくったものと思われる。寝室内では干草や藁をぶ厚く敷きつめ、この上に横臥し簡単な布をかけて就寝した。ナンドの出入口で敷居を一段高くし帳台構にするのは、ナンド内部に敷きつめた干草や藁が出入の際外へ出るのを防ぐために考え出された古い建築手法の一つである。したがって社会が進歩し、多くの庶民が就寝の際、敷きぶとんを敷きその上に寝るようになると、やがて帳台構えはその必要性を欠くために建築手法から消えていくのである。

当家は建立に関する記録及び伝承等を残していないが、平面・構造・細部等の特徴から十七世紀中期頃まで溯る極めて古い遺構であると推察される。

須永武男家は梁間四間、桁行九間半の規模をもち、デー表は半分を開放し高瀬好夫家より多少開放的になっている。ナンドの出入口はやはり帳台構えとしているが、当家の場合は床上よりシキイのメヂ上端まで九寸もある高いものである。

デーは接客の間ともいわれ、公けの性格をもった空間と考えられている。そのため畳敷にされるのもこの部屋が最も早く、後になるとトコ・タナが付けられるのもこの部屋である。

調査の結果当家のデーはすでに畳敷とされていたようである。

ザスキは家族の居間であり、食事室でありユカ上の仕事場でもあるが、また日常の軽い訪問客のための応対にも使用されるという雑多な兼用空間であった。このためザスキには必ずダイドコロ寄りのほぼ中央にイロリが設けられ、ダイドコロとの境ではまだ建具を嵌め込んでおらず、ザスキはダイドコロとの結びつきが強かったことを示している。そしてザスキ表の半分に格子を嵌め込みサマとするのも古い手法である。

当家は建立についての記録および伝承等もないが、建築の平面・構造・細部等の特徴から十七世紀末期頃の遺構と推定する。

関口宗佑家はダイドコロ部を大正三年（一九一四）に大改造し、二階を増設しているためこの部分の復原は困難であった。しかし、ユカ上部分の特徴は須永武男家と類似しているところから、当家は須永家とほぼ同年代頃のものと考えられる。

宗佑さん（大正九年生）の話によれば、ユカ上部分は十三代前につくられたということである。したがって当家のユカ上部分は、十七世紀末期頃の建立とみれば穏当であろう。

穴原和郎家は表側の柱を中古に入れ替え、ダイドコロの妻側を四尺五寸程もぎとっているため、完全な復原は困難であったが、関口宗佑家に次ぐ古い遺構と考えられるところから、十八世紀初期頃の建立とみてよいであろう。

当家は中古に採光のため妻側を少し切り上げ、切り上げた妻側から桁行に約二間の幅にわたって、土間を約三尺程掘り下げハタバとしている。古老の話によると、織物を織る場合湿度を多くすると織り易いのだといい、そのために織物を織る場所を地面より低く掘り下げ、そこでイザリバタを織ったのだと伝えている。そしてその昔、小平のハブタイは相当名が知れており、越後方面から織子が多勢出稼ぎに来たのだといい伝えている。当家では昭和八、九年頃までダイドコロで機

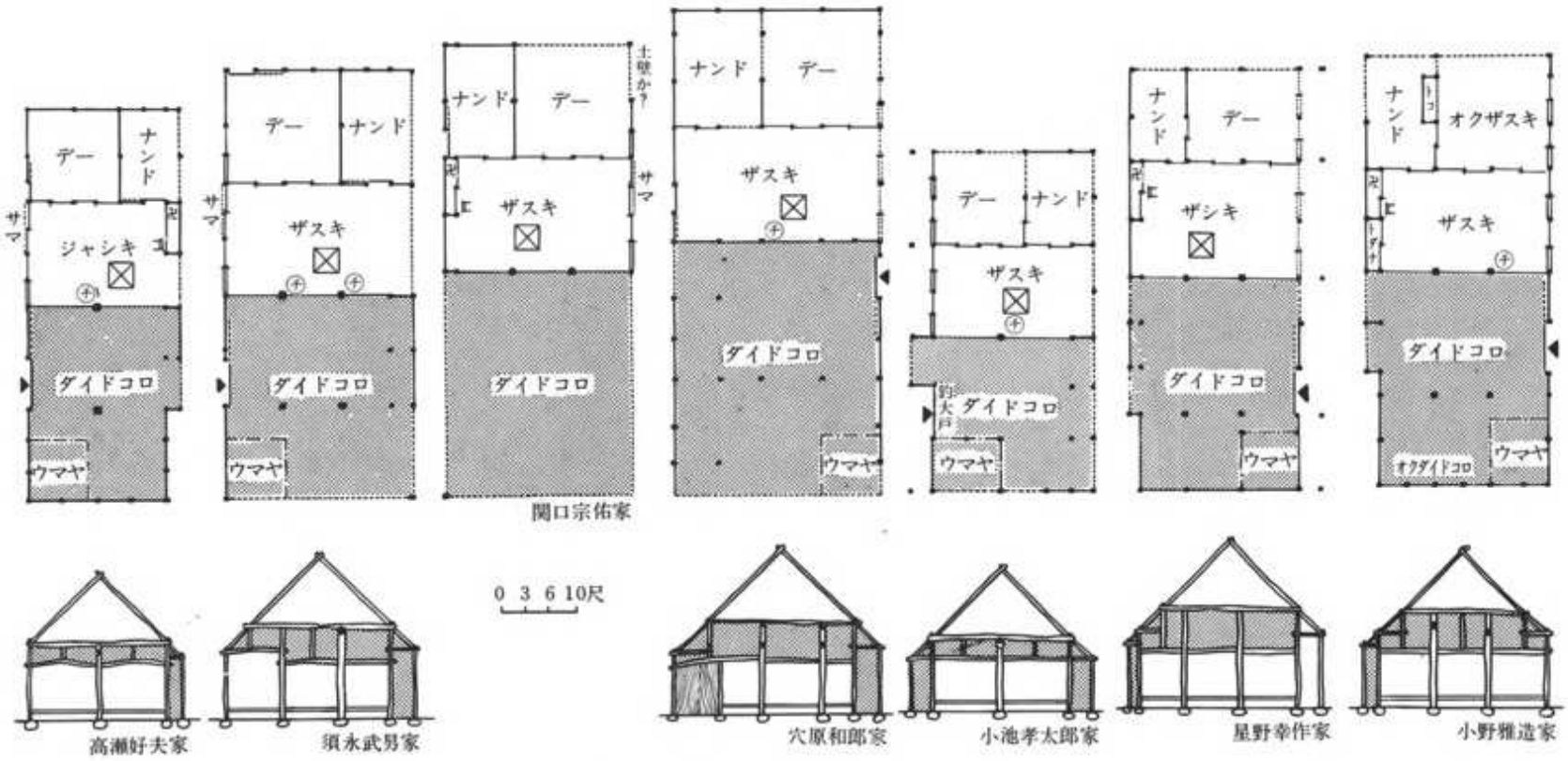


図3　広間型の民家（復原平面・断面図）

織をしていたという。

小池孝太郎家・星野幸作家は類似した特徴を示す遺構である。この期の遺構になると、デー表の土壁が消滅し、デーとナンド境では半分の土壁が消滅し、ここに建具を入れて表側からデーを通してであるが、ナンドに採光するようになる。

小池孝太郎のトボーグチの大戸は蔀戸のように内側へ釣り上げるもので、引戸のように引き込む壁を必要としない長所があり、トボーグチの新しい開閉方法として採用されたものであろう。

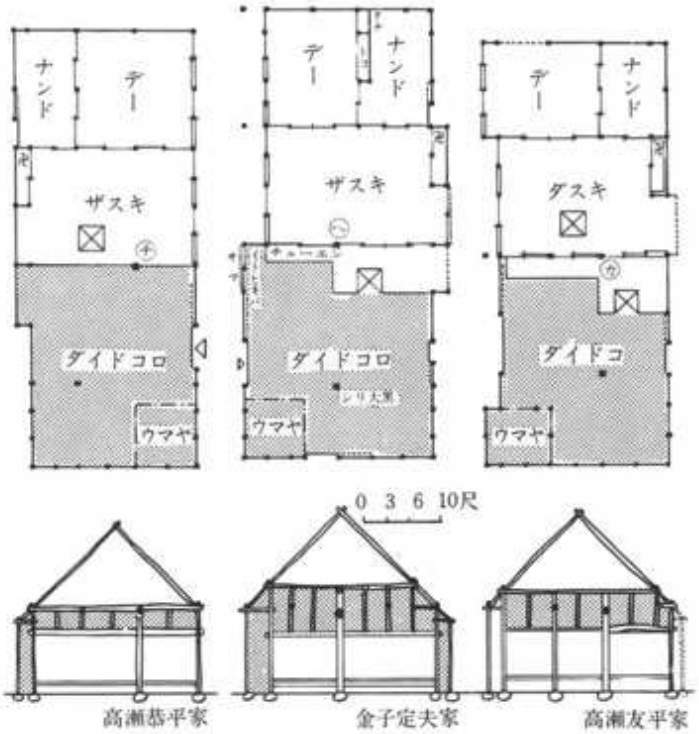


図4　広間型の民家（復原平面・断面図）

小池孝太郎家・星野幸作家とも建立に関する記録及び伝承を残していないが、建築の特徴から一八世紀中期頃の遺構と推定される。

小野雅造家は小池孝太郎家・星野幸作家より幾分新しい遺構と考えられるもので、オクザスキ（デー）とナンド境にトコを設けている。当家に前述の広間型六棟の遺構と同様、本百姓の家柄で名主等の役職を勤めた家柄ではない。しかしオクザスキ（デー）にトコを付けていることは、時代の進展によって幕府の禁令にもかかわらず、本百姓層ではすでにトコを設けていたことを示すものであろう。

当家は雅造氏（大正十二年生）で六代目になるということから、一九世紀初期頃の遺構とみてよいであろう。

高瀬恭平家・金子定夫家・高瀬友平家は共に類似の特徴を示すもので、建立年代は一九世紀中期頃のものと考えられる。この時期の遺構になると、開放性が目立つようになりデーとザスキ境では中柱を除去し差鴨居を使用するようになる。また、大黒柱は四面をカンナで仕上げられるようになり、土間側に逃げをうって据えられるようにもなる。

大黒柱が土間側に逃げるのは、ザスキに畳を敷きつめるようになったからであろう。古い手法はザスキとダイドコロ境の間仕切芯に大黒柱の芯を合わせて据えるため、他の柱より太い大黒柱はザスキ側にかなりはみ出すことになる。（写真11参照）。このような状態で畳を入れようとする場合、大黒柱に当る部分の畳を凹字形に欠くか、大黒柱自身を欠くかしなければ畳が入らないことになる。そこで太い大黒柱を敷居の内側に合わせるため、ザスキとダイドコロ境の芯より幾分土間側へ寄せて据えるようになるのであり、このような場合に大黒柱の逃げがあるというのである。（写真17参照）。

したがって大間々町の民家の場合、ザスキに畳を敷きつめるようになるのは一般の本百姓民家の場合およそ一九世紀中期頃とみてよいであろう。ザスキに畳が敷きつめられるようになると、これまでザスキに設けられていたイロリはダイドコロに張り出した板張り部分に移行

するようになり、ザスキとダイドコロ境には建具が入って、ザスキはダイドコロから独立した空間として意識されるようになる。

さらにこの時期になるとダイドコロの表側に格子棒を嵌め込んだサマを設けてここから採光し、その内側で糸をひいたり、機を織ったりするようになる。そしてサマの内側を今日でもイトヒキバあるいはハタバ（ハタヤともよぶ）とよんでいる家が多い。

五、喰違四間取の民家

広間型の民家における広々としたザスキは作業に適していたが、種々な用途が重なり合っていたため不便なこともあった。例えば食事中の来客には困ったことであろう。そこでやがてこのザスキから、食事室の独立が計られることになり、ザスキが分割されて裏側にチャノマが設けられるようになる。この形式が図―5に示す喰違四間取の民家である。

小倉元男家はデーとナンドの境を土壁で閉鎖し、大黒柱の逃げもないことなどから比較的古い遺構であろう。しかしデーにトコを設けているところから、名主程度の格式の高い家柄であったと思われる。

小倉玉吉家は名主を勤めた家柄と伝えるが、デーとナンド境は閉鎖され、ザスキ表にはサマも残している。しかしデーとナンド境にトコを設け、ザスキ・ダイドコ境の柱に逃げがあるなど進んだ手法も示している。これは名主という立場のため、進んだ手法を受け入れ易かったことも考えられるところである。

小倉元男家・小倉玉吉家とも建立に関する記録・伝承等を残していない。しかし、建築の特徴及び農村における当時の階層差を考慮する時、一八世紀初期頃の遺構と考えてもおかしくないものと推察する。

福田勘助家も名主を勤めた家柄である。オクリとナンド境は幅一間を開放し建具を嵌め、この片わらにトコを設けている。またチャノマ

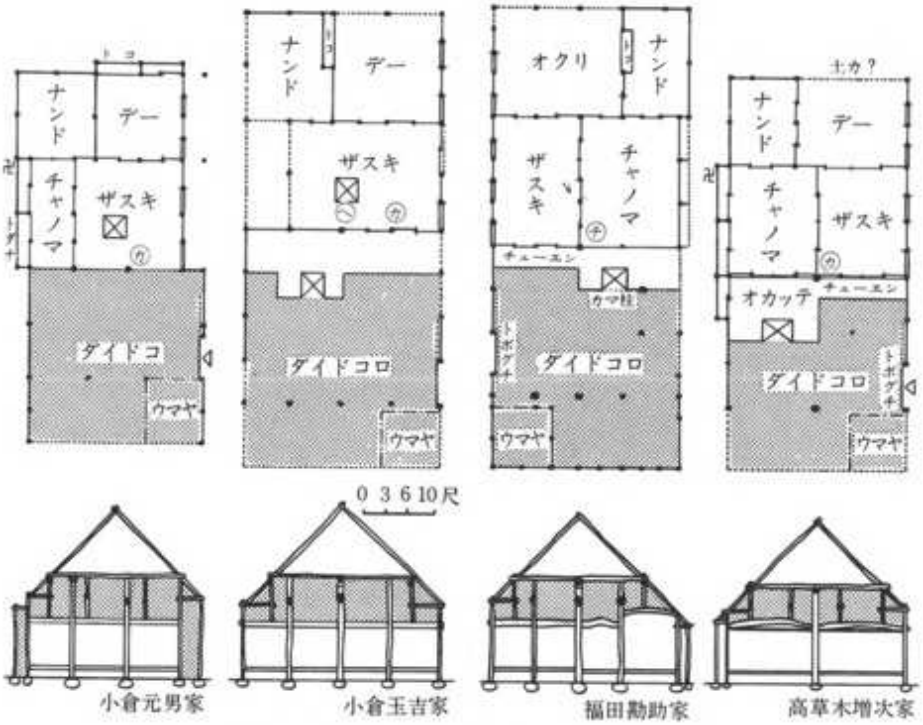


図5　喰違4間取の民家（復原平面・断面図）

の奥行が広くとられており、ザスキの発展を窺い知ることができる。当家も建立に関する記録及伝承等を残していないが、建築の特徴と階層差を考慮して、十八世紀中期頃の遺構と推定しておく。

高草木増次家は本百姓層の遺構である。デー・ザスキ境及びザスキ・チャノマ境は中柱を省略し、差鴨居を用いており、大黒柱はカンナ仕上げとし、逃げもある。当家も建立に関する記録及び伝承を残していない。しかし建築の特徴からおよそ十九世紀中期頃の遺構ではないかと推定される。

六、不整形田字平面の民家

喰違四間取の民家の初期における形式は図―5の小倉元男家及び小倉玉吉家のように、ザスキの裏側に設けられたチャノマの奥行がせまいため、チャノマとザスキ境の間仕切はナンドとデー境の間仕切線より裏側へずれて設けられるために喰違いを生じていることがわかる。

調査遺構より推察するところによれば、大間々町における不整形田字の民家は、初期喰違四間取の民家におけるザスキとチャノマ境の間仕切線が、デーとナンド境の間仕切の延長線上まで前進して生成した形式であろうと考えられる。

本調査で不整形田字の民家に属する遺構は十四棟の調査を行ない、調査遺構中の各形式のうちで最も多く、約三十二%に達した。

不整形田字の民家に属する調査遺構の中で最も古い遺構と思われるものが、図―6に掲げた小池政之助家である。当家はデーとナンド境にトコを設けているため、デーとナンド境は全部開放されるまでに至っていない。このようにトコが設けられる位置として、古いものではデーとナンド境に設備し、新しいものではデーの妻側に設けられるのが一般的である。当家はデー・ザシキの表側及び各室境の間仕切に中柱を有し、大黒柱は土間側をチョーナ、他の三面をカンナ仕上げとしているが、逃げはある。また、チャノマの裏側は総べて開放し、ナンドの妻側にも半間余りの開口部を設けているなど新しい手法もみられる。

当家は文政十二年の記録によれば、組頭を勤めた家柄であり、大司（オオツカサ）という屋号も有している。しかしながら建立に関する記録や伝承等は残されていないので、階層差を考慮した上で建築の名種特徴から推察すると、およそ十八世紀末期頃の遺構と推定してよいであろう。

深沢順磨家はデーとナンド境の半分に土壁を残し、この部分に古い様式の名残を伝えている。しかし、ここ以外における内部の室境の間仕切では、総べての個所で中柱を省略し差鴨居を用いている。大黒柱は四周をカンナで仕上げており、逃げもある。ダイドコではウマヤを裏側へ配し、表側の外壁にサマを設けてここより採光し、サマの内側部分をハタヤとよんで昔はここで機織をしたのだと伝える。

当家も建立に関する記録や伝承を残していないので建築の平面・構造・細部等の持徴から判断すると一九世紀初期頃の遺構と推定される。

星野邦次家ではデーとナンド境に土壁がみられず、中柱を有するが建具を嵌め込み二間を開放している。デーとザスキ境及びザスキとアガリハナ境の間仕切では中柱を省略し、差鴨居を用いているが、デー及びザスキの表側では相変らず中柱を有している。

大黒柱は裏側とダイドコロ側をチョーナとし、他の二面をカンナで仕上げているが逃げはない。また、トボーグチより妻寄りの二間は下屋まで取り込んで、表側をサマとしこの内側をイトヤとよんでおり、ここで糸ひきをしたのだと伝える。サマの窓台（敷居）までの高さは地上から約二尺程で、ザグリで糸をひく高さと丁度合致する。

当家は先祖の宗平（天保十二年生）という人が、古家を買って当地へ移築して住んだ初代であるといい伝えているところから、十九世紀中期頃再建された遺構とみてよいであろう。そして、再建された遺構

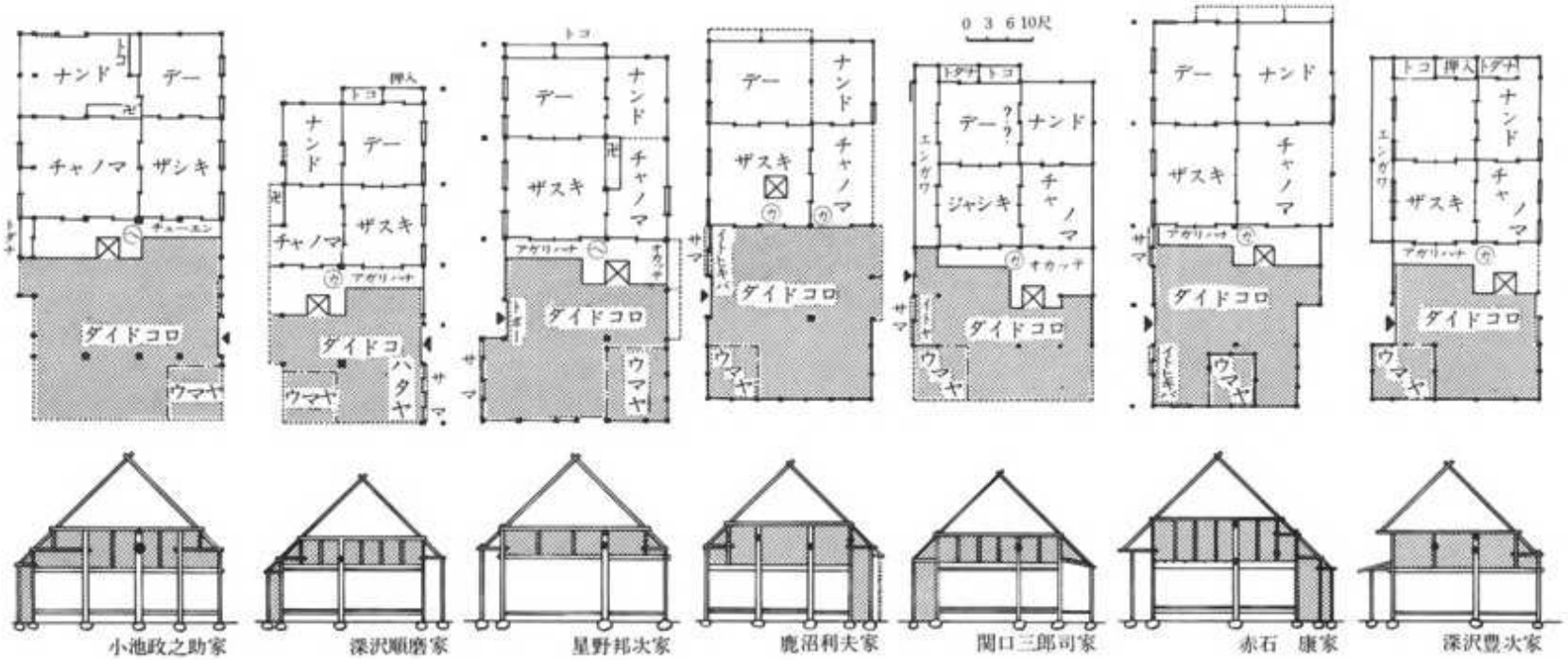


図6　不整形田字平面の民家（復原平面・断面図）

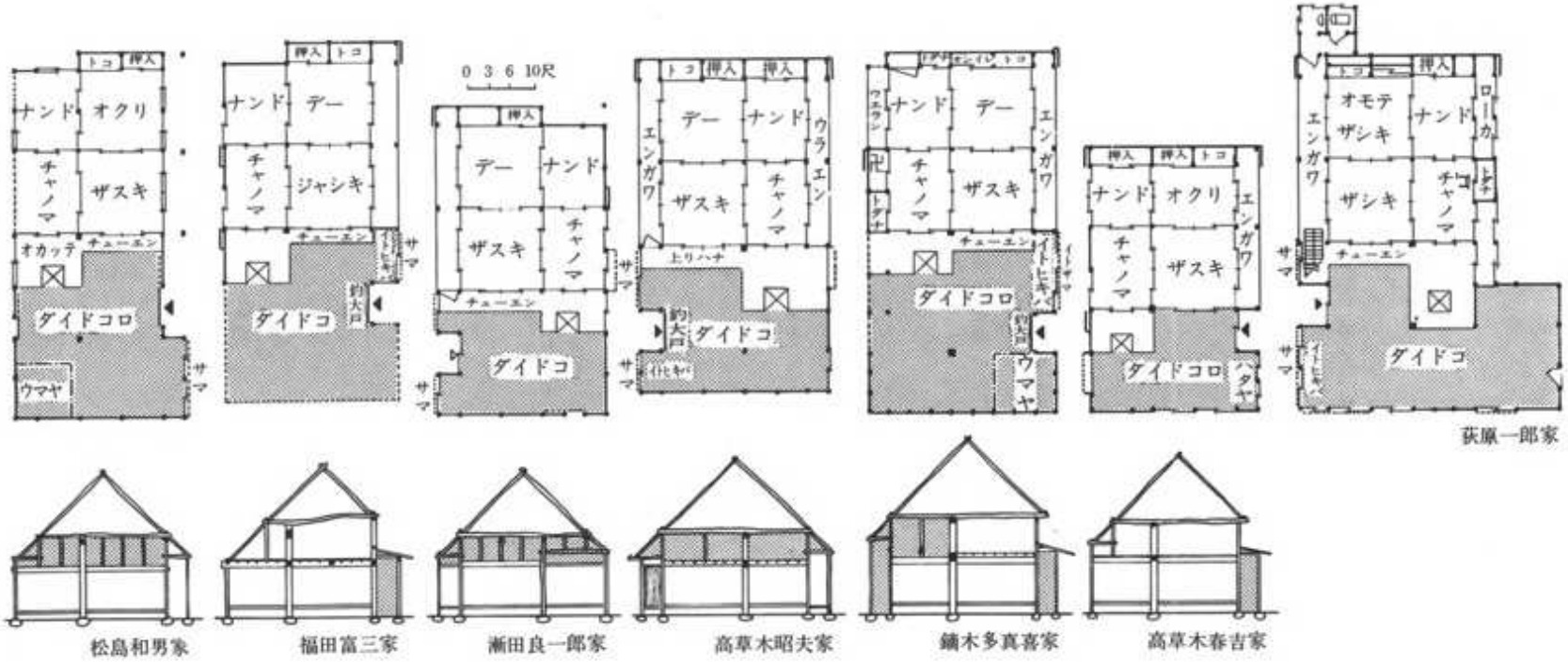


図7　不整形田字平面の民家（復原平面・断面図）

とはいえ一九世紀中期頃の特徴をよく表現している。

鹿沼利夫家はデーやザシキ表ばかりでなく、各室境にも中柱を有しているが、ダイドコロと床上境にたつ二本の太い柱はカンナで仕上げられている。しかしこの二本の柱は逃げを有していない。デーとナンド境では中古に差鴨居を入れて中柱を除去し、差鴨居を受けている左右の柱の内側には、板を打ちつけているのでこの部分における間仕切の復原を明らかにすることができなかった。

当家における新しい特徴はナンドの裏側を半分開放し、裏側よりナンドへ直接光していることである。

当家では建立に関する記録及び伝承等を残していないので、建築における各種の特徴を総合的に判断して、一九世紀初期頃まで溯る可能性を否定しきれないが、一九世紀中期頃の遺構と推定しておけば無難であろう。

関口三郎司家はデーとナンド境に中柱を残しているが、他の個所の間仕切では差鴨居を用いて中柱を省略している。また、当家はデーとジャシキ表にエンガワを設け、エンガワの外側に引き通しの雨戸を付けている。

当家は安政六年（一八五九）生れの人が十六才の時結婚し、この家を新築して住んだと伝えるところから、明治八年（一八七五）の建立ということになる。そして棟の上には昭和二十五年まで草をはやしていたという。これは土手の芝を土を付けたまま、取ってきて棟の上にのせたもので、"クレグシ"とよんでいたという。古老の話によると昔は草葺家の多くがクレグシであったという。

赤石康家はデー・ザスキ境とザスキ・チャノマ境及びザスキ・ダイドコロ境の中柱を省略しているが、他の部分では中柱を残している。当家はザスキ・ダイドコ境より桁行に小黒柱までと奥行は大黒・小黒間を結ぶ部分の表側上部に根太天井を張って、六坪ではあるが屋根裏利用を考えている。この屋根裏利用の方法は、上屋柱の丈を高めて軒下端と二階床間に丈の低い開口部を設けて、ここから採光すると同時に、外からこの開口部にハシゴを掛けて上り下りしたもので、屋根裏利用（二階造り）の初期的形態を示している。

トボーグチの右手ではウマヤを梁間中央部まで後退させ、約四尺五寸幅のサマを開きイトヒキバの空間をつくり出している。

当家は建立に関する記録や伝承等を残していない。しかし以上のような建築的特徴や建築の構造及び細部等の特徴から、およそ一九世紀中期頃の遺構と推定する。

深沢豊次家は豊次氏（七十六才）の祖父（大正八年七十八才没）が明治の中期頃、建立したものと伝える。外観は草葺総二階造りにしているが、二階を利用できるのは床上部分だけで、ダイドコロの部分は天井も張られていない。

明治中期になってもオクザシキの表側とオクザシキ・ナンド境に中柱を残しているのは注目されるところである。また、当家はウマヤを表側の外壁に接して設けており、ダイドコロにサマもないところから、明治中期頃の農家であっても、ダイドコロにイトヒキバやハタバを設けなかった農家もあった一例である。

松島和男家は昭和四十五年七十五才没の親が移築したと伝えるところから、十九世紀末期頃に再建されたものと推定される。ナンドは妻側と裏側の両方を開放し、薄暗い室というイメージを脱している。

ダイドコロではオカッテに接する裏側を開放し、ウマヤを裏側へ押しやって前面の幅二間をサマとし、下屋まで取り込んで内側をハタヤとしている。当家は移築当時屋根裏利用を考えていなかったが、その後ダイドコロ・床上部分とも根太天井を張って、屋根裏を利用できるよう改造している。

福田富三家は当主の祖父が明治二十年頃移したと伝え、土間は昭和十年頃妻側の三間をもぎ取ってしまったものという。デー・ジャシキの表側はもちろん、各室境では総べて中柱を省略し、差鴨居を使用し

ている。トボーグチでは左右の土間部分を下屋まで突き出しているため、引大戸にできないので釣大戸にしている。当初より二階造りとし、当初の二階では土間・床上境より上手へ三間の開口部をとり、赤城型の屋根形式として採光していた。しかし、今日では二階の開口部をもっと広くとっており、赤城型の外観を示していない。

瀬田良一郎家は火災にあい二年前八十一才没の人が腹にある時建ったものと伝えるところから、明治二十六年（一八九三）の建立ということになる。各室境では総べて差鴨居を使用し、デー・ナンド・ザスキ・チャノマに接する床上中央部の柱を長者柱とよび、ダイドコの表側片隅のイトヤではサマ鴨居の内側に糸ひき神様の幣束と並んで、赤・緑・白の紙でつくった機神様もまつられている。また、ダイドコの裏側中央の壁にはオカマ様（竈神様）をまつったシメナワが多数束になってまつられていた。

高草木昭夫家は明治二十八年（一八九五）に建立されたといわれる遺構で、ダイドコ上部の表側半分に根太天井を張って、二階を設けている。当家は表側だけでなく、裏側にもエンガワ（ウラエンとよぶ）を設け、ナンドの裏側も全部開放している。トボーグチは釣大戸とし、トボーグチの左右の表側をサマとしそれぞれの内側をイトヒキバとよんでいる。

鏑木多真喜家も高草木昭夫家と類似の平面を示すものである。二階の設けられている個所は、大黒柱より表側の部分でデー・ザスキ境から小黒柱までの部分であり、この部分には根太天井を張っている。外観は赤城型としトボーグチから上手へ三間の開口を設けて、二階へ採光している。

当家は調査時に留守であったため、建立に関する伝承等を聞くことができなかった。しかし、建築の特徴からみてそう古いものでなく、一九世紀末期頃の建立とみて穏当であろう。

高草木春吉家は明治三十四年生れの人が五、六才の時、古家を買って移築したものと伝え、棟はクレグシであったという。このことから当家の再建された明治四十年頃に至っても棟をクレグシで葺いていたことが明らかとなった。

当家の外観は前兜造りであり、大間々町内では後に述べる水島松次郎家と共にめずらしい例であった。

荻原一郎家は昭和二年（一九二七）に建立されたもので、建築費は二千円であったという。

切妻瓦葺総二階で表側は二階の面積を広く取るために出桁造りにしている。エンガワの上手突当りに内便所を設け、エンガワの下手には二階への階段を付けている。ダイドコの表側は総べてサマとし、妻側も開放的にしているため、ダイドコ内部は大変明るくなっている。また、ダイドコの表側隅部では低いサマを矩の手に廻して、内側をイトヒキバとよんでいる。小屋組は和小屋にしているが、二階も総べてサオブチ天井を張っているため、断面図を採取できなかった。

養蚕は主に二階で行ない、一回で約百二十貫もとれ、普通年に二回行なったという。当家では大黒柱に対応してダイドコ中央部にたつ柱をシリ（尻）大黒柱とよび、床上中央にたつ柱をチョージャ（長者）柱とよんでいる。

七、整形田字平面の民家

この形式の民家平面は表側と裏側の室の奥行を等しくとるため、床上の四室はほぼ同じ広さの室となる（図―8参照）。

不整形田字の民家平面はいずれも表側の室の奥行より、裏側の室の奥行を狭くとっているため、前後の室の大きさにアンバランスを生じている。このアンバランスを修正し、裏側の室を表側の室と同じ広さに発展させたものが整形田字平面の民家と考えられる。

この形式に属する民家は六棟を調査したが、どれも十九世紀中期以

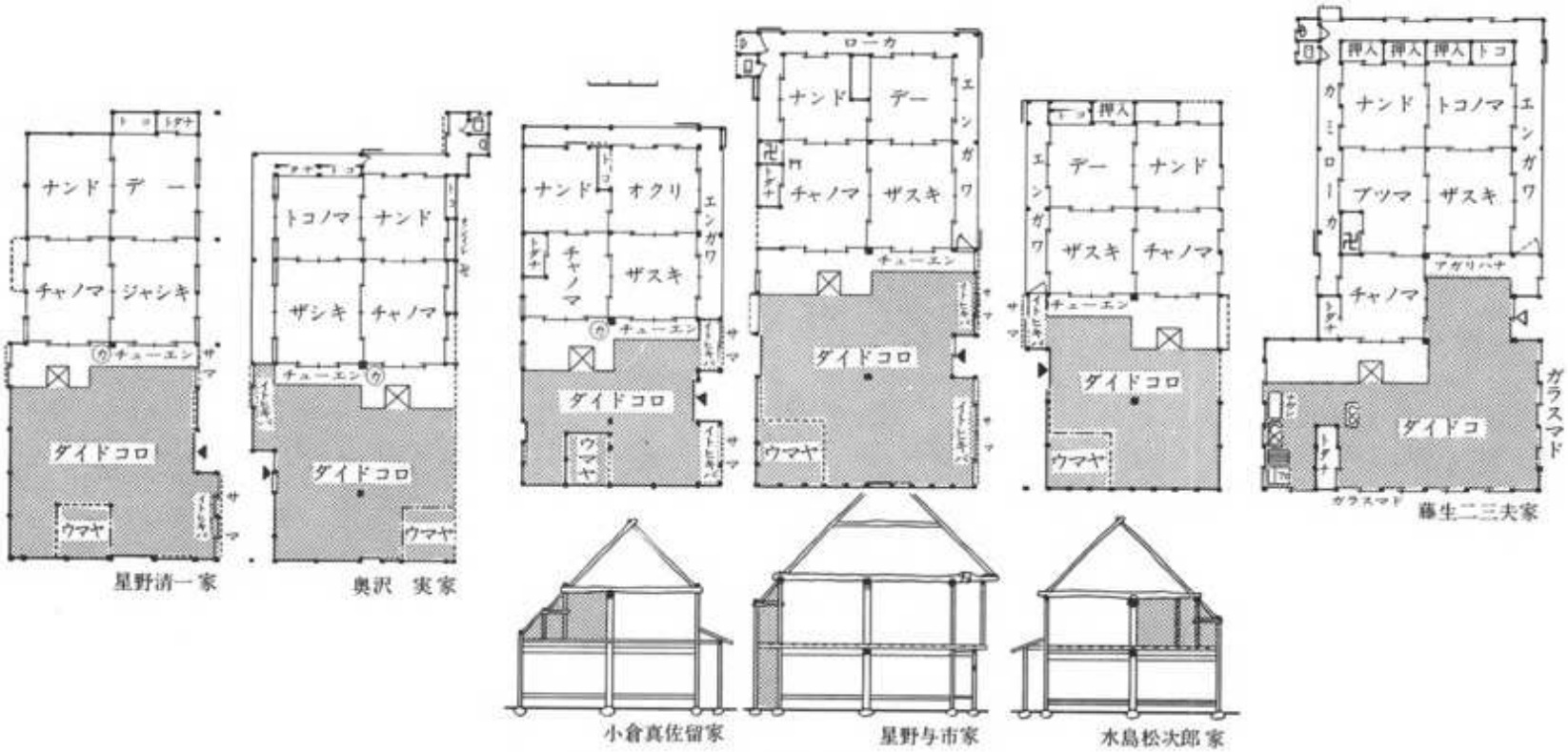


図8　整形田字平面の民家（平面・断面図）

降に建立されたと考えられる新しい遺構であった。

星野清一家は小屋組を改造し、現在瓦葺にしているが、これは昭和三十年頃におこなった改造によるもので、改造前はクズヤ（草葺家）であったという。当家の建立は昭和八年に八十六才で亡くなった先祖が十才の時建ったものと伝えるところから、安政四年（一八五七）頃の建立となる。そして、大工は東村の花輪にあるお寺を建った大工と同じ人であると伝えている。

梁間方向に架けられた梁の、イロリの上部に当るところに荒縄を四～五回まいているのが目に映ったので聞いてみると、これは泥棒よけのまじないだという。このように土間のイロリに近い太い梁に荒縄をまいた例は、宮城村や他地区で数例みたこともあるが、そのいわれを聞くことができたのは初めてであった。また、当家は母屋の西に棟の低い別棟のイトヤを有しており、ここでは二十年前頃まで、さかんに糸をひいたのだという（写真39参照）。

奥沢実家は当主（五十一才）の三代前に火災にあい。建て替えた遺構と伝えるところから、およそ一九世紀中期頃の建立と推定される。床上の表側をはじめ各室境では差鴨居を使用し、ナンドにまでトコを設け、ナンドの西に便所を付けている。

小倉真佐留家は草葺二階造りで、一九世紀末期頃の遺構と推定されるものである。棟はクレグシとし、調査で訪れた時黄色い山ユリが棟上できれいに咲いていた。前にも述べたように、当地方の草葺民家は当家のように、土を厚くつけた土手の芝を棟にのせて、頂部の雨もりを防いだものであった。しかし、今日残されている草葺民家の棟は、瓦あるいはトタンでおおわれ、昔の面影を伝えるクレグシを見ることができたのは当家が唯一の例であった。

星野与市家は草葺総二階出桁造りで、規模も大きい。ダイドコロの表側は総べてサマとし、その内側をイトヒキバとしている。当家は前の母屋が古くなったので明治三十三年（一九〇〇）に建て替えたものと伝えている。

水島松次郎家は大正三年（一九一四）に建立されたものと伝え、草葺前兜造りの外観を示している。柱間の内法は十二尺ぴったりとし、ナンド・チャノマの裏側も開放的につくられている。

藤生二三夫家は田字平面の間取のダイコにチャノマを突き出したもので、室数は五つになるが、平面の基本は整形田字なので、整形田字平面の民家に含めたわけである。当家はローカを三方にめぐらし、ダイドコの表側はサマでなく、腰高のガラスマドとしている。幕末に名主役を勤めた家と伝えるが、母屋は昭和十六年（一九四一）に建立されたものである。外観はトボーグチより上手を瓦葺出桁造りの二階とし、トボーグチより下手を平家にしている。母屋の南には道路に面して長屋門がたち、名主の家柄をしのばせている。

八、多間取平面の民家

四間取より室数の多い遺構を分類の都合上多間取平面の民家と仮称したわけであるが、調査遺構四十四棟のうちこの形式に相当するものは図―9に示す二棟であった。

小野里公男家は名主役を勤めた家柄で、ザスキ表に式台を設け、比較的古いわりに立派な造りをしているなど、各主の役柄が建築にも反映している。床上は上手一列と次の列を三室つづきとした六間取の平面を示し、デーに相当する室をジョウダン（上段）とよび、トコ・タナを付けている。

差鴨居の使用がみられず、各柱は一間間隔に建てられており、ジョウダンとナンド境の間仕切は半分を土壁で閉鎖し、ダイドコロでは採光用のサマも設けられていないなど古風に様式を示している。これは建立年代が古いことを示す証拠である。また、構造的にはサス組内に棟束をたて、二階の利用も考えられていないのも、平面の特徴と同様

に比較的古い造りを示す証拠であろう。

当家には明治三十四年の年号が記されている絵図面と、これよりかなり古いと思われる二種の絵図面が残されているが、残念ながら古い方の絵図面には年号がなく、また痕跡と比べると建立当初のものでもないらしい。

当家には名主役に関する古文書が、いくつか残されているが、母屋の建立に関する記録や伝承等は残されていない。そこで階層差を考慮した上で、建築の平面・構造・細部等の特徴から建立年代を推定すると、およそ一八世紀初期頃まで溯るものと思われる。そして比較的改造も少ないことから、名主役宅として貴重な遺構であろう。

金子正次家は小野里公男家と全く同様な間取を示すが、規模は一廻り小さい。切妻造り鉄板葺二階家であるが、当初は板葺であった。ナンドの裏に設けられている細長い室をオクナンドとよび、この室は主に出産と死者を安置した室であれという。チャノマの裏の細長い室はウエノオカッテといい、主にカッテ用品を収納する室であるという。

当家は昭和五十一年に九十二才で亡くなった人が二十才で嫁に来た時九十三才のおじいさんがいたが、そのおじいさんが三才の時火災にあい建替えたのが現在の母家であると伝えるところから、逆算すると文化十一年（一八一四）に建立された遺構ということになる。

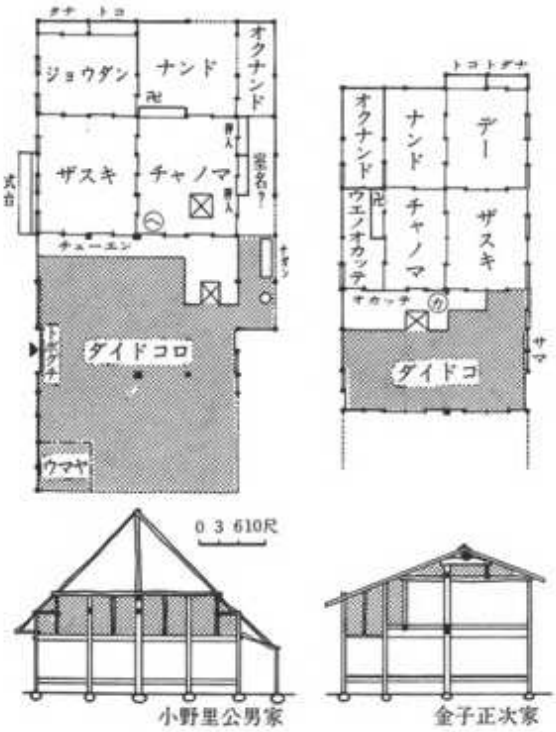


図9　多間取平面の民家（平面・断面図）

九、町　家

大間々町の街中には道路に面してたつ古風な瓦葺土蔵造りの家がいくつか残されている。いずれも店屋で表側開口部に格子戸を嵌め、重厚な瓦葺と厚い白壁が印象的である。

街中には住む古老の話によると、大間々の街は何度となく大火に見舞われているため江戸時代に入るような古い建物はないのだという。一番新しい大火は明治二十八年で、この時も相当広い範囲を灰にしてしまったと伝えている。

図―10に掲げた三棟も明治二十八年の大火後、すなわち明治二十九年に建てられたものといわれている家であり、これらが街中で古い建物の部類に入るのである。

須永善十郎家・野口信三郎家は相接してたつ遺構で、両家とも平面が屈折している。これは敷地がそのように曲っているために、敷地いっぱいに建てる町家は、家の恰好も敷地の通りの恰好になってしまうのだという。

町家とはふつう町人の住む家のことを指すが、大間々町のように街道筋の町人の町は、ふつう表通りに面して商家、奥まったところに職人の家を並べた。商家の家は通りに面した表を店とし、通常低い二階をもつ平入で、一方に片よって入口が設けられた。入口からは奥まで土

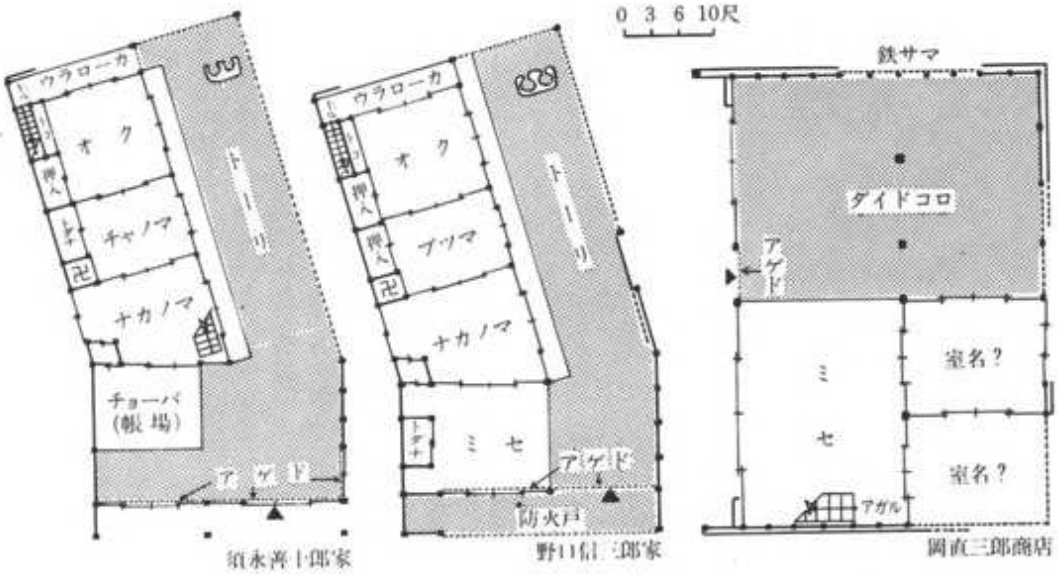


図10　町家（平面・断面図）

間が通じ、ここに井戸・かまど・ナガシなどが並べられていた。部屋の配置は一番表側をミセとし、ミセの奥は家族の集る居間的機能を持つナカノマとなり、奥へ行くほど私的性格の強い室が配される。須永善十郎家・野口信三郎家は以上のような町家の特徴をよく受け継いだ平面を示しており、たび重なる火災の対策として外壁を土蔵造とし、道路に面した表側開口部は防火戸の設備まで用意されている。

須永善十郎家は米屋であるため、母家の他に妻倉・文庫倉・中倉・ミソ倉・玄米倉等が奥深い敷地に現在でも所せましと並んでいる。そして店屋でありながら、両家とも二階では昭和初年頃まで養蚕をおこなったという。

岡直三郎商店も明治二十八年の大火後に建てられた土蔵造平入りの店家であるが、通り庭式のものでない。その平面は農家造りと類似し、桁行の半分を土間（ダイドコロとよぶ）とし、他を床上としてその表側半分をミセに当てている。岡直三郎商店は滋賀県の出身（近江商人）で天明七年二月の創業という古い酒造業者である。会社の組織は支配人制度をとり、支配人は単身赴任を原則としているため、店はそのための宿舎をも含んでいるのだという。恐らくミセの裏側隅の室が支配人室であり、雇人達は多勢で二階に宿泊していたようである。

十、主な柱のよび名について

民家には多く柱が使われておりいろいろなよび名が付けられている。しかし、今日では大黒柱は知っていても、それ以外の柱名を知る人は極めて少ない。そこで、ここでは主な柱のいくつかについて、そのよび名を紹介しておこう。

図―11において①の柱はミヤコ柱・チョージャ柱・ダイジン柱などとよばれていたが、当地方ではミヤコ柱・チョージャ柱などのよび名が混在しているようで、ダイジン柱とよぶ例は一例だけであった。

ミヤコ柱・チョージャ柱などのよび名の由来については不明であるが、ここで私見を加えてその由来について解説しておこう。図―11にみるとおり、①の柱は床上の中心的位置に据えられている。上流社会における生活の中心は都（ミヤコ）であり、庶民のあこがれの地でもある。このようなところから、床上の中心→社会の中心→都→ミヤコ→ミヤコ柱（床上中心の柱）というふうに変化して名付けられた名称ではないであろうかと推察する。

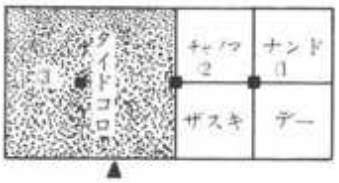


図11　柱の名称

また、チョージャは「長者」のことを指すものと思われ、「都」と「長者」は庶民の感じるイメージに何か共通なものを与えるのではないだろうか。

図―11における②の柱は、ダイコク柱とよばれ、これ以外のよび名を聞くことはなかった。ダイコクは大黒と書き、三宝を愛し五衆をまもり飲食を満たす神である「大黒天」から来たものと考えられ、①の床上の中心柱と違って②の大黒柱は家の中心に据えられる柱のことをいう。そしてここから転じて世間で俗に「大黒柱」という時は、一家あるいは団体の中心となる人物を指すような言葉にまでその意味が発展したものと推察される。

③の柱は大黒柱に対応して土間の中程にたつ柱で、ショーコク柱・シリダイコク柱・フクダイコク柱等の名称でよばれていたが、ショーコク柱とよばれている例が普遍的であった。ショーコクとは〝小黒〟と書くものと思われ、大黒に対比して用いられるようになった名称と考えられる。

この他にカマ柱とよばれる柱もあった。例えば図―5の福田勘助家のように、ダイドコロの裏側にたつ上屋柱のうち、イロリに近い柱をカマ柱とよび、カマ柱には幣束をゆわえてカマ神様をまつっていた。即ち、カマ柱とは「竈柱」とかき、かまど神をまつった柱を指すものと考えられる。

十一、イトヒキバ及びハタバ

幕末に建築されたと思われる遺構の大多数は土間の表側に低い格子窓（サマとよぶ）を設け、サマの内側をイトヒキバ・イトヤ・ハタヤ・ハタバなどとよんでいる。以上の四つのよび名のうち最も多く聞かれたよび名は、イトヒキバでそこは主に糸ひきがおこなわれた場所で、そのための採光窓としてサマが設けられたものだと伝えられている。

大間々町内の農家にみられるサマは写真1のように低い位置に開口している。これはザグリで糸をひく高さにサマ台を合わせたもので、イトキバとして合理的な採光方法であろう。このような低いサマは県内他地域ではみられないもので、大間々町地域に限ってみられるイトヒキバ用の特有なサマとみてよいであろう。

このようなサマはいつ頃から農家のダイドコロ表に設けられるようになるのか。調査遺構から検討してみよう。

調査遺構の中で土間表にサマを設けている最も古い例は深沢順磨家で、建立年代は一九世紀初期頃のものである。当家はウマヤを土間の裏側隅部に設け、土間表の隅部をハタヤとよんで、表側に低いサマを設けている。このように土間表にサマを開け、イトヒキバあるいはハタヤを設けている例は一九世紀初期のもの一例、一九世紀中期のもの六例、一九世紀末期のもの七例、二十世紀初期のもの四例の計十八例であった。以上のことから当地方に於て、糸引あるいは機織が農家の副業としておこなわれはじまる時期が、一九世紀初期頃で、一九世紀中期から末期にかけて最も盛んに行なわれたことが建築遺構を通して窺い知ることができる。また、このことは農家経営の中に占める養蚕の拡大

とも深く関連しており、養蚕空間の確保から出現した二階造母屋の出現時期とその後の発展期ともほぼ一致するようである。

有形民俗資料

はじめに

編集分担項目は有形民俗資料となっているが、実際には、共通の聞きとり調査を担当しているために、各分野への報告はかなりの量を出しても、有形民俗資料のカードの受取りは極端に少なく、今回は編集するだけの分量もないので、再調査もできないまま、カードを並べることにした。この種調査の弱点をさらしてしまったことになるが、次回調査においては十分注意したいものである。（阪本英一）

写真1 星野与市家のサマ、この内側をイトヒキバという。

桑ブルイ

養蚕の稚蚕期には、桑の葉をこまかく刻んで給桑するが、そのとき桑ブルイの中に入れて蚕座の上でゆすって平均されるようにする。掃立時はもっとも目がこまかく、日数が経つとやや粗くなるように三段階くらいの桑ブルイがある。ここに示したのは粗いものである。

ヌカブルイ

稚蚕期飼育では、蚕座を乾燥させて蚕を病気にかからせないようにするために、モミガラを焼いてつくったヤキヌカをふりかけることをすることがある。ヌカブルイはヤキヌカを入れてふるいかける道具である。

コノメ

養蚕は、母屋の二階などの蚕室でする例が多い。蚕室には、コノメといわれる棚や養蚕カゴを入れて、棚飼いで行なうことが平均的であった。継に十枚のカゴが入れられる棚が基本で、二列ならば二十棚、三列ならば三十棚といわれる。県西部ではコワクという。

養蚕火鉢

春蚕に火力を使用して飼育するのが普及するようになるのはひかく的新しいことで、手軽に火を使う道具として養蚕火鉢が出現する。写真の資料は、火鉢の縁が割れたために、竹のたがをかけて補強したものである。火鉢は太田市南の小泉焼きである。

モジアミ

蚕室にコノメをかいて、養蚕カゴの中で飼うカゴ飼いでは、たちまちたまってくる蚕糞蚕沙をとる除沙作業（ウラトリ）に、糸網を使って蚕をなくさないようにした。稚蚕期はこまかい糸のモジアミで、壮蚕期になると、縄でつくったモジアミ（ワラミ）を使用する。最近ではビニール製のものが主力になっている。

養蚕木鉢

蚕の上簇時に、熟蚕を一匹ずつ拾いこんで入れる容器として戦前ま

でさかんに使われたもの、県内では、利根郡下と、吾妻郡六合村で生産されたのが有名だが、写真の資料は、利根系の彫り方である。菊花状の彫りあとが美しい。もう一つはコネバチ状の彫り方をしている。

マブシ折り器

ワラ製のマブシを多用する地域では、昭和初年からシマダマブシを折るマブシ折り器が普及しはじめ、手で折ってつくるマブシにかわって「ガチャンガチャン」と能率的に折れるので好評だったが、シマダは一回限りで捨てるのでその筋から改良マブシ（トウカイマブシもその一つ）が指導され、そのためのマブシ折り器（B）が導入された。トウカイマブシは何回も使えるようになった。

スブザル

隣接の利根村で生産されるもので、桑を入れても、穀類を入れても、食器入れにしても丈夫で、使いよい万能のザルで、現在も多用される。

マユカケザル　竹製の浅いザルで、給桑にも使う家があるが、マユカキをするときや、マユを入れて目方をはかる容器として使うことが多い。

背負子

ショイコ、ショイダイとこつの呼称があるようであるが、背中があたるところの下のところにあるコより下がかなり長いことが注目される。荷をつけて背負い出すときや、休息するとき楽なようなくふうであろう。

セエブク

背負に袋ということからの呼称かどうかは不明であるが、他の地区でビクとか、ショイヅカリとよんでいる草で編んだナップザックである。土地の人も編むというが、利根の方の人に編んでもらうことが多い。

テカイ

背中に背負ったり肩にかけるのでなく、腰に下げることが注目される。またメカイでなくテカイとよぶところもおもしろい。

セエカゴ

背負い籠が二つ示されたが、大形のものは草刈りや、落葉を背負う籠、やや小さ目のもの（人の背負っているもの）は、弁当や肥料作物などを背負うものとして必要品であった。

イモカキグルマ

イモはカゲノタワラといわれ、食生活の相当の物分を占めていたが、食べるためにはよく洗う必要があり、そのために川（用水など）に一種の水車をかけ、その中に入れたイモが自動的に洗えるくふうをした。写真は、イモカキグルマの軸を外して立てたものである。

木　鉢

雑穀を粉として食べる時、こね鉢として使用する木鉢は必需品であり、ウドン・ヤキモチ・マンジュウなどはこの中でこねられ、形をつけられて加工された。餅をついたときもこの中へ入れて処理することもあった。

マルショウギ

スズ竹でつくられたマルショウギは、水きりが早く、汚れないので食器かごとしてさかんに使用されてきた。

ユトウ

人寄せをして食事を提供するときに、汁を注いで歩いたり、湯を注いでまわる道具。かってはウドンブルマイは祝儀の席に欠かせないことで、ユトウの中にオスマシを入れて使用するので、村の旧家には数多く用意されていた。

オシラキ

神仏へ食物を供えるための器、トチの木やその他の木を板にし、ざっと削った上にもようを彫りこんで、盆前とか、歳暮に売りに来た（市で求めることもある）。これに供えものを盛って供え、祭りが終ると捨

た。

桶ズルス

没落した旧家の土蔵の片すみに放置されていたもので、下の方の竹のたがは崩れて落ちてしまっていたが、かつては、モミスリの道具としてさかんに活やくしたことがある。桶のようにつくられている。

麦ぶるい

穀類の選別道具。曲げ物の丸枠に金網を用いた節が出現する前にさかんに使ったもの。

俵編み器

穀類を保管、運搬したりする容器としての俵は、農家の人たちが冬の農閑期に自家用分くらいは編んでおいたもの。脚はうまくみつけた二又の木を二つに挽き割って、これに角材を利用して縄をかけるものをつくっている。編みながら落ちないように縄がはさみこめるようにくふうしてあることも特色。これで炭俵も編んだ。

モロコシボウキ

トウモロコシではない穂モロコシ（コウリャン？）のからを利用して、自家用のホウキとして作ったもの。茎を長く利用して柄とした。一種の草ボウキである。

ハナカキナタ

小正月のときにつくるハナ（ケズリバナ）を作るための専用の刃物。刃の先端についているカギのところがハナをつくる大切なところで、手をのばして向うの方から手前へ引いてハナギをけずってハナを作る。最近は作る人が少なくなった。

大　鎌

山の下刈り等に使用する大形の鎌で、一メートル以上の長い柄をつけ、夏山の下刈りに振ったりする鎌。普及したのは戦後ということである。

写真にはワラジも一緒に写っているが、大きさから見ると馬のワラジとしては少し小さい感じがする。踏鉄をつけなかった時代には欠かせないものであった。

タカツナ

竹を細く加工してつくった縄。竹を細く割ってもなうことはできないので湯で煮てからなうというが、萱ぶき屋根のなわとしては最高のもの。かつては荒物屋でも売っていたが、現在は見られない。

商家の家具

大ぜいの奉公人を使用していた商家では、奉公人用の引出しをたくさんつけた家具をつくり、めいめいの名札をつけて使わせた。また部屋を活用して使うために、階段も「階段」として作らず、家具として引き出しのついた階段ダンスのようなものを利用した家が多い。一般の民家でもやる家があったが例は少ないようである。

日掛貯金箱

納税用の貯金として、地元の金融機関と特約して日掛け貯金をした時の貯金箱、一戸毎に金額を記し、穴があって、そこへ現金を入れて隣りへまわすしくみだった。

写真５　金子元治家（２間取）

写真２　正田猛家旧母屋（１間取）

写真５　高瀬好夫家（広間型）

写真２　正田猛所有の移築建物（２間取）

写真６　須永武男家（広間型）

写真３　旧石原岩三家（１間取）

写真７　関口宗佑家（広間型）（大正２年にダイドコロ部分を改造し２階とする。）

写真４　久保田吉松家（２間取）

写真 11　小池孝太郎家の大黒柱
大黒柱には逃げがない（室境の芯に柱芯を合わせている）ため、他の柱より太い大黒柱は敷居の内面より室内へはみ出してしまう。このような室へ畳を入れる場合は、当家のように畳を凹字形に欠くか、大黒柱の畳の当る部分を切り欠くかしなければならない。このような大黒柱の据え方は古い遺構によくみられる特徴である。

写真 8　穴原和郎家（広間型）

写真 9　穴原和郎家
中古にダイドコロの妻側寄りの土間を幅約2間深さ約3尺位掘り下げ、ここでイザリバタを織ったこうすると適度に湿気が保てて織り易くなるのだというこの写真は掘り下げられた部分の土間をみたところ。

写真 12　星野幸作家（広間型）

写真 13　小野雅造家（広間型）

写真 10　小池孝太郎家（広間型）
20年位前にクズヤネをセメント瓦に改造したもの

写真 17　金子定夫家の大黒柱
写真 11 の大黒柱と違って柱芯をダイドコロ側に寄せて大黒柱の内面と敷居の内面を合わせている。このような大黒柱の据え方は新遺構にみられるもので、大黒柱に逃げがあるという。こうすることによって大黒柱のところで畳を欠かなくても済むようになる。

写真 14　高瀬恭平家（広間型）

写真 15　高瀬恭平家のイロリ
最近ではイロリを残している家が少ない。

写真 18　高瀬友平家（広間型）

写真 16　金子定夫家（広間型）

写真 19　小倉元男家（喰違 4 間取）

写真24　深沢順磨家（不整形田字平面）

写真　小倉玉吉家（喰違4間取）

写真25　星野邦次家（不整形田字平面）

写真21　福田勘助家（喰違4間取）
クズヤネを大正4年、瓦葺に改める。

写真26　鹿沼利夫家（不整形田字平面）

写真22　高草木増次家（喰違4間取）

写真27　関口三郎司家（不整形田字平面）

写真23　小池政之助家（不整形田字平面）

写真31　松島和男家（不整形田字平面）

写真28　関口三郎司家
トボーグチより土間正面をみる。正面の屋根と桁の接する部分にシメナワがいっぱい下っているが、これは竜神様をまつったもの

写真32　福田富三家（不整形田字平面）

写真29　赤石康家（不整形田字平面）

写真33　漸田良一郎家（不整形田字平面）

写真30　深沢豊次家（不整形田字平面）

写真34　高草木昭夫家（不整形田字平面）

写真39　星野清一家にみられた別棟のイトヤ（手前の低い瓦葺建物）

写真35　鏑木多真喜家（不整形田字平面）

写真40　奥沢実家（整形田字平面）

写真36　高草木春吉家（不整形田字平面）この地方ではめずらしい前兜造である。

写真41　小倉真佐留家（整形田字平面）

写真37　荻原一郎家（不整形田字平面）

写真38　星野清一家（整形田字平面）
昭和30年頃クズヤネを瓦屋根に改造する

写真 45　藤生二三夫家（整形田字平面）

写真 42　小倉真佐留家の大黒柱
約沢角で四面にカンナがかけられ逃げもある。

写真 46　藤生二三夫家の長屋門
当家は幕末に名主役を勤めた家で、この長屋にはそれを裏付ける生きた資料である。

写真 43　星野与市家（整形田字平面）

写真 47　小野里公男家（多間取）
名主役を勤めた古い家柄である。

写真 44　水島松次郎家（整形田字平面）
この地方ではめずらし前兜である。

写真　51　野口信三郎家（町家）

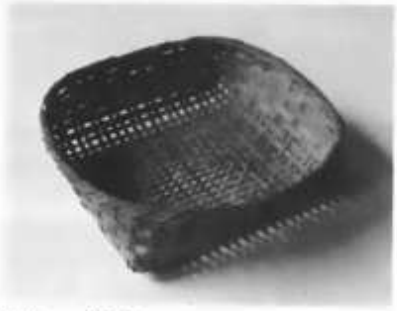
写真 48　小野里公男家の式台

写真 52　岡道三郎商店（町家）

写真 49　金子正次家（多間取）

写真 53　奥付酒造店（町家）
当家は外部の写真撮影だけで、内部の調査は行なっていない。

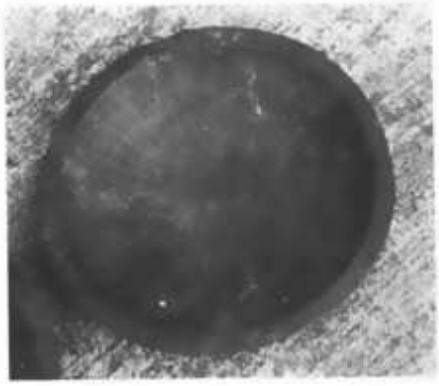
写真 50　須永善十郎家（町家）



ヌカブルイ（小平）（阪本英一　撮影）

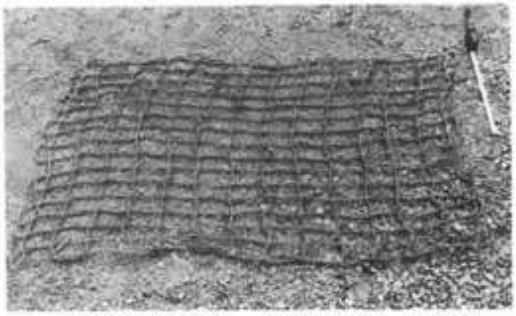
養蚕火鉢（小平）
（阪本英一　撮影）

コノメ（狸原）　（板橋春夫　撮影）



モジアミ（小平）　（阪本英一　撮影）

養蚕木鉢（小平）の裏と表
（阪本英一　撮影）



ワラミ（狸原）　（板橋春夫）　撮影）

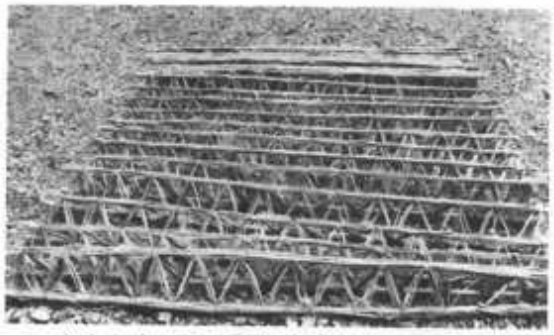
マブシ折り器B　　狸原）
（板橋春夫　撮影）

オコアゲの時に使うキバチ
（狸原）（板橋春夫　撮影）

スズザル（小平）
（阪本英一　撮影）

マブシ折り器A　（狸原）
（板橋春夫　撮影）

ショイバシゴ（上神梅）
（板橋春夫　撮影）



トウカイマブシ（狸原）（板橋春夫　撮影）

ショイバシゴ（上神梅）
（板橋春夫　撮影）

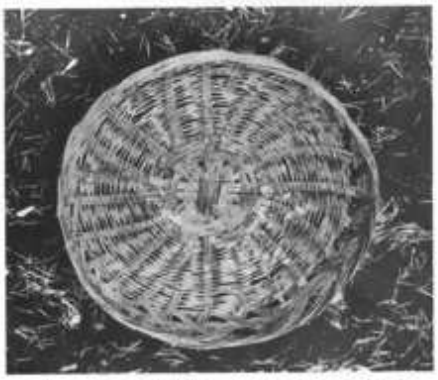
マユカケザル（狸原）
（枝橋春夫　撮影）

テカイとその使用法（狸原）
（板橋春夫　撮影）

セエブク（狸原）
（板橋春夫　撮影）

セエカゴ（狸原）
（板橋春夫　撮影）

セエカゴ（狸原）
（板橋春夫　撮影）

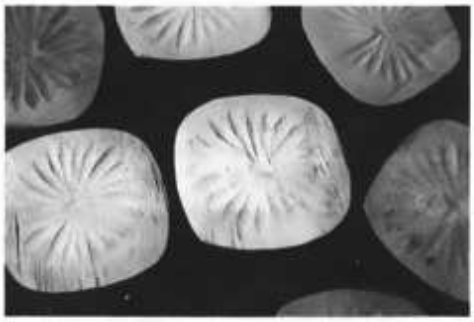


洗いザル（神梅）（関口正巳　撮影）

キバチ（狸原）
（板橋春夫　撮影）

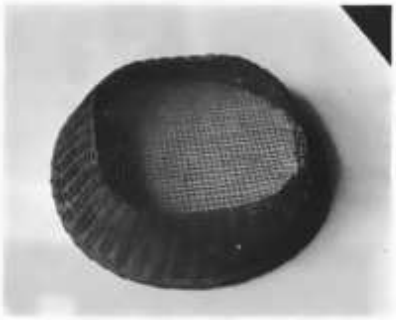
ユトウ（小平）
（阪本英一　撮影）

イモ洗い車（上神梅）
（関口正巳　撮影）



オシラキ（小平）　（阪本英一　撮影）

木ズルス（小平）
（阪本英一　撮影）



フルイ（小平）（阪本英一　撮影）

タワラアミキ（小平）
（板橋春夫　撮影）

フルイ（小平）（阪本英一　撮影）

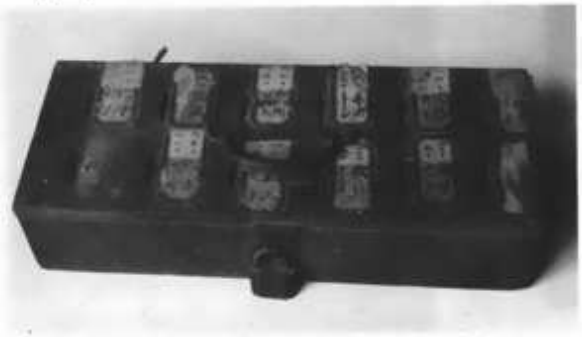
ハナカキナタ（狸原）
（板橋春夫　撮影）

モロコシボウキ（狸原）
（板橋春夫　撮影）

タカヅナ（竹綱）―（小平）
（阪本英一　撮影）

ウマのワラジと大鎌（浅原）
（板橋春夫　撮影）

奉公人が使った引出し。（岡直三郎商店）（八間々）
（板橋春夫　撮影）



日掛貯金箱（小平）　（阪本英一　撮影）

引出しのついた階段（大間々）
（板橋春夫　撮影）

——神 ……6,32,35
ヤタ……49
八ツ飯……28
ヤツデ ……32,80
柳のまな板 ……185
屋根 ……38,81
——替え……39
——ふき……38
——ムクリ……95
——屋……39,113
矢畑 ……229
ヤブ入り……61
山犬様 ……234
山入り ……184
ヤマガンビョウ……20
山グワの木 ……189
—の神様 ……185,187,223
—の開き ……199
やんめ……87

ゆ　行

ユイ……95,112
結納 ……141,155
——おさめ ……155
——金 ……141
ユイツギ ……100
夕食……27
湯灌 ……142,167
遊芸人……74
雪の日 ……237
ゆず……86
——湯……86
輸送……69
ユトウ ……270
指遊び ……246
夢……78
—封じ……78

よ　行

夜遊び ……106,141,151
良い夢……78
養蚕……41,43,51
夜えびす ……192
夜カゴ ……269
夜木鉢 ……269
夜火鉢 ……269
ヨキ……60
よそいぎ ……5,7
ヨソ村との交際 ……113
予兆……76
ヨッコ……95
四ツ身……11
四ツ飯……6,28
夜泣き……86
ヨナノカ ……174
夜ナベ ……61,63
夜這い ……117,152
ヨビモドシ ……164
ヨムシ……85
ヨメゴ……85
——のお茶 ……141,160 161,162
——のつとめ ……114
ヨメ三年婿八年 ……142
嫁入り支度……12
——衣裳 ……153
——道具……12
——前 ……152
嫁取り ……152
嫁の着物 ……7
—の権利 ……153
—の里帰り ……162
—の正月 ……191
—の生活 ……152
—のつとめ ……152
—の年季 ……153
—のみやげ ……161
嫁迎え ……157
嫁婿の村まわり ……162
ヨリアイ ……100
ヨロク ……73,95,116
ヨロケ病……2,68
四十九杯 ……173

ら　行

ライサマ……77,124
雷電木……82
—よけ……82

り　行

リガク……65
利尿済……89
りゅうばしら……37
料理番 ……161
リンゴ箱……66

る　行

留守居仏 ……209
るすんぎょう……25

れ　行

恋愛 ……153
恋愛結婚 ……153
——の仲人 ……153
蓮生坊……25

ろ　行

老人クラブ ……117
六月の忌日 ……199
六合神社 ……120
六算様……88
六算除け……88
——の唱えごと……84
六部……74
炉ばた……36
—ぶち……36

わ　行

若衆ギンザ ……161
——組 ……140
若水 ……179
—餅 ……190
ワジメ(輪飾) ……222
ワセタンバ栗……65
綿帽子 ……157
わたまし……38
渡瀬川 ……1
藁市……70
わらい話 ……231
わらじ……10
——づくり……64
ワラデッポー ……219
わら人形 ……175
ワラビ……20
ワリダシ……96,186
ワリムスビ……20
悪い夢……78
綿入れ ……8

ゆ　行

湯灌 ……167
ユキノシタ……20
湯沐 ……187

よ　行

ヨメゴのお茶 ……161,162
嫁のみやげ ……161
嫁婿の村まわり ……162

御鉾の三東雨……76
ミカンの皮……89
右ずまい……32
ミクンチ……217
ミコシ……126
水泳ぎ……150
水ごり……200
ミズナ……20
水ブサ……185
ミズブサの木……36
水を大事にした話……105
味噌……25,32,66
ミソカソバ……225
ミソカッパライ……225
みそずけ……18
ミソッチル……17
ミソと小判……229
ミソハギ……206,207
道刈り……101,204
道普請……102
水車……30
三ツ絞……6
三ツ身……11
三ツ峯講……109
ミツメ……162
ミツモリ……29
ミナガワ……54
ミナノカ……174
峯八軒……96
ミノカサ……122
ミヤコ柱……266
耳がかゆい……77
—だれ……87,88
—の異物……90
—ぶさげ……83,143,175
ミョウガ……20,44
————餅……6
————タケ……19,20
————バカ……19
妙見さま……148
————の腰掛石……228
苗字分布……114
民間療法……86
民俗知識……75

む 行

六日ドロ……185
無縁物……208
迎えイチゲン……157
迎えダンス……157
迎え火……203
迎え盆……176
ムカデ……63,66,87,90,123
麦刈り……47
—夕……49
—作り……41
—の諺……47
—の品種……46
—ふみ……47
—ぶるい……271
—まき……46
—まきを忌む日……47
—めし……16
—わら帽子……10
ムグラ鉄砲……220
ムコ……152
ムジナ……85
————の嫁入り……233
————の話……233
虫歯……88
虫封じ……86
ムシロ編み……57
息子たちと戦争……117
結び方……10
娘かぶり……15
棟木……38
ムナノカ……174
村仕事……101
—尽くし……248
—に来た芸能……113,117
—に来る商人……113
—に来る職人……113
—の開発……94
—の組織……94,98
—の費用……100
—の役……99
—の連絡……100
—八分……30
—まわり仁義……141

め 行

銘仙……9
めかい……163
目かご……87,88
めくら暦……91
メッツケガミサン……142,164
目のゴミ……87
メハジキ……142,171
メハジヤ……171
メマシ……164
メリンス……9
メンス……146
めんどり……77
メンドリ畑……229
メンパ……27

も 行

モーカ木綿……12
モウソウ竹……20
モグラ退治……220
————ップサギ……22,48,219
モジアミ……269
餅……23
—家例……184
—ぐさ……199
—つき……223
—を供える神……225
—をつく日……23
—モロコシ……44
モッケ病……88
モトバタヤ……55
モノヅクリ……187
喪服……7,173
モヨッケ水道……30
もらい湯……39
もりっこおび……10
モリワタシ……25
モロコシボウキ……271
————モチ……23
もんつき……5,7
モンペ……9

や 行

夜学……151
ヤキカガシ(ヤカガシ)……193
ヤキモチ(焼き餅)…21,22,202
ヤギリ(焼き穂)……47
厄落し……151
薬草……88,90
厄年……150
——子……149
厄除け……150
火傷……88,89
屋号……68
厄病除け……32
焼ケ十二……25
八坂神社……126
八坂祭……125
屋敷稲荷…35,119,130,141,151
——内の木……34

ふだん着 ……5,6,8,9
フツームスビ……10
二日め ……162
ブッツケナノカ ……143,173
舟場……69
フナ餅……23
フナマイダマ……17,24,53
フナヤスミ ……24,51
あぶぎ……11
二間取の民家 ……253
冬の仕事……63
フレヲマワス ……100
フルシキ ……118
風呂組 ……104
——に入る順……39,117
——の位置……39

へ 行

幣束 ……158
兵隊検査 ……6,150
ヘソクリ……95,116
ヘソの緒……86,144
ベタ ……133
ベタ ……247
ヘッツイ ……131
別当職 ……133
ヘビ ……66,85
——の抜け殻……86
勉強道具 ……118
便所……32
——の神様 ……132
弁天講 ……109,112
——待 ……112
弁当箱……27

ほ 行

ボウウチ……47
箒 ……113
—神様 ……140,143
奉公人 ……56,61
———の苦労……57
———の休み ……225
ほうそう神送り……83,140
ホウヅキ ……176,206
ホウヅキの根 ……148
ホウバイ仕事……95,112
————ヅキアイ……95,112
坊主結び……10
ほおざし……32
ホカイ……38,141,155,175
ホカケ ……31,50,141
ボク迎え ……187
補習学校 ……151
ボタモチ……21,206,207
ホトトギスの兄弟 ……230
————のはなし ……230
ほどやき……22
————を作る日……24
ホマチ ……73,95,170
ボラ……44
ボロカクシ……39
盆 ……203
—市 ……205
—送りの食習 ……214
—打ち ……203
—踊り ……215,248
—買いもん ……205
—ガラ ……216
—ゴザ ……205
—棚 ……176,206
—中の産死 ……175
—中の不幸 ……216
—中の墓参 ……203
—提灯 ……203
—月 ……203
—の供物 ……203
—の中日 ……212
—のぼたもち……24
—の埋葬 ……203
—の用意 ……204
—花 ……203,205
—迎え ……203,209
本善 ……108
ボンゼン……83
本裁……11
ボンデン ……125,143
ホンビ ……162
ホンフラン ……9

ま 行

マイダマ……24
マイ葬 ……171
前掛 ……9
まえすべり……10
マカナイ方 ……161
まき銭 ……171
枕返し……78
—団子 ……167
—直し ……166
—飯 ……166
マクリ ……148
孫だき ……146
呪い(まじない)……82
マス……18
まぜごはん……17
間違い地蔵 ……135
町の組織……99
町家 ……265
町割り……96
マツカン……59
松を立てない家 ……225
間取り……35
間引 ……145
まぶし……53
マブシ折り器 ……270
マミ除け ……171
マムシ……91
マムシ酒……89
豆まき ……194
マユカケザル ……270
まゆかき ……191
マユダマ……53,188
————の販売……55
マユ玉をゆでた水 ……189
魔除け……32
まるおび……10
マルショウギ ……270
マルブキ……38
アルマゲ ……157
まるめ年越し ……189
まわし ……116
まわし屑……70
マワタ……14
マンガアライ……50
マングワ……49
満光院 ……125,137
万才 ……248
まんじゅう ……21,23
マンダルク……82
マンドウロク……82
アンドモウセ……51
マンリョウ……80

み 行

ミ ……163
見合 ……153
ミウト ……161
ミオクリ ……171
ミガキコ……66
ミカゲ石……69

八十八夜の祝い……150
――――の別れ霜……199
八幡神社例祭……198
八寸ば……10
初市……186
初うぶ毛……86
初絵売り……193
初午……192
ハッカとギョウザ……80
二十日正月……192
ハツカリメン……15
八朔……31,163,216
初正月……148
八将神……138
初節句……148
ハッタリ……16
初誕生……148
ハッツキトウバ……143
八丁ジメ……200
初穂……48
初詣……180
初夢……78,180
ハナガキ……187
ハナカキナタ……187,271
鼻血……91
ハナドリ……64
花祭り……80,198
花むすびぞうり……10,61
花嫁衣裳……8
花輪……68
ハネタキ……113
はねをつける……155
バヒフ……88
馬糞……88
破魔弓……148
腹帯……143
腹下し……89
原の井戸……103
原の風……77
はらみ箸……24,81,187,188,190
ハラミ女……143
バラマキ……47
張板……12
針供養……13,196
針箱……12
春ゴ……51
春駒……114
ハルタ……46
榛名の三東雨……76,77
――の雷……76
春彼岸……198
ハンゲ……50,199
――坊主……50
ハンタクオビ……8
バンダイ餅……6,23,25,124,187
班長……98
ハンテン……8
半縄半日……13
馬場平……132

ひ 行

ヒイラギ……32,195
ヒエ……17
ヒエメエダマ……44
火があがる……193
日掛貯金箱……271
ヒカリモノ……234
彼岸ダンゴ……198
――のボタ餅……24
ひきわり……15,16
日暮の明星……84
備荒食……30
日乞い……83
ヒザムスビ……10
ヒシ餅……23
ヒショマイ……53
左膳……33
左ずまい……32
ヒツコクリ……10
ヒツジサル……34
ヒツバライ……10
ひとえもん……8
ヒトカタケ……16
ヒトケックリ……46
一ツ身……11
ヒトダマ……115,237
ヒトナノカ……173,174
――――の飾りつけ……171
一間取の民家……255
ヒト寄せの時……113
人寄せのときの料理……29
一人一日の仕事量……109
雛市……3,197
ヒナタヘビ……66
ヒナ祭り……197
ヒノキ笠……10
火に立つ……196
火の番組合……102
火吹竹……150
火伏せ……166
――の神……123
皮ふ病……90
広間型の民家……253
ヒメコ……51
ヒモカワ……21
ヒヤス……151
ひやめしぞうり……10
百観音……134
百度参り……164
百八燈……139,216
ひょう……77
評議会……100
――員……94,100
病気は気から……91
火よけ……39
ひよっとこかぶり……14
ヒヨトリ……54
ひより下駄……10
肥料……41,44
ヒル……85
ひるばてえ……21
ヒルメシ……27
拾い子……149
ビワ……80
びんかき……9
びんだし……9
びんつけ油……9

ふ 行

フエルト……10
深沢の組立式舞台……242
――の大火事……102
――人形……242
ふかしまんじゅう……162
フキ……20,80
ふきごもり……39
福岡村……1
武家屋敷……96
福区長……98,99
複合家族……117
福茶……88,194
腹痛……88
福豆……195
フジマワシ……246
扶持持ち……164
藤森稲荷……130
不整形田字平面の民家……258
フダイ……115
フタケ……49
フタナノカ……174

——からのお歳暮 ……154
——とのつき合い ……154
——のお礼 ……154
——のぞうりきらし …141,154
——のナナデンボウ …141,154
ナシ……80
梨木温泉……70
ナスウマ ……206
謎 ……237
名付け ……147
———親 ……147
ナツタ……49
七色ギモン ……149
七草ガユ ……185
七つ坊主……86
七つ星……84
ナナ晩焼き ……203
七夜着……11
七日ザラシ……14,175
浪波節語り ……113
ナミノハナ……79
菜めし……17
ナレアイ ……153
ナワシロ……49
なわない ……109
ナンテンの箸……87
———の葉……89
ナンド……36,144
———の神様 ……132
———の掃除 ……193

に 行

握り飯……25
ニコニコの伴天 ……9
二・七の市……72
二十三年忌 ……174
二十三夜様 ……112
———マチ ……109
ニシン……19
日光裏街道……68
二の市……66
荷馬車……70
二番草……49
ニボウトウ……21
ニホンゴメ……19
入棺 ……168
乳歯……86,148
庭……32
ニワオキ……51
ニワトコ……90,187
人形芝居 ……242
妊娠 ……143
——しての注意 ……143
——中の夢……78
——中の禁忌 ……145
——と馬の手綱……79
——とほうき……79
——と便所……79
——と禁忌……78
人足仕事 ……102

ぬ 行

ヌカブルイ ……269
ヌルデ ……187

ね 行

ネーロ……66
ネギの北枕……82
猫供養 ……137
—地蔵 ……137
—のさか毛……77
—のはなし ……230
ネズップサゲ……48
ネズミ除け……85
ネバ土掘り……66
ネブツ……88
寝まき……9,12
年始回り ……181
念仏 ……173
——石 ……228
——玉 ……142,173
——団子 ……142

の 行

納棺 ……142
農耕……41
農耕の禁忌……81
農事暦……91
農村歌舞伎舞台 ……238
農休み……23,163,202
ノガエリ ……171
ノシ買い……55
ノシ取り……73
ノゾツコミ酒 ……161
ノッペラボー……85
ノデンボー……24,185,188
のどのとげ……87
野辺 ……171
ノボリコミ ……159
ノボリ身上 ……114
飲み込んだ異物……90
ノラクラ……64
ノラボウ坂……98
ノリデマ……95

は 行

歯……86
ばあさんかぶり……14
羽織 ……7
墓掃除 ……204
—直し ……142,172
墓場 ……173
——の団子……87
袴 ……7
馬鹿むすこの話 ……230
秤……60
掃立て祝い……54
はきもの……10
履物の俗信……11
バクチ ……134
馬喰う ……42,65
ハコベ……88
ハサミバコ ……157
破傷風……87
柱……36
機織り……5,13,43,55
——唄 ……248
——の暖房……57
機神様 ……2,5,13,119 126,138,203
ハタケ……46
畑入り ……193
畑の神……48
秦野刻煙草……68
機屋……56
——の休日……57
——の正月と盆……57
——の食事……57
——の賃金……56
——のふんどし……57
——の奉公人……56
——の夜なべ仕事……56
肌ジュバン ……9
ハタムスビ……10
働き着 ……8
蜂……85
—さされ……89
—の巣……76
八王子様 ……120,228
———の祭り ……122

地まつり……37,138
地名……235
茶の間……36
ちゃぶだい……27
茶屋……113
中気……87
チュウゲン……141,157
チュウバ……10
中風……89
チュウマイ……53
長者柱……36,266
チョウチン……53
チョウムスビ……10
ちょいちょい着……5,6
チョコダンゴ……174
チョッポマキ……47

つ　行

ツキコ……66
ツキマゼ餅……223
つけ菜……18
漬けもの……19
ツゲ……80,166
ツジュウ餅……222
頭陀袋……168
頭痛……87,89
つばうら……78
つばき……87
ツブシムギ……16,50
ツボ庭……32,34
ツミッコ……21
つめりっこ……22
つわり……143

て　行

出あいイチゲン……158
手打うどん……21
デエ……32,36
テカイ……270
デキル……142
テクノボー……170
テコバコ……89
テッコ盛り……192
手伝い……93
デッチ……61
手っぷり水……92
テッポリタンポ……102
出針……14
テバタ……55
テマツカリ……95
寺への年始……181
てんかん……88
天気まつり……49,83,122
天狗様……124
でんぐり返し地蔵……86
――薬師……134
天候の予兆……76
――の予報……77
デンジ……46
天神様……120
――の祭典……120
デンシュウロク……65
天井上げ祝い……60
天南草……90
テンボシ……78

つ　行

十日ダンゴ……219
十日夜……218
――のワラデッポウ……219
――餅……23,219
ドウギミモチ……28
道玄の娘……226
銅蔵……68
銅山街道……68
トーザン……12
冬至……222
――のトウナス……90
――の日の食べもの……88
桶ズルス……271
道祖神……87,190
銅問屋……68
道中着……12
トウナス……88,163
糖尿病……90
塔婆のタテジマイ……174
トウモロコシ……17,28,44,223
ドブロク……29
トボグチ……85,252
とがくし……9,109
戸隠様のお札……77
毒消売り……73,74,113
トクサ……80
どくだみ……88
毒虫……88
とこあげ……145
ドコウジン……131
床とり……161
床の間……36
床柱……36
トコバン……142,168
戸沢……99
年男……179
年祝い……150
年占い……195
歳神……225
年神様……195
年越しそば……86
どじょうのヒボリ……66
――ばさみ……66
年とり……195
土蔵……34
ドテモグラ……6,22,48
ドドメ……51
となえ言……85
トマリゾメ……141,151
トムライ……195
――ジメ(トムライアゲ)……143
トメアナ……142
トメトウバ……143,174
ともばらみ……149
土用……200
――みつめ灸……88
――餅……23
トラノオ……46
トラム……165
トリアゲバアサン……144
――水……146
トリムスビ……141,161
トロロ……90,185
ドンドン焼き……190
呑竜がえり……48
――様……86,147
――坊主……83

な　行

苗クバリ……49
苗バ……49
長尾根……1,96
長居する客……84
長生きの相……150
流しびな……198
ナカノカイト……128
中の寺……132
中宿……152
長持……12
流れ灌頂……175
――星……84
仲人……154

生理帯……146
セエカゴ……270
セエブク……270
石尊様……124,139,216
赤飯……17
——家例……184
——をつくる日……23
石板……118
セチ餅……23
石灰……65
セッタ……10
節供の贈答……198
——ばたらき……82
節分……82
——の豆……195
セミの脱けがら……88
セリタタキ……185
世話方……161
——役……100
善慶寺……204
仙台平……6
洗濯……9,14
——板……5,12
先達……126
せんてい……81
センドモウセ……51,83
洗髪……9
膳箱……26
センブリ……88
ゼンマイ……20
染料……67

そ 行

総会……100
贈答……198
雑煮のいわれ……232
葬儀の知らせ……169,170
——の日取り……165
葬式の後……165
——の分担……165
葬送……167
葬制……164
葬列の役割……170
葬式のわらじ……78
双体道祖神……119,137
相談役……98
ゾウニエンギ……116
ぞうり……83,109,171
ソガイ……54
俗信……75,76
そこひ……89
ソテツ……89
ソトサン……6,15,16
外便所……34
ソバ……17,32,44
——ガレイ……184
——エンギ……116
染物……13
反町の薬師様……150

た 行

田植え……49,50
田植えのときの食事……31
大火……102
大黒……20,36
大根のきりぼし……19
——の年取り……220
——のひば……19
——まき……91
大食漢……114
大神宮……138
台所の石……76
大日堂……132
大日様……84
堆肥……44
台風の被害……117
大福餅……163
ダイマナク……197
ダイマナク除け……197
タイヤのお膳……142,168
タカガイト……97
タカサゴ……160
タカヅナ……271
たかはり……10
タカミ……97
薪……39
—取り……66
たくあん……18
竹馬……246
竹ボウキ……184
タケヤスミ……51
タゴイ……45
だし……26,126
タスキ……8
———結び……10
裁ち板……12
タチ餅……148
駄賃つけ……65
タツウタ……237
タツガシラのノリ……50
辰の日……50
タツミ井戸……32
タツミカド……34
たてかえの手伝……39
タテガン(棺)……168
タテジマイ……143
たてば……65
タテマタ……60
タドガイト……97
棚上げ餅……174
棚ざらい……184
七夕……202
——祭……203
狸石……228
種蒔き……41
田の神……48
足袋……11,92
——屋……72
卵を飲んだ蛇……85
多間取平面の民家……264
魂よび……142,146
タマンマイ……53
ため……44
たらい……5,12
たらし……22
———焼き……22
タロッペ……20
俵編み器……271
俵神様……132
ダンゴ……21,24
タンス……12
タンジュウ……46
誕生……143
——餅……148
ダンジン柱……266
丹毒の特効薬……89
タンポポ……88
タンボ……46

ち 行

近戸神社……198
チガヤのゴザ……176
力石……106
チカラクラベ……141,151
地震の時刻……77
チタケ……20
チチグサ……20
チチババ……30
血止めの呪い……84
チブク……79,145

七年忌……174
七の市……66
七の膳……172
しつけ……79,92
シニガラス……77
死人の夢……78
死の予兆……164
篠切り……65
四・八の市……70
シビレ……87
シブ紙……37
シマイコト八日……222
シマイ正月……193
シマダマブシ……270
シマヘビ……85
シメ飾り……224
下神梅……1
ジモグリ……66
シモの病……87,90
霜よけ観音……134,198
社会生活……94,117
ジャガイモ……18,63,88
シャクリ……86
蛇頂石……78
ジャラ……15
ジャンボムスビ……10
ジャンボン……165
祝儀着……12
十五日ガユ……191
——のあづきがゆ……81
十五夜……23,217
——の供物……217
十三夜……23,217
十三年忌……174
十三念仏……173
出棺……170
——後……171
十二様……2,60,119,127,128,138,140,143
——の木……128
——の供え物……25,59,184,187
十二祭……6
十八ガユ……192
十郎もち……41,48
シュウロクデンジ……188
十六マユ玉……188
修験……119,137
主食……15
出産呪術……3
正月様……179
——棚……183
——のおかず……18
——の供えもの……86
——の不幸……175
商家の家具……27
上州の三大祇園……244
ジョウスイ……49
ショウズカバアサン……137
焼香……170
定済屋……73
上棟式の唱えごと……84
商人……65
正福寺……133,137,150
ショウブ……199
——湯……82,199
成満院……125,131,137
醤油……25,32,66,113
ショウリウ様……176
ショウリョウサマ……207,209
浄瑠……247
ショイコ(背負子)……270
ショイダイ……69
ショイブクロ……67
食……5
食事の格……17
——の作法……92
——のしつけ……28
——の量……16
——の席順……27
食習あれこれ……29
食制関係の俗信……29
諸職……41
処女会……151
除夜の鐘……225
白髪染め……9
白井権八供養の灯籠……229
白砂……66
白滝神社……2
シラタキ姫……126
シラハギの枝……189
尻大黒……36
じりやき……21,22
二郎の一日……193
シロエン橋……113
シロカキ……49
白ナンテンの実……89
ジンカン皿……29
——盛り……29,139
神経痛……90
信仰……119
身上の評価基準……114
——まわし……114,142
しんぞう病……89,90
シンツキトウバ……143
新築の家と植木……80
シンノミ……20
神明様……119,151,227
人力車……69

す 行

スイカと天ぷら……80
水車……97
水田……49
水道……118
スートメ……49
数代家族……117
スエノカサ……142,167
菅原神社……98
すきぐし……9
スグアミ……60
すげ笠……10,160
スケット……39,64
スゴヤ(直屋)……252
スゴロク……246
スショウ……162
鈴香神社……132
——大明神……123
スズショウギ……67
ススハキ……222
スズメとツバメの話……230
すすりだんご……28,44
ステバ……168
スブザル……270
住まい……32
炭のこぎり……60
炭焼き……43,59
——道具……60
スリエ……148
坐り産……140,144

せ 行

生業……41
整形田の字平面民家……262
精根人……43
青年……106
——会……106,117,151
——集団……94,106
生前供養……175
精米……50
——所……50

コシヤリ……53
五十肩……89
小正月……187
五節供……163
巫女(ごぜ)……74,113,114,247
——のしょうべん……74
子育地蔵……86
コタネガイ……25,191
小平大門の舞台跡……242
コトジマイ……123
コトハジメ……123
子どもの遊び……246
——の行動範囲……149
琴平様……123
コト八日……197,222
諺……235
子なきは……114
こなもち……23
コニタ……59
子のできない人……145
コノメ……269
コノメの間……54
琥珀……10
コバユリ……20
ご飯を食べた茶わん……79
ごぼっぱもち……23
コマ……246
コマイ竹……65
コマカ……16
——餅……16
ゴマメ……29,143
ゴマヨゴシ……20
ゴムグツ……11
米……16
—カイザシキ……36,117
—の祝い……150
—のめし……10
子守り……150
小屋……32
コヤシ神さま……21
ゴロ……53
婚姻……152
——圏……153
金剛油……88
根生大明神……137
コンニャク……88
婚約……154
婚礼の祝儀受帳……157

さ 行

細工……67
財産のつくりあい……117
西福寺……204
歳暮……163,223
裁縫……9,13
——関係の俗信……13
——の一人前……13
材木運び……43
歳末諸事……222
祭文語り……247
嵯峨宮……119,228
さかな……18
坐棺……168
作業……91
サク入れ……47
作神様……48
サクキリ……47
サクダテ……47
桜田門の変……229
サクラ峠……229
ザクロの根……89
酒……161
鮭……18,19
サシ萱……38
さし木……81
ささひき……166
さしみのつま……88
雑穀食……17
サツマイモ……18
——のかんそう……29
サトイモ……18
里ばら七日……30
サナ……47
さなだ虫……89
座盃……160
サボテン……90
サルスベリ……80
猿田彦……123
サルのコシカケ……89
猿まわし……114
—ムコのはなし……230
沢入り……68
サワガニ……89
三ガ日……80
産育に関する禁忌……78
——俗信……149
産衆(サンシ)……147
サンダワラ……149
産見舞……146
三回忌……174
産後の食事……145
産衆(サンシ)……147
三・七の市……70
三社様……120
三十五日……174
三十三年忌……174
サンショウ……20
産泰様……143,150
三東雨……2
山中……229
サンド蚤……51
三番草……49
山王様……124
三本辻……212
サンマ……18,19
ザンマタ……60
サンミンサン……51
三夜様……112
三夜待……112
サンリンボ……84

し 行

痔……90
椎茸……20
——の塩づけ……19
ジオウサマ(十王様)…3,30,191
塩鮭……18
塩沢……1
塩マス……19
式三番……243
式服……7
敷き物……37
嗜好品……19
ジゴクボシ……77
仕事着……5,6,8
私財……117
死産児……149
死者となまぐさ……30
——と猫……175
シジャスミ……51
獅子舞……114,247
四十肩……89
四十九日……173,174
死装束……168
自然暦……91
下着……9
七・五・三……150,218
七十七の祝い……150

き　行

喜応丸……73
祇園祭……3,163,200
キキョウ……208
飢饉の食べ物……30
着ゴザ……8
気象の予兆……76
きちがいまぶし……53
キツネ……85
――ツキ……84
――に化された話……232
――の嫁入り……85,232
――火……232
絹の市……1,70
きのこのシロ……20,31
キノハツカゴ……197
木鉢……270
――屋……74
岐阜提灯……211
貴船様……124
――神社……77
――の天王様……202
ギボウシ……20
キマムシ……66
着物……79
きものの季節による変化……9
キャラブキ……20
旧正月……179
旧福岡村……140
キュウリの水……89
キュウリモミ……19
経帷子……168
行商……73
鏡台……12
共同飲食……29
共有地……101
――林……101
清め酒……166
桐生三尺坊……109
切り傷……88
桐の葉……88
桐原……1,68,98
――会員名簿……107
――青年共和会……106
――と沼田……108
――の会旗……107
――の活動記録……107
――の仕事……106
――の寄合……107
禁忌……78
近所まわり……154
近親結婚……154
ぎんだし……9
ギンナガシ……235
ギンナンの実……90
キントン……161
キンピラ……19,29
ギンボウス……48

く　行

クアイ……49
食う競争……31
食い合わせの禁忌……79
食いぞめ……140,147
草刈り……45
――場……101
草取り……49
グシ……38
グシ餅……38
クズかき……44
クズ餅……23
クズ屋根……39
クズマイ……53
薬売り……73,117
クゾフジの根……30
クチガタメ……141,154
クチナシの実……90
口封じ……82
区長……98,99
区費……100
雲……76
組合ツキアイ……113
蔵開き……186
クリカン……59
クリゴワメシ……17
栗飯……17
暮の市……222
――不幸……175
くわ入れ……180
クワダテ……186
桑切鎌……54
―コキ……54
―の根……89
―っ桑餅……6,22,28
―ブルイ……269
クンチナス……217
クンチモチ……223

け　行

ケサガケ……144
けすじ……9
下駄……10,92
――箱……12
結婚式の料理……161
結婚年令……153
血族結婚……153
結髪……14
ケツマンザイ稲荷……114
ケヤキ……82
下痢……88
現在の隠居……118
元三大師……180
げんのしょうこ……88,89
ケンチョン汁……17

こ　行

小泉焼……269
光栄寺……134,150
郷倉……97
高血圧……89
交際……112
コウジカビ……54
洪水の被害……117
講習ガマ……59
講集団……94,109
ゴウシュウヤ……113
庚申講……109
――様……109,119,137
――塔……110,137
――マツリ……109,110
――待……16,110
荒神様……138
コウデ……49,86,173
弘伝水……228
弘法大師の杉……229
コーモリ様……137
――薬師……135
洋傘なおし……113
五月節供……199
古稀の祝い……150
五・九の市……70
国防婦人会のたすき……118
告別式……173
子さずかり……149
ゴザイマキ……60
腰あげ……11
―巻き……10

オナメ……26
鬼の豆……195
おねしょ……91
オハオリ男……59
オハジキ……246
帯……10
オビアキ……140,147
オビトキ……5,7,11
帯解祝……5
オヒヤ神参り……146
お百度参り……134,139,142
オヒヤマイリ……140,146
オビヤキ……144
オブスナ様……145
オブタキごはん……146
オブヒボ……10
お便所参り……148
オベントウ……170
オボタテ……146
お盆……163
オマチ女房……161
オミキスズ……128,187
オミタマサマ……190
オミナエシ……208
オモト……38,80
主な店……72
母屋……32
オンナイチゲン……141,158,162
オンナシの年始……191
女の子のももひき……10
女の仕事……62
女のしつけ……93

か　行

カイコ……51
———祝い……58
———のはなし……58
———の病気……53
カイコビヨウ……54
会計……100
カイド……32
ガイト(ゲート)……94,97
カイバ……55
買物……73
回覧板……100
改良マブシ……270
蛙と猿……231
柿……81
—と秋刀魚……80
—薬師……134
書き初め……180
カキ花……187
カギ竹……37,80,195
カクシゼニ……168
カクスコ……66
角地蔵……134
各地の市……73
神楽……114
かくらん……87
籠屋……113
駆け落ち……154
カザリダンゴ……168
カシ……81
カジ……77,84
カジノキ……80
鍛治屋……65
カシワ餅……23
果樹園芸……65
カスリ……12
カズゾーリ……12
カズノコ……29
風の神……83
———道り……83
風邪の高熱……89
火葬……173
家族生活……114
——の私財……116
かたあげ……11
カタイタ……60
カタショウジン……25
カタッケ……20
片見月……218
勝抜坂……69
カツキリ……60
学校通……118
カツブシ……145,146
———ミソ……145
カッパ……233
河童の昇天……233
門謡い……159
—送り……159
角地蔵縁日……198
門付……193
門松……181
——迎え……223
カニババ(カナババ)……148
カノヤキ……43
かぶりもの……10
鎌が風を切る……82
釜が鳴る……84
かまど……37
カマノクチアケ……202
神送り……83,217
—棚……35,225
—迎え……218
上神梅……1
—桐原……99
髪洗い……14
—洗粉……9
—結道具……9
雷……76
紙屋……65
亀印……68
カミガミサマ……131
カヤ……14,81,226
——ツリグサ……49,89
——場……101
——番……60
カヤ山……60
カユエンギ……116
カユカキ棒……187,188,191
カラウス……30
鳥……77
ガラ焼き……59
刈りあげ祝い……50
軽いお産……79
カルウト……173
カルカヤ……208,226
カルマン……65
カレイ……116,184
枯レッコ……66
カロウト畑……229
川……34
川魚……19
川内村……1
カワラケ……207
川ビタリ餅(カビタリ餅)……221
間食……28
官地……101
カンヌキ結び……10
観音講……133
——様……191,216
——堂……229
神梅……228
——義太夫……242
——寿会……102
——神社……198
漢方薬……90

——縄 ……105
——番帳 ……105
——を埋める時……34
稲作……41
稲荷 ……138
——様 ……195
イヌコロ餅 ……221
犬の生れかわり ……234
犬の遠吠え……77
戌の日……48,143
———の麦まき ……232
稲の品種……48
いのり釘……84
位はい ……173
衣服の俗信……14
イブリ……60
イボ……87
イモウエザクラ……74
イモウエツツジ……80
イモカキ車……31,270
イモガラ……19,220
イモデンガク ……196
イモヨウカン ……161
イモはかげの俵……18
忌み切り ……174
———餅 ……142
入れ雲・出し雲……76
いろり……36
———の禁忌……80
———の席次 ……177
岩穴観音 ……122,132
イワシ……19
イワシバ……67
インキマメン ……116
インキョ ……114
飲料水……30

う 行

植木の禁忌……80
上杉謙信の馬 ……237
魚雑貨市……73
うぐいすな……44
ウシトラ……34
ウチサン(内三) ……6,15,16
打ち身……90
ウツギ……44
ウデマンジュウ……21
ウデモチ……21
うどん ……17,32
うどん粉……21
———の食品名……21
うなぎと梅干……80
うぶき ……7,146
ウブスナ様 ……147
———の笑い ……148
産湯 ……146
馬 ……66,80
生れかわり ……149,175
梅干 ……18,19,88,89
ウラトリ……52,269
ウリッパ……20
うるう年……77
うろこ雲……76
噂話 ……117

え 行

エエガエシ……63
絵かき ……113
易を見る ……114
オシブトン……12
江戸棲 ……6
エビス講……3,16,192,221
———様 ……131,138
———棚 ……221
エボムスビ……10
エンガウナイ……61,109
縁起……30,81,95,116
——の良い夢……78
エンキリ縄 ……171
エンジの木……80

お 行

オイド ……102,229
大岩の蛇 ……227
大鎌 ……271
大杉まさ……77
大山祇神……25,144
大間々市(イチ)……73
———の井戸 ……103
———の気質 ……113
———の祇園 ……243
———町の成りたち……95
———六人衆……96
オオヨギ……13
大晦日 ……225
オカイチョウ……73
オカシラツキ ……128
おかず……18
お勝手仕事……28
オカボ……44
オカマサマ ……190
オカミアゲ ……141
オガミヤサン ……119,137
送りイチゲン ……158
送り盆 ……176
オクマンサマ ……123,138,140
———まいり …140,149
オクンチ ……127,163,217
オケ屋 ……113
オコアゲ ……51,54
オコモリ ……119
オサキ……28,179
———つき……84
オサゴ ……130,131,137 143,146,187
お産 ……144
——のブク ……127
オシイ ……109
お七夜 ……146
オシメ ……146
オシャカ様 ……122
お酌着物 ……157
オシャクコ ……160
オショウジン ……139
———の食事……25,152
おしょうばん ……158
オシラキ ……130,223,225,270
オシラサマ ……180,189,196
オシラ祭 ……188
おすましのだし……26
お先達 ……138
オタイギ振舞 ……141,161
オタカ盛 ……161
オタナアゲ …142,165,173,174
———イタ ……187
———サガシ ……184
小平狸原の舞台 ……239
オチカヅキ ……158
オチツキのモチ …159,161,170
お乳 ……148
雄蝶雌蝶 ……160
お通夜 ……142,168
オッキリコミ ……20,21
夫のつわり ……140
おでき……88
お天狗様……64
男の子の初節供……82
お年玉 ……184,246
オトミマク ……140
オトミマケ ……143

索　　引

あ　行

アーボーヒーボ……188
アオジソ……88
青大将……76
青物市……73
赤城おろし……76
——神社……2,83,119
——様……122
——代参……122
——の神……123
——の雷……76
——のむかで……85
——山……199
——登山……198
赤いはんてん……150
——帽子……150
アカザの杖(つえ)……87
赤堀道玄……3
赤ん蜂……85
赤ん坊のとまりそめ……147
アキアゲ……31
あきの方……146
————の山……223
アクヤ……97
アクヤマ……97
アゲクサ……49
朝雨……76
朝エビス……192,221
朝草刈り……41,109
アサヅクリ……45,63
麻の葉のきもの……144
朝藤夜縄……80
浅原……1,98
——の神仏……132
——の舞台……241
朝メシ……27
朝焼け……76
朝湯……180
足入れ……155
足尾街道……41
——線……68
——銅山……2
アジサイ……81
足膳……27
あしだ……10
アシツカワセ……14
アシナカ……11,83
————ぞうり……11
アズキトキババアの話……234
あずきめし……17
アゼヨク……46
愛宕精進……119,123,192
あだな……234
頭の毛……14
暑け……88
あっため粥……190
小豆がゆ……24,81,109
——の分量……24
——めし……24
後産……145
あとば……10
穴原共有林……101
アナマワリ……142,170
油いり……19
—祝い……5
—みそ……19
—モモ……65
阿夫利神社の祭……124
雨乞い……2,51,82,83,122
甘茶……80
あめ売り……74
あまんじゃく……228,231
アラコ……46
新盆……176,206
——見舞……176,211
——迎え……176
荒物屋……73
アララギ……89,90
アラレ……76,82
アリジゴク……89
あわせ……8
アワ……17,44
——餅……17,223
アンコメンコ……21
安産祈願……143

い　行

イイ(エエ)……49
イイガエシ……49
鋳掛屋……113
生きかえり……149
イキトウバ……143
育児……148
池の鯉……76
医光寺……73
居酒屋……65
石臼……3
石垣……69
石工……123
石原の三本兄弟松……228
石山観音……191
衣・食・住……5,7
衣生活に関する禁忌……79
伊勢講……109
——ころがし……227
板割り……65
市……70,73
イチゲン……141,157
————座敷……158
————まけ……158
イチゼン飯……79
胃腸病……89
一日の食事……27
一人前の仕事……64,91
一年忌……173
一番草……49
イチヤモチ……223
五日正月……181
イッケ……114
——稲荷……115,119,128
——の禁忌……115
——の結合……114
一升ツカ……43
——マキ……43,49
——マスに財布……192
五つ紋……6
一食の基準……27
一周忌……174
一斗マキ……43,92
いっちょうら……9
イツナノカ……174
一般座敷……157
イッポン……20
井戸……2,32,34,39,94,102
——替え……103
——神様……2,34,131,138
——組……94,95,102
——組合……103
——綱……103

群馬県民俗調査報告書第十九集

大間々町の民俗

昭和五十二年三月二十八日印刷
昭和五十二年三月三十日発行　（非売品）

編集兼発行者　群馬県教育委員会

発行所　前橋市大手町一丁目一―一
群馬県教育委員会事務局

印刷所　前橋市元総社町六七
朝日印刷工業株式会社
電話　(51)四三六七